

はれたる觀念よりも一層積極的包括的で、更に高大純潔なる倫理的・靈的意義を有し、神の如き事、換言すれば完全の義を表はしてをる。今この語の新約書に用ゐられた類例をあげるに、ヨハネ傳十七の十一にはこれを神に適用して「聖き父」さいははれてあるが、それは同章廿五の「義しき父」さいふに同じく、共に神の性質の道德的一致を表はしてをる。又神の靈に適用して「聖靈」せいりやうといひ、イエスに適用して「聖き僕イエス」せいしよぶといつた事がある（使徒行傳四の三十）。基督者は一般に「聖徒」せいとと稱せられた。又非人格的物象にもこの語を適用した事もある。「聖き召」（テモテ後書一の九）。「聖き約」（ルカ傳一の七十二）なごがそれである。何れの場合でも、全然倫理的意義を有するは新約書の特色である。5 基督者の

の聖潔「聖潔は神の恵の工であつて、これによつて人間の固有性が淨められ、罪と世から離隔し、最高の愛を以て神を愛するものとなる事である」。換言すれば我らの内部にある罪の性質が全く除き去られて凡ての事に於て心より神の旨に従ふ生涯を送り得るに至る事である（コロサイ書の十二参照）。聖書中にはこれを「罪に死ぬ」、「罪より釋き放たる」、「凡ての罪より潔めらる」、「聖潔」、「心の潔き者」、「完き愛」、「完全」、「聖靈に充さる」等の語を以て認はされてあるが、その内容すべて同意義である。この状態に達し得らるるのは我らのこの世を去る時、若くは基督再臨の日であるといひ、或は次第に段段に聖潔められるのであるといひ、信者は聖潔に向つて成長するものでその完成即ち聖潔はこの世を去る時、若くはその後に於て得られるなごを説をなす者が多い。けれども新約書に於ては、斯る意味に於て「聖潔」の語を用ゐられた所はない。我らが神はこれを爲し給ふこの「信仰」をもつて神に祈り、「その身を神の意に適ふ聖き活ける祭物として神に獻ぐる」（使徒行傳十五の九、ロマ書十二の一）時、神は聖靈により、キリストの血により、又神の言によりて我らを潔め給ふのである（ロマ書十五の十六、ヘブル書九の十

四、ヨハネ傳十七の十七）。但ここに注意すべき事は聖潔は純精なる神の如き絶対完全を意味するものではなく、また天賦的完全即ち彼らの如き勝れたる智識・判断・辨別力を有するに至る事でもない。又誤謬なき生活、誘惑なき生活、犯罪・墮落等の不可能なる状態に達する事でもない。亦これ以上恵に進み得ざるほどのものとなり得るのではなく、神に對する愛、人に對する愛の完全、即ち純潔なる愛のみを衷に有するに至るここである。一言にしていへば聖なる状態は愛の状態である。イエスが神の完全なるが如く完全であれと言ひ給へるは、愛に於て完全であれこの謂である（マタイ傳五の四十一・四十八）。パウロはヨハネと同じく、愛を以て最も優れた賜、衆徳の帯であるといつてをる（コリント前書十三、エペソ書一の四、コロサイ書三の十四、ヨハネ第一書三の廿一・廿四等）。されば全き愛の生活は即ち聖潔の生活であり、聖潔は我らが信仰に献身により神に近づく時、神に同化せられて、我らの在世中に達し得らるる神の恵である。この聖潔の生涯が時時刻刻保たれて、主イエスキリストの日にまで及ぶ事は、基督者の特權であり、光榮であり、又神の聖旨である。我らはこの状態にまで進まなければならぬ（テサロニケ前書五の廿三）。

## 聖所

建物名

幕屋及び神殿中の一室で、至聖所の前に當る室である。その大きさは幕屋にありては長さ二十キュビト、幅十キュビト、高さ十キュビトであつたが、神殿の聖所は長さ幅高さとも、幕屋の二倍であつた。又幕屋のは下が土間であつたが、神殿のは黄金を張つた床板であつた（列王紀上六の三十）。幕屋の聖所に外より入るには美はしい幔があつたが、神殿には兩方に摺む戸が二枚あつて、その幅は五キュビトあつた（列王紀上六の三十三）。この戸は香拍で造られ、橄欖の木で造つた門の柱に、金の蝶番で附けられてゐた。而して又その戸には棕櫚の木の間にケルビムの像とその上には咲ける花を彫刻し、

キヨキモノ



幕屋は地上にある信者及び教會の型で、神殿は天にある教會の型である。その長さ幅さとも神殿は幕屋の二倍であるから、全部の廣さは神殿は幕屋の四倍に當る。

神殿の至聖所と聖所



〔タルマツド〕の註による

一面に下の彫刻が見えるやうに薄く金を被せられたものであつた。周圍の壁は幕屋にありては無飾の金を被せた合歡の木の板であつたが、神殿のはその戸と同様の構造であつた、殊に壁には一面に玉を嵌められてあつたので、燈臺の光のために燦爛として輝いた。幕屋の聖所には中央の左に純金の燈臺、右に合歡の木に金を被せて造つたパンの案、至聖所に相對する所に合歡の木に金を被せて造つた香壇が各一個づつ据付られてあつたが、神殿の聖所には幕屋で用いた燈臺を中心純金の燈臺十個を左側に列べてあつた(列王紀上七の四十九)。(普通には左右にあるのを神殿の入口からいふ左右取り、燈臺及び案を左右各五つづつを置かれたとしてをるが『タルマツド』の幕屋の註によれば、左右はモーセの幕屋で造つた燈臺や案に對していふ左右で、本文の如く列べられてあつたに似る。)中央至聖所に近く、香拍を以て造り、金を被せた香壇がある(同六の廿・廿二、七の四十八)。又右側に供のパンの案が十個(幕屋のは中央に置き、都合十一個)あつた(歴代志下四の八)。又幕屋に於ては至聖所と聖所の間には隔の幕があつたのみであるが、神殿はこれに添へて、橄欖で造り金を被せた入口の戸と同様な戸があつた。但戸は四キュービト二枚づつの折戸であつたから、中央に四キュービトの幕のみ見える間隔があつたやうである。(右に掲げた『幕屋及び神殿の至聖所と聖所』の平面圖参照)。

潔き者

術語

鳥獸畜を潔き者、潔からざる者に分けたのは、元始よりのこゝであるらしい

(創世記七の二)。潔き獸畜は蹄の全く分れた反芻者である(レビ記十一の三―八)。鳥の潔き者は、肉食をなさぬ者、又差別なしに物を食はぬ者である(同十一の十三―十九)。魚の潔き者は鱗と鰭を有する者である(同十一の九―十二)。虫の潔きものは飛腿ありて地に飛ぶ者である(同十一の廿―廿二)。この區別は初め犠牲に關したものであつたが、後食物にも應用せらるる事となつた。この律法の根本的觀念は斯る特殊の生活によつて、ヘブル人と他の人種の相違を教へる爲であつたらうといはれるが、その上に

キヨキモノ

キヨサイ キヨス キリアタイム

これは衛生保健の爲にも善く、又心靈的の教訓をも與へる爲であつたと思はれる。即ち潔き者は神の恵を反芻する者、危険の場所にて踏止まり得る者、所謂肉につける者を食はず、且つ精神の糧をこるに當りて、差別なしの雑食をせざる者、魚に鱗ありて自己を守るごまく自ら守り、尾と鳍によりて、進み得る如く進む生涯を送る者、地に屬ける生活に甘んぜずして、天に向つて飛躍する生活を送る者である事を暗示すると思ふ。

キヨサイ 禮典 別項「禮物」を見よ。

キヨス

地名

小亞細亞の西岸を距る五哩の處にある一島で、その南北の延長三十二哩、その幅は八哩乃至十八哩である。昔はその産する所の葡萄・無花果・大理石等で名高かつた。島中に羅馬の自由都市の一である同名の町があつた。ここは亦かの有名な詩人ホーマーの誕生地だといはれてをる。紀元五世紀頃にはこの地の住民は希臘の中でも富んでゐるものとして數へられてゐたこの事である。紀元五世紀は第三傳道の際ミテレネより船でサモスへ渡る時、この島の對岸を通つたが、ここには立寄らなかつた（使徒行傳廿の十五）。今はスキオと稱ばれてをる。

キリアタイム

地名

「ヘブル語」二重の邑」 1 ヨルタン河の東方にあつた堅固な邑で、もろ巨人エミ人が住んでゐたが、東方の王たちに攻略せられ（創世記十四の五）、後にモアブ人の「一對の都」になつた。以色列民族の占領後ルベンの支派に屬する邑になつた（ヨシユア記十三の十九、民數紀三十二の三十七、エレミヤ記四十八の一・二三、エゼキエル書廿五の九）。現今クレイヤットと稱ばれ、マケラオ城趾の東、メデバの西十哩にある。2 ナフタリの支流の中にあつたレビ人の邑で、ゲルシヨン人が住つてゐた（歴代志上六の七十六、ヨシユア記廿一の三十二にはカルタンとある）。現今はケルカ

ラミ稱んでをる。

キリアテ

地名

「ヘブル語」邑」ベニヤミンの支派に屬した邑である（ヨシユア記十八の廿八）。但ヨシユア記十八の廿八のヘブル本文は成句態になつてをるから、後に來るべきヤリムが缺けてをるのである事がわかる。次に來る「邑」ミといふ語がある所から、つい落されたのであらうといつてをる學者がある。七十人譯にはこれを支持すべき譯し方をしてをる、即ち「ヤリムの邑」になつてをる。この説を採ればこの地は次項のキリアテヤリムと同じ處である事となる。

キリアテアルバ

地名

「ヘブル語」アルバの邑」ヘブロン原名である（創世記廿三の二、三十五の廿七、ヨシユア記十四の十五、十五の十三・五十四、廿の七十一、士師記一の十、ネヘミヤ記十一の廿五）。

キリアテサンナ

地名

ヨシユア記十五〇四十九。これはキリアテセベルと同じ所であるが、謄寫の時書き誤られたのであらう。次項「キリアテセベル」を見よ。

キリアテセベル

地名

「ヘブル語」書籍の邑」カナンの邑であつたが、カレブの舎弟オテニエルによつて占領せられた。オテニエルはこれによつてカレブの女を妻になし得た。この邑は後にデビルと稱へられた（ヨシユア記十五の十五―十九、士師記一の十一―十五）。別項「デビル」を見よ。尚ヨシユア記十五の四十九にある「キリアテサンナ」も同じ所である。

キリアテヤリム

地名

「ヘブル語」要塞の邑」ギベオン人の四つの邑の一である（ヨシユア記九の十七）。この邑はユダとベニヤミンの間の境にあつて、ユダに屬してゐた（ヨシユア記十五の九、十八の十四・十五、十五の六十、士師記十八の十二）。契約の櫃がこの邑に置かれた事もある。後カナン

キリアテ キリアテアルバ キリアテサンナ キリアテセベル キリアテヤリム

### ギリシヤ

宗教の禮拜所である崇所たかところのあつた邑むらとなつた(サムエル前書六の廿一、七の一・二、歴代志上十三の五、同下一の四)。現今クーリート・エル・エナブミイヒ、エルサレムの西九哩、ヨツバ街道に當つてある。古城趾は邑の西方に當つて見え、十字軍時代の美しい會堂が邑の中に恢復された。尙この邑にキリアテバアル(ヨシユア記十五の六十)、バアラ(同十五の九・十、歴代志上十三の十六)、バアルユダ(サムエル後書六の二)等の別名があつた。コンダーはソレクの谷の南方なるケールベツト・エルマである云ふ。

### ギリシヤ

地名

ギリシヤの名はヤベテの子ヤワンの子であるエリシヤより出たものであらう

(創世記十の四)。この國はバルガン半島の極南に位する國で、古來哲學文學の淵藪うんさうとして、多大の貢獻をなしたのであるが、これが舊約書中に現はれてゐるのは、エゼキエル書ミダニエル書のみである(エゼキエル書廿七の七、ダニエル書十一の二)。勿論表號的にはこの國について多くの預言を見る事が出来るのであるが、舊約書の完成前に於ては、ギリシヤ人はヘブル人ミ直接の交渉を有たなかつたのであるから、その明かな記事のない事も當然である。この國ミ猶太國ミの直接の關係は紀元前三百三十三年アレキサンダー大王がベルシヤミイツサスに戦ひ、遂にペルシヤを轉覆せる時に始まる。これによつて猶太國の主權者はギリシヤ國に代つたからである。猶太の史家ヨセフアスの傳ふる處によれば、アレキサンダー大王は盛に猶太人を好遇し、これに従前に優つた特權を與へたこの事である。エジプトにアレキサンデリヤ府が建てられ(前紀三三一)、多くの猶太人が住むに至つたのはこの時である。それ故ダニエル書には他の諸國に對しては恐ろしき猛獸である「豹」ミとしてあらはされ、猶太人に對しては「牡山羊」ミとしてあらはされてゐるのである。彼の死後帝國は四つに分裂せられ、所謂「繼承者の時代」ミとなつたのであるが、これらについては、「スリヤ」、「エジプト」等の項に記してある。新約時代にはこの國は羅馬に

屬してをり、パウロは第二傳道旅行及び第三傳道旅行の時、その重なる都府であるアテネ、コリント等に傳道した事が見えてをる(使徒行傳十七の十五—十八の十八、廿の二・三)。

### キリストテアン

術語

「ギリシヤ語」キリストに従ふ者」この名は紀元四十二年頃スリヤのア

ンテオケに於て初めて起つた名で、もミ不信者がキリストを信する者を賤めて稱んだ名であるといふ人が多くあるが、使徒行傳十一の廿六に「弟子たちのキリストテアンミ稱へられしは」ミある原語は、神が批准して公然天下に宣言し給ふ事を意味する字で、神がこの美名を蒙らしめ給うたのであるミ説く聖徒もある。「この名は言ミしても珍らしい名で、その思想はヘブルの思想で、やはり膏を注がれキリストミと同じ事であるが、その語はギリシヤ語であるし、語尾はラテン語の語尾である。それ故この一語の中に、普く世界の人の語を含んでをる。神は我らにこの美名を與へ給うたのである(ヤコブ書二の七参照)。(バアクレー・バックストン)。眞のキリストテアンミはイエス・キリストを信じて之を我神ミいひ、我主ミ稱びて、その教訓に従ひ、彼がわが罪を贖ひ給うた事によつて、永遠の苦を免れ、永遠の幸福を望む者である。たミひ洗禮を受けて教會に連つても、これらの確信なきものはキリストテアンミ稱ぶ事は出来ぬ(使徒行傳十一の廿六、廿六の廿八、ペテロ前書四の十六)。

### キリスト

職名

「ギリシヤ語」受膏者」別項「イエス・キリスト」を見よ。

### キル

地名

「ヘブル語」石垣」アツスリヤ王がダマスコの民を虜へ移した所の邑の名である

(列王紀下十六の九)。アモス書九の七によればスリヤ人は元キルから移住したやうである。しかしその所在は明かでない。イザヤ書十五の一に「モアブのキル」ミ稱する處があるが、勿論このキルではない。或人はエゼキエル書三三の廿三の「コア」ミ同一であるといひ、或人はアツスリヤの北の方クル河

キリストテアン キリスト キル

キルハラセテ キルハレス ギレアテ

の岸に沿うた國であらうともいふ。何れにせよアツスリヤより程遠からぬ地であつたに相違ない。モアブのキルについては次項「キルハレス」を見よ。

**キルハラセテ** 地名 「キルハレス」を見よ。

**キルハレス** 地名 「ヘブル語『陶器の邑』」 又の名をキルハラセテ或はモアブのキルミ稱び、

死海の東南十里を離れた處、アルモアブより南三時間にして達し得らるる處にある(イザヤ書十五の一、十六の七・十一、エレミヤ記四十八の三十一・三十六)。この邑は實に天險の要害で、イスラエル、ユダ、エドムの三國同盟軍も容易にこれを降す事が出来ず、遂にモアブの王がその長子を石垣の上に燔祭せしめた悲惨なる光景を見るに及んで、退軍したのであつた(列王紀下三の廿五―廿七)。

**ギレアテ** 地名

「ヘブル語『証憑の垣』、アラビヤ語『荒き』。スリヤ語ではエガル・サハドタミいふ」

1 ヨルダン河東地方の名稱で、その長さ六十哩、幅は二十哩ばかりある。北はバシヤンに境し、南はアンモンに接してをる。この地方は山が多く、草木が生え繁つて、又た香物を多く産するに由つて有名である(民數紀三十二の一、三十七の廿五、エレミヤ記・四十六の十一)。この地方はもリアモリ人の王シホンに屬してゐたが、以色列の所領となつたときガド・ミルベンの支派に與へられた(ヨシユア記十二の二・五、申命記三の十二・十三)。新約時代には「ペレア」といつた。別項ペレアを見よ。2 ホセア書六の八、十二の十一にあるギレアテはミヅバ(士師記十の十七)の近くにあるギレアテであらう。これは今のエス・サルトの北五哩にあるゼラアドである。3 士師記七の三のギレアテ山はギルボア山の一の山頂をいふのであらう。ギルボアの北傾斜面即ちツエリンから二哩ばかりの所にある泉が、「ハロデの泉」(士師記七の一)であらう。この泉を現今アイン・ヤルド(ヤルドの泉)といふが、昔の

ギレアテの轉訛したのではあるまいか。説をなすものがある。ギデオオンがその兵士一萬人中より、精兵三百人を選抜したのは、この泉のほごりに於ける事件であらう。

**ギレアテ** 人名 (男) 「ヘブル語『強い』」 1 マキルの子(民數紀廿六の廿九・三十)。2

エフタの父(士師記十一の一・二)。3 ミカルの子(歴代志上五の十四)。

**ギルガシ人** 種族名 「ヘブル語『粘土』」 カナン人で、ガリラヤ湖の東南に住んでゐた人人である(創世記十の十六、十五の廿一)。

**ギルガル** 地名 「ヘブル語『廻轉』」 1 ヨルダン河の西方、エリコに近き處にあつた地である。以色列の人人はヨルダン河を涉つて、直ちにこの地に陣營を張り、又ヨルダン河の底から取來つた

十二の石を以て石塚を築いた(ヨシユア記四の十九―廿四)。後日サウルが、燔祭を獻げて失敗したのもこのギルガルであつたらう(サムエル前書十の七、十三の七―九)。現今舊エリコの東三哩の處にピルケツト・イル・ユリエミいふ池がある、池は長さ百呎、幅八十四呎で、荒石の垣を以て廻らされてをる。

池の南に三分の一哩四方の荒廢せる地域があり、五十呎平方、高さ十呎の所が散在してある。土器や硝子等が發掘せられた。中世紀まで十二の石が傳説にひかれた。2 **ヨシユアの本營**のあつたギルガル(ヨシユア記九の六、十の六・十五・四十六、十四の六)は申命記十一の三十によればモレの橡林を去る事遠からずある故、エリコの東にある前記のギルガルではない。これをサムエル前書七の十六、十

一の十四、十五の廿一、列王紀下二の一、ホセア書四の十五、九の十五、十二の十一、アモス書四の四、五の五等の記事より考へるに、これはエフライムの領地にあるシロの西南の山中即ちシロミベアルより、共に五哩を隔て、又エルサレムミシケムミの中間にある現今のジルジリエであらうと思はれる。3 ヨ

ギレアテ ギルガシ人 ギルガル

ギルボア キロ キン キンセン

シユア記十二の廿三にあるギルガルはドルの三十哩南、アンチバトリスの四哩北にある現今のイルリエであらうといはれてをる。

ギルボア

地名

「ヘブル語『湧き出づる泉』」

エズレルの平地の東にある山で、その高さ千七百十五呎、昔ギデオンがベリシテ人に勝利を得た所、又サウル王がヨナタンを偕に戦死した所である(士師記七の三、サムエル前書三十一の二、サムエル後書一の廿一)。現今はゲルボンといふ。

ギロ

地名

「ヘブル語『圓』、『地方』」

ヘブロン西北三哩の丘上にある。ここはダビデ王の大臣の一人であるアヒトベルの故郷である(ヨシユア記十五の五十一、サムエル後書十五の十二)。現今はヤラミといふ。

黄金

鑛物名

聖書に黄金の事の記されてあるのは、創世記二の十一が始である。ヘブル人はこれを貨幣となし、又器具及び裝飾に使用したゼカリヤ書四の十二に『金の油』とあるのは金色の油の意である。黄金は金屬中最も高價で尊いものである所から『神性』の表號として用ゐらるに至つた。

銀

鑛物名

銀は黄金より價が卑いけれども、太古より一般の賣買に使用せられ、又器具及び裝飾に用ひられた。殊にエホバへの献物に關する律法に、銀を以て贖の標準を定められた所から(レビ記廿七)、銀は『贖』の表號として用ゐらるに至つた。

金錢

物名

古代は流通貨幣として銀を用ゐられたのであるが(創世記十七の十三、廿の十六、廿三の十五・十六、三十三の十九、三十七の廿八、エレミヤ記三十二の九・十)、これは鑄造した貨幣でなく、羊の形または羊の刻印をした銀の小塊で、目方で計算するものであつたらうといはれてをる。而して以色列人が始めて自ら鑄造貨幣を用ゐたのはバビロンの捕囚より歸還した後で、紀元前百四十年頃



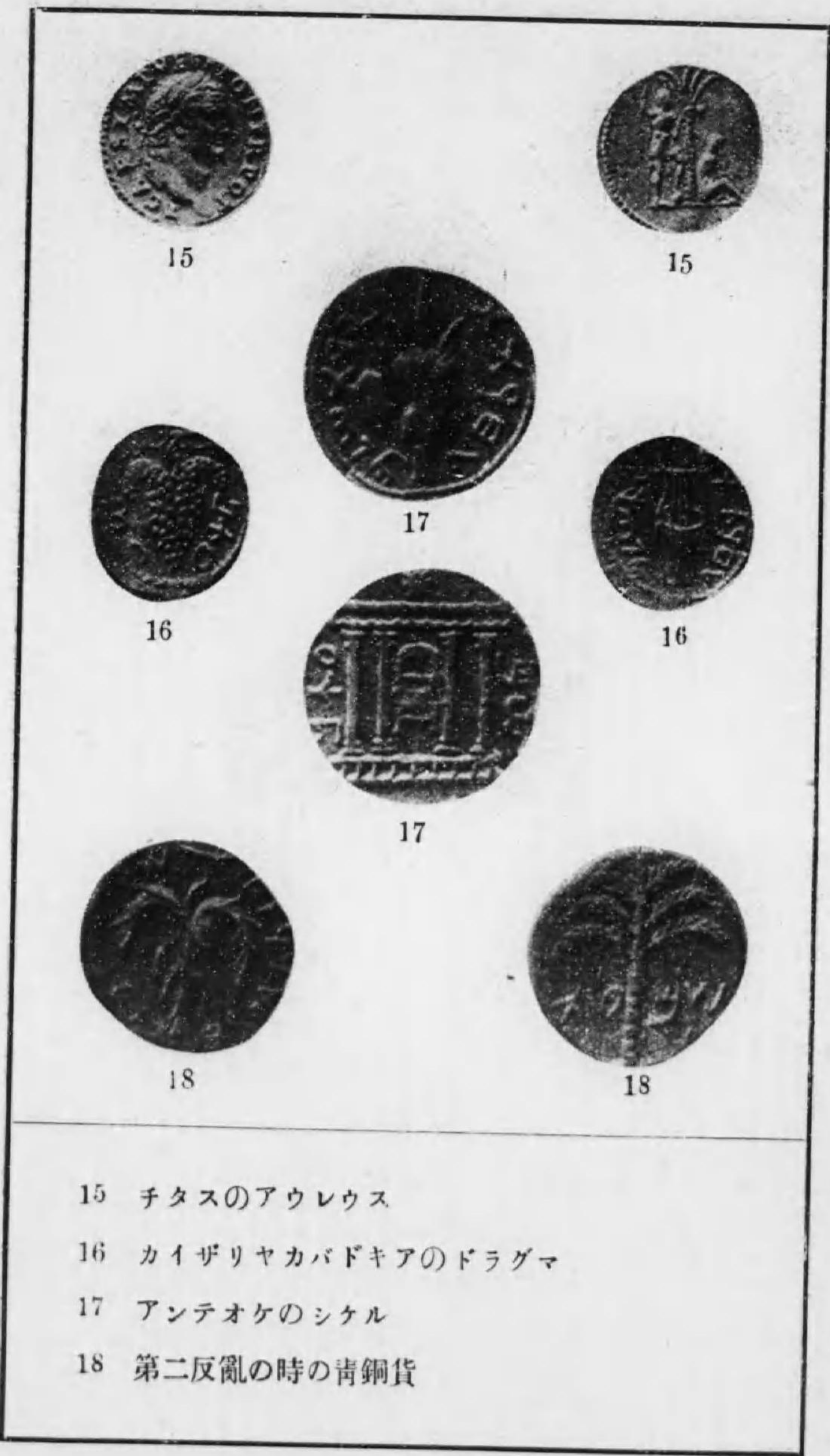
- 1 ペルシヤの金貨
- 2 シドンの二シケル
- 3 ツロのシケル
- 4 トレミーのシケル



10 ヘロデアンテバスの青銅貨  
 11 アグリツパー世の青銅貨  
 12 ポンテヲピラトの青銅貨  
 13 テベリオのデナリ  
 14 六六乃至六七年のシケル



5 アンチオカス・エピファネスのシケル  
 6 ヨハネヒルカナスの青銅貨  
 7 アレキサンデルヤンネウスの青銅貨  
 8 ツロのシケル  
 9 ヘロデ大王の青銅貨



15 チタスのアウレウス  
 16 カイザリヤカバドキアのドラグマ  
 17 アンテオケのシケル  
 18 第二反亂の時の青銅貨

のものが、その最古のものであるといはれてをる。エズラ書二の六十九、八の廿七、ネヘミヤ記七の七十一、七十二等にあるダリクはこれをペルシヤから得たものであらう。ダリクは金貨で、表面には弓と鎗を携へた王の肖像がある。又當時の貨幣の代用として土牌はを使用した事も見えてをる。エズラ書三の七に「金」ミあるのはそれで、巾一インチ乃至三インチ、長さ四インチ半のものである。ロフタス氏のワルカ地方に於て掘り出した多くの土牌にはさまざまの王の名が記され、そこに記されてある年號は、紀元前六百廿六年より五百廿五年にわたつてをり、その中にはクロスの名もある。土牌は通常の便利を計る爲に政府の發行したもので、一定の價格を示し、今日の債券の如きものだといはれてをる。前述べた猶太の最初の鑄造貨は一シケルミ半シケルのものであつたが、少し遅れて半シケル、四分の一シケル及び六分の一シケルの銅貨も出來た。新約時代に於ては、これらがギリシヤ、羅馬の金・銀・銅貨と相並んで通用したやうである。それ故エルサレムの神殿中に兩替する者があつて、諸國より參詣した猶太人が、神殿に納める義務金（それは貧富の區別なく、一人半シケル宛の銀を納むべき律法であつた）出エジプト記三十の十一、十六、マタイ傳十七の廿四參照）を猶太の半シケルに替へる必要があつたのである。羅馬の重なる銀貨はデナリである。一デナリは勞働者一日の賃金で、共和政治時代にはアポロ、デユピター等の神の像が附けられてあつたが、帝政時代になつてからは皇帝の肖像とその名をつけるやうになつた（マルコ傳十二の六）。レプタはギリシヤ人の通用貨中の最小なる銅貨である。以上諸種の貨幣を今日の價格に換算すれば、凡そ次のやうになる。

キンゼイ



キンネレテ

舊約時代の貨幣		新約時代の貨幣	
(甲) 古代ヘブル貨幣(重量を以て秤れる) 半シケル(神殿への税額) 我凡そ七十二錢 一シケル(半シケル二個) 一圓四十四錢 一マネ(六十シケル) 九十二圓四十錢 一タレント(五十マネ) 四千六百二十圓		(甲) 猶太及び羅馬の貨幣 一レプタ 我凡そ二厘五毛 一コドランテス(二レプタ) 五厘 一アス(四コドランテス) 二錢	
(乙) アスモニアン朝時代の貨幣 一シケル 我凡そ十圓六十六錢 一マネ(百シケル) 一千〇六十六圓 一タレント(百マネ) 十萬六千六百圓		(乙) 羅馬及びギリシヤの貨幣 一デナリ(一アスの凡十六倍) 一ドラグマ 我凡そ三十六錢 一テトラドラクム(二デナリ) 半シケル 七十二錢 一テトラドラクム(二デナリ) 一シケル 一圓四十四錢	

キンネレテ

地名

〔ヘブル語「琴」〕

ガリラヤの湖の別名、「ガリラヤ湖」を見よ。

ク

悔改

術語

1 悔改は罪惡を離れて神に立歸る義で、單にその罪を認めて深くこれを哀むのみならず、斷然これを振すてて神に歸り、聖き生活をなさうといふ決心である。これを「生に至るの悔改」といふ(コリント後書七の八一・一、マタイ傳廿一の廿八・廿九、使徒行傳十一の十八、廿六の廿)。原語の意味は「心變する」といふ意である(ゼカリヤ書八の十四、マタイ傳三の二、民數紀十七の三十)。2 聖書の中に神が悔い給うたこの事が屢記されてある(創世記六の六、ヨナ書三の九・十)。これは人の思想を神に附して、神が氣を變へ給うたといふ事で、勿論罪に少しも關係はない。何となれば神は全く聖く、また全智の方で在す故、決して惡をなし給ふ事がないからである。神の御定の前後を知らない人間の目から見れば、聖旨が變つたやうに見えるのみである、神の大計畫に於ては進歩もあり、變化もあるが、その聖旨といふ原因は少しも變る事はない故、如何ほご現象が變つても、神が氣變りせられたと論ずる事は出来ぬ。

偶像

術語

天地の造物主である獨一の神に歸すべき禮拜を受くる眞神以外の者を偶像といふ。神を表示するものとして、或は人の像、又は圖畫・月・星辰・禽・獸を拜するは勿論、神よりも勝りて他のものを愛する事も亦偶像禮拜といはれてある(コロサイ書三の五)。偶像禮拜は神の堅く禁じ給ふ事で、これを行ふ事は神に對して重き罪を犯す事である(出エジプト記廿の三・四、申命記五の七、六の十四・十五、八の十九・廿、エレミヤ記四十四の三・八)。古より世の人は唯自然の智慧と自己の想像に任せて偶像を拜するものになつた(ロマ書一の廿一―三十二)。或學者は創世記四の廿六に「この時人人エ

クイアラタメ グウソウ

ホバの名を呼ぶこゝを始めた」こあるのはエホバの名を他のものにつけたこの意である。こ解釋して、偶像禮拜の起原であるこいふけれども、この解釋は不適當であらう。しかしユダ書十四・十五を見れば偶像禮拜の古より行はれた事がわかる。かのバベルの塔も偶像禮拜の爲であるこいはれてをる。さてカルデア人の偶像禮拜は主として天體崇拜であり、エジプト人の偶像禮拜は主として禽獸虫魚等の動物崇拜であり、ギリシヤ人及び羅馬人の偶像は凡ての善徳と惡徳を表する男女の像であつた。以色列人はその隣國の風に化せられて、男神バアル、女神アシタロテ、火神モロク、軍神ケモシ、海神ダゴン、家庭の神テラビムその他種種の偶像禮拜に陥り、その結果バビロン捕囚の悲運に遭遇したが、幸にもその後一切偶像禮拜をなさざる民となり、今に至つてをる。併し精神的の偶像は尙かれらにも拜せられてをる。エホバは世の國國の中より殊に以色列の民を撰び、彼らに契約を結んでその夫となり給うた故、以色列の民がエホバに叛いて偶像を拜する事を、姦淫を記されてをる(イザヤ書五十四の五、ホセア書二の七、十六、エレミヤ記三十一の三十二)。

クシ

人名・地名 【ヘブル語】黒い 1 (男) ノアの子ハムの長男である(創世記十の六―八、歴代志上一の八一―十)。 2 クシの子孫の住んだ國の名である。これは主としてエジプトの南方にあるエテオピア地方を指していふのであるが(イザヤ書十一の十一)、又クシはエラムの古稱でもあるから、クシの子孫はこれらの兩所に住んだと見るべきである(創世記二の十三)。

闇

情例 闇を撃いて事を定める事は以色列人の習慣の一であつた。彼らは闇によつてエリコの城の詛はれた物を盗んだ人を定め(ヨシヤ記七の十四―十八)、最初の王サウルを見出し(サムエル前書十の廿)、サウルにベリシテ人との戰に於て罪を犯した者を發見し(サムエル前書十四の四十一)。

四十二)、又イスカリオテのユダの代りこして使徒の一人を選んだ(使徒行傳一の廿一―廿六)。箴言十六の十三には「人は箴をひくされし事を定むるは全くエホバにあり」こある。これは亦羅馬人の間にも行はれた如く、その兵卒等は闇によつてイエスの下衣の所有を定めたこある(詩篇廿二の十八、ヨハネ傳十九の廿三・廿四)。闇の方法は壺の中に支派の名又は姓名等を記した幾枚かの札を入れ置き、その中より一枚を擧ぎ出して定めるのである。但十字架の下に於ける兵卒の闇は突差の場合故、何か便宜の方法を用いたであらう。

接吻

情例 以色列民族中には行はれた風習の一で、愛する者、又は親しき者の額、又は頬、若くは口に、口をつける事である。これは愛の徴であり(雅歌一の二、箴言七の十三)、また敬ふべき者を敬ひ、王たる者、師たる者、主たる者に歸服する徴である(列王紀上十九の十八、ルカ傳七の四十五)。又親しき者相互の愛のしるしである(創世記廿九の十一、三十三の四、四十五の十四・十五、ルツ記一の九・十四)。イスカリオテのユダはその惡心を隠し、主イエスを愛する如く装ひ、接吻を以て主をその敵に渡した(マタイ傳廿六の四十八・四十九)。新約書には清き接吻(ロマ書十六の十六、テサロニケ前書五の廿六、コリント前書十六の廿、同後書十三の十二)、愛の接吻(ペテロ前書の十四)を以て互に安きを問へこあるが、これは基督者が兄弟である所から、愛のしるしとして行はれたのである。始は男女共に許されたのであるが、後に至つて男子は男子に、女子は女子にするやうになつた。

履鞋

物名 猶太人の用いた履は皮又は木で造られ、紐を以てこれを足に結びつけ、僅に足底を保護するだけである。けれどもアッスリヤ人の鞋は足底ばかりでなく、その側面も踵も包み、これに裝飾を施してあつたから、ヘブルの貴婦人もこれ等しきものを履いたであらう。雅歌に「君の女よな

クツ クビキ

んちの足は鞋の中にありて如何に美はしきかな』とあるのはこれを指したものであらう。人が家に入れば必ず鞋を脱がねばならぬ。それ故僕は鞋の紐を解き、水を以て足を洗ふ任務を探る慣例であつた。数人の僕のある場合は、最も低き者がこれをなす役であつたから、鞋の紐を解く事、足を洗ふ事は謙遜の記號となつた(マルコ傳一の七、マタイ傳三の十一、ヨハネ傳十三の四)。又鞋を脱ぐ事は敬意を表はす事を意味する場合もあつた。祭司が神殿に於てその職務を行ふ場合には、洗足であつた(出エジプト記三の五、ヨシユア記五の十四・十五)。物を賣買する場合に、その證據として鞋を脱いで相手方に渡す風習もあつた(ルツ記四の七・八)。又兄が子なくして死んだ時は、弟が兄の妻を娶るべき責任があつたが、これを拒んだ時は、婦人は弟の鞋を脱ぎ取り、彼の面に唾して『その兄弟の家をたつる事を肯んぜざる者には斯の如くすべきなり』といふ事である。そしてその弟の名は『鞋を脱ぎたる者の家』とよばれた(申命記二十五の五・十)。尙鞋を投げつける事は、彼を卑め、また賤業をせらしむる意をあらはす事の記號であつた(詩篇六十の七・八)。



鞋

〔物名〕 これは牛馬を御する農具で、これによつて表はす所の意味がさまざまある。即ち服従(列王紀上十二の四・十一、イザヤ書九の四、エレミヤ記五の五)、厳しき苦役(申命記廿八の四十八、

軛

エレミヤ記廿八の十三)の記號である。又二匹の牡牛を指して一軛といつた、これは二匹の牛で一つの軛を曳くからである(サムエル前書十一の七、列王紀上十九の十九・廿)。尙又一軛の牛で一日間に耕し得るだけの畑の廣さを『一軛の地』といつた事もある(サムエル前書十四の十四)。

クプロ

地名

【ギリシヤ語】銅

スリヤの西方に近く、地中海の東方にある島である。その延長約百四十哩、その幅五十哩あつて、島中にサラミス、パボスの二大市邑がある。その土地は豊で、多くの穀物・葡萄酒・油・蜜・銅等を産し、貿易も亦甚盛であつた。又その住民は専ら驕奢に長じ、飲食に耽つてゐた。パボスはバルナバの故郷である(使徒行傳四の三十六)。使徒パウロはその第一傳道旅行にバルナバ及びマルコムと共にこの島に來つて傳道した(使徒行傳十三の四・七、十五の三十九、廿七の四)。

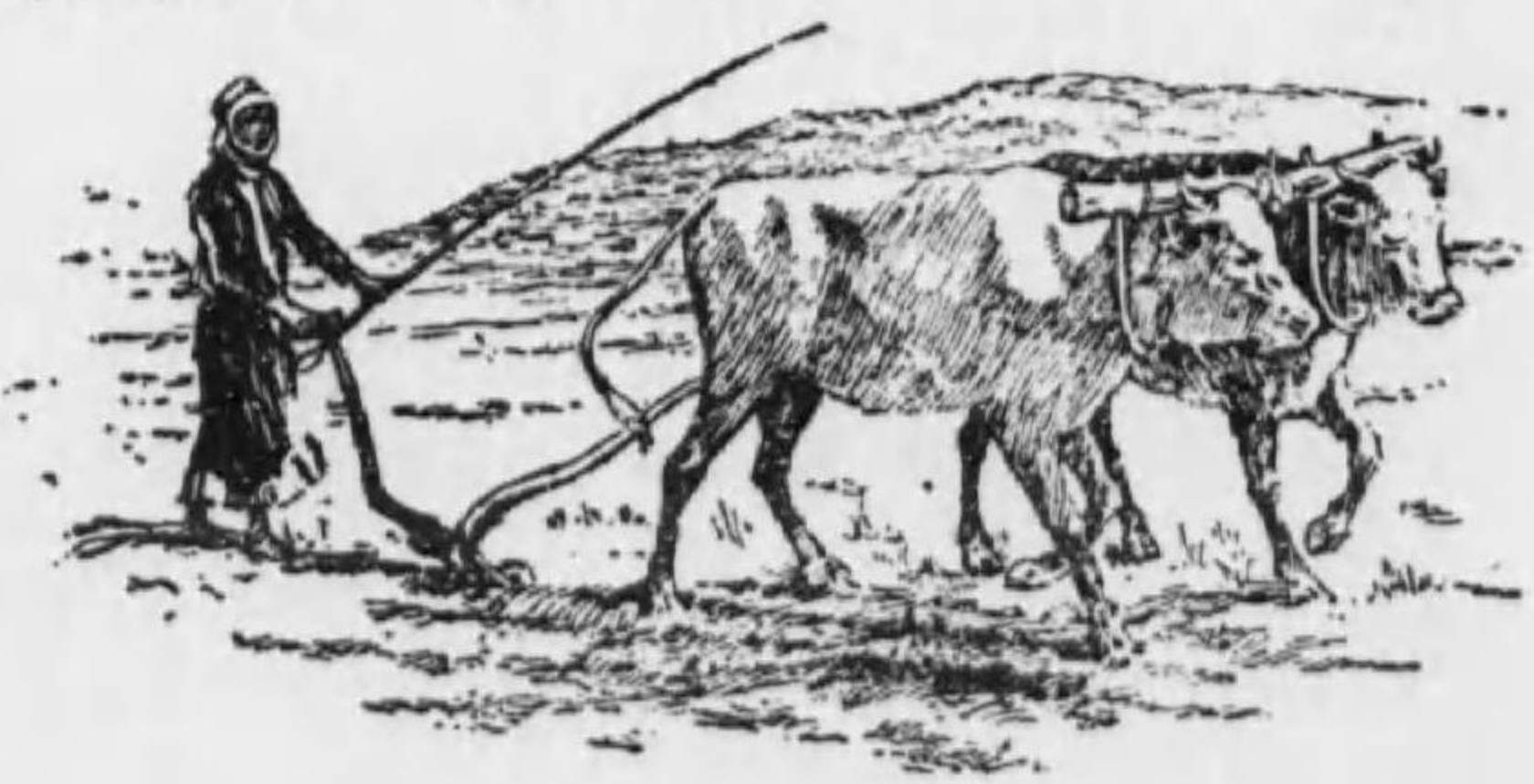
クプロ 人名 (男) 【ラテン語】駐軍? クラウデオの全名は「チベリウス・クラデイウス・ドウルス・ネロ・ゲルマニクス」

クラウデオ

人名

「チベリウス・クラデイウス・ドウルス・ネロ・ゲルマニクス」

い名である。彼はカイザル王朝第四の羅馬帝で、カリグラの後を繼いで、紀元四十一年より五十四年まで十三年間その政を執つたが、その妻アグリピナの爲に毒殺された。彼の御代にアンテオケ教會は設立せられ、又三年間續いた飢饉があつた。(使徒行傳十一の廿八・三十)。又ロマに居住してゐた猶太人が騒亂を起した爲、これをロマ府より追放した(使徒行傳十八の二、紀前五二年)。



キ ビ ク

クプロ クラウデオ

クラニオン クリイロ クルマ クレニオ

**クラニオン**

**地名**

【ギリシヤ語「頭蓋骨」】

これはエルサレム郊外にあつた小丘の名で、その

形が頭蓋骨に似た所から、かやうに名づけられたのである。イエス・キリストはこの處で十字架に磔殺せられ給うた（ルカ傳廿三の三十三）。改譯に「髑髏といふ所に云云」とあるが、この方がよろしい。これを英語でカルバリといふのは、頭蓋骨のラテン語譯カルバリアより來たのである。固有名詞とするならばゴルゴタといふのが至當で、カルバリ山なごいふは當を得てをらぬ。尙別項「ゴルゴタ」を見よ。

**栗色**

**雜語**

別項「色（聖書の）」を見よ。

**車**

**物名**

別項「戦車」を見よ。

**クレニオ**

**人名**

（男）【ギリシヤ語「クレネの」】

羅馬人で、イエスキリストのベツレヘムに生

れ給うた時、スリヤの國を治めた羅馬の總督である（ルカ傳二の二）。彼がスリヤの總督として在職した事は前後二回あつた。即ち紀元前四年より一年までと、紀元後六年以後との二回であつた。ヨセフアスの記録に後者のみが記されてある爲、ルカのこの記録を間違つてゐるとした者も多數あつたが、ザムプトといふ人の研究の結果、スリヤの總督の名とその年代表がわかり、前者が明かになると共に「クレニオ、シリヤの總督たりし時に行はれし初のものなり」との注意深い記事の確かである事が知れて來た。但クレニオの最初總督となつた時は紀元前四年の秋であつて、ヘロデの死はその春であるから、尙そこに過誤がある様に思はれるけれども、この戸籍調査がクレニオの前總督ワラス（紀元前六―四年在職）の時より始まつたもので、クレニオの在職中完成せられたものである所から、これをワラスの戸籍調査とはいはず、クレニオの戸籍調査といつた事を知るならば、何の矛盾もなくなる譯である。而してこれはキリストの降誕を紀元前五年の十一月頃と見る我らの見解に裏書するものである。

**クレネ**

**地名**

【ギリシヤ語「城壁」】

阿弗利加洲の北部、上リビヤの市邑で、クレナイカといふ

國の首府である。この市邑は紀元前六百三十二年ギリシヤの殖民によつて創めて建てられた市邑であつたが、アレキサンダー大帝崩御の後にはエジプトの國に屬し、夥多の猶太人がここに住んでゐた。又イエスの十字架に釘けられ給うた時、その十字を負うて彼に従つたシモンは、この地に住んでゐた猶太人であつた（マルコ傳十五の廿一）。五旬節の時、この市邑よりエルサレムに來てゐたものがあつた（使徒行傳二の十）。又クレネの猶太人はエルサレムに會堂を有し、且つ初代の基督教徒を迫害するに名高かつた（使徒行傳六の九―十三）。現今この市邑は荒果てて住む人もなく、唯猛き獸と、遍歴するアラビヤ人の時時徘徊するのみである。

**クロス**

**人名**

（男）【ベルシヤ語「太陽」】

ベルシヤ王カンピセスの子で、メデヤの王ダリヨス

の甥である。彼は才能勇氣の最も優れた者であつたが、初めベルシヤ國の大將軍となり、後紀元前五百五十九年に至り、遂にメデヤ・ベルシヤ兩國聯合の王となつた。彼が諸國と戦ひ勝ち、西部亞細亞諸國を悉く征服した時、有名なるバビロン國も亦その中であつた。而して七十年間バビロン國に捕囚となつてゐた猶太人を解放して、本國猶太に還らしめ、且つ神殿を再建する事を許して、これに種種の扶助を與へた（イザヤ書四十四の廿八、四十五の一―七、歴代志下三十六の廿二・廿三、エズラ書一の一―七、ダニエル書六の廿八）。斯くて王は紀元前五百廿九年に至り、會て戰場に於て受けた傷を病んで薨去した。預言者ダニエルはクロス王の大臣であり、又その親友であつて、その宮殿の中に住つてゐた。

**黒き色**

**雜語**

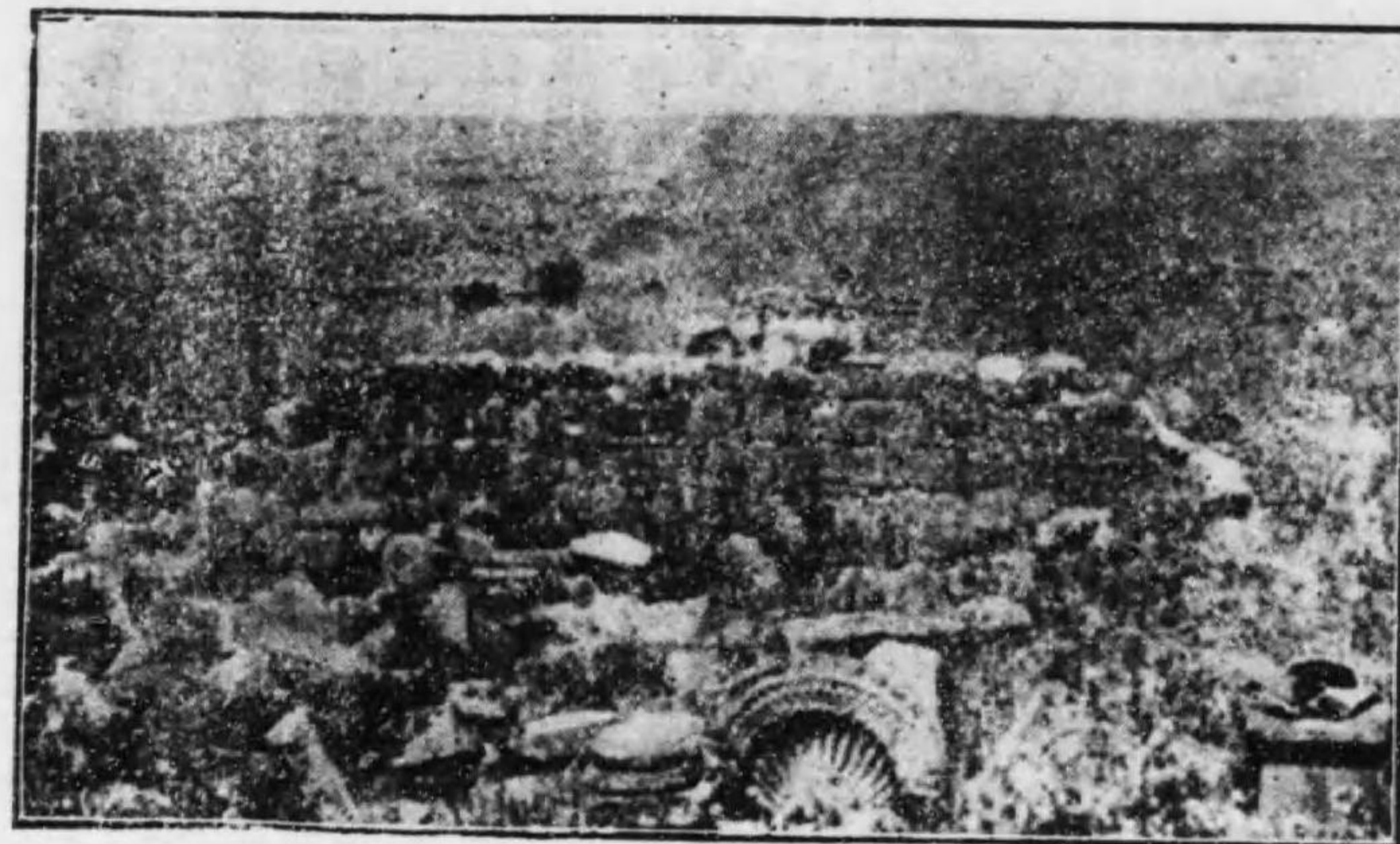
別項「色（聖書の）」を見よ。

**會堂**

**建物名**

以色列人がバビロンに捕囚となつてゐた際、彼らは神を禮拜すべき場所即ちエルサ

クレネ クロス クロキイロ クワイドウ



カペナムの會堂の跡(現存せる唯一の會堂)

レムの神殿に於て禮拜する事が出来ない爲、處處に會堂を設け、そこで聖書を誨へ、祈禱をする習慣ができた。而して彼らは本國バレスチナに歸還した時、その組織をも携へ歸り、これを移植した(ネヘミヤ記八の二、九の一、エズラ書八の十五參照)。マカビ一ス獨立戦争後に至りて、この會堂の数は次第に増加し、各町村に一個若くは數個の會堂があり(使徒十五の廿一)、エルサレムの如きは四百八十個の會堂があつたこの事である。而して各國に散在してをる猶太人が、祝節筵にエルサレムに來會した際は、各自その地方人の會堂に集るを得たのである(使徒行傳六の九參照)會堂は通例市中に建てられたが、又野外に設けられたものもある。又祈禱前に沐浴する便宜の爲に、河又は水邊に設けられた事もある。會堂の大小は會衆の多少によつて異なつたが、その方向は一定し、會衆の室内に入るや、エルサレムに向つて禮拜し得るやうに建てられてあつた。會堂を建築し、且つこれを維持する事は會衆の責任であつたが、或場合には篤志の個人によつて建設せられた事がある。又異邦人の中にも會堂を建設して猶太人に寄附したものもあつた(ルカ傳七の五)。會堂に入つて集會室の内部を窺へば、正面に高座の設けあり(マタイ傳廿三の六、ルカ傳四の十六、

ヤコブ二の三)、聖書を読む者の爲には一段高き所が設けられてをる。聖書の巻物は美麗な裝飾を施した箱に藏められ、これを納むる爲に正面に押入の設があつた。入口には施濟金を投ずる函を備へ、また節筵の日に喇叭及びその他の樂器を納める箱もあつた。會堂では犠牲を備ふる祭典を行ふ事を禁ぜられ、單に祈禱を献げ、聖書を読み、これを解釋するばかりであつた。その主なる目的は會衆をして聖書の歴史と教義、殊に律法に通ぜしめん爲に、祈禱を献ぐる事であつた(マタイ傳四の廿三、ルカ傳四の十五、マルコ傳一の廿一、ヨハネ傳六の五十九)。會堂では男女の席を分ち、又老幼の席をも異にした。會衆が集るに先づ祈禱を以て式を始め、シマミ稱する信仰の告白を唱へる。その語句は申命記六の四以下に十一の十三―廿一、民數紀十五の三十七―四十一を加へたものである。次にテヒラミ稱する祈禱を唱へる。祈禱の間會衆は起立し、祈禱者が朗かにその音聲を掲ぐれば、全會衆はアメンミ唱へてこれに應ずる。次には聖書中より律法書の一部を朗讀する。(律法書は禮拜用の爲に百五十四部に小分せられて、三年毎に一回これを讀み終る事に定められてあつた)。この職は會衆中で適宜にこれを爲すを許された。その人は宰又は長老の指名に應じ、指定せられたる所を朗讀した。イエスの時代には預言書中より撰んだ課程があつて、律法書に加へて安息日の禮拜には必ず之を讀む慣であつた(使徒行傳十三の廿七、ルカ傳四の十七)。會堂の役員は長老・宰及び執事の三職で(ルカ傳七の三、十三の十四、使徒行傳十三の十五)、長老は會堂を總攝し、司法權をも有し、人を鞭ち又は破門する等をなす權能をも有つてゐた。宰は會堂に關する日常の事務を掌つた。執事は會堂の開閉・書卷の整理・刑の執行若くは小兒の教育等の事を掌つたのである。新約書にはこれを「係りの者」ミ稱んでをる(ルカ傳四の廿)。説教をする事は會衆中の適任者に依頼せられた(ルタ傳四の十六、使徒行傳十三の十五・五)。會堂は安息日毎、又毎週二回禮拜

式があつたが、ここは又學校にもなり、小裁判所にもなつたのである。學校は六歳以上入學を許され、毎日開かれて、讀書・算術及び猶太人の律法を教へてゐた。律法はレビ記をもこし、それにモーセの五卷の殘部、又は猶太教の歴史の書、次に預言書を教ふる順序であつた。

光榮(改譯) 榮光

術語

諸ての人及び物の殊に勝れて善美なるをその光榮又は榮光といふ。

レバノン山の榮光はその繁茂したる木である(イザヤ書三十五の二、六の十三)。人の榮光はその靈魂である。又その舌である(詩篇十六の九、三十の十二)。神の榮光はその工にあらはれてをる(詩篇十九の一)。即ちこれらは神の限なき權能・智慧・清潔及びその正義と眞實と恩恵とを顯はしてをるのである。又時によりては神の光輝・譽・尊貴をもその榮光といふ(詩篇六十六の二、七十二、七十二の十九、イザヤ書六の三、マタイ傳十九の廿八、ルカ傳廿一の廿七)。また信者の爲に天に備へられたる福をも榮光といはれてをる(ロマ書八の十七、コリント前書十五の四十、同後書四の十七、ピリピ書三の廿一、コロサイ書三の四、ヘブル書二の十、ペテロ前書五の四)。すべて信者はその信仰と善行とによつて神の榮光を顯はすべきである(コリント前書六の廿、ペテロ前書二の十二、ヨハネ傳十五の八)。

火祭

禮典

別項「禮物」を見よ。

灌祭

禮典

別項「禮物」を見よ。

クミン(改譯) 馬芹

植物名

別項「馬芹」を見よ。

ケ

系圖

情例

血統によりて父より子子孫孫に傳はる順序に従ひ、若くは法律上産業を繼ぐ者の順

序に従つて、先祖代代の血統を一一に列擧した記録である。ヘブル人は特にその系圖を重んじ、これを保存する事に注意した。それは彼らの支派の區別、土地の所有權、高位の役目、若くは特別の權は、悉くその系圖に基つて定まるからである(歴代志下五の一・十七、九の一、歴代志下十二の十五、エズラ書二の六十二)。それ故ヘブル人の公の系圖は代代の騷亂變動の中にも確く保存せられた。聖書中には三千年五百年以上、四千年の久しきに亘る系圖がある。それらの系圖は血統によるよりも、寧ろ相續權によつたものが多い。それであるから先祖の子等とは必ずしもその先祖の産んだ所の子等ではない(創世記四十八の五、民數紀廿六の四十一)。系圖中時としては一代若くは數代を省略された場合もある。レビ、ダビデ及びエズラの系圖にそれを見る(出エジプト記六の十六・廿一、ルツ記四の十八・廿一、エズラ書七の一・五)。マタイ傳の卷頭にあるイエスの系圖中にもこの省略法が用ゐられてをる。即ち八節のヨラムミウジャの間にアハジャ、ヨアシ、アマジャの三代の省略があり、十一節のヨシヤミエコニヤの間にエホヤキムが略されてをる。而して彼らが己が好みに従つて系圖を區分し、又は神祕なる方法によつて同じ數を作る事をその習慣とした事は、この系圖中にも七、若くは七の倍數十四を三たび重ねた事によつてあらはれてをる。

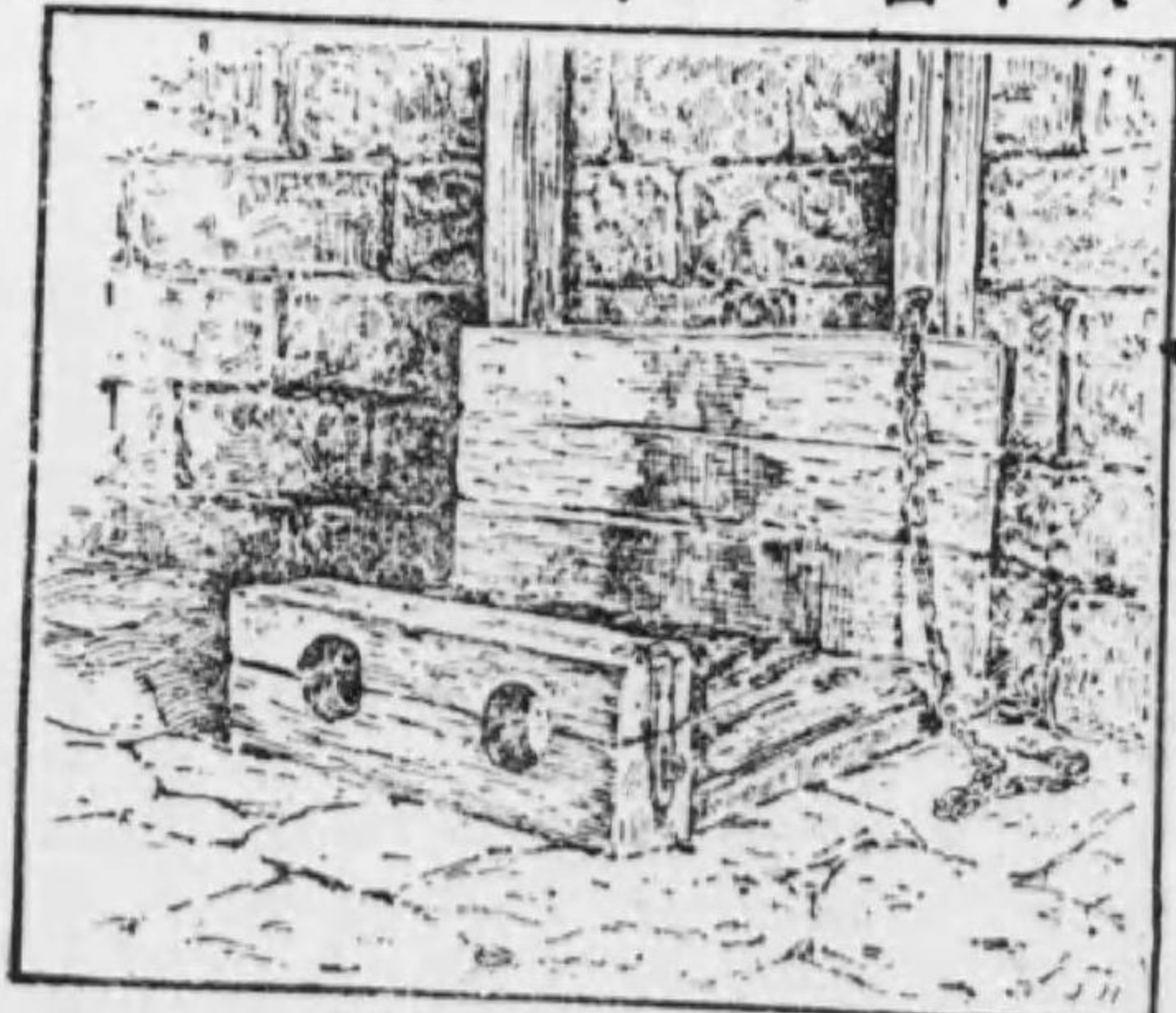
刑罰

制度

刑罰とは罪惡又は過失を犯した者に、權威ある者が蒙らす苦痛で、以色列人及び基督教會内に行はれた者のみを記す。1 誣はる(コリント前書十六の廿二)。之は唯に晚餐に陪する特權を失ひ、教會より放逐せらるるのみならず、神の恩恵に離れ、惡魔に交され(コリント前書五の五)、誣はれ(ガラテヤ書一の八)、沈淪に至る(ロマ書九の五)をいふ。2 追放(エズラ書七の廿六、默示録一の九)。3 鞭撻(ヨハネ傳十九の一、使徒行傳十六の廿二)。その刑具は革で造られた鞭で、革鞭で

ケイバツ

打つ数は三十九を過すこゝは出来ぬ規定であつた(使徒廿二の廿五、コリント後書十一の三十四・三十五)。**4** 刎首(列王紀下十の六―八、マタイ傳十四の八・十、使徒行傳十二の二、黙示録廿の四)、モ―セの律法にはこの刑が許されなかつたが、アツスリヤ人、ベルシヤ人、ギリシヤ人、羅馬人等は屢こ  
 れを行つた。**5** 眼を抉る事(出エジプト記廿一の廿四、七師記十  
 六の廿一、列王紀下廿五の七)。**6** 烙刑及び焚殺(創世記三十八  
 の廿四、レビ記廿一の九、廿の十四、十の―三、七師記十四の十  
 五)。時として奴隷の手に焼印を押す事があつたが(イザヤ書十四  
 の五)、猶太の律法はこれを禁じてをる(レビ記十九の廿八、ガラテ  
 ヤ書六の十七)。**7** 白で搗く事(箴言廿七の廿二)。**8** 没收(エ  
 ズラ書六の十一、申命記二の五、三の廿九)。**9** 十字架刑。『十字  
 架』を見よ。**10** 民の中より絶たる事(創世記十七の十四、レビ  
 記十八の廿九、廿の九―十一、民數紀十五の三十、出エジプト記三  
 十の三十三、レビ記廿三の廿九・三十、民數紀九の十三)。**11** 神  
 より來る刑罰。俘囚(エズラ書九の七、エレミヤ記十五の二、アモ  
 ス書九の四)、早魃(申命記十一の十七、イザヤ書五の六、エレミヤ  
 記十四の一―七)、饑饉(エレミヤ記廿四の十、三十四の十七)、疫病  
 (エゼキエル書六の十一、七の十五)等。**12** 水に溺らす事(マタイ傳十八の六、マルコ傳九の四十二)。  
**13** 猛獸に付す事(ダニエル書六、コリント前書十五の三十二)。**14** 贖罪金(出エジプト記廿一の三



櫃 足

十、民數紀三十五の三十一・三十二)。**15** 皮を剥ぐ事(ミカ書三の二・三)、アツスリヤ人の間に行はれ  
 た刑罰で、ベルシヤ人は皮を剥いだ後に十字架に釘け、且つその皮をば使用したこの事である。**16** 木  
 に懸ける事、これは死屍を木に懸けることである(サムエル前書三十一の十、同後書四の十二、廿一の  
 九、申命記廿一の廿三、ヨシヤ記八の廿九、エステル書五の十四、七の九・十、九の十四)。この語は  
 又尖つた材に刺し貫く義に用ゐられる。この風はアツスリヤ及びベルシヤに行はれた。**17** 絞殺(哀歌  
 五の十二、サムエル後書十七の廿三)。**18** 禁獄(士師記十六の廿一、エレミヤ記三十七の十五)。**19**  
 辱しむる事。その方法は種種あつた。或る罪人はその死屍を街上に棄てられ(詩七十九の二・三)、或は  
 焚かれ(ヨシヤ記七の十五・廿五)、或は木に懸けられ(サムエル後書七の十二)、或は石を投げられ  
 た(ヨシヤ記七の廿五・廿六、八の廿九、サムエル後書十八の十七)。**20** 身體を毀損する事(士師記  
 一の六・七、サムエル後書四の十二、ダニエル書二の五、サムエル前書十八の廿七、エズラ書廿三の廿  
 五)。**21** 毛髪を抜く事(民數紀十三の廿五、イザヤ書五十の六)。**22** 投げ落す事(歴代志下廿五の十  
 二、列王紀下八の十二、ホセア書十の十四、十三の十六)。**23** 損害賠償(出エジプト記廿一の十八―三十  
 六、レビ記廿四の十八―廿一、申命記十九の廿一、レビ記六の一―五、民數紀五の五―十、出エジプト  
 記廿一の三十二、廿二の五・六、ルカ傳十九の八)。**24** 復讐(出エジプト記廿一の廿二―廿五、レビ記  
 廿四の十九―廿二)。**25** 鋸でひく事(ヘブル書十一の三十七、箴言廿の廿六、サムエル後書十二の三  
 十一、歴代志上廿の三)。**26** 荆棘を以て打つ事(士師記八の十六、列王紀上十二の十一)。**27** 奴隷ミ  
 する事(出エジプト記廿一の三、列王紀下四の一、ネヘミヤ記五の五)。**28** 鎗又は劍を以て殺す事(出  
 エジプト記十九の十三、民數紀廿五の七・八、出エジプト記三十二の廿七、サムエル前書十五の三十三、

廿二の十八・十九、同後書一の十五、列王紀上二の廿五以下、同下十の七。**29** 桎梏（歴代志下十六の十、エレミヤ記廿の二、ヨブ記十三の廿七、三十三の十一、箴言七の二十二、使徒行傳十六の廿四）。**30** 石で打殺す事（出エジプト記八の廿六、ヨシユア記七の廿五、レビ記廿の十、申命記廿二の廿一、廿四、ヨハネ傳八の五・七、レビ記廿四の十一・廿四、列王紀上廿一の十、使徒行傳七の五十八、ヨハネ傳十の三十一、レビ記廿の六・廿七、申命記十三の十、申命記廿一の廿一、申命記十三の五、出エジプト記三十一の十四、三十五の二、民數紀十五の三十五）。**31** 答刑（レビ記十九の廿、申命記廿二の十、申命記廿五の三、コリント後書十一の廿四）。**32** 窒息せしむる事。ペルシヤ人の刑罰でギリシヤ人の中にも行はれたが、聖書には録してない。

契約

術語

世間普通の意味でいふならば、契約とは能く考へ、嚴かに約束することである。神人との契約といふも、神が嚴かに約束し給ふ事である。ヘブル語では契約をする事を契約を切るといふが、これは契約をするに際して、牛羊の類を二つに切つて、その間を辿つたからである（創世記十五の十以下）。聖書は舊約と新約の二つになつてをるが、これは二つの時代を指すもので、即ち舊約は律法の契約、新約は恩恵の契約である。律法の契約はモーセによりて以色列人に授けられ、その中には多くストによりて與へられ、その寶血によりて印證せられ、萬國の信徒に救拯し永遠の生命の幸福を與へるのである（ヘブル書八）。民數紀十八の十九及びその聖書の所所に見えてをる「鹽の契約」は、鹽を以てその約束を堅めた契約で、即ち永遠不變の契約である事を意味する。

契約の櫃

物名

律法の櫃、エホバの櫃、又神の櫃ともいはれてをる。これはモーセに示し給う

た雛形に従ひ、合歡木を以て作り、その内外を金で蔽うた櫃で、神の幕屋や神殿の至聖所に据置かれたものである。この櫃の大きさは長さ二キュビト半、幅一キュビト、高さ一キュビト半であるから（出エジプト記廿五の十一・十六）、普通これを長さ三尺七寸五分、幅一尺五寸、高さ二尺二寸五分に換算せられてあるが、聖キュビトによつたものさすればもすこし大きいものであつたにせねばならぬ。櫃の上の周圍に金の縁があり、その蓋のやうに置かれた純金の贖罪所がある。贖罪の兩傍に相對つて禮拜する如き形に造られた二個の純金のケルビムがあつた（出エジプト記廿五の十六・廿二）。その櫃の中に三つのものが藏められてある。即ち契約の石板二枚、マナを藏めた金の壺、アロンの芽さした杖である（申命記三十一の廿六、ヘブル書九の三・四、民數紀十七の八）。この契約の櫃の上にある贖罪所即ち兩個のケルビムの中間は、以色列の神エホバが、その民に會ひ又語り給うた場所である（出エジプト記廿五の廿二、民數紀十七の四）。この櫃を見、これに觸れ、亦これ運び得るものは祭司等のみであつて（歴代志上十五の十二・十三）彼らがこれを運ばんとする時は、まづ障蔽の幕を取おろし、これをもつてこの櫃を覆ひ、その上



契約の櫃



に籬まきの皮の蓋をほきこし、またその上に總青の布を打かけ、その竿さきをさしいれたのである（民數紀四の五・六）。この竿は平素抜き放つことなき規定であつたから（出エジプト記廿五の十四）、唯この時だけ寸時抜いたものであらう。以色列人が曠野を旅行する際、この櫃は彼らの中央にあつて進み、彼らの滯陣中はその營の中央に組立てられた神の幕屋の中に納められてあつた。彼らがヨルダン河を渡つて約束の地に入る際には、契約の櫃は先ちてヨルダン河に入り、彼らの悉くが渡り終へるまで河中に立ち、而して後カナンに入つたのであつた。これは『信仰の導師またこれを全うする者なるイエス』のよき型である（ヨシヤ記三、ヘブル書十二の二）。次でエリコ城は、この櫃の前に壊れた（ヨシヤ記六の四―十二）。以色列の民がシケムに於てかの嚴かなるアーメンを唱へた時、契約の櫃は呪詛を宣言せられたエバル山に据ゑられてあつた（ヨシヤ記八の三十一―三十五）。その後契約の櫃は暫くギルガルに置かれたが、後シロに移され（ヨシヤ記十の四十三、十八の一）、また以色列の陣營に昇り入れられた。けれどもペリシテ人との戦があつて、以色列人は櫃を昇出したが、意外にも敗戦し、櫃は奪はれてペリシテ人の手に入つた。しかしその櫃の至る處で彼らに取つて著しき凶事が起つた爲、彼らはこれを持餘して以色列に歸したので、爾後數十年間櫃はキリアテヤリムに置かれてあつた（サムエル前書四の一―七の一）。その後サウル王の世に至りてはノブさいふ處にあつたが、ダビデ王の治世にこれをシオンに移し、ソロモン王はエルサレムに神殿を建てて、その至聖所に安置した。（歴代志下五の二―八）。後にユダの王が偶像を以て至聖所を汚した時、祭司等は神の櫃を神殿より他へ移したやうであるが、ヨシヤ王の時に至り、命じてこれを神殿へ移さしめ、再び他へ昇り去ることを禁じた（歴代志下三十五の三）。猶太人がバビロンへ虜こなつた時、神の櫃も亦遂に打壞されたか、或は敬虔な猶太人によつて隠されたか、その後これが

所在を知るものは絶えてないのである。

ケイラ

地名

【ヘブル語「包圍」】

1 エルサレムの西南、ペリシテの境にあつたユダの地の邑で（ヨシヤ記十五の四十四）、ペリシテ人がこの邑を攻めた時、ダビデはこれを撃つてその住民を助けたが、その住民は恩をそれにも思はず、ダビデをサウルの手に解なさうと企てたので、ダビデはここを去つてこれを通れた（サムエル前書廿三の一―十三）。ネヘミヤの時代に、この邑の知事が築城に加はつてをる記事がある（ネヘミヤ記三の十七）。今はクルーベツト・キラミ稱び、ワデイ・エス・スルの高みにある廢趾に掩はれた丘である。この處は海拔千五百七十五呎の所、丘の階段は穀物畑でかこまれてをる。アドラムのつい南でエリユーテロポリスの東八哩に當つてをる。傳説には預言者ハバククがここに葬られたとある。2 人名（男）（歴代志上四の十九）。

教會

備語

教會ケクワイとは多くの人の中より呼出された者さの意で、聖書に於て教會ケクワイといふのは神を敬ひキリストを信する人人が、神を禮拜する爲に集る所の團體である（使徒行傳二の四十七）。新約書に此語が百十一回記されてあるが、其内容により四種の區別がある。1 教會を稱して公同教會ケクワイといふ時は、國國世世の眞の信徒より成り立つ者で（ヘブル書十二の廿三）、その内之を（イ）眼に見えざる教會ケクワイ、（ロ）目に見ゆる全世界の教會の總稱ケクワイ二つに區分する。2 又同一地方にあるキリスト信者が、神を禮拜し聖き生活をなしキリストの國を擴張する爲に結合する者をも教會ケクワイといふ。多くは其地名を冠らせ、たごへばロマの教會、コリントの教會、エペソの教會、アンテオケの教會ケクワイといふのは之である。3 又地方の數教會をも引くるめて教會ケクワイよぶ事もある（使徒行傳九の三十一、十五の四十一、十六の五、コリント後書八の一・十八・十九・廿三・廿四、ガラテヤ書一の二・廿二、黙示録一の四・十一・廿）。尙

教會を神の國・キリストの國・神の家ともいひ（マタイ傳十六の十八、十八の十七、コリント前書六の四、テモテ前書三の十五）、キリストの體ともいふ（エペソ書一の廿三、コロサイ書一の廿四）。キリストは教會の首であり、その監督・その隅の首石である。彼は己の血を以てこれを買ひ給うた事ある（使徒行傳廿の廿八）。

**【職名】**

二の三十五、ルカ傳十の廿五。これは新約書に於て「學者」を稱はれてをるものと同じであらう。別項「學者」を見よ。

**【術語】**

瀆す事 神の聖なる名を誇り、その聖旨に叛く行爲をなす事を瀆す事といふ、猶太人は罪を犯して神の名を瀆した（エゼキエル書三十六の廿）。新約時代に於ては、自らを神の子といひ、神に等しき者とする事を瀆す事といつた。これは死に當る罪である。それ故イエスが自己を神の子と稱ひ給ひし事は、祭司や學者等の目に無上の罪惡者に見做されたのであつた（マタイ傳九の三、廿六の六十五、ルカ傳五の廿一）、聖靈を瀆す罪とは明かに神の聖業である事を知りつつも、わざとこれを惡魔の行爲と誣めることである。イエスが「御靈を瀆すことは赦されじ」と述べ給うたのは、彼が盲目の啞者を癒し給うた時、バリサイ人らがこれを「惡鬼の首ベルゼブルによる」としたからである（マルコ傳三の廿二―三十）。又キリストが明かに神の子たる事を知りながら、而して一旦確かにその恵を受けながら、これを拒み詛ふ事も聖靈を瀆す罪である。但弱くして計らずも罪に陥り、悔い悲んで神に立歸りたく、心に願ふ者は、未だ聖靈を瀆す罪・赦されざる罪を犯したといふべきではない。

**【地名】**

ゲシユル 【ヘブル語】橋】 ヨルダン河の東、バシヤンの東北の方にあつたスリヤの小國

である（申命記三の十四、サムエル後書十五の八、歴代志上一の廿三、ヨシユア記十三の十三）。ダビデはこの國王の女を娶つて、その後（サムエル後書三の三）その後よりアブサロムが生れた。それ故アブサロムはその兄ノアムンを殺した後、この國へ身を避けたのである（サムエル後書十三の三十七）。  
**【地名】** ゲゼル 【ヘブル語】懸崖】 カナン人の重なる邑であつたが、ヨシユアはその王を撃つてこれを占領した（ヨシユア記十の二十三、十二の十二）。後ベニヤミンの支派に與へられたけれども、カナン人は依然この處に住んでゐた（ヨシユア記十六の十）。又この邑はしばしば戰場となつたが（サムエル前書廿七の八、同後書五の廿五、歴代志上廿の四）、マカビー戦争の時代には最も激戦が戦はれたのである。こんな所であるから、「若しもゲゼルの邑の周圍に仆れたもの凡て―エテオビヤ人・ヘブル人・アツスリヤ人・アラブ人・ツラン人・ギリシヤ人・ローマ人・ケルト人・サクソン人・モロコ人―が審判の日に起ち上るならば、その光景は如何であらう。」といふ諺がある程である。尙列王紀上九の十六、十七を見ればパロ王がこれを攻め取つてソロモン王の妻であるその女に與へた事、及びソロモン王が再びこの邑を建てた事が記されてある。位置はエマオ（アムワス）の北四哩、平原より二百五十呎の丘にあつた邑で、今はテル・エゼルといふ。考古學上の参考品が發掘されたが、その一は壺に子供の遺骨の入れられたもので、それが焦けてをる所から見るにモロクに捧げたものらしいこの事である。

**【人名】**

ゲダリヤ 【人名】（男）【ヘブル語】エホバは大である】 パビロン王ネブカデネザルがユダヤの代官とした人である（列王紀下廿五の廿二、エレミヤ記四十の五）。預言者エレミヤはゲダリヤの親しき友であつた（エレミヤ記四十の六）。又彼は大に民の信用を受けた人であつたけれども、遂にユダの血統より出でたイシマエルの爲に殺された（エレミヤ記四十一の二）。

ケダル ゲツセマネ

**ケダル** **人名** 【ヘブル語】力が強い】 アブラハムの子なるイシマエルの次男である（創世記廿五の十三）。その子孫はアラビヤ人の重なる宗族となつた。彼らの住んだ國をもケダルミといつた（イザヤ書廿一の十六、エレミヤ記四十九の廿八）。彼らは定まつた市邑をもたず、黒い毛で製した天幕に住み（雅歌一の五）、多くの家畜を有し、これを牧ふ爲に水草を追うて處處を歴めぐり、或は村落の中に住んだ。詩篇の一記者は彼らが好戰的種族である事をのべてをる（詩篇百廿の五―七）。

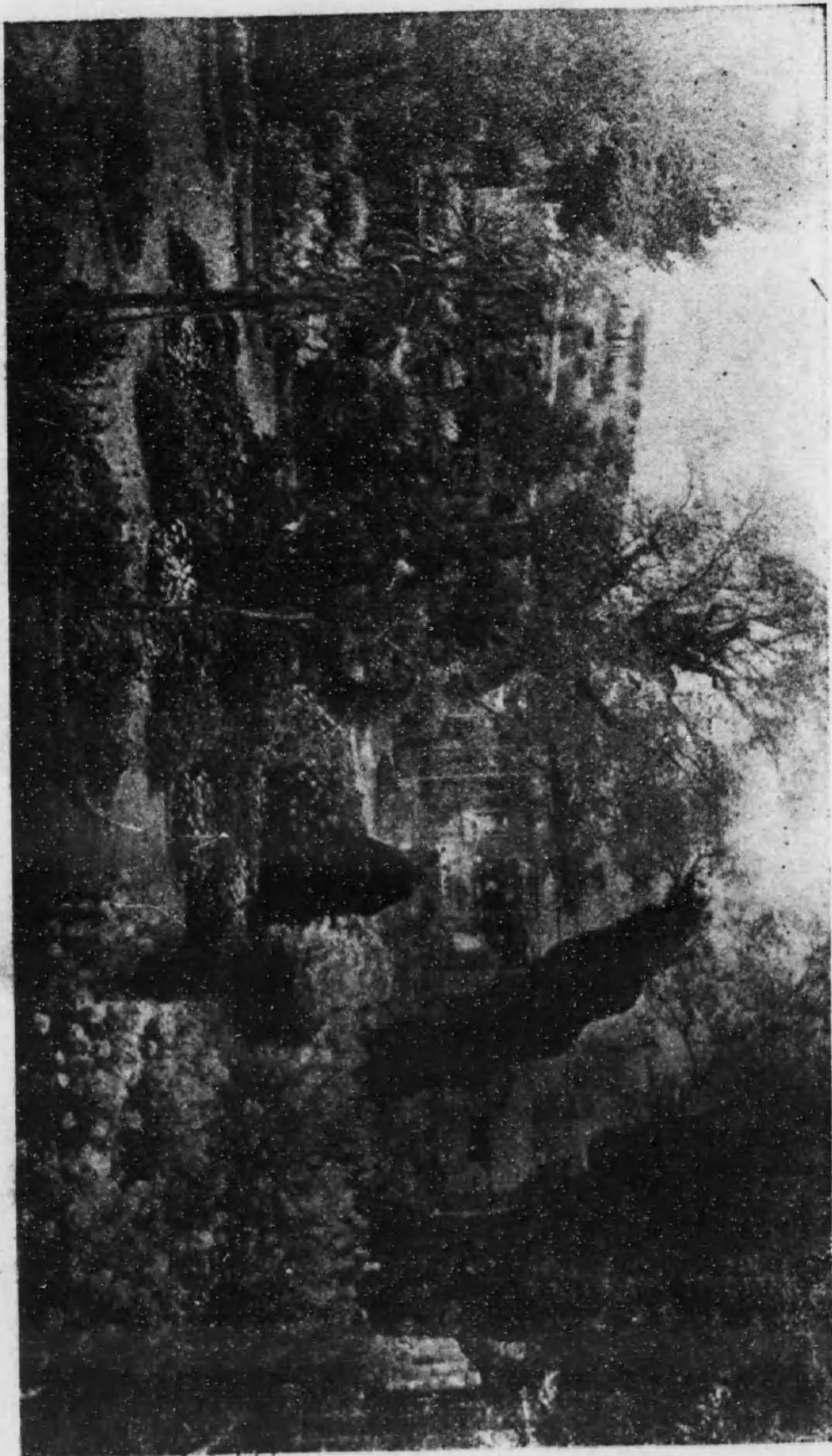
**ゲツセマネ**

**地名**

【ヘブル語】油搾木】

ゲツセマネはエルサレムの東にあるオリブ山の西麓

にあつた小園で、この名を得たのは、その處に橄欖の樹が多くあつて、そこで油を搾つたからであらう。イエスはその弟子と共に、屢この處へ來給うた（ヨハネ傳十八の一・二）。而してその十字架に釘けられ給ふ前夜、ここで血の汗を流して熱禱し給うた（マタイ傳廿六の三十六―五十七）。園の廣さは千二百坪ばかりで、往來の人に自由に出入が許されてゐたのであるか、或はその所有主はイエスの友人若くは弟子であつたかであらう。近代これをマルコの母マリヤの所有であつたとする學者があり、そのわけで最後の祈禱場にゐたかの青年を、マルコだと言つてをる（彼をマルコだとする理由は他にも二三ある）。現今は馬車の通ふ大路に沿うて、歪める四角の石塀で圍まれ、その園を稱せられる所は經七十歩、鐵柵を繞らした中に、樹齡千年以上の橄欖の古木が八本ある。その最大なるものは幹圍四尋を超え、小なるものも三尋餘ある。枝葉は茂りながら、幹が腐蝕して空洞になつたのを、石で圍んであるものもある。他に柏檜類及び草花を栽培し、客あれば黒衣繩帶のフランシスカン派の番僧が之を迎へ、花を呈して保存料を請求する。柵外には硝子窓の温室さへ設けられてある。ユダが接吻した場所や、三弟子が意氣地なく眠つたといふ岩は、塀外の上方面にある。



ゲツセマネの今現

**ケテシ** **地名** 【ヘブル語「分離」又は「聖い】 1 ヨシユア記十五の二十三、ユダヤの南にあつた邑で、所は不明である。カテシバルネアミは別であると思ふ者もあるが、或は同じ處であるかも知れぬ。2 歴代志上六の七十三、イツサカルの支派の中にある邑であるが、これは多分キシオンの書き違ひであらう（ヨシユア記廿一の廿八参照）。3 ケテシ・ナフタリ（士師記四の六）。ガリラヤのケテシ（ヨシユア記廿の七）なご稱ばれた邑である。これはレビ人に與へられた邑で（ヨシユア記廿一の三十二）、また逃遁の邑として選ばれた邑である。これはガリラヤ中でも繪畫的の場所の一として知られてをるよき景色の處である。現今はケテスミいふ村で、位置はメロム湖の西にある。

**ケテロン** **地名** 【ヘブル語「混濁】 エルサレムの西北の方一哩半許距つた所から流れ出で、エルサレムミオリブ山の間の狭き深谷を経て、死海に注ぐ谷川である。その水は夏期は涸れるけれども、冬期に至れば増してその流が激しくなつた。その川の延長は約十五哩である。ユダの王等は屢偶像ミコレに附屬する物をこの川で焼きすてしめた（列王紀上十五の十三、歴代志下十五の十六、廿九の十六、三十の十四、列王紀下廿三の四・六・十二）。その兩岸には人の屍が多く葬られた（列王紀廿三の十六）。**ケトラ** **人名** 【ヘブル語「香】 アブラハムの妻サラの死んだ後、彼の後妻ミなつた婦人である。アブラハムは彼によつて六人の子を産んだ（創世記廿五の一・六、歴代志上一の三十二）。

**ケナズ** **種族名** 【ヘブル語「脇」又は「側面】 1 アブラハムの時代にカナンの地に居つた一族である（創世記十五の十九）。2 **人名** 【人名】（男）エサウの子なるエリバズの第四子（創世記三十六の十一・十五、歴代志上一の三十六）。3 カレブの兄弟（ヨシユア記十五の十七、士師記一の十三、三の九・十一）。4 カレブの孫（歴代志上四の十三）。

ケテシ ケテロン ケトラ ケナズ

ケニビト ケネサレ ケバ ゲバ ゲハジ

**ケニ人** **種族名** **「ヘブル語『鍛冶屋』」** 1 紅海の東方、バレスチナミシナイ山の間におた種族である。モーセの舅であるエテロはこの種族の者である(創世記十五の十九、士師記一の十六)。この種族の或部分は北方へ移つた(士師記四の十一)。カナン王ヤビンの總指令官シセラを釘で打殺したのはケニ人の婦人であつた(士師記四の十七-廿一)。サウルミダビデはアマレクを打滅した時、彼らを救うた。それはこの種族がその昔以色列人に恵を施したからである(サムエル前書十五の六、廿七の十、三十の廿九)。

**ケネサレ** **地名** バレスチナにある湖水。これはガリラヤ海の別名である。その項を見よ。

**ケバ** **人名** (男) **「アラマイク語『岩』」** ギリシヤ語のベテロミ同様、岩の義である。イエスはこれをシモンの別名として與へ給うた(ヨハネ傳一の四十三)。

**ゲバ** **地名** **「ヘブル語『岡』」** ベニヤミンの支派の産業の地にあつたレビ人の市邑で(ヨシユア記廿一の十七、歴代志上六の六十)、エルサレムを距る事北へ七哩、ユダの地の國境にあるいさ嶮しき山中の堅固なところにあつた。サウルの時ペリシテ人はここにその代官を置いてゐたが(サムエル前書十三の三)、ヨナタンはこれを殺した。この邑は前記の如くユダの北境にある所から、南朝の領域をいふ時に、「ゲバよりベエルシバまで」といつた(列王紀下廿三の八)。(以色列全國の場合は「ダンよりベエルシバまで」といつたのである)。

**ゲハジ** **人名** (男) **「ヘブル語『拒む者』又は『小さくする者』」** 預言者エリヤの僕である。彼はシユネムの婦人の子が死んだ時、エリヤに先ちてエリヤの杖を携へてシユネムに走つたが、その子供は甦らなかつた(列王紀下四の廿五-三十一)。ナアマンが癩病を癒された時、エリシヤミナアマンを欺き、

金と衣服を食つた爲、終に癩病人になつた(列王紀下五の廿一廿七、八の四)。

**ゲバル** **地名** **「ヘブル語『山地』」** 1 地中海沿岸のフェニキヤにあつた邑で、レバノン山の麓を西に走つた所、ベイルツトの北二十哩にある(エゼキエル書廿七の九、ヨシユア記十三の五)。以色列國の理想的範圍中の邑で、アドニス・アスタロテ禮拜で有名であつた。今はエベールといふ。ギリシヤではプロソスとして知られてをる。2 詩篇八十三の七、このゲバルは死海の南にあつた地方で、今も尙エバルといふ名を留めてをる。3 列王紀上五の十八にあるゲバル人といふのは、本文が甚だ疑はしいので、種種の説明をする人がある「……石を切り、そのために縁をつけたり」と譯する者もある。即ち名詞を動詞の形で見るのである。

**ゲヘナ** **雜語** **「ヘブル語『ヒンノムの谷』」** ヒンノムの谷はエルサレムの南及び西南に横はつてゐる谷であるが(ヨシユア記十五の八、十八の十六、ネヘミヤ記十一の三十、エレミヤ記十九の二)、この處で行はれた事件よりして、遂には悪人が末日の審判後投げ入れらるべき刑罰の最終の場所、身體も靈魂も共に苦む場所を表はすに至つた。この場所は「火」、「消えざる火」、「蟲盡きず火消えざる所」、「爐の火」、「外の暗黒」、「火の海」として記されてをる(マタイ傳五の廿二・廿九・三十、十の廿八、十八の九、マルコ傳九の四十五、四十八、マタイ傳十三の四十二、五十、八の十二、默示録十九の廿、廿の十・十四・十五)。舊約時代に行はれた事件並に預言については列王紀下十六の三、廿一の六、エレミヤ記七の三十一、列王紀下廿三の十一・十四、エレミヤ記十一の十一・十三、七の三十二、イザヤ書五十の十一、六十六の廿四を見よ。

**ゲラセネ** **地名** マルコ傳五の一、ルカ傳八の廿六にガダラ人の地とあるのを、改譯はゲラセネ

ゲバル ゲヘナ ゲラセネ

人の地さしてをる。ここはガリラヤ海の東岸にあつた一村で、その附近の山麓に數個の古墳があり、又同じ附近の湖に沿うた所に半哩ばかりの斷崖がある。その崖の上即ち山の麓には平地があり、崖に臨んだ平地の端に草木が多いので、平地よりはその崖のある事が一寸知られない。而して又一旦これを知らずに草木の所を通過した時は、既に崖を降りはじめるので、急に止まり得ず、湖まで馳せ下らねばならぬ様になつてをり、且その崖の下の水は深く、他に泳ぎ行く事が出来ないものである。二千匹の豚が溺死したのは當然である。尙ここをガダラ人の地さいつたのは、ガダラがこの地方の總稱であつたからである。別項『ガダラ』及び『ゲルゲサ』を見よ。

## ゲラル

地名

〔ヘブル語〕周圓又は『地方』

バレスチナの南方、ガザに近き處にあつた邑、

又は地である（創世記十の十九）。ソドム滅亡の後アブラハムはこの處に來た（創世記廿の一）。また饑饉のあつた時、イサクもこの處へ來た（創世記廿六の一）。現今ウム・エル・エラルミ稱ばれてをるこの邑の古跡は、ガザの南六哩にある。この地は冬には水流があり、夏には井があるから、比較的灌溉に便利である。近頃矢の根石の如き遺物を多く發見せられる事によつて、以前多數の人人が住んでゐた事が證せられる。また多くの井の趾があり、中に甚深く石で圍まれたものが二個ある。

## ケリジム

地名

〔ヘブル語〕荒山或は『祝福の山』

シケムに近き處にあつて、エバル山と相

對し、その南にある。シケムより高き事八百呎、海拔千八百五十呎の高さがある。一見するに圓く滑かで平凡に見える山であるが、これに登ることはなかなか険阻で困難である。但その絶頂の觀望はバレスチナ中の絶景である。ここよりバレスチナの中部地方は一面に眼下に見え、タボル、ギルボア等のガリラヤの諸山も見え、また遙に雪を戴くヘルモンの聳ゆるの見える。そしてその中間には美はしき谷ミ

肥えたる田野がある。眼を右に轉すればガリラヤの湖水ミ、ヨルダンの溪谷ミ、また向にはバシヤン、アヤロン、ギレアデ、モアブなどが見える。更に左に向へば、カルメルよりガザに至る地中海は眼前に展開して、これを望めば微かにかの異邦人の島、および以色列人の爲に著へある福祉について想起さしめる。まここにこの山は以色列の民が祝福の應をなすに適はしい山であつたのである（申命記七の一―廿六、ヨシユア記八の三十三）。新約時代にはこの山上にサマリヤ人の神殿があつた（ヨハネ傳四の廿）。現今はエベル・エト・トゥルミといひ、山上に神殿の廢趾がある。崩壊せる四壁の石材が、稍完全な基礎の上に狼藉さしてあるのみである。

## ゲルゲサ

ゲラセネ

（改譯）

地名

別項『ゲラセネ』を見よ。尙これをゲラサミ混同する人があ

るが、ゲラサはアラビヤの野に近いヒラデルヒヤの北に當る邑で、湖から約四十哩も離れてをる。

## ケルビム

靈名

〔ヘブル語〕智慧の圓滿又は『つかむ者』ケルブの複數形

天に於て神の御座

の傍に立ち、その命令を執行する至尊いとたうと且つ智慧の勝れた天使等で、神が生命の樹を衛るために、エデンの園の東に、自ら回轉する火焰の劍ミ共に置き給うたミある（創世記三の廿四）。又モーセは神の示に従つて幕屋を作つた時、至聖所の贖罪所の上に黄金で作つた一對のケルビムを据え、隔の幕にもケルビムを織込んだミある（出エジプト記廿五の十八、廿六の三十一、三十六の三十五）。ソロモンの神殿の至聖所にもこの像が置かれ、又周圍の壁にもこれを彫刻せられた（列王紀上六の廿三―三十二）。現今その像を正確に知ることは出來ぬ。エゼキエル書一の五―廿八、九の三、十の一の活物はケルビムを表はすものである。（エゼキエル書十の十四にあるケルビムは一の十ミ對照して牛ミ解すべきである。）尙默示錄四の六―九の活物については、別項『活物』を見よ。

ケルブ ケルブ ケンサイ コウシレイハイ

**ケルブ** **地名** バビロンのケバル河の近くにあつた捕囚の置かれた地方の名である(エズラ書二の五十九、ネヘミヤ記七の六十一)。

**ケルブ** **靈名** 天使の一種、別項「ケルビム」を見よ。

**怒祭** **礼典** 別項「犠牲」及び「供物」を見よ。

コ

**犢禮拜**

**犢禮拜** **雜語** 昔時エジプト人は牡牛を天然の勢力を代表するものとし、これをアピス又はネピスミ名づけて禮拜した。ヘブル人は永くこの國に住んでゐたから、この弊習に染んだものであるか、或はセミチック人種の間に行はれた宗教上の古式を摸擬したものか、彼らがエジプトを出で、シナイに至りし時、モーセが山より降る事の遅きを見て、金の犢を鑄造し、これをエジプトより彼らを導き出した神として禮拜した。或學者はこれは多分木像の上に金を鍍めたものであらうといつてをる(出エジプト記三十二の四・廿・廿四参照)。何れにせよ、これは神の前には大なる罪惡であつたから、彼らは厳しく譴責せられた。その後王政の時イスラエル國第一の王ヤラベアムは金の犢二つを造り、これをダンミベテルに置き、己が民をして彼處に至りて祭をなさしめ、彼らがユダの首府エルサレムに登らないやうにした(列王紀上十二の廿六―三十三)。ヤラベアムはこの



(牛神製銅青)スピア

犢を以て以色列をエジプトより導き上つた神として拜ませたのであるが、これも勿論神の聖旨に適はぬものであつたから、その呪詛が預言者によつて宣告せられ、又その如くなつたのである(列王紀上十三の二―四、同下廿三の十五・十六―十八、ホセア書十の六)。ヤラベアム以後のイスラエル國王は何れも「ヤラベアムの罪に離れざりき」といはれてゐるが、これは犢禮拜を指して言はれたのである。

**洪水**

**洪水** **雜語** 太古ノアの時代に、人人の罪惡を罰する爲に、神が四十日四十夜引續いて雨を降らせ給うた爲、全世界が水に掩はれた事がある。所謂「ノアの洪水」である(創世記六―八)。その時代は普通の年表によれば、開闢後千六百五十六年即ち紀元前二千三百四十年頃である。この洪水は全世界に及んだとあるが、當時人人の住んでゐた凡ての地即ちアララテを中心とする西部アジアの地方及びヨーロッパの諸地方のみに限られたものであらう。キリストは所謂大艱難時代が、ノアの時の如く來る事を告げて、人人を警誡し給うた(マタイ傳廿四の三十七・三十八、ルカ傳十七の廿六―廿七)。

**ゴグ**

**ゴグ** **人名** 「ヘブル語「高い」、「山」、「英雄」」 1 マゴグの王である(エゼキエル書三十八の二・三・十六・十八、三十九の十一)。別項「マゴグ」を見よ。 2 ルベンの支流に屬する人(歴代志上五の四)。

**試煉**

**試煉** **術語** 聖書に試みといふ言は種種の意味に用ゐられてゐるが、その普通の意味は人又は物の性質及びその善惡を明かにする爲に、これを試すことである。 1 神が人を試み給ふのは、人の心を知り得給はぬのではなく、又もこより人を惡に誘ふ爲ではない。これによつてその人自身の爲に、その性質及びその善惡を顯はす爲である。而してこれを試むるには艱難或は幸福を以てしたまふのである。昔エホバがアブラハムを試みてその獨子を献げよとの命を發し給うたのは、これによつてその愛心・忠

コウスキ ゴグ ココロミ

義を顯し、これを堅うし、またこれを後世の總鑑となすためであつた(創世記廿一の一)。2 人が神を試みるはその道に反いて、妄りに神の佑助又はその恩を求め事である(ルカ傳四の十二)。以色列の人人は荒野に於て、屢神の著しき佑助之恩恵を蒙りながらも、尙神を信ぜずして眩き、その永く耐へ忍び給ふ事をなみして、これをためした爲、多く滅された(出エジプト記十七の二、コリント前書十の九)。3 悪魔の人を試みるのは、これを誘うて神に對して罪を犯さしむる爲である(マタイ傳四の一)。これについては別項『誘惑』を見よ。4 またすべて人の遭ふ所ニ艱難辛苦を試みいふ(コリント前書十の十三)。

**深紅色** コキクレナキイロ 別項『色(聖書の)』を見よ。

**ゴザン** 地名 『ヘブル語』渡し』 イスラエル人がアツスリヤ王に捕へ移された處で(列王紀下十七の六)、アツスリヤ語ではダサヌーミ稱び、アツスリヤ國の南部にある一地方で、ハボル(大なる河)がこれを貫流してをる。この河はその源を大メデヤの西南なるザクロス山中に發し、ゴザンの水をチダリス河に注ぎ入るるもので、その兩岸には青青とした草が生ひ茂り、又古より船舶交通の便が開かれてあつた。ゴザンをメソポタミヤの北部アルメニヤミの間であるとする者もあるが、イデルシヤイムの説に従つて本文の通して置いた。

**五旬節** (改譯) 禮典 別項『ペンテコステ』を見よ。

**ゴセン** 地名 『エジプト語』汎濫の地』 エジプト王バロが、ヤコブミその子等に與へた地である(創世記四十五の五・十、四十六の廿八、四十七の廿七、五の八)。この地はエジプトの東方地中海ミ紅海ミの間にあつた最も豊饒な地で、野菜が多く生じ、且つ良き牧場があつた。以色列人はエジプトを

去る時までこの地に住み、人口大に増殖し、強く且つ大なる民となつた。今はサフト・エル・ヘンネーミいひ、ザガツイツヒの東六哩の地點にある。ギリシヤ人は冠詞ミ共に讀んだ所からバクウサミいつた。トレミーに從へばアラビヤの洲内で重要な邑であつた。2 ガザミギベオンの間にあつた地である(ヨシユア記十の四十一、十一の十六)。3 ユダの山地にあつた邑(ヨシユア記十五の五十一)。

**琴** 物名 別項『樂器(聖書の)』を見よ。

**異邦人** 術語 別項『異邦人』を見よ。

**異能** 術語 別項『奇蹟』を見よ。

**道** 物名 1 イエス・キリストの稱である。人がその言を以てその心をあらはす如く、神はその子イエス・キリストによつてその聖心を人に顯し給ふ故に、イエス・キリストは神の言であるといふのである。而してこの道なるキリストは、始めに神ミ倍にあり給うた神聖實在であるヨハネはいつてをる(ヨハネ傳一の一・十四、ヨハネ第一書一の一)。而して彼が世を審き給ふ時に際つても、「彼の名は神の言ミいふ」ミある(黙示録十九の十三)。2 聖書を神の言ミいはれた場合もある(ルカ傳十一の廿八、ヤコブ書一の廿二)。3 又神の約束・律法・誠命及び命令をも神の言ミいはれてをる(詩篇百十九の廿五)。4 使徒たちが聖靈によりて宣べ傳へた言をも神の道ミいはれてをる(テサロニケ前書二の十三、マタイ傳十の四十)。

**コハテ** 人名 (男) 『ヘブル語』集會』 レビの次男で、アムラム、イヅハル、ヘブロン、ウジエル等の父である(創世記四十六の十一、民數紀三の十九)。コハテはアムラムの父、またアムラムはアロンの父であるから(出エジプト記六の廿)、コハテは即ち凡て祭司たる者の先祖で、且つレビ人中の首



座たる者の先祖である。以色列人の曠野を旅行した時、コハテの子等は神の幕屋の至聖物にかかはる勤務をした（民数紀四の四―廿）。コハテの一身については、彼がヤコブ及びレビに偕にエジプトへ移住した事（創世記四十六の十一）、その姉妹はヨケベテミいひ（出エジプト記六の廿）、又その齡百三十三歳に至つたミいふ事の外知る事が出来ぬ（出エジプト記六の十八）。

羔羊

【動物名】

昔以色列人は神の命令により羔を犠牲として献けたが、その羔は當歳の疵なき牡羔でなければならなかつた（出エジプト記廿九の三十八―四十一、民数紀廿八の九―十一、廿九の二・三―四十）。羔は獸の中で最も柔和なおおなしい者であるから、これを以てイエス・キリストの模範とした人の罪を負ひ且つこれを贖はん爲に十字架にかかつて犠牲となり給うた神の子イエスを、神の羔といふのである（ヨハネ傳一の廿九・三十六、ペテロ前書一の十九、黙示録十三の八、五の六、使徒行傳八の三十二、イザヤ書五十三の四―九）。昔エジプトにあつた以色列人が、その家の門の梁に兩旁の柱に羔の血を塗り、門内にあつてその羔を食した爲に、首子の滅亡を免れ得た事は、神の羔なるイエス・キリストの血が凡て彼を信する者を救ふことゝの型である（出エジプト記十二の七、コリント前書五の七）。黙示録五の六にある羔が七つの角七つの目を有することゝは、全き權能と全き智慧とを有し給ふ事をあらはすものである。

戀茄

【植物名】

これはヨルダンの西に東を問はず、いづれのパレスチナの野にも生ずる草で、根は二股にも三股にも分れ、人の形をしてをる莖は極めて短く、煙草の葉に似た大葉が根本から出でて地を覆うてをる。紫の花がその中から出る。短い花梗がある。實は黄色を帯び、梅子大で、赤茄子のやうである。その香は頗る人をこころよからしむる。雅歌七の十三に「戀茄かぐはしき香氣をはならしむる」とある。

のはこれである。實の熟するは四月乃至五月である、小麦かりに行つたルベンが、野よりの歸るさ端りなく、この珍果を得たのであらう（創世記三十の十四）。この植物は茄科植物の多くと同じく、有毒性で、下痢を催さしめ、麻酔せしめる。アラビヤ人がこれを「惡魔の林檎」といふのは、それからつけた名ではあるまいか。ヘブル人がこれを「戀草」といふのは、根が人の形をした所からの名であらう。これを食する時酔心地になるのを喜んであるか、土人は今もこれを嗜み食ふ。シリヤの婦人は、今もこれを食すれば石婦もよく孕むといつてをる。わが腹をいためた子のないのかこちてラケルが強いてこれを得たのも、この植物にかやうな奇効があるに信じてゐたからである（創世記三十の十四―十五）。



茄 戀

セファスの記したものであれば、この植物を得ようとするれば、まづあたりの土を堀り、さて犬をこれに結びつけて曳かしめる。もよより小さい植物のこゝであるから、容易に抜かれるけれど、そのをり譬へん方なき妻まじき叫聲を發する。こゝ、犬は斃れる。これその主に代つたので、誰でもあれ、自らこれを抜かうとするものは、この叫聲をきくこゝにも、或は狂し、或は死ぬるのである。かくて後は戀茄を扱ふ事は自在で、これを以て、物の怪の人についたのを拂ふに足るこゝいふ事である。されば「戀茄のこゝき叫

ゴメル コモラ コヨミ コラ コラジン

『こいふ事が古書に残つてをるこの事である。』

ゴメル

人名

【ヘブル語】全き】

1 (男) ノアの子ヤベテの長子である(創世記十の二・三、歴代志上五の六)。彼はヨーロッパの國の祖先であらう。2 (女) 預言者ホセアの妻で、夫にそむいて姪行をなし、姪行の子を生み、遂にホセアを離れて遊女になつてゐたが、神はホセアをしてこれを買はしめ、而して姪行をなせる婦人の如きイスラエルに對して、神の有ち給ふ愛を實驗せしめて、彼を愛の預言者として立たしめ給うたのである(ホセア書一―三)。

ゴモラ

地名

【ヘブル語】水に掩はる】

シデムの谷にあつた五つの市邑の一であつたが、その民の惡虐により、天火によつて焼き滅された(創世記十八の廿、十九の廿四・廿八)。

コラ

人名

【ヘブル語】禿】

1 エサウがアホリバマによりて生める子(創世記三十六の五・十四・十八)。2 エサウの子なるエリバズの子(創世記三十六の十六)。3 レビの子なるコハテの孫で、イヅハルの子である(出エジプト記六の十六―廿一)。彼は傲慢にして名を好み、ルベンの支派であるダタン、アビラム、オン等と偕に謀り、自ら叛逆者の首領になつて、その従弟であるアロンをモーセにさからつたが、遂に地は口を開きてその徒黨を呑みつくし、又エホバより出でたる火が彼らを焼きつくした(民數紀十六、廿六の九、廿七の三)。けれどもコラの子の或ものは生きながらへて、後世神殿の職務に名あるものになつた(歴代志上六の廿二・三十七、九の十九、ユダ書十一)。「コラの子の歌」を稱する者が詩の中に多くある。

コラジン

地名

【ヘブル語】高く叫ぶ】

この邑はガリラヤ海の西北、カペナウンより北に

二哩半離れた處にあつた邑で、イエスはこの邑に宣教し、又奇跡を行ひ給うた(マタイ傳十一の廿一、ルカ傳十の十三)。この邑の事は舊約書にも經外書にも一度も出てをらぬ。今はゲラゼミいひ、湖に注ぐ川の左岸にある、遺跡を見るに、かなりの大邑で、家の壁の跡、又飾られた會堂の跡なきがある。

ゴラン

地名

【ヘブル語】圓圈】

バシヤンの市邑で、マナセの東の半支派の産業に屬し、レビ人の住んだ所、また逃避の邑であつた(申命記四の四十三、ヨシユア記廿の八、廿一の廿七、歴代志上六の七十一)。位置は確定し難いがシユマツヘル氏はガリラヤ湖の東十七哩にあるサヘム・エル・ヤウランといふ邑が、ゴランの跡であらうといつてをる。

ゴリアテ

人名

【ペリシテ語】占ふ者】

1 ペリシテのガテ人で、四十日間ペリシテの陣營より出でて以色列の軍勢に戦を挑んだ巨人である。その時以色列の陣營よりダビデが出で、小石を以て彼を打殺した(サムエル前書十七)。2 サムエル後書廿一の十九のゴリアテは前記のゴリアテとは別人であらう。原文は和譯の如く「ゴリアテの兄弟ラミ」にせず、「ゴリアテを殺せり」になつてをる。但し歴代志上世の五の原文は和譯通である。斯る所より批評家は種種の説を立ててをる。

コリント

地名

【ギリシヤ語】裝飾】

ギリシヤの有名な首府であるアテネを距る事西方へ四十哩、モレヤ半島と本州を繋ぐペロポネサスの地峽にあつた有名な都會で、その東方にはケンクレアといふ港があり、西方にはレケウムといふ港があつて、昔はその間に木製の軌道を設け、小さい舟はその上を曳いて通過し得るやうにしてあつたけれども、大船はさうする事が出来ないで、ギリシヤ南端の岬を廻つたのであつたが、今はアドリヤ海からピレウスに至る航程二百哩を短縮する爲に、十二ヶ年の歲月に六千萬法の工費を費して、コリント、エトナ兩灣の間に、長さ四哩・幅七十五呎、深さ廿六呎

コラン コリアテ コリント

のコリント運河が開鑿され、自由に大船の通行をもなし得るに至つた。さて昔のコリントの邑は高い岩上に建てられてあつたが、人口多く、商業繁盛して、いふ富み榮え、その繁華飲食、及び文學等を以て名高かつた。紀元前百四十六年羅馬の軍勢に破滅せられて以來、百年間は荒蕪たる地となつてゐたが、紀元前四十六年に至り、ジュリアス・シーザーが再びこの邑を改築して、これをその殖民地とした爲、以前の如き繁盛な都會となつた。その住民はギリシヤ人、羅馬人、及び猶太人等であつた。彼らの特に禮拜した神は美術の女神であつて、彼らはこれが爲に大なる社殿を建て、そこに野卑なる禮拜を行つた。社殿に屬する娼妓の如き賤業婦のみでも、實に一千人の多數に上つたといふ。使徒パウロは紀元五十一年九月から五十三年三月までこの地で福音を宣傳し、教會を建設した（使徒行傳十八の一―十一）。その後また來りて、同教會にあつた種種の問題を解決した（コリント後書十二の十四、使徒行傳廿の二）。またエペソ及びマケドニアよりこの教會へ書簡を贈つた。コリント前後書がそれである。この邑は現今はただ小村として残つてをのみである。尙こ



河運トコリコ

の地の教會に關しては、別項「コリント前書」及び「コリント後書」を見よ。

コリント前書

書名

パウロがコリントの教會に贈つた書簡で、新約書中の一卷、1 コリント

ト教會はパウロの第二傳道旅行中、多分紀元五十一年九月より五十三年三月まで一年六ヶ月間コリント滞在中、彼がその基礎を据ゑた教會で（使徒行傳十八、コリント前書三の十）、その會員の一部は猶太人一部は異邦人であつた。パウロの出發後偽の教師等が入り來つて、教會を亂し、パウロの聲望を奉仕を毀損した結果、黨を結び派を分つに至り、或者は猶太教の儀式を固守すべしと主張し、或者は基督者の自由を誤解し濫用して放縱に流れ、姪行に陥り、或者はパウロの弟子なりと誇り、或者はアポロの弟子なりと稱し、異邦人信者は偶像に供へし物を食ひ、猶太人信者はこれを罪なりとし、或者は異教徒間に常に行はるる姪行の習慣より全く脱し居らず、或者は異教の哲學や空論に捕はれて、遂にキリストの再臨や復活の教義を否定し、富者らは主の晩餐を奢侈の機となし、或者は靈の賜物を濫用して聖會を攪亂し、或婦人等はその靜肅の美德を離れて、公會に於て辯論をなす等の如き状態となつた。2 本書の書かれた時期・機會・目的・場所、パウロは第三傳道旅行中、多分紀元五十三年十月より五十六年一月まで、エペソに滞在して傳道してゐたが、その際コリント教會に屬するクロエの家の人が來て教會の状態を報告し、次にステパナミポルトナミアカイコにより（十六の十七、七の一）、教會よりパウロに質問書が贈られたので、パウロは教會の紊亂及び諸問題を解決する爲且又教會よりの質問に答ふる爲に本書を認めたので、これを認めた時は多分紀元五十五年の十月頃であつたらう。教會の制度を知り、教理上の疑を究める爲に必要であるのみならず、その中に含まるる訓誡、就中人智過重の弊を説き、社會に於ける交際法について教を垂れた邊なき、傾聴すべき點が多い。

3、分解表

<p>第一分派に就いて</p> <p>一、挨拶と感謝(一の一―九)</p> <p>二、分派的論争を戒む(一の十一―四の廿一)</p> <p>1、キリスト中心たるべき事(一の十一―三十一)</p> <p>2、信仰は人の智慧にあらず神の能による(三)</p> <p>3、キリストのみが基礎、尊崇すべき御方(三)</p> <p>4、キリストの使者の忠信なるべき事(四)</p>	<p>第二部 姪行に就いて</p> <p>三、不道徳と不潔の行爲を戒む(五―七)</p> <p>1、淫行者を教會より放逐すべき事(五)</p> <p>2、信者間の事件は聖徒に訴へて解決すべき事(六の十一―十一)</p> <p>3、身體は聖靈の殿、故に深く保つべき事(六の十二―廿)</p> <p>4、婚姻に関する忠告(七)</p>	<p>第三部 質問に就いて</p> <p>四、社會的、宗教的誤謬を糾す(八―十四)</p> <p>1、偶像に献げし物に就て、愛を以て判断せよ(八)</p> <p>2、教職は教會によりて生活權利がある(九)</p> <p>3、飲食、集會、聖餐等皆神の榮光の爲に敬虔を以てなすべき事(十一―十一)</p> <p>4、各様の靈の賜物を尊びこれを正しく用ふべき事(十二)</p> <p>5、最大の賜物は愛である(十三)</p> <p>6、靈の賜物の目的は教會の徳を建てる爲である(十四)</p>	<p>第四部 復活に就いて</p> <p>五、復活の教理、主の甦り、キリストの再臨に際し聖徒の甦る事、同時に生ける聖徒の榮化する事(十五)</p> <p>六、最後の勸告と挨拶(十六)</p>
---	---	---	---

**コリント後書** 書名 バウロがコリントの教會に贈つた書簡で、新約書中の一卷。1 本書を贈つた場所・時機・目的、パウロはコリント前書を贈つた後、エペソを去つてトロアスに至り(コリント後書二の十二)、コリントよりテトスの歸り来るを待つたけれども、遂に來らなかつた爲、同地を去つてマケドニヤに至り(同二の十三)、そこでコリント教會よりの満足な報告を受け(同七の五・六)、そこでよりの書を認め、猶太の乏しき聖徒への寄附金の事について、テトスとその同伴者を遣はす序に、本書を彼によつて贈つたのである(八の一―十四、九の一―五)。で、本書を認めたのは多分紀元五十六年の夏で、場所はピリピであつたらう。尚パウロは本書中に、コリント教會中であつてパウロを批難攻撃する者どものあるに對して、自己の使徒職に就て説明してをる。

2、本書の分解表

<p>第一部 辯証</p> <p>一、挨拶(一の一―二)</p> <p>二、パウロの傳道精神及び方法(一の三―七の十六)</p> <p>1、コリント訪問を延引せし理由(一―二)</p> <p>2、モーセに勝る彼の奉仕(三)</p> <p>3、肉體は弱いけれども神に於</p>	<p>第二部 奨勵</p> <p>三、エルサレムに乏しき信徒への寄附金(八―九)</p> <p>(模範とするべきマケドニヤ諸教會、テトスの熱心と忠實、愛の行動の祝福)</p>	<p>第三部 譴責</p> <p>四、パウロの使徒職權の辯明(十―十三)</p> <p>1、彼の權威は容貌又は書ではなく神の能である(十)</p> <p>2、彼は純福音を無報酬でコリント人に傳へ、凡ての使徒等に勝つて勞した(十一)</p>
---	---	---

- て權能ある福音の職(四)
- 4、來世の榮光を望んで勵むべき(この勸告五)
  - 5、福音を接し、使徒の範に循ひ世を離るべき事(六)
  - 6、パウロ、コリント人の従順を喜ぶ(七)

- 3、主の顯現と默示及び休微と奇跡等使徒たる最高の證を有してなる(十二)
- 4、彼のコリントに至る時、義の爲惡を罰するであらうと告ぐ(十三)

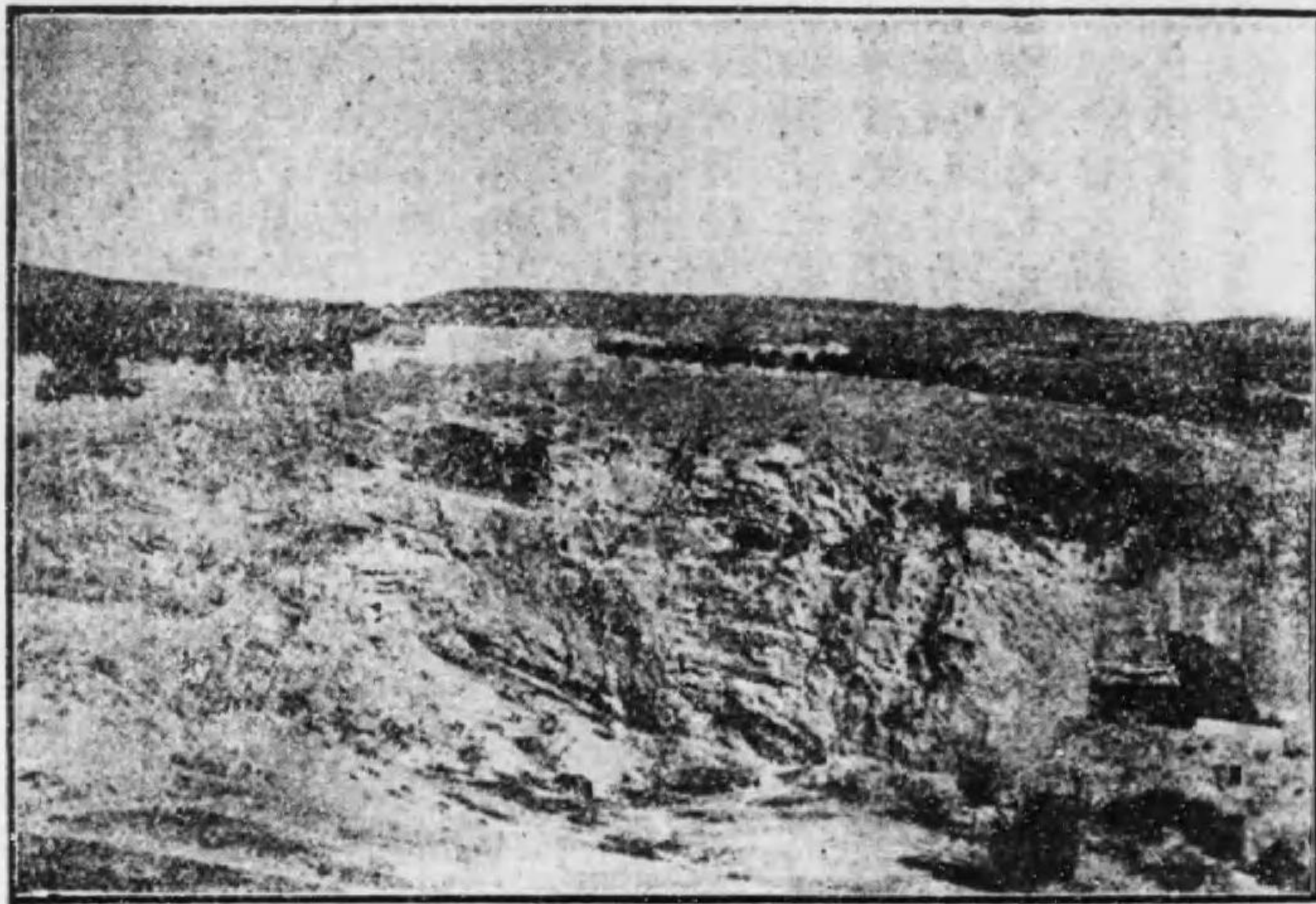
**ゴルゴタ**

地名

【ヘブル語「髑髏」】

イエス・キリストの十字架に釘けられ給うた處で、當時

エルサレムの城外にあつたが、この位置について二説がある。その一はコンスタンチヌス帝の母ヘレナが発見して、これを記念する爲に會堂を建築した所、即ち現今聖墳會堂のある場所であるこの説である。しかし近代探險の結果、この所はイエス在世當時、エルサレムの石垣の内にあつた事が明かになつた爲に信ぜられなくなり、第二の説である所謂ゴルドン氏のゴルゴタが採用せらるるに至つた。ここはエルサレム城外の東北に當り、ダマスコ街道の右手、エレミヤの洞窟と稱する處のある丘で、エルサレムの宮を戴いた山が北方に廣がり、エルサレムの石垣の外に至つて圓形の頂となり、周圍の平地より六十尺の高さある髑髏の上部に似た形をしてをるのである。この小山の南面は絶壁で、エレミヤの洞穴がその中にあるので、オリブ山から見ると恰も眼球のない眼窠をもつた大髑髏のやうに見える。それ故これをゴルゴタと稱んだのだといふのである。これは福音書の記録とも一致してをる。即ちここは都の門外にあつたけれども甚近く(ヨハネ傳十九の廿)従つてその頂に於てあつた出來事は皆往來の人によく見る



窟洞のヤミレエび及々ゴルゴ

事が出來たのである(マタイ傳廿七の三十九、マルコ傳十五の廿八・廿九)。羅馬人がかかる所を死刑場としたのは、往來の人の見せしめにする爲であつたと思はれる。尙またこの附近に古昔の墓の多くあることも、ヨハネの記録に一致する(ヨハネ傳十九の四十一)。ユダヤ人の傳説によれば、この小山は『石で打殺す所』と名づけられてゐたこの事である。これらによつてここがイエスの死刑場であつたこととする第二説は眞に近いものであらう。近頃の旅行家の記す所によれば『この園の面積は約千坪、四時の果樹草花を蒐めて、栽培に勉めてゐる。園中の大斷崖(それは髑髏の形をしてをる)の左側約五十間の處に、斷崖を穿つて出來た墓がある。千年以上の古色を帯ぶるもので、洞を二室に分ち、第一室は少しく緩かで約三坪ばかりあり、第二室は稍小さくて、一隅に天然岩を以て鑿成した柩がある。長さ六尺、幅四尺、深さ三尺のものである。若し髑髏形の大斷崖がゴルゴタであると思すれば、この古墳こそ所謂アリマタヤのヨセフの新しい墓であつたといつてよい。即ちイエスの墳墓である』云々である。

ゴルゴタ

**コルネリオ**

人名

(男)「ラテン語『角』」

カイザリヤに駐屯したイタリヤ隊の百卒長である(使徒行傳十の一一八)。彼は異邦人中イエス・キリストを信じた最初の者である。

**コルバン**

雜語

「ヘブル語『供物』又は『進物』」猶太人は輕卒に契をなす風があつたが、申命

記世三の廿一―廿三に一たび契つた事は必ず遂げなければならぬ律法があるので、一時の情にかられ、輕卒に父母の奉養のために何物をも出さぬ。一旦口外した場合、雖も、律法の明文に従つてこれを遂げねばならぬ。ラビは言つてゐた。又契により多くの供物を神殿に納める事を得たので、ラビは「如何なる誓でも一旦口に出した以上は必ず遂げねばならぬ」と規定し、儀文の爲に倫理を害する場合は屢あつたので、イエスは之を誡め給うた(マルコ傳七の十一)。

**コロサイ**

地名

「ギリシヤ語『巨像』」コロサイは小亞細亞の西方フルギヤにあつて、ヒエラ

ポリス及びラオデキヤに近く、メアンデル河の支流であるライカ川の畔にあつて、ラオデキヤより十二哩の川上に位してゐた。ここはエペソより南部ガラテヤ及びキリキヤを経て、スリヤ地方に達する隊商の往來する大道に臨み、往時は随分隆盛な市邑であつたが、羅馬ニロ帝の十年即ち紀元六十五年地震の爲に破滅し、その後再び建設せられたけれども、その近傍の都市が東方貿易の爲に旺盛になつた爲、自ら衰微するに至り、今はクロノスといふ村の附近にその遺跡を止めてをるに過ぎぬ。使徒パウロは一回もこの教會を訪問した事が記されてないが、或は第三回傳道旅行の際この邑に來たかも知れぬ。使徒行傳十八の廿三、十九の十參照)。パウロはこの教會の信徒中の或者らをよく知つてゐた。而して彼の同勞者エパfrasよりこの教會の状態を聞き、この教會に書簡を贈つた。コロサイ書がそれである。コロサイの教會の状態については別項『コロサイ書』を見よ。

**コロサイ書**

書名

パウロがコロサイの教會に贈つた書簡で、新約書中の一卷。1 コロサイ

の教會。コロサイの教會は使徒パウロの自ら設立したものであるまい。しかし彼が始め遍く小亞細亞を經巡つて、キリストの福音を宣傳へた時、長くエペソに止まつて傳道した際、コロサイ人エパfrasは多分エペソのテラノスの講堂で福音を聞いて信者となり(使徒行傳十九の九・十)、コロサイに歸つて熱心に主の道を傳へ、遂にコロサイ教會の設立を見るに至つたのであらう(コロサイ書一の七)。而してこの教會員の大部分は、異邦人の信徒であつた(コロサイ書一の廿一・廿七、二の十三、三の七)。2 本書を認めた理由。時・處。本書は紀元六十一年の下旬、即ちパウロの第一回羅馬入獄中に認めたもので、テキコミオネシモによつて贈つたものである(使徒行傳廿八の三十、コロサイ書一の七・八、ピレモン書廿三、コロサイ書四の七・九、ピレモン書十)。當時パウロはエパfrasよりコロサイ教會の状態を特にその面しつつある危険を聞き(コロサイ書一の七・八、四の十二・十三)、彼らが猶太教の空言なる哲學であるグノーシス教に誤られる事のない爲に、イエスキリストは神の子にして萬物の創造者であり、神人間の唯一の仲保者、宇宙萬有の中心點、凡ての中にある一切で在し給ふ事を教へ、また天使等も皆イエスに奉仕し、従僕するものである事を教へて、天使禮拜を攻撃し(一の十六、二の十・十五・十八)、グノーシス教の哲學に反對して罪は心にある事を主張し(一の廿一)、難行苦行の無益なる事を論じ(二の廿三)、唯信仰によりてキリストの死に甦に一致結合し(三の一―四)、而して『舊き人』その行を脱ぎ』て潔きに至る事を教へ(三の五―十七)、又猶太教の儀式を守るべき事を主張した偽の教師等に對しては、割禮・節期・月朔・安息日・飲食に關する事、その他の儀式や規條は『皆來らん』とする者の影で、眞の形はキリスト』である事(一の十七)、キリストの十字架によりてのみ救はれる事を示した(一

の十一―廿三)。誠に本書はキリストと宇宙との關係を示す重要な書簡である。  
3、本書の分解表

第一部 教理	第二部 實生活
一、緒論(一の一―一二) 1、挨拶(一の一―二) 2、使徒の感謝と祈禱(一の三一―三二) 二、教理……基督學……(一の十三―三三の四) 1、キリストと信者との關係(一の十三―十四) 2、キリストと宇宙との關係(一の十五―十七) 3、キリストと教會との關係(一の十八―廿) 4、キリストによりて神と和む(一の廿一―廿三) 5、キリストを宣傳せん爲に全力を竭すパウロ(一の廿四―廿九) 6、パウロの信徒に關する熱望(二の一―七) 7、異端に對する警誡(二の八―十五) 8、形式的宗教の警誡(二の十六―十九) 9、キリストと偕に世の小學に死す(二の廿一―廿三) 10、キリストと偕に天的生活に甦る(三の一―四)	三、基督者の實生活(三の五一―四の六) 1、罪より解脱して新生活に入るべき命令(三の五一―五十七) 2、家庭の宗教―夫婦、親子、生徒の關係及び義務(三の十八―四の一) 3、覺醒して祈禱すべき勸告(四の二―六) 四、結論(四の七―十八) 1、使者テキコモオネシモ(四の七―九) 2、パウロの同勞者の挨拶(四の十一―十七) 3、パウロ自筆の挨拶(四の十八) ○論語「一切であり、又一切に於てあるキリスト」(三の十一)、「奧義」即ちキリストの内住(一の廿六・廿七、二の二、四の四)

婚姻

備例

ヘブル人の婚姻は大抵夜間に行はれた。當日に至れば、新郎はその親密なる朋友

を伴つて新婦の家に行き、そこで婚姻の式をあげる。ヨハネ傳三の廿九にある「新郎の友」は媒介者の事で、特別に新郎を助ける者である。この際新婦が一生一代の事件として、出來得る限り美はしく着飾るのは、何處に於てもかはる事なき風習である。ヨハネ默示録には天のエルサレムの美を形容するに「夫の爲に飾りたる新婦のごとく準備して神の許を出で、天より降るを見たり」(一、十九の七・八、イザヤ書六十一の十)。今日アラビヤ人の中に行はるる風習によつて類推し判断すれば、覆衣を以て全身をおほひし新婦は、婦人の從者に導かれて、特に設けられた天幕若くは室に入り、次で新郎はその友に導かれて入り来る。而して乳母と友とは共に出する。新郎は挨拶して祝賀の言を述べつつ新婦の覆衣を取り去る。この一瞬間は新婦が將來己の夫たるべきものに始めて己の顔を顯はす時であるから(スリヤに行はれた結婚の習慣によれば、男子は女子を娶りて己の妻となすまではその顔を見る事がない)、實に心を勞する時で、彼女の心も待女等の心と共に「新郎は喜ぶであらうか、否か」の疑問で充される。新郎が若し賞讃の聲をあぐれば(ヨハネ傳三の廿九)、婦人の心は喜で刺されるやうである。この喜憂の運命の決せらるる新郎新婦の會見の結果を知らうとして、天幕の外若くは室外に待つてゐる媒介者その他の人人も、この時聲をあげて喜ぶのである。新婦の家に於ける婚姻式が終るに、新郎は新婦とその待女、並に大なる行列を伴うて、自分の家に歸つて行く。その時新婦のために祝福の言がのべられる。また、乳媪が伴はれるこゝもある(創世記廿四の五十九―六十一)。この行列の進行する時、凡てこれに伴ふ人は、ランプ或は燈火を持ち、また屢音樂隊が列に先立つこゝもある。そして新婦の家に於ける前記の婚姻式に與る事の出來ぬもので、新郎の家で開かれる婚姻の饗筵に招かれた客等は、この行列の歸り來

コンイン

### ザアカイ

るべき道に出でて、これを待つべきであつた（マタイ傳廿五の一—十三）。マタイ傳廿二の一—十三に王子の婚禮の譬話があるが、斯る婚禮に際し、王は寛大なる恩恵により、招きたる人人の凡てに禮服を供給する風習があつたが、かの處罰せられた人は、傲慢の爲にこの禮服を受くる事を拒んだので、言ひのがるべき口實がなかつたのである。婚禮の饗筵は通例一週間、時には二週間にわたる事があつた。ヨハネ傳第二章に饗筵の途中で酒盡きた話があるが、これは自家製の酒を用いた彼の國の風習として止むを得ない事であつた。その饗宴中には勿論歌が謳はれた。舊約書中の雅歌は猶太の婚姻歌だといふものもある。その際また種種の餘興もあつたらしい、かのサムソンが裏衣三十衣三十襲を賭けて『食ふ者より食物出で、強き者より甘き物出でたり』と隠語をかけたのも婚禮の際である（士師記十四の十一—廿）。婚禮の週間は、何ものも雖もその喜その樂を妨げる事を許されなかつた。斷食などの儀式上の義務を免るるは勿論、最も嚴格なる日である『大なる贖の日』といへども、これが爲にその儀式の一を省略する事を許されたのである（マタイ傳九の十四—十五）。又この週間はすべての喪を停止した。婚姻後一ケ年は凡て公の職務を免除せらるる風があつた。これはモーセの律法によつて定められてをる（申命記廿四の五）。尙捕虜になつた婦人を妻とする場合は、その婦人は髪を剃り、爪を截り、捕虜の衣服をぬぎすて、その父母の爲に一ケ月間哀哭き、後結婚すべき規定であつた（申命記廿一の十一—十四）。

### サ

#### ザアカイ

人名

（男）『ヘブル語』清い・『無邪氣』

エリコの市邑に住んでゐた富める猶太人で、取税人の長であつた。イエスがエリコに行き給うた時、彼はイエスを見んきて路傍の桑の樹に登り、

イエスが彼の家に客となり給ふに聞き、急ぎ降つて彼を迎へた（ルカ傳十九の一—十）。當時の收税に關する制度を辨へざる所から、ザアカイを「罪人の長」の如く論ずる者が甚多いが、これは彼に對する濡衣である。彼は向上發展の熱誠を有する公平正義の人で、且つ堅忍不拔の行をなした人であつたが、當時の人人の偏見よりして、彼を大罪人視し、多くの基督者もかく論じたのである。（收税に關する當時の制度につき、別項『取税人』を見よ。）初代教會の傳説によれば彼は後ペテロに隨行して、北の方カイザリヤに傳道旅行をなし、終に同地の監督になつたといはれてをる。又一説には當時行はれたバレンタナス及びトレミーオスの異端説を駁撃したともある。

#### 罪祭

禮典

以色列人が神に献けた献物の一で、禮拜する者を罪人に見做し、この献物を獻ぐるによつて、神と和ぐ事を表はすのである。この献物は牛・羊等の動物で、其動物は殺されて營の外に於て燔かれ、その血は聖所に於ける香壇の上に注がれたのである（レビ記四）。これは新約書に啓示せられてをる如く、キリストの死に給ふ事によりて、我らが神と和ぎ得る事を豫表するものである（ヨハネ傳一の廿九、ロマ書五の一・二、ペテロ前書三の十八等）。尙別項『禮物』及び『犠牲』を見よ。

#### 祭司

職名

人のために罪の供物と犠牲を獻ぐる事をする者である（ヘブル書五の一）。モーセ時代より以前は、家族の長たる者がこの職務を行つたのであつたが（創世記八の廿、十二の八）、モーセの時以來、アロンとその子孫が特に撰ばれて此職に當る事となつたのである（民數紀十六の四十、ヘブル書五の四）。しかししたまひアロンの子孫でも、身に疵ある者は、何の疵たるに關はらず、祭司となるを禁ぜられた（レビ記廿一の十六—廿四）。祭司の數は始めは少數であつたが、ダビデ王の時に至りて、その數は大に増加し、三千七百の祭司等はヘブロンでダビデに加はつたにあり（歴代志上十二の廿七）。ダビ

ザイサイ サイシ



デは彼らを廿四班くわじゅうよんぱんに別ち、順序に従つてその職を行はしめた。而して宗教上の職務を總轄する祭司の首領は祭司長さいしやうと稱へられ、之に任ぜらるる者はアロンの嫡流に限られてゐた。新約時代には退職したる祭司長をも尙これを祭司長と稱び、これに對し現任の祭司長を特に大祭司と稱へた。但アンナスの場合に限り特に彼を大祭司と稱んでゐる。これはその勢力が偉大であつたからであらう、(從來は祭司長さいしやうは廿四班の班長で、大祭司だいさいしは祭司總長であるにせられてゐた。尙感謝すべき事には邦語改譯には、大祭司だいさいしと祭司長さいしやうが明かに區別せられてゐる事である。)祭司長の下に殿みやの宰さいがあり、その下に多數の下吏したやくがあり、レビ人があつて、神殿に於ける諸種の務が全うせられた。下吏の中には祭典の時を報する者があり、門戸の開閉を掌る者もあり、守衛の長、樂手の長、及び祭典の助手などがあつた。又抽籤を以て祭司中に割當てられた種類の職務があつた。例へば香壇に點火する事、燔祭壇の火を注意する事、汚れたる者(特に癩病者の如き)を検査する事(マタイ傳八の四、ルカ傳十七の十四)等である。唱歌隊及び樂手は音樂を司り、喇叭を鳴らして祈の時と祭典の時刻を報じた。又人の争鬭を判き、戦争の時、角を鳴らし契約の櫃を昇ぎ、又常に神の律法と禮式を民に教へる事も彼らの職分であつた。彼らの法服については出エジプト記廿八、三十九の兩章に、その任職式については同書廿九の一―三十七に記されてゐる。彼らの住所としては、ユダ、シメオン、ベニヤミンの産業中に十三の市邑を分與せられ(ヨシヤ記廿一の十三―十九)、その生活費として、レビの受くる所の什一の献物の中より、復その什一の部分を取り(民數紀十八の十四―十九)、又犠牲に供へられた肉類・穀物・酒・油等の初穂が與へられた(申命記十八の三一五)。

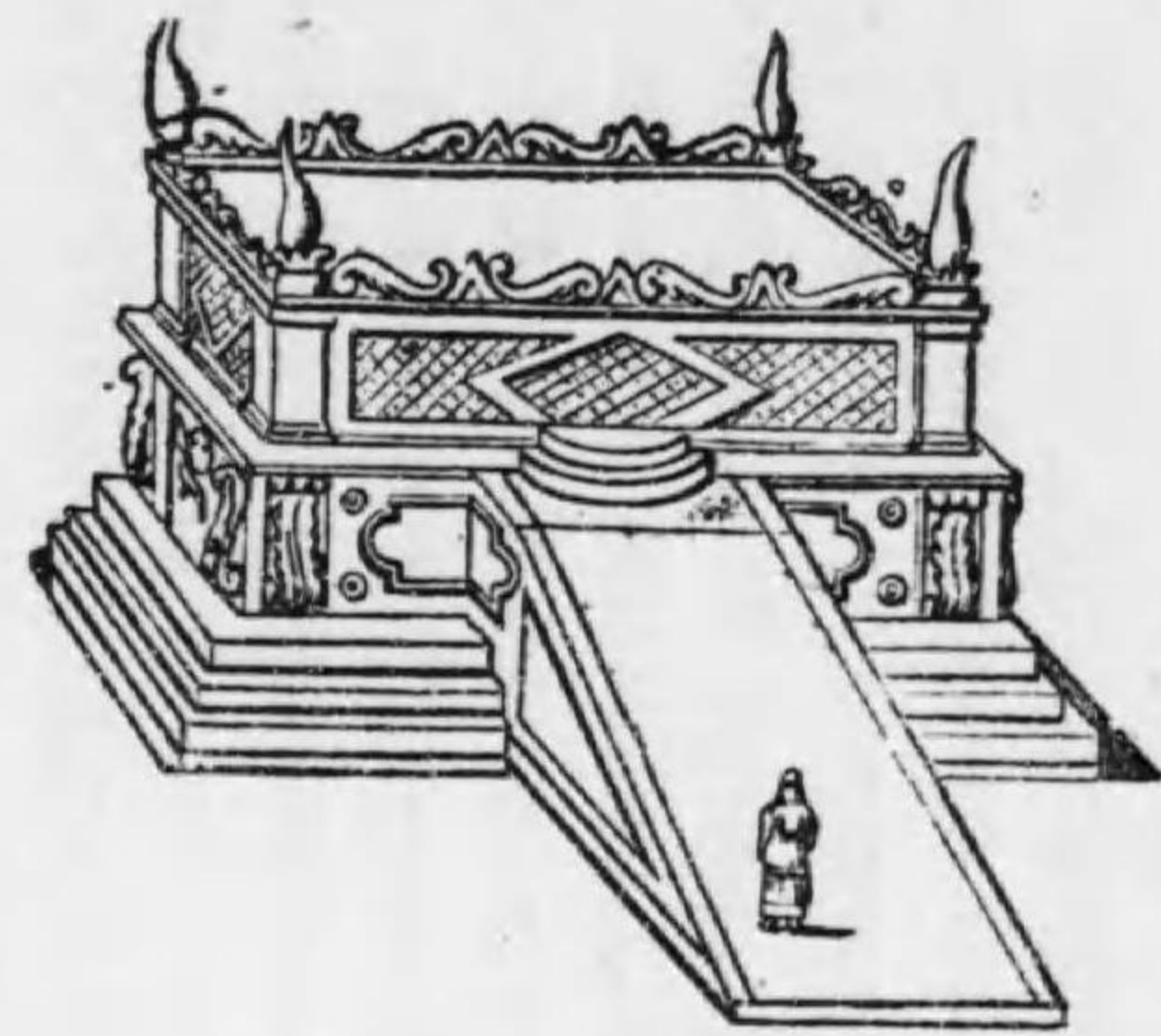
神殿に於て祭司が如何にその職務に従事したかを知る爲に、假に安息日以外の一日の狀況を描い

て見るに、夜半を過ぐれば殿の宰は數名の祭司と共に起き出で、各自炬火たきまきを手にし、殿内の諸室を巡檢して、早天の準備が具はつてゐるか否かを見るのである。巡檢の際看守に會ふ時は、看守に向つて「爾安かれ」と挨拶する。萬事不都合がなれば、祭司はこれに應へて「總て宜し」といふ。他の祭司等も間もなく起き出でて沐浴し、法服を着け、抽籤により各自執るべき職務を擇び、業に就く事となる。やがて喇叭を吹奏して、市街の人民に天明の近づいた事を報するのである。次に門は開かれ、燔祭壇上に積み上げられた薪に點火する。望臺の看守がエルサレムの遙か南方にあるヘロブンの邑に曙光を認むるや否や、合圖をなし、祭司は犠牲の獸を屠り、その血を祭壇に注ぎ、犠牲に供すべき部分を燔祭の壇上に運ぶのである。續いて音樂と共に禮拜式を擧げる。次に金の壇に香を燒き、祭司の祝禱がある。斯くて祭司は燔祭の壇に犠牲を供へる。その間レビ人は詩を唱へ終つて喇叭を吹奏する。正午に至れば祭司とレビ人は食事をする例である。正午より二時間半を経れば晩の禮拜式が開始され、先づ羊を屠り、その他の献物と共に神前に供へられる。日没と共に禮拜式はその終を告げ、諸器物は淨められて、翌日の用に備へられる。茲に於て祭司は休息に就き、翌日もまた前日と同じ仕事を繰返へすのである。安息日又は祭日にも禮拜の順序は略一様であるが、儀式の數も多く、隨つて莊嚴を増し加へた。例へばモーセの歌(申命記三十二)、又は勝利の歌(出エジプト記十五)などを合唱する如きは平日にない事である。尙舊約時代の祭司長は來らんとする大なる眞の祭司長キリストの模型であつた。

### 祭壇

【物名】 神に供物を献げる爲に築かれた壇で、その始は土又は石で粗末に築かれたもので、琢石を以て建てる事や、鑿のみを常てる事は汚れとして禁ぜられてあつた(出エジプト記廿五)聖書に録されてゐる最初の祭壇は、洪水の後ノアが方舟を出で、エホバの爲に築いたものであるが、多分創世

記第四章に録されてあるカインヤアベルの供物も、祭壇の上に献けられたものであらう(創世記四の三・



た(歴代志下四の一)。又祭壇の上の火は熄ゆる事なく、たえず燃えしむべき筈であつた(レビ記六の十二・十三、九の廿四)。

## 再臨

## 術語

基督の再臨の事で、これには數種の區別がある。1 基督の復活後、再び肉體的に來り給ふ事(ヨハネ傳十四の十八、十六の十六)。2 聖靈に因る心靈的の再臨、これは弟子等の生存中起る事で、彼らの心に父ミ基督ミ不斷に内住し給ふ結果を齎らすものである(ヨハネ傳十四の廿

四、八の廿)。アブラハム、イサク、ヤコブはその住所に祭壇を築き、供物を献け、エホバを禮拜した(創世記十二の七・八、十三の十八、廿五の廿六、三十三の廿)。その後神の幕屋の前に建てられた祭壇の形状及びそれに要する器具は、エホバのモーセに示し給うた所に從つて造られたものである(出エジプト記廿七の一一八)。この祭壇は祭合歡の木を以て造り、之に銅を着せたもので、その形状は四角、其の長さ幅は各五キュビト、その高さは三キュビトである。その上の壇四隅に銅の角があつて、これに將に献げんとする獸畜を繋いだ。又罪を犯した人がこの角を捕へた時は、死罪を免れる事が出來た(出エジプト記廿一の十三・十四、列王紀上一の五十)。ソロモン王が神殿を建築した時には、銅を以て大なる祭壇を築いた。その形状は四角で、その長さ幅は各二十キュビト、高さは十キュビトであつ

三、十六の七比較)。3 弟子の死する時、彼らを迎へて天の家に移す爲に肉眼に見へないで來り給ふ事(ヨハネ傳十四の三、コリント後書五の八比較) 4 審判の爲の歴史的再臨、即ち歴史の局面の轉機に當りて、來る所の者で、最後の再臨ミは別である(黙示録二の五、三の三・十一、マタイ傳廿六の六十四比較)。この後人の子大權の右に座し云云ミある語にマイヤーは「キリストの力ミ勝利の繼續的顯現である」ミ註してをる。5 終局的再臨、世の終に來り、世を審判し、惡しき者を滅し、聖徒に報を與へ、榮の國を建て給ふのである(マタイ傳廿四の三)。以上は主ミして其意義の區別から見たのであるが、それらは互に必然的な關係を有してをるのであつて、1 を承認する時に、2 3 4 5 も必然的に承認さるべき性質のものである。故に特に注意すべきは 1 の肉體的再臨である。基督は此時代の終に當り、御使の長の聲ミ神の喇叭ミ共にみづから天より空中まで來り給ふ。その時の體は恰も彼の昇天の際の如き靈體であらう(使徒行傳一の十一)。その際既に基督にありて眠れる信者は復活し、生き居る信者は忽ち榮光の體に化し、共に昇天し、空中に於て基督に會ふのである。(テサロニケ前書四の十三・十八、コリント前書十五の五十一・五十四)。その時空中に於て所謂羔の婚筵が開かれ(黙示録十九の七・九)、又「報償の審判」が行はれる。即ち信者各の善行に應じて、義の冕・生命の冕・榮の冕及び其他の褒美が與へられるのである。斯る事件が空中に於て行はるる際、地上は所謂「大艱難時代」にあるのである。現今散らされてをる猶太人は、世界の各地より、パレスチナに歸り來り、受肉せる僞基督ミ約を結び、エルサレムの神殿を建て、禮拜を復舊する。また戦争・饑饉・疫病・地震が引續き起る。僞基督は偶像禮拜を強し、之に従はざる猶太人その他の聖徒を迫害する。猶太人は火の如き苦難の中より救を叫ぶ。茲に基督は空中より聖徒ミ共にオリブ山に下り來り、猶太人を救済し、僞基督ミ僞預言者を火の池に投入

れ、サタンを縛りて千年の間閉込め置く(黙示録十九の十一-廿の三上半)而して地上に所謂基督統治の千年王國時代が来るのである。以上の空中再臨ミ地上顯現ミを總括して普通に再臨ミいふのである

サイロビニケ=スロ・フェニキヤ (改譯) 地名 「ピニケ」を見よ。

創造 術語 1 聖書の天地創造論は主として創世記第一章に記されてある。その他にはヨブ記三十八、箴言八の廿一-三十一、イザヤ書四十の十二以下、エレミヤ記十の十一-十六、ヨハネ傳一の一-三、コロサイ書一の十六・十七、等を見るべきである。創造ミは無より有を造り出す事で、創世記一の一には物質の創造があり、廿一には生命の創造があり、廿七には生靈の創造がある。神はこれをその言によつて創造し給うたミあり、又『神の靈、水の面を覆ひたりき』(一の二)ミあつて、靈の働も加はつてをる様である。即ち創造は父なる神ミ、神の言にして神なる聖子ミ、靈の神ミ。(これは三にして一なる神である)が偕に働き給うた結果である。創世記一の一にある『神』の字が原語で複数名詞が用ゐられ、『創造り給へり』の字が單數動詞が用ゐられてあるのも、一の廿七に『我儕に象りて我儕人を創造り』云云ミあるのも、これによつて知る事が出来る。されど勿論誰もその時にあつて、神がこれら凡ての物を創造し給うたのを見たものはない。而して又これは現今の進歩した科學によつても證明し盡す事は出来ない。信者は唯これを信仰によつて認知するのである(ヘブル書十一の三)。多くの學者は創世記一の一に教へらるる真理は、凡ての無神論を否定し、多神教を否定し、凡神論を否定し、宿命説を否定し、物質の無始終説を否定し、神の不可知論を否定するミ共に、神の實在の眞理、神の獨一なる眞理、神が宇宙ミ別個に存在し給ふ眞理、神の絶對的自由なる眞理、物質の有限なる眞理、人間の神に關する知識の確實なる事の眞理を肯定するものであるといつてをる。2 イザヤ書六十五の十七に『視よ我新

しき天ミあたらしき地を創造す』ミあり、同六十六には『わが造らんミする新しき天ミあたらしき地ミわが前にながくミさまる如く』云云ミあるが、これは無より有を生ずる創造ではなく、現在の天地が天よりの火によつて潔められ(ペテロ後書三の十一-十三)、新なる天地が出現する事である(黙示録廿一の一-七)。

創世記 書名 舊約聖書の第一巻で、その中に世界の起原、人類の創造、罪惡の事蹟、贖罪の約束、猶太人の族長等の歴史が録されてある。初の十一章は世のすべての人に關はる記録で、第十二章以下が撰民の歴史である。其記する所の年數は前後約二千五百年間である。この書の著者をモーセミするは一般の説で(マタイ傳十九の七・八、ルカ傳十六の廿九、廿四の廿七、ヨハネ傳一の十七、七の十九、使徒行傳三の廿二、廿八の廿三、ロマ書十の五參照)、その歴史の材料は口碑又は古き書物より撰び取り、神の指導に従つて編纂したものである。

分 解 表

第一部 全人類の歴史	第二部 猶太民族の歴史
一、緒言 天地人の創造 (一の二-三) 二、天地創造の由來(二の四-四の廿六)	アブラハムの歴史 七、テラミその子孫の傳記(十一の廿七-廿五の十一) 一、アブラハムの召(十二)
	イサクの歴史 八、イシマエルミその子孫の傳記(廿五の十二-十八) 九、イサクミその子等の傳記(廿五の十九-三十)
	ヤコブの歴史 十、エサウミその子孫の傳記(三十六) 十一、ヤコブミその子孫の傳記(三十七-五十) 一、ヨセフの夢及び彼の

- 東(三)
- 3、カインの殺人—罪惡の發展—利器の發明(四)
  - 三、アダムの傳記(五の一—六の八)
  - 一、アダムよりノアに至る敬虔派の傳(五)
  - 2、罪惡の蔓延(六の一—八)
  - 四、ノアの傳記(六の九—九の廿八)
  - 1、ノア方舟を造り、義を宣傳す(六)
  - 2、ノアとその家族方舟に入る洪水(七)
  - 3、ノアとその家族方舟を出づ(八)
  - 4、ノアとの契約(九)
  - 五、ノアの子孫の傳記(十の一—十一の九)
  - 1、ノアの子孫より出でし種族(十の一—三十)

- 2、アブラハムの選擇(十三)
- 3、アブラハムの戰(十四)
- 4、アブラハムの契約の祝福(十五)
- 5、アブラハムの信仰の失敗(一)(十六)
- 6、アブラハムの改名と割禮の起原(十七)
- 7、ソドムの爲の祈禱(十八)
- 8、アブラハムの祈禱の答(十九)
- 9、アブラハムの信仰の失敗(二)(廿)
- 10、アブラハムの信仰の報償(廿一)
- 11、アブラハムの信仰の試練(廿二)
- 12、アブラハムの信仰の告白(廿三)

- 五の廿九
- 1、エサウとヤコブの出産(廿五の十九—三十)
  - 2、イサクとアビメレク(廿六)
  - 3、イサク欺かれてヤコブを祝す(廿七)
  - 4、ヤコブその家を去る(廿八)
  - 5、ヤコブの結婚(廿九)
  - 6、ヤコブの子等の出産と蓄財(三十)
  - 7、ヤコブ本國へ歸る(三十一)
  - 8、ヤコブ天使と角力す(三十二)
  - 9、ヤコブその兄と會ふ(三十三)
  - 10、シケムに於けるヤコブ(三十四)
  - 11、ヤコブその家を潔む父イサクを葬るべく歸

- 賣らるる事(三十七)
- 2、ユダ家督權を失ふ(三十八)
  - 3、ヨセフの大なる試(三十九)
  - 4、獄中に於けるヨセフ(四十)
  - 5、ヨセフエジプトの宰相となる(四十一)
  - 6、ヨセフと彼の兄弟(四十二)
  - 7、ヨセフとベニヤミン(四十三)
  - 8、ヨセフその兄弟を試む(四十四)
  - 9、ヨセフの復讐(四十五)
  - 10、イスラエルの一族エジプトに移住(四十六)
  - 11、ヤコブのエジプト滞在及び彼の最後の願(四十七)
  - 12、ヤコブヨセフの子等

- 1、
- 2、バベルの塔(十の一—九)
- 六、セムとその子孫の傳記(十一の一—十一の廿六)

- 13、アブラハムの信仰の果(廿四)
- 14、アブラハムの死(廿五の一—十一)
- ◎本書の論語は「元始」
- 1、創造の始(一)
- 2、人類の始(二)
- 3、罪の始(三)
- 4、宗教の始(四)
- 5、携擧の始(五)
- 6、審判の始(六)
- 7、救の始(七)
- 8、回復の始(八)
- 9、契約の始(九)
- 10、國民の始(十)
- 11、揀擇の始(十一)

- 宅す(三十五)
- ◎本書に於ける靈的教訓の雛形
- 1、アダム(舊き人)
  - 2、カインとアベル(肉の人と靈の人、贖を信ぜざる自然人と贖を信する新生人)
  - 3、ノア(パプテスマの奧義を知る)
  - 4、アブラハム(信仰者の生涯)
  - 5、イサク(平和なる神の子の生涯)
  - 6、ヤコブ(奉仕の生涯)
  - 7、ヨセフ(受苦と榮光の生涯)

- を祝す(四十八)
- 13、ヤコブの臨終とその子等につきての預言(四十九)
  - 14、ヤコブの葬式とヨセフの死(五十)
  - ◎本書の主眼
  - 一、恩寵の領域—物質的宇宙の始、
  - 二、恩寵の主體—人類の始、
  - 三、恩寵の起因—罪の始
  - 四、恩寵の性質—贖罪の始、
  - 五、恩寵の範圍—諸國民の始、
  - 六、恩寵の管—ユダヤ人の始、
  - 七、恩寵の結果—信仰と献身の生涯の始、

サウル 人名 (男)「ヘブル語『しきりに求めし者』又は『望まる』」ベニヤミンの支派に屬するキシの子で(サムエル前書九の二)、以色列國最初の王である。神は以色列人が王を立てやうと欲する

サウセイキ サウル

望に應じ、預言者サムエルに命じ、民の中より彼を撰み、これを立てて王に給うた。これは紀元前千百〇二年で、この時より以後四十年間王位に坐してその國を治めた(サムエル前書十三の一の原文は「サウルは……歳にて王の位につく彼は……年間イスラエルを治めたり」とあつて、「……」の處が赤字となつてをる。カイル氏はサウルの在位年數を一〇七五—一〇五五年の二十年間と見てをる。ヨセフアスの古事記にはサウルは四十年間王であつたとある。使徒行傳十三の廿一參照)。サウルは丈高く威光ある美はしき人品の人で、以色列人が想像した王たるべき人物であつたが、其性質は氣儘で、思慮淺く、屢神の命令に従はずして罪を犯した爲、種種の患難に遭ひ、遂にベリシテ人との戰爭に於て重傷を負ひ、自殺して果てた。その傳記はサムエル前書九章より同後書二章までにある。

榮光

備語

別項『光榮』を見よ。

杯

物名

1 以色列人の用ゐた杯は角又は金銀、或は陶器で造られ、葡萄酒を飲むに用ゐられた(創世記四十の十三、四十四の二、列王紀上七の廿六)。2 時として杯の中にあるものを指して單に杯ともいつた(コリント前書十一の廿六、詩篇十一の六、十六の五)。3 神が世を治め給ふにあたり、一個人若くは一國民に施し給ふ幸福或は禍害を形容して杯といふ事がある(イザヤ書五十一の十七、詩七十五の八、廿三の五)。4 ユダヤ國に於ては饗應の時、その主人は先づ杯をこつてこれを賓客にまはす習慣があつたが、これらの習慣になぞらへて、杯といふ語を用ゐた事が屢ある(エレミヤ記五十一の七、黙示録十七の四、コリント前書十の十六・廿一、マタイ傳廿六の廿七)。5 マルコ傳十の三十八にイエスが「わが飲まんとする杯」云云といひ給うたのは、その將に受けんまし給うた苦痛を指し給うたのである。

酒搾

物名

酒搾は葡萄より汁を搾り取る器で、これに二つの區分がある。一は上の酒搾といはれ、一は下の酒搾といはれる。上の酒搾は葡萄を踏みつぶす爲の器で、下の酒搾は上の酒搾から自然に流れ出る汁を受け容れる器である。これら二個の酒搾を堅固な岩に穿つこともある。ロビンソンの目撃したものは八呎四方で、深さ一呎六吋あり、これにも上下の別があつて、葡萄汁が上器より下器に流れ行く爲に、穴を設けてこれが通路としてあつたこの事である。葡萄を踏むには人の足とする。その時には歡喜の歌を謳ふのである。イザヤ書六十三の一—六はこの葡萄をふむ事になぞらへて、エドムに對するエホバの審判を預言せられてゐるのである。黙示録十四の十八—廿は神に敵する世界の人にのぞむ審判で、同じく酒搾をふむ事になぞらへて述べられたものである。別項『葡萄酒』の部に酒搾の繪を見よ。

ザカリヤ

人名

(男)〔ヘブル語〕エホバに憶えらるる者。1 エリサベツの夫で、バブテスマのヨハネの父である。彼はアビヤの班に屬する祭司で、その班の順序に従ひ、神殿で職務を取りつた時、その妻エリサベツの男子を生む事を御使に示されたけれどもこれを疑つた爲、爾來ヨハネの命名の時まで啞者となつてゐたが、その際口開けて神を讚美した(ルカ傳一の五—廿五・五十七—八十)。

經外書『ヤコブ傳福音書』には、ヘロデが「ユダヤ人の王」として生れ給へる者を殺さうとした時、ザカリヤはその子ヨハネを求められたけれども、これを告げなかつた爲、祭壇の傍で殺された事が記されてをる。2 イエスが宮に祭壇との間に於て殺されたといひ給うたバラキヤの子ザカリヤ(マタイ傳廿三の三十五)。このザカリヤは(一)ゼカリヤ書を書いた預言者である(解釋する者(ゼカリヤ書一の一)、(二)バブテスマのヨハネの父ザカリヤであるとする者、(三)歴代志下廿四の廿—廿二に記載せられたものであらうとする者がある。第三説が正しからう。シナイ原本にはバラキヤの文字がなく、ルカ傳にも省か

サカフネ ザカリヤ

れてをる（ルカ傳十一の五十一）。バラキヤミは「エホバに恵まれた者の意」で、エホヤダの別名であつたか、或はエホヤダはザカリヤの祖父で、ザカリヤの父はバラキヤミ稱へたのかも知れぬ。而してこれをエホヤダの子としたのは猶太人の習慣によるものであると解釋するも無理ではない。イエスが「アベルの血よりザカリヤの血まで」言ひ給うたのは、ヘブル語の舊約書の順序から言へば創世記は最初の書であつて、歴代史略はその最後の書であつたから、この語の中に舊約全書に録された凡ての悪事を含め給うたものと見るべきであらう。バビロンのタルマツドには此ザカリヤの血が二百年間即ち猶太國民がバビロンに移されたまでの長歲月間、神の庭に湧き出でる事があつたとの昔話がのせられてある。勿論これは昔話ではあるが、これによつて民がザカリヤの惨殺せられた事を記憶して、その懼るべき事、憎むべき事、惜むべき事を忘れなかつた事を悟り得られる。但第二説でも、前述の事實があつたと思へば、イエスの談話は實に最近に行はれた活ける材料を用ひ給うた事となつて、興味があるけれども。ザカリヤの父がバラキヤであつた如何かは、何處にも據所がない。尙一説にこの後猶太と羅馬の戦争のあつた時、バルクの子ザカリヤを稱する祭司が神殿の間にゼロテ黨によつて殺された事があるが、これを預言的に言はれたのであるか、又はエルサレム滅亡後にマタイ傳の記者が勝手に挿入したのであらうといふものもあるが、これには信を置き難い。要するに第三説が最も眞に近いものであると思ふ。

酒 物名

猶太人の用いたものには「濃酒」もあり、「混和酒」もあつたが、普通に葡萄酒が用ゐられた。葡萄酒には少くも三種類あつたやうである。即ち搾りたての新しい葡萄汁ミ、乾葡萄に水を加へたものミ、アルコール分を含んでゐる普通の葡萄酒ミがあつたといはれてをる。聖書には酒を飲む事の危険を示して警誡せられてをるころが多い（イザヤ書五の十一・廿二、箴言廿の一、廿三の廿九

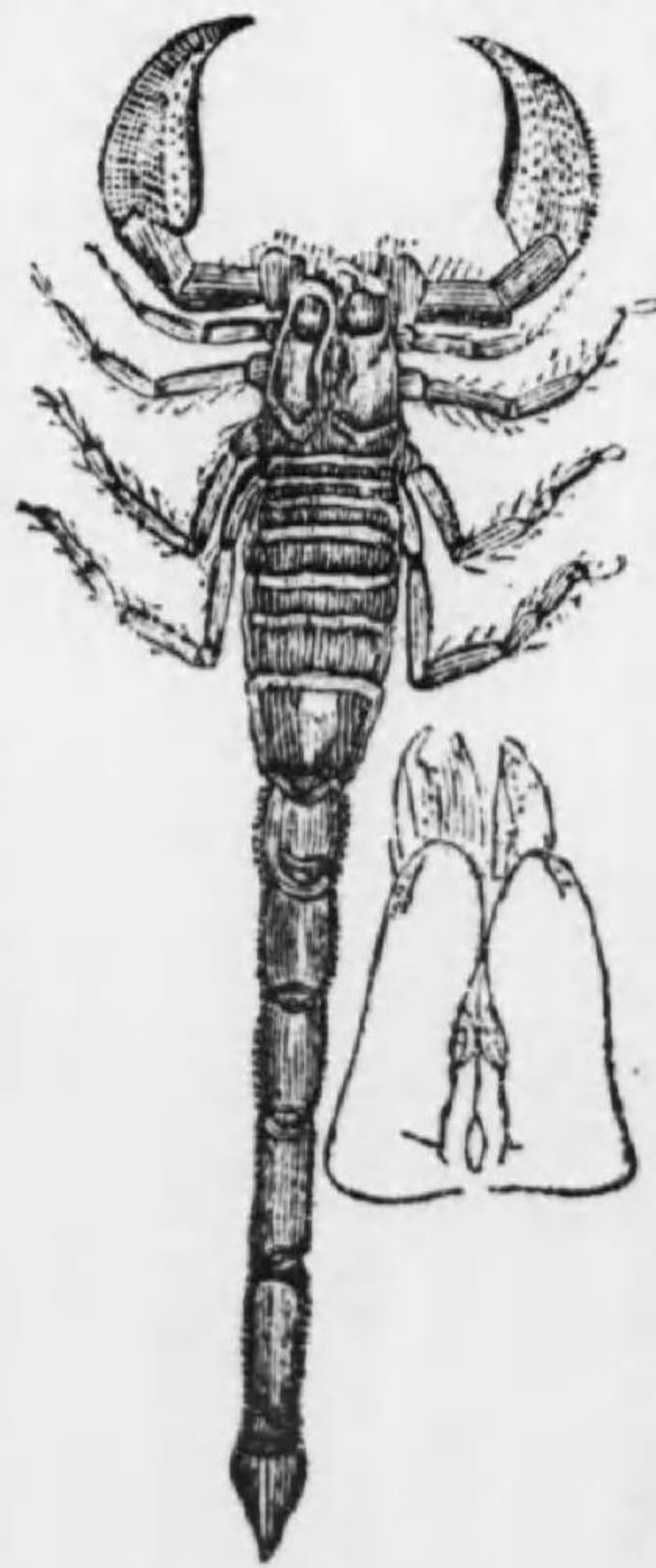
一三十五三十一の四一五、エペソ書五の十八）。基督者が酒を斷つ理由は、酒の中にあるアルコールは毒物であるから、神の殿である身體を害する事は神の聖旨に適はぬから、又よし酒に溺るる事がないにしても、飲めば酔ひもし、害を受けるのみならず、弱い兄弟の事を思はず、これを迷はして愛の道にかなはぬ事なるから、第三には飲酒は贅費で、もしこの費を善き方に用ゐるならば、飢ゑんとする貧民を飽かせ、滅びんとする未信者を救ふことが出来るからである。尙別項「葡萄酒」を見よ。

サソリ

動物名

サソリはバレスチナに非常に多く生息する節足動物の一種で、晝は石の下壁の穴其他隙間ある處に巧にかくれ、夜に入るに歩きまはつて、人を刺し、虫なごを捕る。捕る時には蟹に似た螯で押へ、尾で刺す。サソリの毒は頗る劇烈で、間間人を死に至らしむる事さへある。

サソリの有毒有害なることは聖書に屢いははれてをる（申命記八の十五、エゼキエル書二の六、黙示録九の五・十、ルカ傳十の十九、十一の十二）。シナイの野に今もいろいろのサソリがゐる、旅人は夜營のをりにあたりの石を一つ引つくり反して先づサソリを退治せねばならぬこの事である。イエスがサソリを並列して述べられた理由の一は、サソリは時時體を曲けて卵形なるからである。歴代志下十の十四のサソリは生物ではなく、鞭の一種で、打たれるミ、ひびく腫れあがるやうなものであらうこの事。ヨシユア記十五の三の「アクラビムの坂」にあるのは、



サソリ

文字からいへば「蠍峠」にも譯すべきで、これはかの地にサソリの多い反映である。

## サタン

【靈名】

【ヘブル語】敵たふ者】

1 サタンはもミケルビムの一人であり(エゼキエル

書廿八の十二—十五)、大なる權威を以て宇宙の一部分を宰つたやうである。けれども彼は傲慢に由つて神に叛いた(エゼキエル書廿八の十六・十七、イザヤ書十四の十二—十四)その爲天より放逐せられ、世界に空中にその領分として活動しつつある(エペソ書二の二、ペテロ前書五の八、テモテ前書三の六)。創世記一の二にある闇黒は神の造り給ひし最初の天地が、サタンの叛逆によつて斯くなつたのであると解く學者もある。人類が造られた時、彼は蛇に入つて、エバを欺き、アダムとその子孫を墮落せしめた。而して基督の空中再臨の時、彼は地に逐下されて、地にある聖徒を滅すために活動する(黙示録十二の七—十)。けれどもやがて又基督地上に顯現して、彼を縛し、これを底なき所に千年閉込め置き給ふ(黙示録廿の一—三上半)。千年終りて後一時その檻より解き放たれ、諸國の人を惑はし、聖徒の陣營にエルサレムを圍ましむるけれども、天よりの火によりて悪人は焼き盡され、サタンは火に硫黄の池に投入られて、世世限なく苦めらるるのである。(黙示録廿の七—十)。サタンには『虚偽の父』(ヨハネ傳八の四十四)、『この世の君』(ヨハネ傳十二の三十一)、『この世の神』(コリント後書四の四)、『アバド』、『アポリオン』即ち滅す者(黙示録九の十一)、『ベルゼブル』(マタイ傳十二の廿四)、『ベリアル』(コリント後書六の十五)など種種の稱呼がある。新約書にサタンの活動につき次の如く録されてゐる。『始より罪を犯す者』(ヨハネ第一書三の八)、『世の暗黒を宰る者』(黙示録十二の九、コロサイ書一の十三)、『世を欺き従はざる者の中に働く者』(テモテ前書五の十五、エペソ書二の二)、『麥の中に毒麥を播く者』(マタイ傳十三の廿五)、『教會に敵し、又これを滅さん計る者』(ペテロ前書五の八)、『諸

ての迫害に患難を起す者』(黙示録二の十)、『巧なる罟を張り、火箭を放つ者』(エペソ書六の十一・十六、コリント後書二の十一、十一の十四、テモテ前書三の七)、『惡しき思想を起さしむる者』(ヨハネ傳十三の二、使徒行傳五の三、コリント前書七の五、エペソ書廿四の廿七)等。2 惡鬼とはサタンの部下にある靈物で、その数は多い。基督在世當時その働を妨ぐる爲に世に遣はされ、病疾・困難の因となり、殊に人人の精神を亂した。彼らの所在地も空間及び地上であつたらう(ルカ傳十一の廿四—廿六、マルコ傳五の八—十三)。3 鬼 これもサタンの使者であるが墮落した天使(ペテロ後書二の四、ユダ書六、参照)とは違ふやうである。その本源については解らぬが、その動作は惡鬼に大差なき様である。彼らは人を感動し、又人に憑く、彼らは基督の無上の權威を認めて居る。又自らその滅亡の永遠の痛苦である事をも知つてをるやうである(マタイ傳八の三十一・三十二、廿九)。彼らも永遠の滅亡に入るのである(マタイ傳五の四十一)。

## サツピラ

【人名】

(女)【アラマイク語】美し】又は【サファイヤー】(寶石の名)【アナニヤミ稱ぶ

人の妻で、その夫と共に地所の賣價を偽り、神の罰を受けて忽ち死亡した(使徒行傳五の一—十一)。

## サドカイ

【宗派名】

サドカイミは「正義」の義で、有名なる祭司長サドクより來た名稱であらう(列

王紀上二の三十五)その起原は詳にないけれども、彼らは祭司族中の名家なるサドク家の末裔及び朋黨で、ダビデ、ソロモン時代より捕囚時代に至り、更に復興後エズラの時代よりスリヤの管理を受くるに至るまで祭司長の地位を世襲したものであつたが、基督前二世紀の頃マカビウス家の英雄等が全權を振つた頃、彼らはその地位をマカビウス等に占められたので、これが回復に努力し、遂にイエスの時代には、彼等の族戚や黨派の人人が復た祭司總長の椅子を占めたのである。アンナスやカヤバの如きは皆こ

サツピラ サドカイ

の派の人である（使徒行傳五の十七）。パリサイがその黨勢を多く人民の間に張れるに反し、サドカイの勢力範圍は最も高等祭司族中に多く、祭司總長の外多數の祭司は人民中の上流社會を網羅してゐた。ヨセフアスは「サドカイは人民を味方にもつてゐなかつたが、富貴の人人をもつてゐた」といつてをる。彼らは聖書を重んじ、割禮及び安息日に關する規律を嚴守し、祭壇に關する種種の職務を執行したが、その最も貴重視したものはモーセの五經であつて、不成文の傳説を排斥した。彼らは亦天使の存在、死者の復活を疑つた（マタイ傳世二の廿三、マルコ傳十二の十八、ルカ傳廿の廿七、使徒行傳廿三の八）。亦彼らは運命説を否定し、善惡共に人間の自由選擇に基けるもので、神の意志に協同を得る必要がないと主張してゐた。彼らが宗教的信仰の報酬として望む所のものは地上の幸福・長壽・子孫繁昌等の現世的賜物で、精神の正直と才能を重んじたけれども、その態度は驕慢にして俗氣に富み、人民に對して峻嚴であつた。又彼らは日常生活の自由を愛し、ヘロデの宮廷その他より饗應に招かるれば敢て辭せず、異教徒と交際し相親しむことも平氣であつた。且つ何事にも冷然として熱情を嫌ふ事が彼らの常であつたから、彼らがバブテスマのヨハネ、イエス及びその弟子等を狂妄の徒として擯斥したのは當然である（マタイ傳三の七、十六の六、使徒行傳四の一、五の十七、廿三の六・九）。

## サドク

人名

（男）「ヘブル語義し」

以色列の民の中にはサドクと名乗るものが多く、普通

の名であるが、その中の一人で最も有名なのはエレアザルの血統であるアヒトブの子で、ダビデ王の治世に、アビヤタル又はアビメレクと共に祭司長であつた人である（サムエル後書八の十七、歴代志上廿四の三）。彼はヘブロンに於てダビデに就き従つたが（歴代志上十二の廿八）、誠に忠義の心篤き人で、アブサロムが反逆を企てた時も、ダビデ王の求に従つてエルサレムに止り、密にダビデ王を助け（サムエ

ル後書十五・十七）、その後ソロモン王に膏を注いで、かれを王位に即かしめた（列王紀上一の三十九）。後にはただ獨で祭司長の職務に當つたが、その裔は代代祭司長となり、捕囚時代に及び、復興後も祭司長となつたものが多い、サドカイ派は彼の裔とその一派によつて起つたといはれてをる。

## 審判

術語

審判は世の終末に於てイエス、キリストの行ひ給ふ事であるこのみ思ふものがある

が聖書を仔細に調べるに數種の區別がある。1 十字架に死に給うたキリストに於て、萬民の罪は定まつてをるが（ヨハネ傳三の十八、エペソ書二の三）、信する者は既に審判を受けてしまつたものとして、以後審判はない（ヨハネ傳五の廿四、十二の三十一・羅馬書五の九、八の一、コリント後書五の廿一、ガラテヤ書三の十三、ヘブル書九の廿六・廿八、十の十・十四・十七、ペテロ前書二の廿四、三の十八）。2 信者は己を審判し、己の罪を見て、己を罪人として悔改めるならば審判されない。悔改めなければ懲治を受ける（コリント前書十一の三十一・三十二、サムエル前書七の十四・十五、十二の十三・十四、コリント前書五の五、テモテ前書一の廿、ヘブル書十二の七）。3 キリストの空中再臨の時、即ち義人の甦の時、信者はその行爲の如何を審判せられ、或者は賞を得或者は損を受ける。これを「報賞の審判」といふ。勿論信者の罪の審判は既に終つた事故、この審判は唯報賞に關するものである（コリント後書五の九・十、マタイ傳十二の三十六、羅馬書十四の七・十三、ガラテヤ書六の七、エペソ書六の八、コロサイ書三の廿四・廿五、コリント前書三の十一・十五、黙示録廿二の十二、マタイ傳十六の廿七、ルカ傳十四の十四、コリント前書四の五、テモテ後書四の八）。4 キリストが大艱難時代の終に地上に顯現し、偽基督・偽預言者を滅し給ふ時、生ける國民の審判が地上に於て行はれ（マタイ傳廿五の三十一・四十六）、千年王國時代に入る。これはかの白く大なる寶座の前に於ける審判と混同すべきではない。



この時には書が展かることなく、三種の者が集合して居る、即ち「綿羊」に「山羊」に「兄弟」である。而してその場所は世界である。この兄弟は「猶太人」の遺残者で、彼らを如何に取扱ふかによつて賞罰を受くるのである。信者はキリストと共にこの審判に當るのである（マタイ傳廿五の三十一・三十二、コロサイ書三の四、黙示録三の廿一、コリント前書六の三）。5 キリストの地上再臨の時、以色列の受くる審判がある（エゼキエル書廿の三十三―四十四、詩篇五十の二―七、マラキ書三の二―五、四の一・二）。6 サタン及び墮落天使即ち惡鬼の審判（黙示録廿の七―十、ペテロ後書二の四、ユダ書六）、これは千年王國後に於ける事件で、信者はキリストと共にこの審判をするのである（コリント前書六の三）。7 萬國民の審判、即ち白き大なる寶座の前にある審判で、悔改めずに死んだ凡ての人はこの時に甦つて審判を受けるのである（黙示録廿の五・十一―十五）、これは世の終末の事件である。以上を概観すれば審判の時期は四期となる。即ち1と2は信者の地上にある時に信仰によつて行はれ、3はキリストの空中再臨の時に空中に於て行はれ、4と5はキリストの地上再臨の時即ち顯現の際―千年期の初期―に地上に於て行はれ、6と7は千年王國後に白き大なる寶座の前に於て行はるるのである。

**審判者―士師**

職名

1、「審判者」は以色列人中の司の職名である。これはももモーセがその義父エテロの勸告に従つて撰んだものである（出エジプト記十八の十三―廿六）。審判の權はもも長老若くは家長に屬してゐたものであるが、王國となつて以來、王たる者がその權を握り、時に律法の解釋に關して祭司に謀り、又祭司によりて神の旨を尋ぬる特權があるにせられた（民數紀廿七の廿一、サムエル前書十四の十八、廿二の十・十三・十五、廿三の六）。又王の下に地方の審判者があつたが、その中多くはレビ人であつた（歴代志下十九の五―十一）。後世に於てはサンヒドリムに稱する議會がこの權

を有してゐた。別項『議會』を見よ。2、「士師」は昔以色列國に於て特別の場合に召されて、驚くべき能を以て敵を撃退し、國を治めた人人である。士師はオテニエルよりサムエルまで十五人で、彼らの國を治めた年數は約四百年である。

**蕃紅花**

植物名

蕃紅花は草本で、秋紫堇色の花を開く。春同じ色にさくのを春蕃紅花といひ、橙黄の花のさくのを黄蕃紅花といふ。その猩紅花をなせる雄蕊頭を六萬本集めて、僅かに一ポンドのサフランを得られる。これは藥劑としては健胃・鎮痙及び通經に用ゐる。染料としては糖菓類及び飲料などに加へて見事な色を現はさせる。パレスチナ及びシリアには栽培種の外七八種類があつて、何れもその花を取つて食物に香を添へ、色を添へる料とせられる。殊にこれを以てわが國に於て茶飯を炊く如く、飯米に色を附ける事が盛である。蕃紅花はもも紅顏玉を欺く少年であつたが、さる女神の術に落ちてこの花の姿をかへさせられたといふ傳説がある。この花はまたいみじき香料の一で、風流な公會の席などで、椅子に蕃紅花水を注ぎかけ、床に同じ葉を播きちらす事があるといふ（雅歌四の十四）。イザヤ書三十五の一にある蕃紅の花は雅歌二の一にある野花と同じで、「水仙花」にするが適譯である。別所氏は『聖書植物考』によつてをる。

**サマリヤ**

地名

【ヘブル語『展望所』又は『觀望山』】1、パレスチナの中央直徑六哩の平地中の山頂に建てられた有名なる市城で、エルサレムを距る事北方へ三十哩、シケムを距る事西方六哩の處にある。ももセメルといふ人の所有であつたのをイスラエルの王オムリが銀二タラント（約七千八百圓）を以て買取り、イスラエル王國の首府としたのであるから、舊所有者の名によつてサマリヤと名づけたといはれてをるが、この地がその名の示す如く、よき『展望所』である所から、サマリヤとよ

サフラン サマリヤ

ばれたのであるかも知れぬ。この地は前述の如く谷の中に屹立する事三百呎、その眺望よく、山山は各方面を圍み、唯西方に狭き入口があるのみで、もし頂上の平地に達しようすれば嶮しき坂を上らなければならぬから、眺望に兼ねるに防衛上類稀なる處で、首府として好適地であつた。それ故ここは久しくその地位を保ち、イエスの時代にはヘロデがここを居城としてゐたのである(列王紀上廿の一一廿一、同下六の廿四、十七の五・六、十八の九・十参照)。現今はセバスタヤと稱する寒村があつて(ミカ書一の六・七)、住民は一千に達せず、僅に古の面影を偲ばしむるに足る遺物の幾つかが存するのみである。これによつて見れば、神殿と王宮と天守とは皆山の西側に立つてゐたやうで、莊麗なる花崗石の高さ十五呎ばかりの一本石で成つてをる宏大な柱が十數本立ちならんでをる。多分城に達する路は幾層かの臺地より成り、各臺地は民家と官殿とによつて掩はれてあつたであらう。最高の頂上には數基の折れて顛倒した柱がある、王城の跡を示すものである。山背の窪地には劇場の墟址もある。2、サマリヤの國はイスラエル國と同じ國で、その首府たるサマリヤよりかく名づけられたのである。別項『イスラエル』を見よ。3、新約時代のサマリヤ國。パレスチナの中央に位し、南北約廿五哩、東西約四十哩の廣さがある(ヨハネ傳四の三・四)しかし嚴密にいへば當時一個の行政区劃をなした國ではなく、唯シケム及びサマリヤなさいへる邑の附近一帶の地方を指していふのみである。その境域は海にも面せず、河にも臨まず、その版圖は不定で、雜種の民が住んでゐた。即ち彼らは一部はイスラエル人、一部は異邦人より出でたもので(列王紀下十七の廿四)、異邦人はサマリヤに移さるるに際し、各その國神禮拜を齋らしたため(列王紀下十七の廿五―三十三)、サマリヤの宗教は一種の混淆的のものとなつた。それ故ユダの民が捕囚より歸還の時、彼らと相容れず、神殿の再建・石垣の改築に際し、彼らの加はる事を拒

んだ爲、彼らはこれを怒つて、その工事に妨害を加ふるに至り、斯くて兩者の間に著しき隔を生じ、互に相敵視してイエスの時代に及んだ(エズラ書及びネヘミヤ記を見よ)。而してサマリヤ人は別にゲリジム山に神殿を建て、エルサレムの神殿に對抗したので、ガリラヤにあるユダヤ人はエルサレムの神殿に至るにヨルダン河の東を迂回し、サマリヤを経ずして上つた。これはサマリヤ人の嘲笑と危難を避くる爲であつた。キリストも始めその弟子をサマリヤに遣はし給はなかつた(マタイ傳十の五)。ヨハネはサマリヤ人の無禮を憤つて、天より火を降さん事を主に乞うた(ルカ傳九の五十四)。但イエスは他のユダヤ人の如くサマリヤ人に對して偏狭な心を有ら給はず、サマリヤの女と語り、又「善きサマリヤ人の喩話」を語り、或は癒されたサマリヤ人を賞め給うた(ヨハネ傳四の七―四十二、ルカ傳十の三十・三十七、十七、十七の十一―十九)。甦の後「サマリヤ……にわが證人となるべし」といひ給うたが、ピリポはそこで福音を傳へ、ペテロやヨハネも共に行つてこれを助けた事が使徒行傳に見えてをる(一の八、八の五―廿五)。尙サマリヤの地味や産物について一言すれば、この地方は此處彼處に豐饒なる高原地を有する小山や村落があつて、麥類、玉蜀黍、無花果、橄欖、葡萄等はそれぞれの季節に於て、充分の收穫がある。ヨセフアスは土地の果實多き事、樹木の繁茂してゐる事、その水の善良である事、草の牧畜に適する爲に他の土地よりも家畜の産する乳量の多い事などを記してをる。又この地が「ユダヤの姉」といはれてをるのは(エゼキエル書廿三の四)、この地がユダヤより早く開け、早く繁榮し、早く腐敗したからである。その早く開けたのは交通に便利であるの爲、食物の豊であるの爲に基くのであるが、その腐敗も亦これに因るので、彼らは收穫の豊なるを誇り、安逸に流れ、淫佚に處を得させたからである。

**サムエル** **人名** (男) 『ヘブル語「神に聽かる」』 ラマタイム・ゾビムに住んだレビ人エルカナミ其妻ハンナの神に祈つて生んだ子で(サムエル前書一の廿)、幼時よりシロにあつた神の幕屋に遣られ、祭司長エリの許にあつてエホバに事へたが、エリの死後以色列の最後の士師となり(使徒行傳十三の廿)、毎年以色列の地を廻つて民を審判した。其政治が正しかつた爲、民は偶像を棄てて眞神に歸り、その敵ペリシテ人に勝利を得た(サムエル前書七の三・四・十)。けれども彼の老年なるに及び、その二人の子を以色列の士師としたが、彼らの執政が不正であつた爲、且又近傍諸國に王があつて、國威のあがれるを見て、國民は王を立てる事を求めたので、神の啓示によりて王政を行ふ事となり、サウルは最初の王となり、サムエルはその指導者となつてゐたが、サウルはその罪の爲に棄てらるる事となつたので、サムエルはダビデに膏を注いで、以色列國の王とする準備をなした。かくて後彼は年老いてラマに葬られた(サムエル前書廿五の一)。舊約書中の士師記、ルツ記、サムエル前書一章より廿四章まではサムエルによつて書かれたものであらうといはれてゐる。

**サムエル前後書** **書名** 舊約書中の歴史書で、往古は一卷の書であつたが、初めて七十人譯で分離され、ラテン譯も、英譯も、和譯もこれに倣うて分離したのである。その初の部分前書一―廿四章はサムエルによりて記され、他の部分はダビデ並にソロモン時代の預言者ナタンミカドの記したものであらうといはれてゐる(歴代志上廿九の廿九)。又或人人は預言者エレミヤ、イザヤ、エズラ等であらうといつてゐる。本書の内容を概観すれば、(一)最後の士師サムエル(前書一―十二)、(二)君主政治の起因(同八)、(三)最初の王サウル(同九―三十一)、(四)弟二の王ダビデ(後書全體)、(五)預言者の職業の諸點が記されてある。

サムエル前後書の分解表

第一部 サムエルの治世 (前書一―十二)	第二部 サウルの治世 (前書十三―三十一)	第三部 ダビデの治世 (後書全體)
一、サムエルの誕生及び幼時(一の二―三の十八) 二、預言者となる(三の十九―廿一) 三、ペリシテ人との戦・最後の大勝利(四の一―七の十七) 四、サウルを王に任ず(八―十二) 五、告別の辭(十二)	一、サウル王位に上る(十三―十四) 二、彼の不従順(十五) 三、ダビデ膏注がる(十六) 四、サウルの衰頹とダビデの興隆(十七―三十) 五、サウルの死(三十一)	一、ダビデ、ユダの王となる(一―四) 二、全支派の王となる(五の二―三) 三、エルサレムの占領(五) 四、エルサレムを宗教的中心とす(六―七) 五、領土を地中海よりユフラテまで擴張す(八―十) 六、彼の犯罪と結果(十一―十八) 七、彼の悔改と回復(十九―廿四) 一、シバの反逆と鎮靜(廿) 二、ギベオンと和解す(廿一) 三、感謝と信仰の歌(廿二―廿三) 四、民衆調査と刑罰(廿四)
◎本書の特色 (其一) 一、『萬軍のエホバ』の言は始めて本書に用ゐられた(前書一の三) 二、メシヤの字も始めて本書に出てゐる(前書二の十) 三、始めて預言者學校が設立された(前書十の五、十九の廿) 四、初めて聖靈について明白に教へられてある(前書十の六・九、十一の六・十六の十三・十八、十六の十四)	◎本書の特色 (其二) 一、始めて君主を牧羊者に喩ふ(後書五の二) 二、君主を膏注ぎし者といふ(前書廿四の六、後書一の十四・十六、廿一其他) 三、二つ名高き喩話(後書十二、十四) 四、靈感によりて語る(後書廿三の二)	

**サムソン** (男)〔ヘブル語「小太陽」又は「太陽男」〕ダンの支派に属するマノアの子。以色列の有名な士師である。その生涯四十年間中廿一年は士師となりてその民を治めたが、その終の部分は祭司エリ及び預言者サムエルと同時代であつた。その生涯は士師記十三―十六章に記されてをる。彼は肉の力に於て偉大であつたが、徳を守る心の弱かつた爲、遂に惨忍なる死を遂げた。その強さは神の靈の感動にあるものであつた(士師記十三の廿五、十四の六・十九、十五の十四、十六の廿・廿八)。その信仰についてはヘブル書十一の三十二に他の聖徒と共に記されてをる。

**サモス** **地名** 〔ギリシヤ語「高い」又は「山」〕エージアン海にあるギリシヤ群島の一で、小亞細亞の本土を去る事數哩、スムルナを距る四十二哩の處にある。東西の長さ廿七哩、南北の幅十哩あつて、島の表面は荒れてをり、山岳に富んでをる。その主峰ケルキ山は四千七百呎ある。島の名はこんな所から付けられたのである。ここは哲學者ピタゴラスの出生地で、パウロは第三傳道旅行の歸途この島の西岸に一泊した(使徒行傳廿の十五)。今はサモシといふ。

**サモトラケ** **地名** 〔ギリシヤ語「トラキアンのサモス」〕ギリシヤ群島中の一で、小亞細亞のトロアスよりマケドニアのネアポリスに行く途中にある。この島はサモスと同じく山に富んでをる。長さ八哩、幅六哩の小島であるが、神所の住所として知られて居る。パウロは第二傳道旅行の際この島を経て、歐洲に入つた(使徒行傳十六の十一)。

**サラ** **人名** (女)〔ヘブル語「女王」又は「皇女」〕アブラハムの妻であり、イサクの母であつて、其以前の名をサライと稱んだ。サライとは「争を好む」といふ言から出た名だとの説もあり、「君らしき」或は「わが女王」の意だとも言はれてをる。アブラムに「ハ」を加へてアブラハムとなし、サライの「イ」

を除いてサラミしたのは一字の喉音(h)を加へられたので、この喉音による文字(h)は息を吹き出さずしては發音する事の出来ない字で、ヨハネ傳廿の廿二にキリストがその弟子等に格別なる特權を與へんじて息を吹き給うた如く、ここでも神は息を吹き入れて、子孫を生むべき特權を賦け給うたのだ。ジユークは説明してをる。尙サラには「茂る」といふ意がある。稱へる者もある。最近女性名詞の語尾が「イ」より「ア」に變じた事に關し、エル・シヤダイ(全能の神)について新しい議論が起されてをる(創世記十七の一参照)。彼女の兩親の事は聖書に詳でないが、猶太人の傳説によれば、サラはアブラハムの兄弟であるハランの女で、ロトの姉妹であるとの事である。この説をみるにサラはアブラハムの姪となるのである。他の説にはサラはアブラハムの異母妹であるとの事がある、この方が眞實であらう(創世記廿の十二―十三・十六参照)。彼の死んだ時は百廿七歳で、イサクを生んでより三十七年後、その夫アブラハムの死に先だつて廿八年であつた。その遺骸はヘブロンに近きマクベラの洞に葬られた(創世記廿三の一・二・十九)。

**サラミス** **地名** クプロ島の東岸、ペディヤス川の北畔にあつた市邑で、良港であつた。以前はこの島の首府であつたが、パウロ等の巡廻した時は首府は西のバボスに移されてあつた(使徒行傳十三の五)。當時の人民はギリシヤ人ミフェニキヤ人との混合で、町の調子と色彩はギリシヤ風であつた。而してその重なる宗教神殿はサラミニヤン・ゼウスであつた。紀元後三百三十二年と三百四十二年に地震があつて、これが爲めに邑は荒れたが、コンスタンチン二世(三三七―三六一年在位)によつて再建され、コンスタンチンといはれた。今はその古跡が荒廢して往時の建物の基礎柱等の外に残つてをるものはない。

サリム サルカ サルゴン サルデス

**サリム** **地名** 【ヘブル語『全き』、『平和』】 アイノムに近き地で、パプテスマのヨハネはこの邊でパプテスマを施した(ヨハネ傳三の廿三)。この地は當時よく知られた處で、スカルの東近くにあつた邑らしい。別項『アイノム』を見よ。

**サルカ** **地名** 【ヘブル語『流轉』】 バシヤンの國の東境の丘にあつた市邑で、オグの治めた邑の一である。現今エベル・エル・ドウルユーゼ(バシヤンの山)と稱する火山系の山の南端の高所にあるザルカといふ邑がそれである。石造の邑で、三百呎の丘上にある、以前墳火口であつたかと思はるるところに、城が立つてをる。水は雨期に貯藏せられた水溜から供給されてをる。

**サルゴン** **人名** 【アツスリヤ語『確立せる王』、『強き者』、サルー・ケヌーミといふ】 イザヤ書廿の一に記されてをるアツスリヤの有名な王で、セナケリブの父である。彼は紀元前七百二十二年即位し、七百十八年にはサマリヤを取り、前帝王の如く西部亞細亞とバビロン國を併呑して、アツスリヤの有さした。彼はヘテの都カルケミシを略奪したので、東より西に至る大道路を開いた。又彼はエルサレムを攻撃せんとしたが(イザヤ書十一の十一?)、七百四年に死んだ。

**サルデス** **地名** 【ギリシヤ語『赤い?』】 小亞細亞のルヂヤ國の首府で、スミルナ山の麓、バクトラス川の濱にあつた都會である。テアテラの東南三十哩、スミルナよりは東北五十哩の隔がある。此都會は太古の名高く且つ貿易の盛な場所、位置の樞要なる大なる富みの爲に、屢その敵の攻撃を受け、其財寶を掠め去られたのであつた。紀元前五百四十八年ベルシヤ王クロスが之を占領した時は、ここに都してゐた國王クリソスより金壹億萬圓を掠め去つたといふ事である。紀元前三百三十四年にはギリシヤのアレキサンダー大帝に征服せられ、同二百十四年にはスリヤのアンチオカス之を攻略し、後羅

馬帝國の屬領となり、紀元後十七年の大地震の爲に打壞されたが、羅馬帝テベリオの助によりて再興せられ、復盛大な市邑となつた。しかし、エペソやスミルナやベルガモよりは遙に劣つてゐた。使徒時代には此處に教會が建てられ、小亞細亞内地傳道の立脚地となつてゐた(黙示録三の一―三)。第十一・二世紀の頃トロコ人に占領せられ、次第に衰微して、今はサルトミといひ僅かにその場所を指定し得るのみで、教會の建つてゐた處だと思はれる所には、少數の野蠻人が羊小屋の如き物を建てて住んでゐるに過ぎなかつた。其探見者は述べてをる。

**サルモネ** **地名** クレテ島の東端にある岬である(使徒行傳廿七の七)。

**サルモン** **地名** 【ヘブル語『臺地』、『高地』】 シケムの市邑を圍んでをる高山である(詩六十八の十四)。士師記九の四十八にあるサルモンも同一の地である。

**サルモン** **人名** 【ヘブル語『被服』、『掩ふ』】 ルツの夫ボアズの父(ルツ記四の廿一、マタイ傳一の四・五)。

**サルモン** **地名** 前項『サルモン』を見よ。

**ザレパテ** **地名** 【ヘブル語『精煉する所』】 地中海濱に臨み、ツロミシドンの間にあつた邑である。預言者エリヤは饑饉の時この地の寡婦に養はれた(列王紀上十七の八一―廿四)。今はスラフエンドと稱し、石塚のみその跡に存つてをる。

**ザレパタ** **地名** ザレパテと同じ、前項を見よ。

**サレム** **地名** 【ヘブル語『平和』、『安全』】 メルキセデク王の住んでゐた都會の名で、エルサレムの古名であらう(創世記十四の十八、ヘブル書七の一・三)。詩篇七十六の二にあるサレムは確かにエ

サルモネ サルモン ザレパテ サレパタ サレム

ルサレムの事である。

**サロメ** **人名** (女) 『ヘブル語平和』 1、ゼベダイミといふ人の妻で、イエスの弟子ヨハネヨコブの母である(マタイ傳廿の廿一、廿七の五十六、マルコ傳十五の四十、十六の一)。これらの語句ヨハネ傳十九の廿五を對照して、彼をイエスの母マリヤの姉妹であるに論ずるものがある。これは眞實らしい。2、ヘロデヤの娘で、ヘロデ王の前で舞をなし、その恩賞としてバブテスマのヨハネの首を求めた女である。聖書中にその名が記されてないが、ヨセファスの歴史にその名が現はれてをる(マタイ傳十四)。

**産業**

**術語**

聖書に於ては人の有てる地面を指して産業といふ。この世界にその中に満てる物は皆神の所有であるから、神はその聖旨の儘に人人に分ち、その住所の境を定め給うた(詩篇五十の十二、使徒行傳十七の廿六)。而して神はカナンの地に住んでゐた諸種族を、その罪惡に偶像に事ふる故を以て滅ぼし給ひ、その地をアブラハムの子孫である以色列の人人に與へ、且つ籤をもてこれを十二の支派にその凡ての家族に分配し給うた(民數紀三十三の五十四、ヨシユア記十三の六)。イスラエルの國に於ては各の産業は他人の所有とする事の出来ない規程があつて、若し故ありてこれを賣り、他人の所有になつても、ヨベルの年に至れば、これを元の所有者又はその相續人に無條件で返さねばならなかつた(レビ記廿五の十)。又本妻から出た男子は産業を繼ぐ事が出来るが、妾腹の子はこれを繼ぎ得ない規程であつた。又親の産業を分與せらるるに當り、長子是他の子の二倍を受ける制度もあつた(申命記廿一の十五―十七)。但長子に不都合の事があつた場合は、彼はその權を失ふ事もあつた(創世記廿五の三十一、四十八の十七、四十九の三・四)。男子なき場合は女子がその産業を繼いだ(民數紀廿七の八)。けれども

さうして相續した女子、はその支派に屬する者にのみ嫁がねばならない規程であつた(民數紀三十六の六―九)。兒女のない場合には、その産業は近い親族のものになつた(民數紀廿七の九―十一)。忠義な僕が主人の女の婚となり、或は養子になつた場合は、その産業を繼ぐことが出来る(歴代志上二の三十四、三十五)。

**サンバラテ**

**人名**

(男) 『アツスリヤ語』月神は活かしめた』 ベルシヤ王アルタシヤスタの任用したサマリヤの官吏で、モアブ人である(ネヘミヤ記四の二・六)。彼はネヘミヤユダの人人がエルサレムの石垣を再建するに際し、大なる妨害をなした(ネヘミヤ記二の十・十九、六の十七―十九、十三の廿八)。これは紀元前四百四十五年の事である。

**シ**

**死**

**術語**

聖書に記さるる死といふ言に四つの意味がある。1 肉體と靈魂と分離する事である(創世記廿五の十一、ヨブ記三十四の十四・十五、傳道の書十二の七)。2 罪の權下にある靈魂の狀態を指す(エペソ書二の一、五の十五、ヨハネ第一書三の十四)。3 永遠の刑罰(ヤコブ書五の廿、黙示録二の十一、廿の六、廿一の八)。4 又大なる災害、危険の狀態を指して『死』といふ事もある(コリント後書一の十、十一の廿二)。(一)これらの**死の原因**は我等の始祖アダムが、神の命に叛いたからである。神は彼らをエデンの園に置き給ひし時、善惡を知る樹の果を食べてはならぬ之を食ふ日には必ず死ぬるに仰せ給うた。始祖らがこの誠命を破つた爲に、その結果である死が始つたのである(創世記二の十七、ロマ書五の十二―十四、コリント前書十五の卅一・卅二、ヘブル書九の廿七)。(二)**死**

**サンバラテ**

滅亡。キリストは此死を滅し、且つ死を畏れて生涯これにつながる者を救はうとして、救ひの道を立て給うた（ヘブル書二の十四・十五、コリント前書十五の廿、テモテ後書一の十、黙示録廿の十四）されば凡て彼を信じ、彼に任せ、彼を愛してこれに従ふ者は、皆この恵みに與り、救はる事が出来る。たゞへ肉體の死は免れる事が出来得ないにしても、死の刺は取り去られて苦痛なく、且つ復活によつて全く死の權に勝つ事が出来る。（コリント前書十五の五十五―五十七）。

シウオンサイ

禮典

神に献ぐる獻物の一つで、神と交はる事を表はすものである。その獻物は動物性并に植物性の食物より成る。その獻物は三部に分割され、一部は祭壇の上に燔かれ、一部は祭司に食せられ、他の一部は犠牲的晚餐として、禮拜者及びその知己朋友たちに食せられるのである。かくの如く神と祭司と禮拜者が、皆齊しく同じ食事をする者として顯はされるのである。（レビ記三の一―十七、七の十一―廿一）。

集議所

シオン

地名

別項「議會」を見よ。

【ヘブル語「城砦」或は「日の照る處」】 1 エルサレムの石垣の中の西南方に

あつた高丘の名である。ユダの王等はこの丘の上に宮殿と城廓を築いた。又その墳墓もこの處にあつた（サムエル後書の七、列王紀上八の一、同下十九の廿一・三十一、歴代志上十一の五、同下五の二）もここはエブス人の住んでゐた處であつたが、激戦の後ダビデが占領したのである（サムエル後書五の六一―九）。 2 聖書にシオン又はシオンの女といはれてある場合は、エルサレムを指してをる（詩篇百四十九の二、八十七の二、イザヤ書三十三の十四、ヨエル書二の二）。 3 またある所にはキリストの教會（ヘブル書十二の廿二）、若くは天にある新しきエルサレムを指して、シオンといふ場合がある（黙示録

十四の一）。

死海

地名

パレスチナの東南境にあつて、ヨルダン河の注ぎ入る大湖で（創世記十四の三）普通にこれを死海と稱んでをるが、これはギリシヤ人の稱へた名で、聖書の中には見えてをらぬ。別名を『アラバの鹽海』とも（申命記四の四十九）、『東の海』とも（ヨエル書二の廿、エゼキエル書四十七の十八、ゼカリヤ書十四の八）、又單に『海』ともいふ（エゼキエル書四十七の八）。現今アラビヤ人はパールツトと稱んでをる。『ロトの海』の義である。この湖は南北の長さ四十六哩、幅五哩乃至十哩であるから、凡そ我が琵琶湖位の大きさである。その東南の濱から、湖中へ突出た地がある。今これをリサンといふ、その長さ十哩、幅五哩許ある。この湖は地中海面より低き事三百呎、エルサレム城より低き事三千八百呎、それに死海自身の深さ最深千三百廿呎であるから、この湖底がエルサレムより低い事は實に五千一百廿呎餘である。而して兩者の距離は僅僅數里に過ぎないから、ユダヤの荒野の傾斜面が如何に鋭き勾配で死海の底に沈み行くかがわかる。無論この湖には一個の流出口もないが、熱氣が猛烈であるのミアラビヤ性の熱風に煽られるので、ヨルダン河及びアルノン、ゼレデの兩河及びケデロン川より流れ込む多量の水を悉く蒸發せしめて仕舞ふ。それ故水は夥多しき礦物性の物質を含み、強きアルカリ性を呈し、色は透明美麗であるが、味は甚だ苦辛い。百分中四十二の食鹽があり、二十四の鹽酸マダネシヤ類を含み、比重は普通の水よりも一倍半重い。それ故人は海面に身を動かさず浮んで居る事が出来る。但浴後の不快は格別で、皮膚はぬらぬらに油を塗付けたやうで、是非ともヨルダンの流に行き、第二の水浴をせねばならないといふことである。一度暴風が吹き風せば、海面は忽ち揺り出すが、亦忽ち静まり行く、波は決して高く大きくならない。唯如何にも強く、重重しく、恰も鐵槌で小船の胴

シカイ シホノウミ

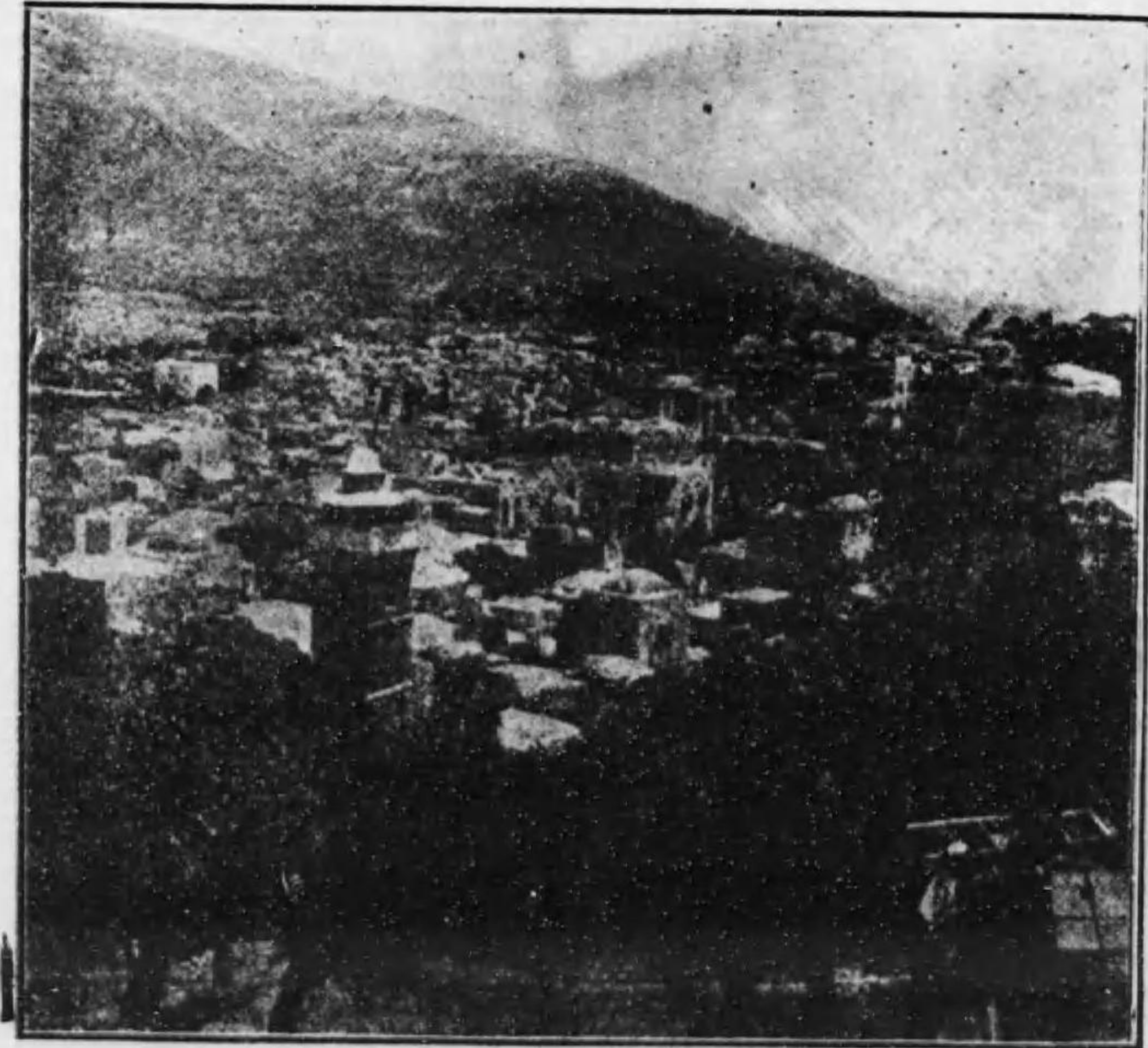
シケム

腹を打撃するかのやうである。死海には一切の生物がゐない。これは通俗には鹽分が強いからである。信ぜられてをるけれども、實は湖中に一種の毒素があるからで、死海の名稱の起つたのはこの故である。南部の浅い處即ちリサンの南は、深さ二十二呎位であるが、ここはソドム、ゴモラの跡だといはれ、この邊一帶に地瀝青、硫黄、曹達、鹽等が産出せられる。死海の中央の西岸にエンゲデの絶景がある(別項『エンゲデ』を見よ)。イエスの時代にはエッセネ派の人人が此邊に住んでゐた。

シケム 人名 (男) 【ヘブル語】肩

1 ヒビ人の君ハモルの子である。彼はヤコブの女デナを辱しめた事によつて、デナと同胞の兄弟シメオン、レビは大いに怒つて、謀を以てシケムとその父及びすべて其邑にあつた男子を亡ぼし、その邑を掠めた(創世記三十四)。

2 地名 ゲリジム山ミエバル



山ルバエミムケシ

山ミの谷間にあつた邑の名で、エルサレムの北三十四哩、サマリヤの東南七哩にある。これは元カナンの市の市邑であつたが(創世記十二の六、三十三の十八・十九)、以色列の人人がカナンを占領した後、エフライムの支派の産業の地となり、遁逃の邑となつた(ヨシヤ記廿の七、廿一の廿・廿一)。ソロモン王の子レハベアムはこの處で王位に即き、後又イスラエルの王ヤラベアムがこれを首府として、六世の王オムリがサマリヤに首府を移す時まで及んだ。後世ローマ帝國の領地となつて、その名をネアポリスといつたが、現今はその名をナブルスといふ。人口約二萬、大部分は回教徒で、七八百のクリスチャンがある。ヤコブの井、ヨセフの墓がその近傍に遺つてをる。この地は土黒く肥えて、草木は鬱蒼と生茂り、野菜島又は諸の果樹園があり、處處の泉から迸り出づる清流は、白玉を轉ずるが如く、實に美しい景色である。尚シケムに於てあつた重要な事件については下の引照を見よ(創世記十二の六・七、ヨシヤ記八の三十一・三十五、廿四の一・廿八、士師記九の一・廿三、列王紀上十二の一・廿五)。

シケル 雑語 別項『金錢』(聖書の)、『度量衡』(聖書の)を見よ。

シケレテ 物名 香壇の上に焚れた香の成分の一である。印度及び紅海より出づる袖貝類の厭甲を焼いて、これを粉にして製つたものであらう。袖貝は螺のやうな形であるが、外唇がひき開いてをる所からつけられた名である。このへたを燃すと強い香がする、他の佳い香とまぜると、香をよくしないうまでも、長く保たせるのである。それ故今も上部エジプト邊ではこれを香料に用ゐてをる(出エジプト記三十の三十四)。

シガヨン 雑語 【ヘブル語】さまよふ 【ヘブル詩の一種であつた(詩篇七の一)。原意が『さまよふ』『千鳥足』(酒に酔うて)である所から、エワルド以來「リズムの急激な變化をする熱狂的歌

シケル シケレテ シガヨイン



シギヨノテ シシシシシシキ

である」にされた。しかしこの様なものであるかは尙不明の中にある。ハバクク書三の一の一シギヨノテはシガヨンの複数であるが、多分これは「ネギノテ」(琴詩四)の書き違へであらうこの事である。

シギヨノテ

【雑語】

前項「シガヨン」を見よ。

士師

【職名】

別項「審判者」を見よ。

獅子

【動物名】

昔バレスチナに多くゐた猛獣であるが、現今はゐない。獅子は獣の王で、強く勇ましいものであるから、勇ましく強い事を表はす兆した。ユダの支派はこれをその旗章とした。キリストを「ユダの支派より出でたる獅子」と稱へた(創世記四十九の九、黙示録五の五)。ベテロ前書五の八には獅子がその脚を踏まうとして人を喰ふ事があることになぞらへて、悪魔が人を喰ふ事をする事を教へてある。

士師記

【書名】

舊約書の一巻で、以色列人が士師によつて治められた時代の歴史を記したものである。その年代を正確に計算する事は非常に困難であるが、ヨシユアの死よりサウルの即位まで三百三十年間とするのが適當であらう。この計算は列王紀上六の一、士師記十一の廿六、使徒行傳十三の廿に基くもので、出エジプトよりカナン入國まで四十年間、其時よりヨシユアの死まで廿七年間、サウルの治世四十年間、ダビデの治世四十年間、ソロモンの治世の初の三年間計百五十年間を四百八十年より控除すれば、三百三十年となるのである。それ故同一時に士師が二人ゐた時もあったのである。史家はエフタ、イブザン、エロン、アブドン、サムソン等をエリ及びサムエルと同時代であるとしてをる。當時以色列は屢エホバを棄てて偶像を崇拜行つた爲、エホバは彼らを懲戒する爲に、これをメソポタミヤ、モアブ、ベリシテ、カナン、アンモン等、近隣の敵に付し、彼らが災禍苦難の中に悔改めて、エホバを

求むるに至れる時、士師を遣つて彼らを救ひ給うたのである(士師記二の十一-廿三)。これを要するに「義は國を高くし、罪は民を辱しむ」(箴言十四の三十四)の聖語の生ける説明である。本書は自ら序言、士師の救拯、附録の三部に分れてをる。

一、序言 (一の六一-三の六)	二、士師の救 (三の七一-十六の終)	三、附録 (十七-廿一)
1、イスラエルのカナン討伐(一) イ、ユダの支派(一の二-廿) ロ、ヨセフの支派(一の廿二-廿九) ハ、その他の支派(一の三十一-三十六) ニ、イスラエルの失敗(二の一-三の六) イ、エホバの救(二の一-五) ロ、ヨシユア在世中のイスラエル(二の六-十) ハ、歴史の大略(二の十一-廿三) ニ、イスラエルの敵(三の一-六)	1、オテニエルの救(三の七一-八) 2、エホアの救(三の十二-三十) 3、シヤムガルの救(三の三十一) 4、アボラミバラクの救(四一五) 5、ギデオンの救(六-八) 6、トラミヤイルの統治(八の三-十三の五) 7、エフタの救(十の六-十二の七) 8、イブザン、エロン、アブドン(十二の八-十五) 9、サムソンの救(十三-十六)	1、ミカの偶像崇拜とその刑罰(十七、十八) 2、ヒビ人(十九-廿一) イ、ベニヤミンの背徳(十九) ロ、イスラエルの討伐戦(廿) ハ、ベニヤミンの存続法(廿一) ◎本書の模型的研究 一、メソポタミヤ人(この世) 二、モアブ人(肉) 三、カナン人(悪魔) 四、ミテアン人(世の事物) 五、ベリシテ人(肉的宗教) これらに勝たしむるものは神の靈である(三の十、六の三十四、十一の廿九、十三の廿五、十四の六、十九、十五の十四)

シシシシ

シシヤク シセラ シツジ シツテム

**シシヤク** **人名** (男) エジプト第廿二即ちバスト王朝の最初の王であるセソソキスで、多分ルビヤに生れた人である。彼は軍國主義の王で、亞細亞征服の望を抱いてゐた。彼はソロモン王の怒を遁れようとしてエジプトへ避けたヤラベアムを容れ(列王紀上十一の四十)。又レハベアム王の五年に、ユダに攻め入つて、神の殿を王宮にあつた寶を掠奪した(列王紀上十四の廿五・廿六)。カナークにあるアンモンの神殿の南壁に、シシヤクの入寇の記事がある。その占領された邑邑の名にはヨシユア記の中にある邑邑と同一なのが多い。

**シセラ**

**人名**

(男)

【アツスリヤ語の「セセル」(子)といふ義であるといはれてをる。もしヘブル語ならば『思ふ』、『考へる』であるが、ムーア氏は「士師記の註解」にこれはセミチック語でなく、ヘテ語であらうといつてをる】

ハゾルの王ヤビンの將軍であつたが、デボラミバラクの率ゐてゐたヘブルの軍勢に打破られ、ヤエルといふ婦人に殺された(士師記四の二・十三・廿二)。

**執事**

**職名**

キリスト教會の役員の名で、その職務は専ら教會の救済金を集め、これを適當な人人に分ち與へ、貧者・病者・寡婦・孤兒及び迫害に遇うて苦める者を訪ねて、これにすべて必要な扶助を與へる事である。執事たるべき者の資格はテモテ前書三の八一十三に明記せられてある(ヘブリビ書一の一)。又女執事があつて、専ら婦人の間に働いたのである(ロマ書十六の一)。

**シツテム**

**地名**

【ヘブル語『合歡の木』】

1 モアブの山麓にヨルダン河との間にあつて、合歡の木が多く成長する所の豊かな平地である。この地は以色列の人人がエジプトを去つてカナンへ至る途中、ヨルダン河の彼方で、最終にその陣營を張つた處である(民數紀三十三の四十九、ヨシユア記三の一)。この處でモアブミデアンの人人はバラムの策略によつて以色列人を惑はし、罪を犯させたので、

之が爲に以色列人もミデアン人も痛く罰せられた(民數紀廿五)。又この處でモーセは以色列の民を祝し、後彼らを離れてピサガの峯に登り、そこで永眠した(申命記三十四の一・六)。

**使徒**

**職名**

使徒は唯に使命を傳へるのみでなく、これを派遣する者を代表する使者の義である。新約書にはキリストの特に選り給うた弟子の稱として之を用ゐ、イエスが十二弟子をよび、之に汚れたる鬼を逐ひ出し、又凡ての疾病を癒す權を賜ひ、これを十二使徒とよび給うた事を記してある(マタイ傳十の一・四、ルカ傳六の十二・十六)。イエスの昇天後マツテヤはユダの代りに十二使徒の一人として用ゐられたけれども(使徒行傳一の廿三・廿六)、比喩的の語(黙示録廿一の十四)を除く外、爾後使徒の數は十二人に限られなかつた。パウロ、バルナバ、及び主の兄弟ヤコブも使徒と稱せられ、『アンデロニコミニユアスに安否を問へ、彼らは使徒たちの中に名聲あり』と稱へられたが(ロマ書十六の七)、シルワノも思ふに使徒であつたらう。尤もテモテヤアポロは使徒と呼ばれなかつた。使徒たる者に五つの必要缺ぐべからざる資格がある。第一は親しくイエス・キリストを見、又これに聽きたる事、殊に復活のイエスを見た事(ヨハネ傳十五の廿七、コリント前書九の一、十五の八)、第二にイエス・キリストの自ら選り給うた者であること(ルカ傳六の十三、使徒行傳一の廿四・廿六、コリント前書十二の廿八、エペソ書四の十一)、第三に聖靈に満たされた者である事(ヨハネ傳十六の十三)、第四に奇跡を行ふ能力を有する事等である(使徒行傳二の四十、コリント後書十二の十二)。第五に多くの人人を救に導く事である(コリント後書九の二)。彼らは教會全體に屬する者で(マタイ傳廿八の十九)、一地方の教會に屬せず、その生活は一所不住の生活で、南船北馬席暖まるに暇あらず、危難を恐れず、困苦を厭はず、

教の爲めに働き、人人に觀玩にせらるるが常である(コリント前書四の九)。  
使徒行傳 書名 新約書の第五卷で、ルカ福音書の著者と同じルカの記した者である。彼は之

を紀元六十一年の終頃ローマに於て書いたであらう。而して本書に記載せられた事項は、イエス・キリス  
トの復活より、使徒パウロの第一回ローマ人獄中までの事で、即ち紀元三十年より六十一年に亘る基督教  
會の歴史、特にパウロによりてなされた傳道の記録である。或人はこれを「聖靈の福音書」又は「聖靈  
行傳」な名づけてをる。本書の歴史的價值は、近代の研究によつて愈その正確な記録である事を承認  
せらるるに至り、引いてルカ傳の正確さ、これに關聯して新約書の眞實なる事を歴史家に認證せしむ  
るに至りつつある。著者ルカについて別項「ルカ」を見よ。

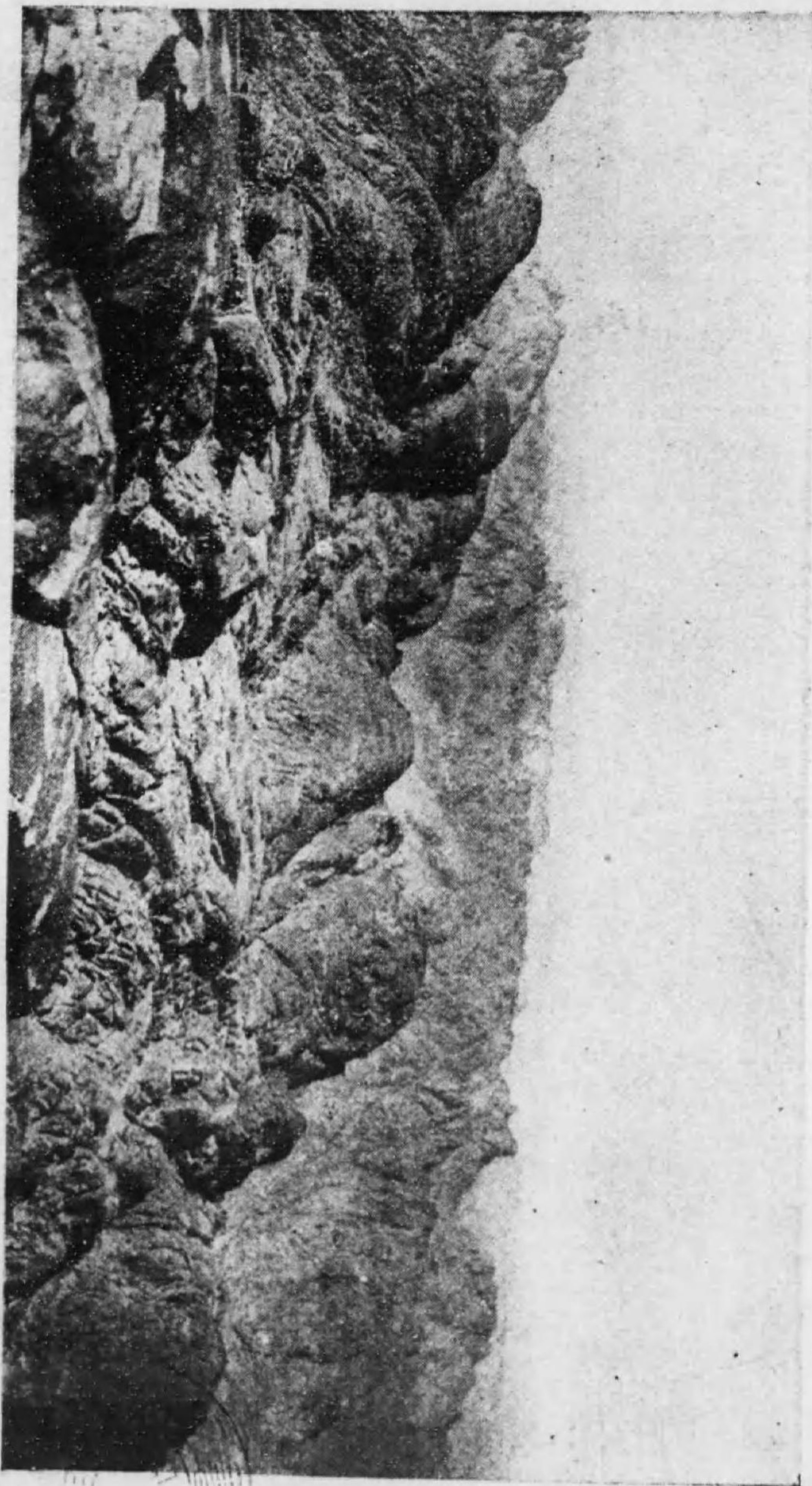
第一部 エルサレムに於ける教會	第二部 ユダヤ及サマリヤに於ける教會	第三部 アンテオケ教會	第四部 パウロの旅行
緒言、(一の十一) 主の最後の命令と昇天 一、エルサレムに於ける教會(一の十二—八の三) 1、教會の成立(一の十二—二の四十七) 2、神慮と説教(三の一—二十六)	二、ユダヤ及びサマリヤに於ける教會(八の四—十の十八) 1、サマリヤに於けるピリポ(八の一—廿五) 2、ピリポとエテオピアの大匠(八の廿六—四十) 3、サウロの回心(九の一—三十二)	三、アンテオケ教會(十一の十九—十二の終) 1、アンテオケ教會の設立(十一の十九—廿六) 2、マンテオケ教會の慈善(十一の廿七—三十) 3、ヘロデの迫害とペテロの救(十二の一—十九) 4、ヘロデの死(十二の廿一—廿三)	四、パウロの第一傳道旅行(十三—十五の三十四) 一、バルナバと共に 1、パウロとバルナバの派遣(十三の一—四) 2、クプロ島の傳道(十三の四—十二) 3、南ガラテヤの傳道(十三の十三—十四の廿八) 4、エルサレム會議(十五の一—三十四)

3、迫害と祈禱(四の一—三十一)	4、ルツダとヨツパに於けるペテロ(九の三十二—四十三)	5、バルナバとサウロ、エルサレムより(一、二の十二の廿四)	五、パウロの第二傳道旅行(十五の三十五—十八の廿二)——シラスと共に 1、小亞細亞の傳道(十五の三十五—十六の五) 2、マケドニア、ギリシヤの傳道(十六の七—十八の廿二)——主としてコリントに於て 六、パウロの第三傳道旅行(十八の廿三—廿一の十六)小亞細亞及び歐羅巴の傳道——主としてエペソに於て 七、パウロの就縛と護送(廿一の十七—廿八の終) 1、エルサレムに於て(廿一の十七—廿二の十) 2、カイザリヤに於て(廿三の十一—廿六の終) 3、カイザリヤより 로마まで(廿四の一—廿八の十六) 4、 로마に於て(廿八の十七—三十一)
4、共産生活と不正の看破(四の三十二—五の十六)	5、コルネリオの回心、十の四十八)	◎本書中の重要な教理 1、イエスの復活(二の三十二—三十三、四の十、五の三十一—三十二、十三の三十一—三十二、廿六の廿三) 2、イエスの再来と審判、三の十九、廿一、十の四十二、十七の三十、三十一) 3、悔改と信仰(二の三十八、五の三十一、十の四十三、十三の三十八、三十九、十四の十五、十七の三十、三十一) 4、救罪と聖靈の賜(二の三十八、八の十五、十の四十五、十九の二)	◎本書の論語「証人」又は「聖靈」(五十回記されてなる) ◎本書の論語(一の八)「エルサレム、ユダヤ全國、サマリヤ及び地の極にまで我証人ならん」 1、「エルサレム」に於ける聖靈の活動(二—七) 2、「ユダヤ全國及びサマリヤ」に於ける聖靈の活動(八—九) 3、「地の極にまで」及ぼせる聖靈の活動(十一—廿八)
5、迫害とガマリエルの知慧(五の十七—四十)	6、エルサレムに於けるペテロの尋問(十一の一—十八)	◎本書の論語「証人」又は「聖靈」(五十回記されてなる) ◎本書の論語(一の八)「エルサレム、ユダヤ全國、サマリヤ及び地の極にまで我証人ならん」 1、「エルサレム」に於ける聖靈の活動(二—七) 2、「ユダヤ全國及びサマリヤ」に於ける聖靈の活動(八—九) 3、「地の極にまで」及ぼせる聖靈の活動(十一—廿八)	◎本書中の重要な教理 1、イエスの復活(二の三十二—三十三、四の十、五の三十一—三十二、十三の三十一—三十二、廿六の廿三) 2、イエスの再来と審判、三の十九、廿一、十の四十二、十七の三十、三十一) 3、悔改と信仰(二の三十八、五の三十一、十の四十三、十三の三十八、三十九、十四の十五、十七の三十、三十一) 4、救罪と聖靈の賜(二の三十八、八の十五、十の四十五、十九の二)
6、慈善委員の任命(六の一—八)	7、ステパノの殉教(六の八—七の六十)	◎本書の論語「証人」又は「聖靈」(五十回記されてなる) ◎本書の論語(一の八)「エルサレム、ユダヤ全國、サマリヤ及び地の極にまで我証人ならん」 1、「エルサレム」に於ける聖靈の活動(二—七) 2、「ユダヤ全國及びサマリヤ」に於ける聖靈の活動(八—九) 3、「地の極にまで」及ぼせる聖靈の活動(十一—廿八)	◎本書中の重要な教理 1、イエスの復活(二の三十二—三十三、四の十、五の三十一—三十二、十三の三十一—三十二、廿六の廿三) 2、イエスの再来と審判、三の十九、廿一、十の四十二、十七の三十、三十一) 3、悔改と信仰(二の三十八、五の三十一、十の四十三、十三の三十八、三十九、十四の十五、十七の三十、三十一) 4、救罪と聖靈の賜(二の三十八、八の十五、十の四十五、十九の二)
8、大迫害と離散(八の一—三)			

シテム シドン

**シテム** **地名** 【ヘブル語『平野』?】 往昔神が天より火と硫黄を降らして焼き滅し給うたソドムとゴモラ及びその他の諸邑のあつた谷の名で、今死海のある處である（創世記十四の三・八）。

**シドン** **地名** 【ヘブル語『砦』】 世界最古のベニケの都會で、地中海濱にある。ツロを距る事北方へ二十哩、エルサレムよりは百三十哩の隔りがある。その名はノアの曾孫でカナンの子であるシドンに因つて名づけられたので、實に紀元前約二千二百廿年の建設である。ヨシユアの時代には「大シドン」と稱ばれ、ベニケの首府であつたやうである（ヨシユア記十一の八、十九の廿八）。以色列人の土地分配の際、この地はアセルの産業に屬したけれども、曾てその支配を受けた事がないのみならず、却つて屢以色列人を虐げた（士師記十の十二）。この都府の人人は昔より貿易・製造及び技術によつて有名であつた。即ち彼らはソロモン王を助けて、神殿の建築に従事した（歴代志上廿二の四、列王紀上五の六、エゼキエル書廿七の八）。けれども彼らは偶像禮拜者であつたから、その惡風をも以色列國に感染せしめた（列王紀上十一の五・三十三、十六の三十一、同下廿三の十三）。ソロモン王の時よりネブカデネザルの時まで、シドンの事は聖書に記される事が稀で、當時はツロの都府よりも劣つてゐたやうである。その後ベルシャの屬國であつた間は、大に繁榮を極めたが、市民の叛逆によりて全市が破壊され、四萬の人民は兵火の爲に焼き滅されたといふ。後漸次舊に復して繁華な都市になつた。イエスはこの地方に行き給うたが、市中には入り給はなかつたであらう（マタイ傳十五の廿一）。但この地方よりイエスの教を聞く爲に來たもののおつた事が録されてゐる（マルコ傳三の八、ルカ傳六の十七）。使徒パウロはロマ護送の途次この地に立寄つて信者を訪問した（使徒行傳廿七の三）。現今その名をサイダミといひ、人口約一萬五千を有してゐる。



聖書のりよ上トナミ

シナイ

地名

【ヘブル語「險岩」又は「荆」或は月神シナイより來た語かも知れぬ】

紅海のアカバ灣

スエズ灣との間にある山の名で、海面より高き事約七千呎、最高峰エベルムサは七千三百六十三呎、その北のラス・スフサフエは六千八百三十呎である。昔以色列の民はエジプトを出でて三月日にこの山麓に到着し、この處に滞在申かの十誡を始め、律法を神より授けられ、幕屋を建てて、翌年の二月に及んだ。検見者の記す所を綜合すれば、この地方は約千八百方里あつて、路の如き谷が多く、而してそれらは皆神がその民に律法を與へようとなし給ふ中央の大殿に至るもので、掌の腹もいふべき中央の平野は甚廣く（現今エルラハミ稱ばる）、且つこの地方は半島中最も水の多い地であるから、二百萬の人が天幕を張るには適當な所である。而して平原の南に高くエベルムサが聳え、又その前に何處よりも見得らるる低い山即ちラス・スフサフエがある、長さ廿八町、幅十四丁ばかりの山で、兩側には狭い谷があり、甚だ峻嶮で、その下に立てば眞に麓に擲り得らる程である。又その周圍が他の諸山より全く離れてをるから、四圍に境界を設ける事も容易であつた。それ故エルラハの平野は以色列の立つた所で、その前の低い山ラス・スフサフエの途中でモーセは以色列の長老等と別れ、而してラス・スフサフエの背後の峰の頂上で、四十日主に偕にあつたであらう。（出エジプト記十九、廿四の九―十八、三十二の十五・十六・十九、使徒行傳七の三十八）この時より六百年後、エリヤはアハブ王の妻イゼベルの憤怒を遁れてこの處に來り、神の啓示を受けた（列王紀上十九の一―十八）。

シナル

地名

【スメリヤ語の「キ・イムギル」イムギル（神の地）の音譯であらう。『二の川の國』の意であるといふ者もある】

往昔ユフラテとヒデケルとの兩河の間にあつた平地で、後にカルデア又はバビロニヤと稱せられた（創世記十の十、十一の二・三、イザヤ書十一の十、ダニエル書一の二、ゼカリヤ書五

シナイ シナル

の十一)。

**シニム**

**地名**

イザヤ書四十九の十二にあるシニムは、パレスチナの南若くは東に當る遠隔の地であるといふ所から、七十人譯には「ベルシヤの地」にしてある。多くの學者は東洋の極である支那を指すといつてをるが、當時ヘブル人ミ支那ミは交渉がなかつたやうである。

**死の蔭**

**備語**

最も暗く、最も苦しくさびしく悲しき暗黒、即ち死人の宿る所に滿つる暗黒を意味する(ヨブ記三の五、十の廿一以下、十二の廿二、イザヤ書九の二、エレミヤ記二の六、アモス書五の九、詩廿三の四、マタイ傳四の十六)。

**死の行**

**備語**

これを行ふ事によつて死の結果を來らしむる行で、一言にいへば「罪」であるが、舊約書の誠命に従つて救を得やうとする事をも、死の行といはれてをる(ヘブル書六の一、九の十四、ガラテヤ書三の十・十一)それは律法の實行によつては救を得る事が出來ぬからである。

**シバ**

**地名**

【アラビヤ語「高し」】 1 アラビヤの西南に當るサベアンの國ミ民ミを稱ぶ名で、今のエーメンである。その住民は創世記十の廿八によるミセム族である。サルゴン(紀元前七〇七年)の記録によれば、彼がエジプト、アラビヤ、サベアンから貢出して金・山の産物・馬・駱駝等を受けた事を記してをる。氣候に於ても、地味に於ても、この地方は他のアラビヤの部分に優つてゐて、アラビヤに産する最も良い葡萄はここから出る。それ故この國は非常に富み、且つ古い文明を有する國であつた。今の首府はサナミいひ、二萬の人口を有してをる。シバの女王の來訪(列王紀上十の十一・十二)は、この國からであるが、これまでシバの國に女王のゐた事が發見されないものである。だが、前記のサルゴンの記録中には「アラビヤの女王サムセ、シバの王イタマラ」があつて、シバの直ぐ前に女王が記されてを

る。

2 創世記十の七及び歴代志上一の九にあるハム族の住んだシバは、アラビヤの東、ベルシヤ灣の南西にあつた國である。3 ヨシユア記十九の二にあるシバ(ヘブル語「誓約」)は、和譯によればベエルシバの別名であるやうに見えるが(創世記廿六の三十三参照)、七十人譯にはベエルシバ、シマミ二つの邑名ミなつてゐる。これはヨシユア記十五の廿六のシマを考慮に置いたものである。そして尙七十八人譯には十九の六のシャルヘンが省かれ、やはり十三邑ミしてある。

**シバ**

**人名**

(男)

【ヘブル語「誓約」】

1 ベニヤミン人ビクリの子で、ダビデ王の晩年に當り叛逆を企てた者である(サムエル後書廿の一・廿二)。

**シバム**

**地名**

【ヘブル語「鳳仙化」】

ヨルダン河の東方にあつたモアブの邑で、ヘシボンの西南二哩の處にあつた。葡萄を以て名高かつた邑である(民數紀三十二の三・五)。民數紀三十二の三十八、ヨシユア記十三の十九、イザヤ書十六の八・九、エレミヤ記四十八の三十二に「シバム」ミあるのは同じ邑である。

**十字架**

**雜語**

木を以て十字形に造られた刑罰の道具である。罪人を十字架に釘ける事は羅馬人の風習であつたが、この刑に處せられる人は重に朝敵であつたものか、又は奴隸の如き最も賤しい者にのみ限られてゐて、羅馬人はその特權としてこの刑に處せられる事を免れ得たのである。罪人を十字架に釘けるには、先づその衣服を剥ぎ取つてこれを柱に縛りつけ、革鞭を以て烈しくこれを打ち、而して後罪人に己が十字架を擔がせ、處刑場へ曳き行くのである。處刑場に於ては先づその苦痛を少しくゆるめる爲に酒に没藥を混じて罪人に飲ましめ、倒してある十字架の上に罪人を上向に横へ、その兩掌を釘付け、兩足を並べてその足首に釘付け、首の上に當る所に罪標を打付け、それより十字架を起して、

シバ シバム シフジカ

豫め掘り置かれた穴に立てるのである。高さは罪人の足が地上より二呎ばかり離れる位である。併して罪人は幾日でもその上に放任せられるので、その苦痛は實に甚しいが、それでも三日又は四日、中には一週間を経て漸く死に至るものがあつたこの事である。羅馬人の習慣によれば、十字架に釘けられた罪人の屍は、自然に腐敗して地に落ちるまでその儘にすて置くことであつたが、猶太人はモーセの律法によつて、日没に至りこれを鎗で突き、又は鎚でその足骨を打くべきにして、これを殺した(申命記廿一の廿一・廿三ヨハネ傳十九の三十一以下)。神の子イエスは斯る慘酷なる十字架の刑に處せられ、詛はれたるいやしき様で死に給うた事によつて、人を罪より贖出し給うたから、十字架は罪の贖の記號となつた。又、基督者の世にありてキリストの爲に必ず遭ふ艱難をも十字架といふ(マタイ傳十六の廿四)。

**十二の支派**

種族名

アブラハムの孫ヤコブの十二の子等及びその子孫である。別項「イスラエル」を見よ。

**十分の一**

制度

以色列がその宗教を維持する爲に納めた税である。その習慣が何れの時代より始つたかは詳でないが、アブラハムが東方の諸王を攻めて、之に打勝つて凱旋したとき、その分捕物の十分の一を、サレムの王にして至高神の祭司であるメルキセデクに献けた記事(創世記十四の廿)を見れば、随分古くから行はれてゐた事がわかる。ヤコブはベテルに於て神の約束を得たとき、亦その所有物の十分の一を神に献ぐる約束をした(創世記廿八の廿二)。又以色列人はモーセの律法によりて、地三萬物を有ち給ふ所の王たる神に、その家畜及び地の産物の十分の一を献ぐべしと命ぜられた。これはその献けた十分の一は産業を受けないで専ら宗教の事務を司るレビ人の分とする爲であつた。而してレビ人も亦その受けた所の十分の一を祭司に與へて、その分をなすべしと命ぜられた(民數紀十八の廿一

一三十二)。又民は神に献けた殘餘の九分中より、その十分の一を携へて、神の幕屋又は神殿に至り、その庭内で饗應を設け、その家族の者も並にレビ人を招き、神の前で喜んで食すべき定めであつた。但し幕屋又は神殿を離れる事が餘りに遠くて、その十分の一の物を彼處へ携へ至る事が出来ぬ場合は、その物を賣つて金に易へ、その金の五分の一を之に加へ、これを携へて神の幕屋又は神殿に至り、その心の好む物を買ひ、饗應を設け、その家族及びレビ人を招き、神の前に於て喜び謝して食ふべきであつた(レビ記廿七の三十一、申命記十二の十七・十八、十四の廿一・廿七)。又第三年毎には神殿又は幕屋へ行かずに、己が門内に於てその十分の一を以て饗應を設け、レビ人その他國人に孤兒に寡婦等を招き、これに食せしむべき事を命ぜられた(申命記十四の廿八・廿九)。マタイ傳廿三の廿三にイエスがパリサイ人等を責め給うたのは、彼らが薄荷・茴香等に至るまで、その十分の一を納めた事を非難し給うたのではなく、その最も重き仁・信・心を廢てた事を責め給うたのである。

**シフマ**

地名

「シバム」に同じ、同項を見よ。

**詩篇**

書名

舊約書中の一卷で、紀元前數百年來敬虔な希伯來人が、眞神と交り、その心の奥底より宗教上の感覺即ち感謝・讚美・悔改・悲哀・希望・喜悅等の感情をいひあらはした詩集で、何れの世、何れの時の基督者も、聖書中福音書に次いで最も尊重する書である。ヘブル語ではこれを讚美の書と稱ふ。それは本書中に悔改若くは悲哀等の詩が含まれてはをるが、これらの詩は僅少で、多くは神を讚美する詩であるからである。詩の數は總て百五十篇、その中百篇は作者の名が附せられ、十六篇は表題のみで名がなく、三十四篇は表題もない。その中ダビデの名を負うたものが七十三篇、アサフの名を負うたものが十二篇、コラの子等の作させられたのが十二篇、ヘマンの作が一篇、エタンの作が一篇、

モーセの祈されたのが一篇、ソロモンの歌されたのが二篇ある。但しこれらはその名を負はせられた人の作ではなく、その引用せられた詩集の名だといはれてをる。例へばダビデの歌であるのは『ダビデ集』より取つて編纂したもので、『ダビデ集』にはダビデ以外の作者も多くあつた事である。古來本書を五部に分つてをるが、尙これをその詩の趣意に従つて區別すれば次の如くなる。1 教訓の詩。一、五、七、九、十二、十四、十五、十七、廿四、廿五は善人、惡人との品性及びその運命の詩。十九、百十九は神の律法の善美なる事。三十九、四十九、九十は人世の虚空しき事。八十二、百一は治者の義務。2 讚美の詩。八、十九、廿四、三十三、三十四、三十六、九十六、百、百三、百七、百廿一、百四十六より百五十。3 感謝の詩。九、十八、廿二、三十、四十六、四十八、六十五、九十八。4 懺悔の詩。六、廿五、三十二、三十八、五十一、百二、百三十、百四十三。5 節筵の詩。百二十一、百三十四。6 歴史上の詩。七十八、百五、百六。7 預言の詩(メシヤの預言)。二、八、十六、廿二、四十、四十五、六十八、六十九、七十二、九十七、百十、百十八。

卷名	第一卷	第二卷	第三卷	第四卷	第五卷
區分	第一篇より第四十一篇まで	自第四十二篇より至第七十二篇まで	第七十三篇より第八十九篇まで	第九十篇より第百六篇まで	第百七篇より第百五十篇まで
頌歌	四十一の十三	七十二の十八・十九	八十九の五十二	百六の四十八	百五十
禮拜の中 の思想	エホバに相應しき御方、助者、稱讚の禮拜	エロヒムに奇跡を行ひ給ふ神驚嘆の禮拜	エロヒムにエホバ能力ある助者不斷の禮拜	エホバに支配し給ふ王服従の禮拜	エホバに贖主完成の禮拜

神の尊 稱の數	鹽		
	エホバ	エロヒム	アドナイ
ヤハ	◎二七五	六八	一四
一	三二	◎二一四	一九
一	四四	◎八〇	一五
七	◎一〇三	一七	二
三二	◎二三六	四〇	一一

地中海又は死海の水を煮て、これより鹽を取つた他に、死海の南方にある鹽山より鹽を掘出した。この鹽山は長さ七哩、幅二哩乃至三哩、高さ數百呎の山である。又死海の東南に鹽の谷がある(サムエル後書八の十三、列王紀下十四の七、歴代志上十八の十二)。鹽は契約の徴、又はこれに印するものとして、すべての供物に加へられた(レビ記二の十三)。これはその契約が永遠破るべからざるものである事を意味する(民數紀十八の十九、歴代志下十三の十五)。マルコ傳九の五十に「汝ら心の中に鹽を保て」とあるのは、誠實・不變なる友情をもつべしとの教訓である。同九の四十九にある「人はみな火をもて鹽づけらるべし」とは、罪人が地獄に於て永遠消滅する事なき火の苦を受くる事である。又コロサイ書四の六にある「汝らの言常に鹽をもて味つくべし」とは人の徳を建つる益ある言を言へとの教である。又「鹽を地に撒く」事は永くその滅亡を示してをる(士師記九の四十五、申命記廿九の廿三)。尙マタイ傳五の十三に「汝らは地の鹽なり」とあるは、基督者は世の腐敗を止め、腐敗を救ひ、保つものであるとの意である。



鹽海シホウミ

地名 別項「死海」を見よ。

シボレテ

雑語

「ヘブル語『穀物の穂』又は『流』」

昔士師の時代にエフライム人ミギレアデ

人との間に戦があつた際、エフライム人は敗れてヨルダン河の方へ逃げたが、ギレアデ人はその軍の一隊を以て津を取り切り、河の傍へ通れて来たエフライム人にシボレテミイはせてみて、その發音が彼らの訛音でセボレテミ響けば、これを捕へて殺し、遂に一日に四萬二千人のエフライム人を殺したとある（士師記十二の六）。北方イスラエルの人はシユの音が出ず、これをスミ發音したのである。日本でも東北の人はシの音が出ないで、鮮をスス、新聞をスンブンミいふ。マタイ傳廿六の七十三にはベテロがガリラヤ訛言によつて、イエスの徒である事を指摘された記事がある。雅歌一の十六の「松」は原語でベロスイムミあるが、これは北方訛で、普通はベロシムである。ヨハネ傳四の七・九にイエスが「飲ませよ」といひ給ひし語は「リシユトス」であつたらうが、サマリヤに於ては「リストス」ミ發音したので、發音の工合によつてもイエスがユダヤ人である事がわかつたであらうミ想像される。

シホン

人名

（男）「ヘブル語『大なる者』」

アモリ人の王である。始め彼はモアブ人を攻めて、

これをアルノン河の近傍へ追放し、その國を領し、ヘシボンをその首府としてゐたが、以色列人がカナンへ入らうとした時、彼らがその國を通過する事を許さず、軍勢を率ゐて以色列人を迎へ撃つたが、却つて大に敗られ、彼は殺されて、その地はルベンミガドの産業となつた（民數紀廿一の廿一―三十一・三十四、三十二の一―五・三十三―三十八、申命記二の廿四―三十六、ヨシユア記十三の十五―廿八、士師記十一の十二―廿八、詩篇百三十五の十・十一）。

シメイ

人名

（男）「ヘブル語『エホバは名高い』」

ヘブル人の中には普通の名で、この名を名

乗る人が舊約に十八人ばかりある。その中で最も有名なのは、サウル王の親族で、ゲラミ稱べる人の子シメイである。彼はエルサレムよりヨルダン河へ行く路傍にあつたバホルミミいふ所に住んでゐたが、ダビデ王がその子アブサロムの反逆を避けて、エルサレムを遁走した時、途中に於てこれに石を投げ、且罵つた。その後ダビデがアブサロムを滅してエルサレムへ還つた時、シメイは痛く懼れ、謙遜つて先の無禮を詫びたので、ダビデ王はその罪を赦したが、その心が果して忠實であるか否かを疑ひ、シメイに心せよミソロモンに命じたので、ソロモンは彼をエルサレムの中に止め、他へ出づる事を禁じたが、シメイは逃走した僕を尋ねるミ稱して、エルサレムを出でたので、ソロモンは彼を召して、その誓に反いた事を責め、彼を擊殺させたのである（サムエル後書十六の五―十四、十九の十六―廿三、列王紀上二の八・九・三十六―四十六）。

シメオン

人名

（男）「ヘブル語『聴く』」

1 ヤコブの次男で、以色列十二支派中の一派の祖

先である（創世記廿九の三十三）その性は残忍で怨を含む事深く、その兄弟レビと共に妹デナの事に關して、痛くシケムの人人を害したので（創世記三十四）、父ヤコブはこれをいましめ、その老年に及びて將に死ななごした時、彼について預言したが（創世記四十九の五―七）、果してその預言の如く、その子孫は次第に衰微して、その數も大に減少し（民數紀一の廿三ミ廿六の十四ミ對照せよ）、終にその産業をユダの産業の中より得るに至つた（ヨシユア記十九の一―九、歷代志上四の廿八―三十三）。  
2 ルカ傳三の三十にあるイエスの先祖の一人。3 イエスの宮詣の時、彼を抱いて預言した老人（ルカ傳二の廿五―三十五）。彼はヒレルの子で、ラビであるミいふ傳説があるが疑はしい。經外書「ヤコブ傳福音書」にはヨハネの父ザカリヤがヘロデ王に殺された後、彼の補缺ミして祭司ミなつたミある（同書第二十四

シメオン

シモン ジャウクノモノ シヤテラク

章)。4 ニゲルミ稱ばるるシメオン(使徒行傳十三の一)。ニゲルミはラテン語で「黒色」を意味する故、彼は黒人であつたともいはれてをる。これをクレネのシモン(マルコ傳十五の廿一)と同人だと思ふ人もある。5 使徒行傳十五の十四及びペテロ後書一の一の改譯にあるシメオンは、シモン・ペテロの事である。

シモン

人名

(男)【ヘブル語】聽くシモンミ稱ばれてをる人は數人ある。1 イエスの十

二弟子の一人であるペテロ(マタイ傳四の十八)。別項「ペテロ」を見よ。2 カナンのシモン、又はゼロテミ稱するシモン熱心黨ミ呼ばるるシモン(改譯)で、彼も同じくイエスの十二弟子の一人であつた(マタイ傳十の四、マルコ傳三の十八、ルカ傳六の十五、使徒行傳一の十三)。別項「ゼロテ」を見よ。

3

イエス・キリストの兄弟(マタイ傳十三の五十五、マルコ傳六の三)。4 バリサイのシモン(ル

カ傳七の三十六―五十一)。5 癩病者であつたシモン(マタイ傳廿六の六一―十三、マルコ傳十四の三―九、ヨハネ傳十二の一―八)。6 クレネ人のシモン(マタイ傳廿七の三十二、マルコ傳十五の廿一、

ルカ傳廿三の廿六、ヨハネ傳十九の十七)。7 イスカリオテのユダの父であるシモン(ヨハネ傳六の七十一、十三の二)。8 皮工のシモン(使徒行傳九の四十三、十の六・十七・三十二)。9 サマリ

ヤに於て魔術を行つたシモン(使徒行傳八の九―廿五)。

常供の物

術語

律法に従つて幕屋若くは神殿に於て毎日朝夕献ける犠牲及び献け物をいふ(民數紀四の十六、レビ記六の八一―十三、列王紀上十八の三十六、同下三の廿、ダニエル書十の廿一、出

エジプト記廿五の三十、レビ記廿四の五一―八)。

シヤテラク

人名

(男)【バビロン語】「王の友」或は「月神の命令」? ダニエルの三友人の

一人で、元の名をハナニヤ(ヘブル語「エホバの賜」)と改めた(ダニエル書一の七)。別項「アベデネゴ」を見よ。

シヤムガル

人名

(男)【アッスリヤ語】「恵深い」南方出の士師の一人で、牛の策を以てベリ

シテ人六百人を殺して、以色列を救うた(士師記三の三十一)。牛の策は通例耕作の時、牛を逐ふ爲に用ゐる刺棍で、長さ約八呎、柄の周圍約五寸で、一端には鋤より土を取除く爲に尖つた鐵をつけ、他端には長い鐵釘をつけてある随分丈夫な農具である。ヨセフアスによれば、彼の士師であつた年數は一ケ年間であつた。尙彼の名がアッスリヤ語である事は、アッスリヤやバビロンの文化が、古くより南方にまで及んでゐた事の證據の一である(エレミヤ記三十九の三のサムガレ・ネボもアッスリヤ・バビロンの言である)。

シヤルテル

シアテル

サラテル

(改譯)

人名

(男)【ヘブル語】神に我が求めた

ユダヤの國民を統率して、バビロンより歸り、神殿を再建したゼルバベルの父で、エコニヤ王の子であり、又イエスの祖先の一人である(エズラ書二の二、五の二、マタイ傳一の十二)。しかし歴史志上三の十七―十九を見れば、ゼルバベルは彼の實子ではなく、その弟ベダヤの子である。思ふにゼルバベルはシヤルテルの養子になつたものであらう。

シヤルマネザル

人名

(男)

【アッスリヤ語】「スルマン(平和の神)は首なり」アッスリヤ

國の王で、テグラテビルセル王の後を承け、またサルゴン王の前に王位に即いて、紀元前七百廿七年より七百廿二年までその國を治めたシヤルマネザル第四世のこゝである。彼はイスラエルに攻め來り、その王ホセアミスラエルの民を虜にして、これをアッスリヤの國へ移した(列王紀下十七の三一―六)。但

シヤムガル シヤルテル シヤマネザル

シャルマン シャルム シャレケテ シャロン

この攻圍中彼は死し、實際サマリヤを陥落せしめ、その民をアツスリヤに移したものは、彼の後繼者サルゴン（七十二年即位）であつた。ホセア書十の十四にあるシャルマンは、シャルマネザル第四世と同一であるといひ、或人はシャルマネザル第三世であらうといひ、又或者はモアブの王サラマヌーであらうといふ。

シャルマン

人名

（男）ナフタリの族の中にあるベテアルベルを打つて、惨害をイスラエルに加へた人である（ホセア書十の十四）。別項「シャルマネザル」を見よ。

シャルム

人名

（男）「ヘブル語」求めた者」 1 ヤベンの子で、徒黨を結んでイスラエル王ゼカリヤを撃ちてこれを弑し、その位を奪ひ、在位僅に一ヶ月にして、メナヘムの爲にサマリヤで殺された。時は紀元前七百六十八年（列王紀下十五〇十一十五）。

2 エレミヤ記廿二の十一のシャルムはエホアハズの事である。3 舊約書にこの名を有する人が十五人ばかりあるが略する。

シャレケテ

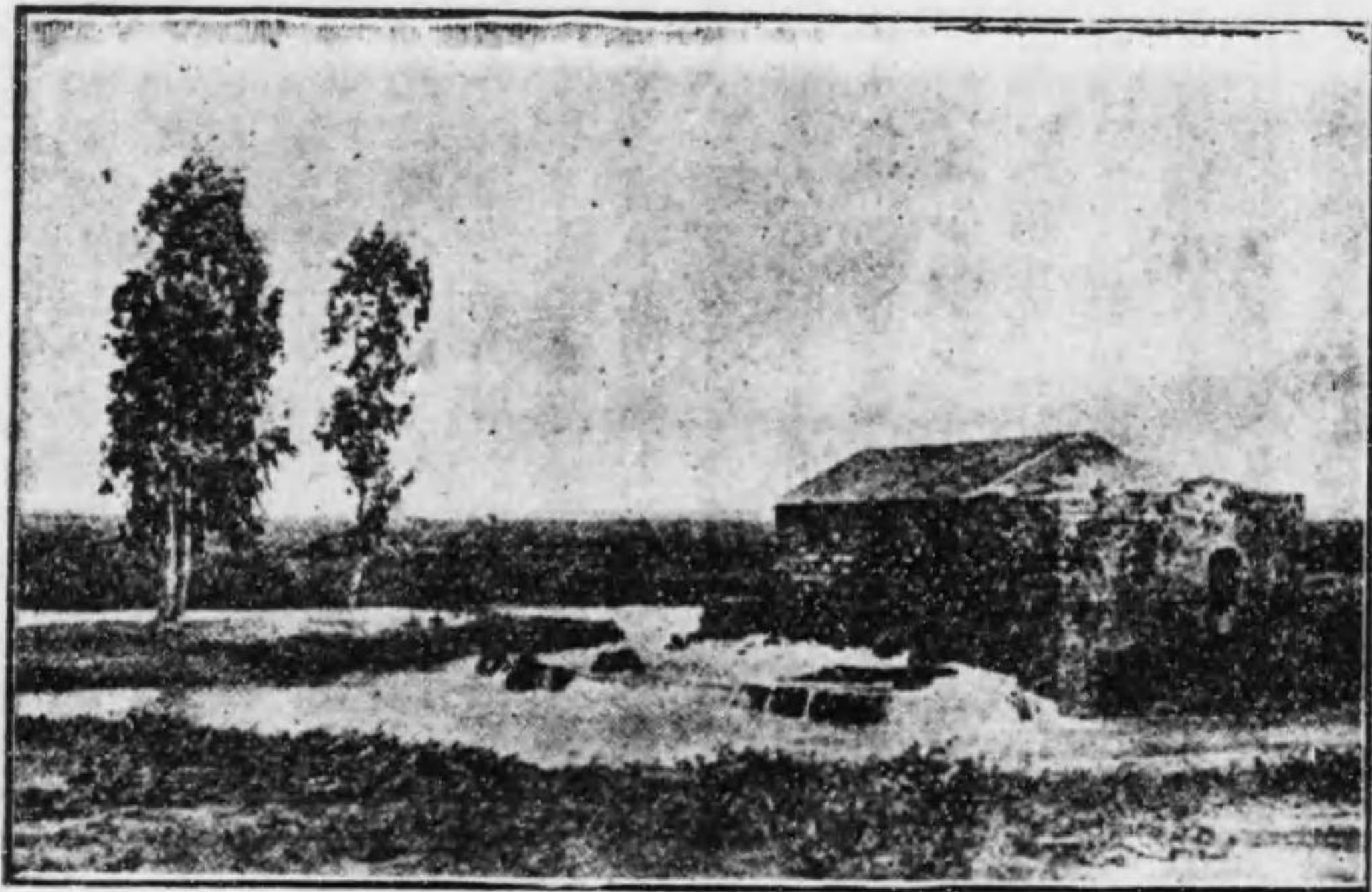
建物名

「ヘブル語」投げ落す」 神殿の西方の外廓に當つて、上り坂になつた所にあつた門である（歴代志上廿六の十六）。多分テロピオンの谷からの上り途である。語義から推して、神殿の塵埃を投げ落したものであらうと思ふ人もあるが、神殿の灰は東又は東南に當るケデロンに棄てたものであるから、この想像は當らない。七十人譯には「上り途なる部屋の門」にしてをる。そこに部屋付の建物があつた所から、その名を得たらしい。

シャロン

地名

「ヘブル語」平地」 1 地中海と山地との間にあるヨツバよりカイザリヤまでの平地で、その長さ約三十哩、その幅八哩乃至十五哩ある。野花の多く生ずる甚豊な地である。このシャロンを他のシャロンと區別する爲に、いつも冠詞をつける事になつてをる（歴代志上廿七の廿九、



ジュウ ジュカウシャ

イザヤ書三十三の九、三十五の二、六十五の十、雅歌二の一、使徒行傳九の三十五）。2 ヨルダン河の東方にあつた地で（歴代志上五の十六同下廿七の廿九）、アルノンとヤボクの間にあつた平坦な台地である。これは冠詞をつけずに使用せられる。

自由

雑語

奴隸たり俘虜たる状態より放ちゆるされる事を自由といふ（レビ記廿五の十）。これになぞらへて信者がキリストによりて、律法の詛、儀式の繋及び罪の罰より赦され、神と和ぎ、永遠の生命と安心を得るを自由といふ（ロマ書八の廿一、ガラテヤ書五の一）。

受膏者

術語

王及び祭司をその位又はその職に任ずる時、その頭に油を沃いたので、これらを受膏者といつた（サムエル前書十の一、レビ記八の十二、詩篇八十四の九）。これになぞらへて聖靈をそがれた者、王にして祭司なるイエスをも受膏者と稱ぶ。メシヤといひキリストといふのは受膏者の意である（マタイ傳三の十六、ルカ傳三の廿二、四の十八―廿一、ヨハネ傳一の三十一）。但し基督も膏を注がれたものではあるが（コリント後書一の廿一、ヨハネ第一書二の廿・廿七）受膏者とは言はない。

祝福シユクフク 祝する

【例】

祝する事は太古よりセム民族の中に行はれた風習で、その始めて聖書に

録されたのは、人類の創造せられた時、神がこれを祝して『生めよ繁殖よ地に満溢よこれを服従せよ又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ』といひ給ひしそれである（創世記一の廿八）。創世記二の三には、神が第七日を祝し給うた事が見えてをり、九の一にはノアとその子等を祝し給うた事が記されてをる。十二の三に至り『我は汝を祝する者を祝し』とあつて、始めて人が人の幸福を求め、願ふ事をの意に用ゐられてをる。十四の十八―廿にメルキセデクがアブラハムを祝福した話が見えてをる。以下聖書には祝福の事が多く見えてをるが、何れも神の名により神に代りて他人の幸福を求め、願ふ事をあらはし、或は遺言の如く權利を與へ嚴肅なる預言をなす事を含んでをる（創世記廿七の四、四十八の八―廿、四十九の一―廿八、申命記三十三）。祝する時はその頭の上に手を按き、或は祝せらるる人の方に向つて手をのべるのである（掌を下に向ける）。時には言のみ、或はその精神もて書に録す事も行はれた（民数紀六の廿二―廿六、ロマ書十六の廿四、コリント前書十六の廿三・廿四、同後書十三の十四其他）。キリスト教會に於ては普通按手禮を受けた教職のみがこれを行ふ慣例となつてをる。

## シユシヤン

【地名】

【ベルシヤ語でスサンは『古き邑』アラビヤ語でスサンは『百合に似た花の類』を指す。ヘブル語のシユシヤンも同じ。ギリシヤ語ではスサである。シユシヤンの近傍には百合に似た花の類が多く咲いてをる。そこからこの地の名も出た多多くの人は言つてをる。この地はもこエラムと稱された國の首都であつたが、預言者ダニエルの時クロス王はこの地を領し、數年後全ベルシヤの首府となつた（ダニエル書八の二、エステル書一の二）。この都はシヤブル河とディツアル河（古のコブラテス）との間にある今のサス又はシヤスと同じである。古跡は前世紀の半ば頃掘出されたが、東西

の廣さ六千呎、南北の廣さ四千五百呎に亘る土地で、その土地の大部分はベルシヤの建築物を以て覆はれてあるといふ。

出エジプト記シユツヒツトキ

【書名】

舊約書の第二巻で、以色列の民がエジプト滞在中に起つた事件より、彼

らがエジプトを出で、シナイ山下に於て幕屋を建てたまでの出来事を記した書である。本書に載せられてをる所を大別して二とする、一は第一章より十八章までで主として歴史を記し、二は第十九章より卷末までで律法の事を記してある。以色列人のエジプト寄寓の年数は四百年若くは四百三十年と記されてあるが（創世記十五の十三、使徒行傳七の六、出エジプト記十二の四十、ガラテヤ書三の十七）、四百年は概數で、四百三十年は確實な年數であるが、七十人譯及びサマリヤ譯聖書の出エジプト記十二の四十には『エジプト及びカナンに住居せしその住居の間は云云』とあり、ガラテヤ書三の十七にはアブラハムに與へられた契約と律法の附與せられた年の年數を四百三十年と記してある。その他種々の記録を綜合すれば、四百三十年とはアブラハムが召された時よりヤコブがエジプトに移りしまでの二百十五年間と、ヤコブの子孫がエジプトを出づるまで即ちエジプト滞在中の二百十五年間を合した者であるといふべきである。本書の目的は單に以色列が奴隸の状態より自由の境遇に入つたのを歴史的に示すに止まらず、更に神が先祖アブラハム、イサク、ヤコブ等に結び給うた契約を、不思議なる御政治の中に徐徐に成就し給ふ事をも示してをる（出エジプト記六の一―八）。創世記に於て『アブラハムの子等』である一家族が、本書に於ては『以色列民族』と成長し、全人類の中より選ばれ立てられて、『神に對して祭司の國となり、聖き民』となつた事を示してをる（出エジプト記十九の四―六）。斯くして猶太教の基礎が据ゑられ、世界人類の救済といふ神の目的に向つて、一段の進歩發展をなしてをる。されば本書の論語を

『贖』三の七・八、十二の十三(三)にするのは適當である。本書の靈的意味を了解せんせば、これをへブル書と對讀するがよい。

<p>第一部 エジプトに於ける以色列 (二一―二二)</p> <p>一、イスラエル人の繁殖(一の九―一八)</p> <p>二、新王の虐待(一の九―二二)</p> <p>三、モーセの出産、成長、失敗、亡命及び結婚(二)</p> <p>四、モーセの召まエジプトへの歸還(二―四)</p> <p>五、パロの頑硬と苛酷(五)</p> <p>六、神の奨励(六)</p> <p>七、奇跡と九大災害(七―十二)</p> <p>◎本書の教理と模型的研究</p> <p>1、贖は全く神より出づ、以色列人は自ら助くる能はず(エジプトは世、パロは悪魔の型)</p> <p>2、贖は一人の人によりて来る(モーセはキリストの型)</p> <p>3、贖は血によりて成る、血は贖の代價である(ペテロ前書一</p>	<p>第一部 以色列國の建設 (十二の二―十九の二)</p> <p>一、過越の祭の起原―イスラエル救出さる(十二の二―十三の十六)</p> <p>二、道の選擇、雲と火の柱(十三の十七―廿二)</p> <p>三、以色列紅海を渡る、エジプト人の死(十四)</p> <p>四、頌歌(十五の二―廿一)</p> <p>五、神以色列の必要物を供給し給ふ(十五の廿二―十九の二)</p> <p>1、メラに於て水を(十五の廿二―廿六)</p> <p>2、エリムに於て安息を(十五の廿七)</p> <p>3、シンの曠野に於てマナを(十</p>	<p>第三部 シナイに於ける以色列 (十九の三―四十の三十八)</p> <p>一、以色列聖別せられ「祭司の國」せらる(十九)</p> <p>二、神十誡を與へ給ふ(廿の二―廿二)</p> <p>三、宗教的律法、社會的律法(廿の廿三―廿三の終)</p> <p>四、契約を與へらる(廿四の二―十二)</p> <p>五、モーセ、シナイ山に上る(廿四の十三―十八)</p> <p>六、幕屋建造の命令(廿五―三十一)</p> <p>七、以色列の偶像禮拜、神の怒、モーセの仲保、再契約(三十二―三十四)</p> <p>八、幕屋の建造及びエホバの榮光(三十五―四十)</p> <p>◎出エジプト記と基督者の生涯と</p>
---	--	--

<p>の十七・十八、レビ記四の三十三―三十五、十七の十一)</p> <p>4、贖は能力によりて設けられた組織である、血が流された時以色列が過越された如く、イエスの血に頼る者を神は永遠に救ひ給ふ(出エジプト記十二の十二・十三、ロマ書三の廿五・廿六、出エジプト記六の六・七、十一の七)</p>	<p>六)</p> <p>4、レビムに於て水を(十七の二―七)</p> <p>5、アマレクとの戦十七の八―十六)</p> <p>6、エテロの來訪と長老等の任命(十八)</p>	<p>の對照</p> <p>1、壓制(一章)</p> <p>2、救主(二―四章)</p> <p>3、救拯(五―十九章)</p> <p>4、幕屋(廿五―四十章)</p> <p>5、祭司(廿八―廿九章)</p> <p>ペテロ前書二の九・十</p>
--	---	---

シユネム

地名

【へブル語】凹凸の所 或は『休息所』

イツサカルの産業の地、小ヘルモンの南傾斜にあつた市邑で、エルサレムを距る事北方へ五十五哩、タボル山を距るこま南五哩であつた(ヨ

シユア記十九の十八)。ギルボアの戦争の前、ベリシテの軍の陣した處で、風景よき地である(サムエル前書廿八の四)。ダビデ王の侍女アピシヤグはこの市邑の女であつた(列王紀上一の三)。ソロモンの心を奪うたシユラミの婦もこの邑の出であり(雅歌六の十三)。預言者エリヤを饗應した女もこの市邑の者であつた(列王紀下四の八)。現今はソラムミ稱ばれ、土造の賤しき小屋が集まつてゐるのみである。

主の日

術語

主が悪人を罰し給ふ日で(コリント前書五の五、同後書一の十四、テサロニケ前

書五の二、同後書二の二、ペテロ後書三の十)、これらは何れもキリスト再臨の日又は審判の日を意味してをる。ヨハネ黙示録一の十を一般に安息日又は日曜日又は日曜日の又の名であるやうに解釋してをるが、これは

シユノバンサン シユラミ シユル

大なる誤であるミサイス博士はカブよく論じてをる。別項「エホバの日」を見よ。

主シユノバンサンの晩餐

【礼典】

主イエス・キリストが、世の人の罪を贖ふ爲に死に給うた事を記念する禮典である。イエスは十字架に釘けらるる前夜、過越の祭を祝ひ給うた時、この禮典を設け、彼が再び臨り給ふまで此禮典を守るべき事を信徒に命じ給うた。(マタイ傳廿六の廿六―廿八、マルコ傳十四の十六―廿六、ルカ傳廿二の十三―廿、コリント前書十一の廿三―廿六)。但し我らは聖徒の祈禱によつてパンシユノバンサンと肉シユラミとがキリストの體と血とに變化するといふ所謂「化體説」や、パンや血の中にキリストの靈が入つてをるシユルといふ説を信すべきではない。之は單に紀念の爲であつて、キリストの體は心靈上の方法によりてのみ與へられ、又取りて食せられるもので、これを受けて食する方法は、食する人の信仰によるのである。尙主の晩餐に用ゐたパンシユノバンサンと葡萄酒を貯藏し、又はこれを携帶運搬し、又はこれを捧持し、又はこれに跪拜せしむる事は、キリストの命じ給はない事である。

【地名】「ヘブル語『平和』」この市邑は多分イツサカルの産業地にあつたシユネムシユラミのここであらう。雅歌六の十三にあるシユラミの女シユラミあるのは、ダビデ王の侍女アビシヤダを指した者であらうといふ説もあるが、シユネムは美人の産地である故、アビシヤダシユラミとする必要はない。否、別の婦人シユラミする方が適當であると思はれる。

【地名】「アラマイク語『岩の石垣』」エジプトの東北の境ミ、カナンの西南の境ミの間にあつた荒地で、又これをエタムの曠野シユラミともいふ(民數紀三十三の八)。この地はハガルの遁走の記事の中に始めて聖書に録されたが、後遂にイシマエル人の住所シユラミなつた(創世記十六の七、廿五の十八)。アブラハムもカデシシユラミシユルシユラミの間に住んだ事がある(創世記二十一の一)。或人はシユルはエジプトに向つ

シユル

【地名】

【アラマイク語『岩の石垣』」エジプトの東北の境ミ、カナンの西南の境ミの間にあつた荒地で、又これをエタムの曠野シユラミともいふ(民數紀三十三の八)。この地はハガルの遁走の記事の中に始めて聖書に録されたが、後遂にイシマエル人の住所シユラミなつた(創世記十六の七、廿五の十八)。アブラハムもカデシシユラミシユルシユラミの間に住んだ事がある(創世記二十一の一)。或人はシユルはエジプトに向つ

て入らうとするアラビヤの國境の邑であらうといひ(サムエル前書十五の七、廿七の八)、或人はスエズより七八哩離れた處にあるアイナムサ即ちモーセの井シユラミと稱する處シユラミ同じであるといつてをる。しかしその名より推して、エジプト人が東方よりの侵略者を防がんが爲に、スエズ地峽を横切つて建築した多少連続した石壁、即ち長き一列の城砦であるとするのが、最も適當な見方であらう(出エジプト記十五の廿二)。

棕櫚

【植物名】

棕櫚の樹はナイル河の岸に繁茂し、紅海沿岸にもあり、エドムにもあり、バレスチ

ナではヨルダン河溪、エリコその他國內の各地に産してゐた(申命記三十四の三)。猶太の棕櫚は主シユラミしてデイトバシユラミと稱する種類で、幹は六十呎乃至八十呎に及び、その太さは上部も下部も同一で、恰も煙突の如く立つてをる。その大きな葉は鳥の翼の如くひろがり、その長さは四呎より六呎に及び、幹の頂上に群生してをる。樹は長命で、百年より二百年に及ぶといふ。棕櫚の用法は寔に多様である。葉は屋根を葺き、壁を蔽ひ、牆、籃、敷物、寢床、刷毛等を造るに用ゐられる。穴を貫いて採つた汁は砂糖シユラミとなり、またアラックシユラミといふ酒シユラミなる。幹は籠シユラミを造るに用ゐられ、また燃料シユラミもなる。纖維では繩を造られる。その多額に産する果は食品シユラミとして多大の價值があり、その堅い種子は碎いて駱駝の食料シユラミなし得らるる。かくも重寶なこの樹も、今日に於てはその數甚減少し、殆んシユラミ消滅したといつてもよい程シユラミなつたが、近來漸くエリコ附近で栽培を始めたこの事である。聖書にはこの樹を種種の事物に譬へられてをる。エレミヤ記には偶像に(十の五)、詩篇には義人に(九十二の十二)、雅歌には美女に(七の七・八)、黙示録には平和と勝利の記號シユラミとして(七の九)用ゐられてをる。イエスのエルサレム入城の際に人人が棕櫚の葉を打振つたのは、黙示録のと同様の意味に於て行はれたのである(ヨハネ傳十二の十三)。

シユロ

尙神殿の壁に棕櫚の刻まれてあつたのも勝利の記號と見るべきである(列王紀上六の廿九)。

**贖罪所** **術語** 契約の櫃の上に載せられて蓋の用をなした純金製のもので、その周邊に冠冕の如き金の縁があつた(出エジプト記廿五の十七・廿一)。その上に純金で造られたケルビムが兩方より相對つて据ゑられ、エホバはこの贖罪所の上、ケルビムの間より語り給うた事ある(出エジプト記廿五の十八・廿・廿二)。祭司の長は一年に一回大なる贖の日に隔の幕の中即ち至聖所に入つて、この贖罪所の上に血を注ぎ、以色列國民の罪を贖うたのである(レビ記十六)。

**燭臺** **物名** 燭臺はその上に燈蓋を置いて、家の内を照す爲に用ゐられた高い臺で、通例木や眞鍮の如き材料で造られたが、金銀で造られたものもあつた(マタイ傳五の十五、ルカ傳八の十六、十一の三十三)。マタイミルカの記事の相違は、語られた場合がちがふのみでなく、一は猶太風の小さき家のものについて、一は希臘風の大家の入口に置かれたものについての語であるからであらう。

**シムロ** **地名** 【ヘブル語】**枝** 1 ユダの平地にあつた邑で、エルサレムを距ること西南へ十六哩、アゼカミアドラムの間にある。現在はクルベット・シウウエーケといひ、エラの谷(ワディ・エス・セント)にある(サムエル前書十七の一、列王紀上四の十)。かの巨人ゴリアテがダビデに打殺され、次いでペリシテ人の軍勢の破られたのはこの近傍である。而して邑は丘上にあつて、その三方面は深い谷にかこまれ、東の一方は狹隘な通路になつてをるので、要害として最も適當である。2 ヘブロン<sup>540</sup>の西南十哩の地點にあつたユダの邑である(ヨシヤ記十五の四十八)。今はエシユ・シウウエーケミ<sup>540</sup>。

**シラクラ** **地名** 別項『スラクサ』を見よ。

**シラフス**

**人名** (男) 【ヘブル語】**強き者** シルワノの縮まつた形であるが、これは多分ヘブル語のシヤラシュ(強き)をラテン化して呼んだものであらう。シルワノともいふ。エルサレムに於ける最初議會の重なる者の一人で、ユダ、バルサバに偕に、パウロ及びバルナバに伴ひ、エルサレムに於ける者の一人で、暫時の間アンテオケに止まり、道を傳へ(使徒行傳十五の三十二・三十三)、後パウロの第二回傳道旅行に伴うて、小亞細亞の諸教會を訪問し、共に歐羅巴に渡り、ビリビでパウロと共に獄屋に入れられたが(使徒行傳十五の四十、十六の十一・十四)、後レアでパウロに分れ(使徒行傳十七の四・十・十五)、コリントで再び相伴ひ、エルサレムに歸つたが、彼はそこに止まり、パウロの第三傳道旅行には伴はなかつたやうである。ペテロがロマよりポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤの諸教會に贈つた書簡を托されたシルワノは(ペテロ前書五の十二)、思ふにこのシラスで、彼はパウロと分れて後ペテロに伴うたものであらう。

**シリオン**

**地名** 【シドン語】**胸牌** ヘルモン山の別名である(申命記三の九、詩篇廿九の六)。別項『ヘルモン』を見よ。これをかくよんだのはその形状が胸牌に似てをる所から、ヘルモン山の一部分をよんだのであらう。七十人譯は廿詩九の六のシリオンをエシユルンと間違へて「愛する者を若き野牛の如く躍らせ給ふ」<sup>541</sup>としてをる(申命記三十二の十五、イザヤ書四十四の二と比較せよ)。

**シリヤ**

**地名** 別項『スリア』を見よ。

**シロ**

**地名** 【ヘブル語】**平和**、『休息所』 1 エルサレムを距ること北方へ十七哩、シケムを距る事南方へ十一哩、この間の大路より東方へ二哩の丘上にあつた市邑である(士師記廿一の十九)。以

シラス シリオン シリヤ シロ

シロアム

色列の人人がカナンの地を攻取つた後、神の幕屋をこの邑に安置し(ヨシユア記十八の一)、士師の時代即ち三百餘年の間以色列の人人は毎年この處に集つて神を祭つたが、契約の櫃がベリシテ人に奪はれた後、神の幕屋はエルサレムに移されたので、シロは漸次衰微し、預言者エレミヤの時代には、いと荒れたる處になつてゐた(エレミヤ記七の十二・十四、廿六の六・九)。今はセイルンに稱び、壞れた邑がこのつてをる。北方の臺地に岩を切り出した四百呎に八十呎の平地があるが、それが多分昔の殿の跡であらう。東方の谷には善き泉がある。又岩を切つて造つた墓が多くある。2 創世記四十九の十にあるシロもやはり平和の意であるが、同節の譯し方について種種の説が行はれてをる。(一)「彼がシロに来るまで」これはシロを處の名と解して、カナンが征服せられ契約の櫃がシロに移置されるまで、ユダの支派が以色列軍の先導をする意と解する。(二)「それをもつ所の彼の來るまで」これは眞の所有者であるメシヤの來るまで、ユダが権力をもち、彼の來るに及んで、その手に渡すまいふのである。(三)「その統治者の來るまで」本文を少し變へるこゝ、この様に譯し得らる。勿論メシヤの來るまでこの意である。(四)「平和の國の來るまで」眞の平和を齎らす所のメシヤの來臨をいふものである。以上の如く種種の譯し方があるので、的確の意味を決定し難いが、メシヤ的意義を有つてをるこゝいふ事は明白である。何れにせよ、ユダの権力が、終極に理想的統治者(メシヤ)の手に移る事をいふのである。

シロアム

物名

「ヘブル語」遺はさる」

1 池の名でその別名をシロアミいふ(イザヤ書八

の六)。又シラミいふ(ネヘミヤ記三の十五)。この池はエルサレムの中にあるオペル即ち神殿のあつた丘の東南の麓ケデロンの谷にあつて、長さ五十二呎、幅十八呎、深さ十九呎の池で、石垣を以てその周圍を圍まれてをる。これに達するには石段を踏んで降りゆくのである。この池の水は「處女の泉」によ

ばれてをる泉から、千八百呎の長き堀貫岩の穴を通して、水を引いたもので、シロアムの名は之より起つたのである(ヨハネ傳九の七)、2 シロアムの櫓(ルカ傳十三の四)については、他の何れの歴史にも見えて居らぬ(ルカ傳十三の四)。シロアム近くのエルサレム城壁に建てられた塔であつたらう。

白き色

雜語

別項「色」(聖書の)を見よ

破城槌

物名

戦争の時、敵城の石垣、

門等を破壊するに用ゐた武器で(エゼキエル書四の二、廿一の廿二、廿六の九)、その形は種種あるが、車の上に乗せられた塔の中に兵士が塔乗し、塔の横から突出した鐵の棒をもて、門や石垣を突き崩すのである(ナホム廿二の五)。次頁の挿繪を見よ。

シワン

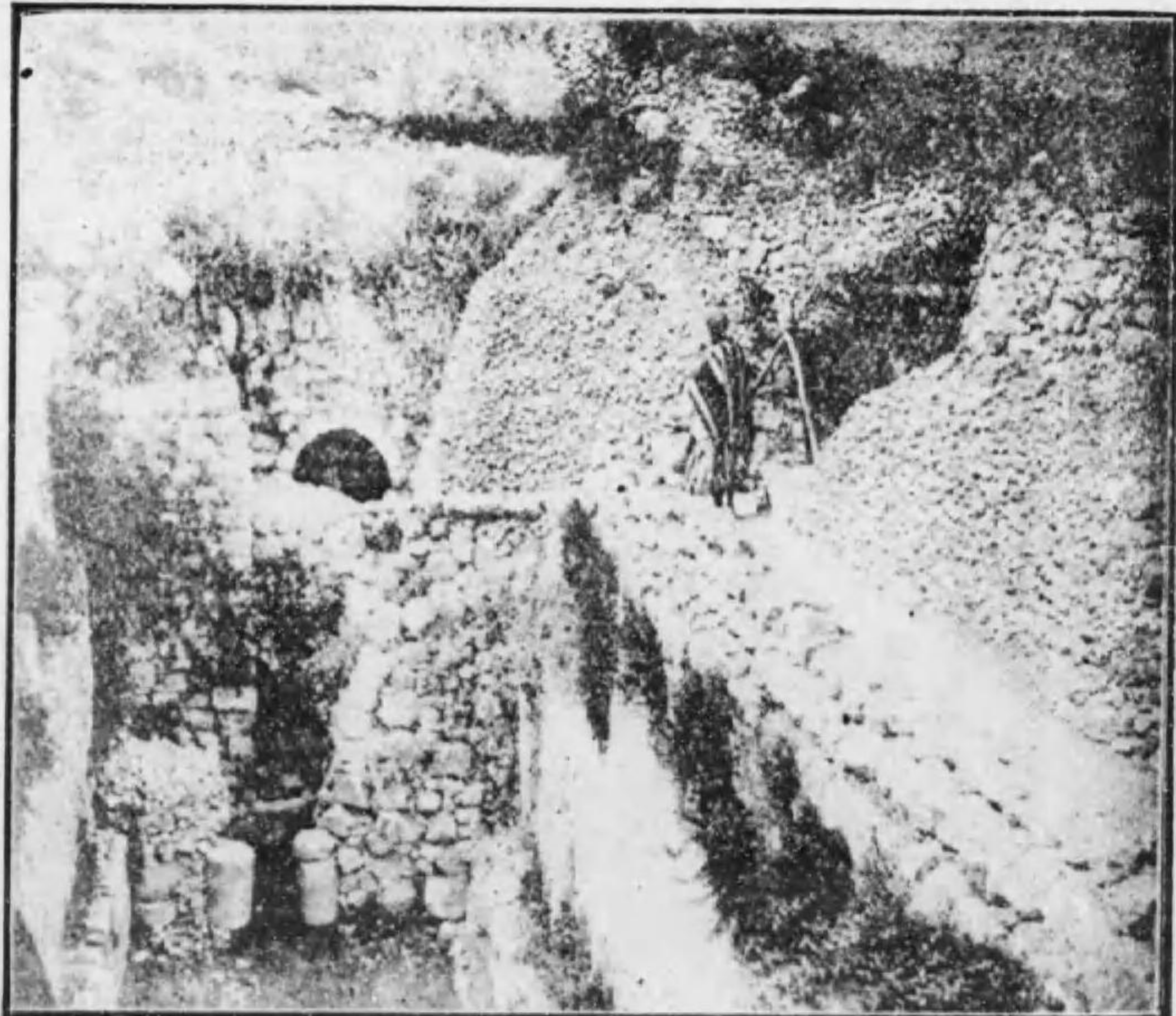
雜語

別項「月」を見よ。

シン

地名

「ヘブル語」沼澤」 エジプト國の邑で、ギリシヤ人はこれをベルシウムと



シロアの池

シロキイロ シロクツシ シワン シン



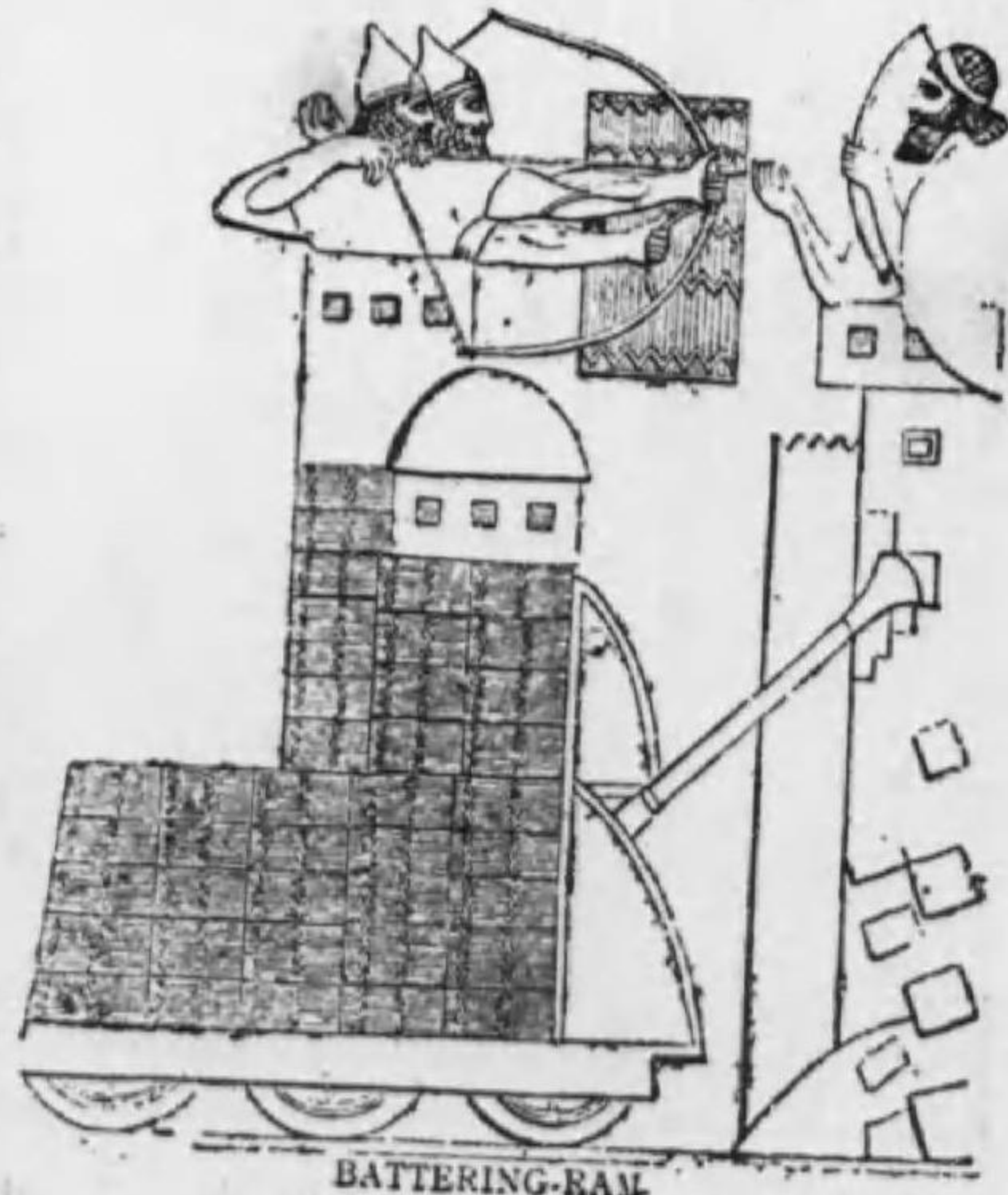
呼んだ(エゼキエル書三十の十五・十六)。地中海より二里離れて、ナイル河の支流の濱にあつた最も堅固な邑であつたが、今は唯塚の如き古跡が存つてをるのみである。

信仰

術語

信仰とは正當の證據に基いて、眞理を  
確認することである(ヘブル書十一の一)。基督教の信仰は天啓の書である聖書に記さるる教義並にこれに關する凡ての眞理を承認する事である。けれども單に眞理を承認することに止まつて、その人の言行に感化を及ぼす事なき信仰は知識的信仰で、これを「死せる信仰」といふ。斯る種類の信仰は、惡魔もこれを有つてをる(ヤコブ書二の十九-廿六)。之に反して「生ける信仰」即ち一教に至る信仰

とは、基督教の教義を眞理として信ずるのみならず、心情全くこれが感化を蒙り、誠實に神の旨に従ひ、その結果の言行にあらはるるをいふのである。キリストを信ずる信仰は聖靈の賜物で、彼を救主・預言者・祭司・王としてうけ、かれに従はしむるに至るものである。かくキリストを信ずる信仰は、即ち救の方法である。それ故信仰がないならば、人は罪より救はれる事もなく、又聖めらるる事もない。凡て信仰によつて義せられた人は、信仰によつて生き、又歩む人である(マルコ傳十六の十六、ヨハネ傳三の十五・十六、使徒行傳十六の三十一、ヨハネ第一書五の十)。基督者はこの信仰によつて、世に勝ち罪ミ惡魔ミに勝ちて、義の冕を受け(テモテ後書四の七・八)、又これによつて大なる工をなすのである



破城機

(ヘブル書十一、使徒行傳十四の九、コリント前書十三の二)。

箴言

書名

舊約書中の智慧文學の一書で、詩の形に組立てられた賢き格言集である。某記者は「若し舊約書を概括的に見るならば、モーセの五巻は神學書であり、詩篇は人類學書であり、預言書は基督學及び救拯學であり、而して本書は實踐道德書である」といつてをるが、本書は實に人生の實際的・倫理的方面を論じたもので、眞正の智慧とは日常の生活を潔め、正義・清潔・敬虔の生活を日日常営む事であるに教へてをる。故にルーテルの言へる如く「何人でも徳に進み、日常生活を潔めよう」と志すものはこの書を座右に供へ、日日熟讀し、これを以て自己を照し、自己を日々この書と比較すべきである」。凡そ如何なる種類、如何なる階級の人にも、本書の教訓によつて益を得ざる者はない。本書の著者はソロモン王(十の一、廿五の一)、アゲル(三の二十一)、レムエル王の母(三十一の一)、及びヒゼキヤ王に屬せる人人(廿五の一)等である。その内の重なる著者はソロモン王である。レムエルは神に奉仕する者との意で、ソロモン王の別名であらう猶太人等は言ひ傳へてをる。而して本書の編輯はヒゼキヤ王の時代になされたものであらう。

第一部 智慧に關する教訓 (一一九)	第二部 箴言第一輯 (十一廿四)	第三部 箴言第二輯 (廿五-三十一)
緒言(一の一-七) 本書の目的及び使命 一、智慧に關する教訓(一の一-九の十八)	二、箴言第一輯(十一廿四) 1、箴言叢書(十の一-廿二の十六) 2、箴言的論說叢書(廿二の十七-廿四の三十四)	三、箴言第二輯(廿五-三十一) 1、緒言(廿五の一) 2、箴言(廿五の二-廿九の終) 附録(三十一-三十二) 1、アゲルの言(三十一)

- イ、眞實の友は善(八一九)
- ロ、偽の友は愚(十一十九)
- 2、智慧の叫(一の廿一の三十)
- 3、両親の勸告(二一七)
- 4、智慧の叫(八)
- 5、智慧の比較(九)
- イ、智に就て(九の一十二)
- ロ、愚に就て(九の十三一十八)

- イ、社會的訓戒、廿二の十七一廿三の十四)
  - ロ、両親の訓戒(廿三の十五一廿四の廿二)
  - ハ、社會的・行政的訓戒、廿四の廿三―三十四)
- ◎本書の論語「智慧」  
◎本書の論語 一の七

- イ、人間の智慧の不完全(三十の一―六)
- ロ、祈禱(三十の七―九)
- ハ、行爲に就て(三十の十一―十三)
- 2、レムエルの言(三十一)
- イ、彼の母の訓言(三十一の一―九)
- ロ、彼の母の繪畫的描寫(三十一の十一―三十一)

参宿

星名

太陽の黄道の赤道に當つてある星座である(ヨブ記九の九、三十八の三十一、アモス書五の八)、學名はオリオン星座で、アラビヤ人はこれを巨人と呼び、我國ではこれを「三ツ星」といふ。不等邊四角形の各隅に強く輝く星があり、中央に三個の星が並列し、その下に大星雲を有する星座で、冬の夜は殆んど終夜これを見る事が出来る。巨人はかのニムロデで彼は不敬虔の爲に天に縛られてゐるのだとの傳説がある。ヨブ記に「参宿の繫繩を解きうるや」とあるのは、古代の人が天象を動物に擬へた所から斯る言ひあらはし方をしたのである。こは普通の見方であるが、最近の天文學上の新説によれば、参宿の各星は別別の方向へ動きつゝある爲、五萬年の後には遂に分散し去るべしとの事、これは神のみがこの繫繩を解き得給ふ事の解釋として更に興味あるものである。

神殿

建物名

別項「エルサレムの神殿」を見よ。

シンの曠野

地名

【ヘブル語「月神の曠野」】

シナイ山脈の西にある南部一帯の砂原で、ラス。

アブゼニメーの南にあり、曠野中最も平地で凄じく、旅行に困難な寂寞たる荒地で、現今エルマールカミ稱んでゐる。その背後には遙か白亜の丘の向にシナイ山の中心である花崗石の山の紫の筋が見え、西は海を隔てて遠く豊饒なるエジプトを微かに見ることが出来る。以色列人はエジプトを出でし後一ヶ月にしてここに着いたが、食物は殆んど盡きんじした。啞は自ら起らざるを得なかつたのである。神はその時マナと鶉を降らせ給ひ爾來四十年間毎朝マナをふらせ給うた(民數紀三十三の十一―十四)。

申命記

書名

舊約書の第五卷で、その末章を除く外は、皆モーセの記したものである(申命記

一の五、三十四の一、歴代志下廿五の四、ダニエル書九の十三、マルコ傳十二の十九、使徒行傳三の廿二)。當時エジプトを出で來つた以色列人等は、カレブミヨシユアを除く他は、悉く曠野に於て死に失せ、今やその子等によつて成れる以色列民族は、將にヨルダンを渡つて、約束の地カナンの國に入らんとしてモアブの平野にゐた。斯る場合に當つて、モーセは茲に更めて過去四十年間に起つた重なる出來事を、民等に語り聞かせ、十誡を復誦し、これに説明を附し、種種の條例及び未だ與へなかつた律法をも民に與へ、而して神を畏れ、神を愛し、神に服従すべき道を教へたのである。而して又最も嚴かに神の道を守る者の受くる祝福を約束し、道を離るる者の上に来る所の戰慄すべき呪詛と審判を告げ、末の世に起るべき出來事をも預言し、各支派に預言的的祝福を與へ、ヨシユアを己が後繼者として立て、ネボ山に登り、ピスガの峯よりカナンを眺めつゝ、主の聖言の如く死者の列に加はつたのであつた。彼がこれを人に述べ始めたのは出エジプト第四十年の十一月一日で(一の三)、彼はその年十二月一日に齡百二十歳で死んだのである。本書の論語は「汝……すべし」であつて、論語は十一の廿六―廿八である。

シンノアラノ シンメイキ

<p>第一部 追 想 (一の二四の四十三)</p> <p>一、第一講演(思ひ出の記)(一の二四の四十三)</p> <p>1、緒言(一の二五)</p> <p>2、イスラエルがエジプトを出て以来の歴史を略説して、神の愛と義を想起す(一の六一三の終)</p> <p>3、神の教訓を守つて従順なるべき事を民に勸告し、これを犯す者を警戒す(四の二四四)ベザル、ラモテ、ゴランの三邑を別ちて逃避の邑となす(四の四十一—四十三)</p> <p>◎本書は献身の書である</p> <p>1、これは贖はれたる民に對する神の要求である(ロマ書十二の一)</p> <p>2、イスラエルの民の従順によりて受くる地上の祝福は、全く主の屬となつた靈魂に來る靈</p>	<p>第二部 律法の解明 (四の四十四—廿六の十九)</p> <p>二、第二講演(律法の復誦)(四の四十四—廿六の十九)</p> <p>1、緒言(四の四十四—四十九)</p> <p>2、十誡の復誦。律法の基礎(五一—六)</p> <p>3、十誡第一誡の適用。偶像忌避、忘恩の警誡(七一—二)</p> <p>4、宗教に關する律法。偶像忌避像教に關する一切を破毀すべき事、祭の條例、誘惑者の警誡、潔き獸と汚れたる獸の條例、レビ人を顧みる事、毎七年釋放の例、過越・ペンテコステ・結茅節の條例(十二の一—十六の十七)</p> <p>5、行政に關する律法。士師及び官人を立つる事、訴訟及び裁判法、逃避の邑、戦闘に臨むる時及びカナン人に對する時の律法(十六の十八—二十の終)</p>	<p>第三部 契約の更新 (廿七—三十四)</p> <p>三、第三講演(警告)(廿七の二—廿八の六十八)</p> <p>1、律法の言語を石碑に刻むべき事</p> <p>ケリジム山で祝福し、エバル山で呪ふ事(廿七)</p> <p>2、従順者の福祉と不従順者の呪詛(廿八)</p> <p>四、第四講演(契約)(廿九の一—三十の廿)</p> <p>1、契約(廿九)</p> <p>2、勸告(三十)</p> <p>五、第五講演(勸告)(三十一の一—廿三)</p> <p>六、第六講演(訓誡)(三十一の廿四—廿九)</p> <p>七、第七講演(預言的詩歌)(三十一の三十一—三十二の五十二)</p> <p>八、第八講演(預言的祝祝)(三十の三—廿九)</p> <p>九、モーセの死の話……これは後</p>
--	---	---

<p>的祝福に當る(コロサイ書二の十)</p> <p>3、神の我らに施し給ふ愛は、我らをして喜んで献げる事を得しむる(ヨハネ第一書四の十—九)</p>	<p>6、社交上及び家政上の律法。社會に對する道德及び犯罪、男女間の問題、貧富強弱者間の問題、奴僕・善願・離婚・貸借・初産物・什一その他の律法(廿一—廿六)</p>	<p>にヨシユア、サムエル、或はエズラの附記したものであらう(三十四)。</p> <p>(備考、本欄の三—四を第三講演とし、四—九を結尾とする學者もある)</p>
---	--	---

**新約 備 註** 舊約に對する新しき約束を意味する。舊約は一言にして言へば罪人を罰し、義人を榮えしむるにあるが、新約は罪人を赦し、不義なるものを義にするにある(マタイ傳廿六の廿八、ロマ書三の廿一—廿五)。舊約は外より律法の嚴守を命ずれども、新約は心を回心せしめ、内部より自ら律法の命ずる處を行ふ事を得しむるのである(エレミヤ記三十一の三十一—三十四、ヘブル書八の八—十三)。イエスはこの新約の中保者となつて血を注ぎ給うた(ヘブル書十二の廿四、九の十四・十五、テモテ前書二の五)。パウロはこの新約の役者させられた光榮を述べてをる(コリント後書三の六—十二)。

**新約聖書** **書名** 基督教の經典で、書中に編入してある書物廿七卷。キリスト降世以後紀元百年頃までの教會歴史、傳記、書簡、預言を集めたものである。傳記及び歴史はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書及び使徒行傳で、書簡はロマ書、コリント前後書、ガラテヤ書、エペソ書、ピリピ書、テサロニケ前後書、テモテ前後書、テトス書、ピレモン書、ヘブル書(以上十三卷は普通にパウロの著こいはれてをる)、ヤコブ書、ペテロ前後書、ユダ書、ヨハネ第一・二・三書、ユダ書の廿一卷で、預言書はヨハネ黙示録一卷である。これらの書は元來その一二篇を除けばみなギリシヤ語を以て記されたも

シンヤク シンヤクセイシヨ

のであるが、聊か普通のギリシヤ語と異なり、地方的特色を帯びてをる。その著述は早きは紀元四五十年頃遅きも紀元百年を出でないが、今日の形状に結集せられ正經として確定したのは紀元三百九十七年カーセージに於て開かれた宗教會議に於てである。尙各卷の冒頭に附けられてある表題は、原作者の手によつて書かれたものでなく、後人の附加したものであるから、これを以て直ちにその著者とするべきではない。その眞偽はその書の批評的研究によつて知り得るのである。但し我らは新約書も舊約書も同じく、これが神より出でたる神の言と信すべきである。而してこれを神の言と認むる根據として、キリストの權威と聖靈の權能と舊約書との一致と、信する者に働く能力とを承認すべきである。

ス

スエネ

地名

【古エジプト語で神の名であらう】 ことはエジプトの南境、ナイル河の第一瀑布の傍にあつた邑で、今はアスーアンといふ（エゼキエル書廿九の十、三十の六）。邑は河の東岸即ち上部エジプトの最初の州の首府のあつたエレファンティン島の對向にある。その後方には花崗石の石切場がある。ピラミッドに用ゐられた石材はこの處から切り出されたのである。此スエネ、エレファンティンには、猶太人の植民地があつて、立派なエホバ禮拜の爲の神殿が立てられてゐた（イザヤ書十九の十九）。この地でアラマイク語で書かれたパピルスが発見された。これは紀元前四百年までのもので、クセルクセス、アルタシヤスタ、ダリヨス二世時代のもので、その一は猶太の法官バコアスに神殿再築を乞ふた願書である。これは紀元前四百十一年に神殿が破壊せられたからである。それに對して好意ある返事が與へられたが、ベルシヤに對する戰（紀元前四〇五年）の爲に神殿の再建が實現しなかつたのである。

前述の如く、この邑がエジプトの最南部にあるところから、『ミグドルよりスエネに至るまで』には、エジプト全地の北より南に至るまでを指す事となる。序ながらここに引照したエゼキエル書の原文には、スエネの前に前置詞が缺けてをるらしい所から、英譯には非常に困難を感じ、『スエネの塔よりエテオピヤの境にまで』としてあり、改譯にも本文はその儘にして、欄外に和譯の如く譯してあるが、勿論和譯の方が正しいのである。日本譯聖書も亦優つてをるさいはねばならぬ。

スカル

地名

「ヘブル語『偽』、『醉酒』」

エバル山の東の麓、シケムの東一哩の處にあつた邑で、今はアスカルといふ村となつてをる。イエスがかの婦人に活ける水の話をして、禮拜の極意を語り給うた事によつて有名となつた（ヨハネ傳四の五―四十二）。その近傍、南に寄つてヨセフの墓やヤコブの井がある。別項『ヤコブの井』を見よ。

スカル



スカルの泉

## スキ人

〔種族名〕

〔ヘブル語「護る」、「掩ふ」〕

紅海の西海岸に住んでる古代の住民で、エテオピアの種族であらう。ベンチンゲルの註解には「黑人」としてある。ギリシヤ人はトロゴデュータイ(穴居民)と呼んでるが、これは彼らが穴に住んで居たこと云ふ風習によるものであらう、七十人譯にもさうある(歴代志下十二の三)。

## 逾越節—過越の祭 (改譯)

〔情例〕

これは猶太國の三大國祭の一で、最も大切なものである。

凡そ以色列の男子たる者は、この祭には必ずエルサレムに來り、エホバの前に於て、いさ嚴かにこの祭をなしたのである(申命記廿三の十五・十七)。この過越の祭の起原は出エジプト記第十二章に錄されてある。即ち以色列の民がエジプト國より出でんことを際り、パロ王はその心を剛愎にしてこれを許さなかつたので、神は種種の奇跡により、災禍を惠をあらはし給うたが、遂に門の鴨居と兩旁の柱に羔羊の血を塗つた以色列人の家のみを過越し、エジプトの凡ての家の長子を殺し給うた事によつて、パロをして以色列人の出エジプトを許さしめ給ひ、彼らがその羈絆を脱するに至つた事を記念する祭、即ち彼らの建國祭である。彼らがこの事を永く子孫に傳へ、エホバの恩を憶えんが爲、毎年その例に従つてこの祭を守り、今尙これを守つてをる。その例はレビ記廿三の四—十四、民數紀九の一—十四、廿八の十六—廿五、申命記十六の一—六にあるが、イエスの時代に於けるその守り方について略述すれば(一)これを守る時期は毎年春季、彼らがアビウ若くはニサンと呼べる月(彼らの教曆の正月で、太陽曆の四月頃)の十四日に始まり、七日間守られたのであるが、(二)彼らは先づニサンの月の十三日の晩に、何れの家に於ても戸主は蠟燭を點け、注意して家中にある酵あるものを搜し出し、夜半以前にこれを屋外に棄てる。(三)而して過越の羔羊は十四日午後の犠牲を献ぐべき時刻、即ち午後三時より六時までの間

に、神殿に於て祭司の手によつて屠られる。律法によれば羔は必ずその夜の中に食ひ盡すべき筈であつたから、家族の少い家は二戸或は三戸組合つて一匹の羔羊を屠るのである。(四)そして屠られた羔羊は全體焼にせられ、外に苦菜、酵なきパン、葡萄酒、汁が調へられる、茲に祝宴の準備は出来るのである。祝宴は十四日の日没後(猶太人の風習に従つて言へば十五日の始)に祝はれた。(五)この祝宴の最初に、父又は集會の長たる者が、水に混ぜた葡萄酒一杯を祝謝して飲む事があつた。これを「祝謝の杯」と稱へた。(六)その後、膳に列つた者はその手を洗つた。ヨハネ傳に記されてあるイエスが弟子たちの足を洗ひ給うた事は、この時に行はれたのであらう。(七)これに次いで、エジプトの壓制の苦を表はす苦菜及び酵なきパンを膳に置き、又果物と酢とで作られたカロセットといふ汁(醬油の如き物)を盃に入れ、これを膳に置いて、パンと苦菜とを食べる時、これをその盃に浸した。イエスがイスカリオテのユダにパンを與へ給うたのは、この時の事であつたらう。(八)この次に、水を混ぜた葡萄酒の第一の一杯を祝してこれを飲んだ。茲に至りて家族として膳に列なれる者らに、家主はこの祝宴の由來を説明した。(九)その後、ハルレルといへる讚美歌の第一の部分(詩篇百十三、百十四)を歌つた。(十)その次に、炙きたる過越の羔羊を膳に置き、一同これを食する。イエスが聖晚餐式を創立せんとして、パンを取り祝してこれを弟子らに與へ給うたのはこの時であつたらう。(十一)これに次いで、葡萄酒の第一の一杯即ち「祝福の杯」と稱へられたものを取り、祝してこれを飲んだ。(十二)之に次いで、葡萄酒の第四の一杯を飲み、その後ハルレルの第二の部分(詩篇百五十一—百十八)を歌つた。この祭は七日間繼續し、第一日と第七日は聖會の日である故、何等の業をもなさず、七日間毎日祭司は燔祭として少き牡牛二匹・牡羊一匹・當歳の羔七匹を献げ、その他麥粉に酒を和ぜたものを献げた。又任意の酬恩祭を

スギコシノイハヒ

献ける事も行はれた。尙酵なきパンの節の安息日の翌日は初穂の節で、穀物の初穂一束をエホバの前に携へ來り、搖祭として献けたのである。尙過越の祭は、神の羔羊たるイエス・キリストが犠牲になつてその民を罪ミサタンより救ひ給ふ事の模型である事をも忘れてはならぬ（コリント前書五の七・八）。

**スクテヤ人** 種族名

も黒海の附近に住んでゐたが、ダニウブ、ドン兩河の間の地方に蔓延した印度歐羅巴種の遊牧民で、長ブリニーの時代には、スクテヤの名は廣く中央亞細亞及び東南歐羅巴の邊陲を總稱してゐた。彼らの猛惡殘忍は諺語となり、コロサイ書三の十一に於ては野蠻人の義を表はしてをる。士師記一の廿七にある「ベテシヤン」は七十人譯に「スクトシ・ボリス」とあるが、これはスクテヤ人の一隊がここに住んでゐたからであらう。

**救**

術語

危難ミ災禍ミ死より助けあげる事は、救いふ事の普通の意義である。新約聖書に於ては救いふ言の意義は最も深奥である。即ち人は生れながらにして、又は行爲の惡しきによつて、罪ある者になつた故、その應報として受くべき神の刑罰ミ罪の結果より免れる事が出来ないものであるが、神の立て給ひし道によつて、それらより救ひ出される事を意味する。換言すれば過去に犯した凡ての罪を赦されて義人ミ稱へらるるのみならず、神の子となり、現在この姦惡なる世にありながら罪を犯すことなく、義しき生活をなし得る能力を與へられ、心の中にある罪の性質を取去つて、潔き生涯を送り得る聖靈を附與せられ、日日平安ミ喜樂ミ満足の日をすごし、かくてこの世を去りし時、未來の刑罰である地獄の火にあふ事なくして、かぎりなくその靈が神の國に住むのみならず、その肉體も榮化せられて、永遠の幸福に與り得る事である。約言すれば救は過去ミ現在ミ未來にわたるものであつて、刑罰よりの救、罪の性質よりの救、及び肉體の救贖を意味するものである。さればヘブル書に「この救を大なる救」

ミ記してある（ヘブル書二の二三）。

**救主**

術語

聖書に於ては一般に神若くはイエス・キリストを指して救主といふ（マタイ傳一の廿一、テモテ前書四の十、詩篇七十二の十二・十四、詩百十六の八・十三）。

**スコテ**

地名

【ヘブル語「慮」】

1 ヨルダン河の東方、ヤボク河の附近にあつた地で、ヤコブ

がハラシよりの歸途、エサウミ會見した後、止まつて慮を建てた所である（創世記三十三の十七）。ヨシユアはこの地をガドの支派に與へた（ヨシユア記十三の廿七）。その後ギデオンがこの地の人人を討した（列王紀上七の四十六、歴代志下四の十七）。現今ヤボク河の北岸、ヨルダンの東四哩にあるテル・ディル・アラミミ稱する所がそれであらう。そこには唯石塚のみが存つてをる。2 往昔以色列の人人がラメセスを出て後、始めて陣營を張つた所で（出エジプト記十二の三十七、十三の廿）、現今ワデイ・トウミラットにあるピトムの近くにあつた邑で、第八州の首府であつた、而してスコテの名はエジプト語のスクターの音譯であらう。或學者はピトムミ同一である云ふ。

**スコテベノテ**

靈名

バビロン人の拜んでゐた偶像の名で、サマリヤに移されたバビロン人は、この偶像の爲に宮を建てた（列王紀下十七の三十）。スコテベノテミはヘブル語で「娘等の慮」を意味する所から、賣淫の爲に婦人を置いたのでこの名があるのであるか、又は女神の像が安置されてゐたのであるミ説明する者があるが、この語がバビロン語であるミすれば、この説明は當らない。バビロン語では「議士なる地の造主」の意で、バビロン人の拜した神である。エデルシヤイムは有名なるバビロンの女神ジルバニト（子孫を與ふる者）の訛音であらうミ解釋してをる。

スクヒヌシ スコテ スコテベノテ

**スザンナ** **人名** (女) 【ヘブル語】「百合花」 イエス・キリストに従ひ、その財産を以て彼に事へた女たちの一人である(ルカ傳八の三)。

**スジン** **種族名** 【ヘブル語】「力強き者」 太古ヨルダン河と死海との東の國にゐた強き巨人の種族である(創世記十四の五)。この種族は申命記二の廿にザムズミ人記され、レバウム人同一視されてゐる種族で、以色列人のエジプト寄寓中、アンモン人に服したが、後アンモン人も亦アモリ人に征服せられたのであつた(同二の廿一・廿四)。その國若くは首都は創世記によればハムであるが、申命記にはアンモンにあると記されてゐる。これは神の名アム或はアミを長くした語である。かく創世記に申命記と相違する事に就いてセイス氏はかういつてゐる。「創世記の記事はある楔形文字の記録から寫したもので、その記録の中には同一の文字で二種の音を發せしむるものがあつたであらう。即ちアムとハム、ズジミザムズミのやうに(著者註)バビロン語ではウミムを現はす言は同一である。であるから臆寫した者は何れが正しい發音であるかを知る事を得なかつたのであらう。しかし申命記の章句を記したものは正しい發音を熟知してゐたから、無論その正しい方を記したのであらう」云。この説によれば必然聖書は楔形文字の記録によつたもので、幾分かこれを源としたものでなければならぬ。ミはいへ、これが爲に少しも聖書の歴史的に正確である事、或は聖靈に導かれて記された事等を傷けらるるものではない。尙ヘシボンの東南十哩にジザミといふ所があるが、それミズジンには、何等かの關係があるらしい。

**ステパノ** **人名** (男) 【ギリシヤ語】「冠冕」 基督教最初の殉教者。彼はエルサレムの幼稚なる教會に於てギリシヤ語のユダヤ人等やその寡婦らが、日日の施濟に漏れて眩いた時、以後かかる手落のなき様に選ばれた七人の慈善委員の一人であつたが(使徒行傳六の五)、その職分の外、道の宣教者

並に奇跡を行ふ人として、最も拔群の人であつた。聖書記者は「御靈と智慧とに満ちたる令聞ある人」、「信仰と聖靈とにて満ちたるもの」、「恩恵と能力に満ち」たるもの、又「汝の證人ステパノ」なご記してをる(使徒行傳六の三・五・八、廿二の廿)。彼は奇跡を行つた爲、敵對者を惹起し、その智慧とその強き主義とは彼を誣告せしめ、遂に捕へられて集議所に引渡され、聖所と律法とを謗瀆する人、ナザレのイエスはこの所を毀ち、我らに授けし例を變ふべしといへる人といふ理由によつて訴へられた。彼は此告訴を受けて少しも騒ぐ事なく、泰然自若として、衆人の前にその顔は天使の如く輝いてゐたといふ(使徒行傳六の九・十五)。祭司長の質問に對する彼の論議は雄大にして、彼は先祖アブラハムの召より、ヨセフ、モーセを経て、ダビデに至り、ダビデよりソロモンの神殿に至るまでの由來を述べ來りて、選民の歴史を概論し、最後に大膽に「項強にして心と耳とに割禮なき者よ」と叫んで、猶太人の頑梗を責め、「汝らは多くの預言者を殺した祖先等の如く、義者を捕へてこれを殺す者である」とこの壯烈沈痛なる斷言をなすや、一層敵の憤怒を激發して、衆目悉くステパノに向つたが、彼は邑より逐ひ出し、石を以て彼をうつた。彼はうたれながらも祈つて「主イエスよ、我が靈を受けたまへ」と呼び、また跪づきて大聲に「主よ、この罪を彼らに負はせ給ふな」と呼び、かく言ひて眠に就いた(使徒行傳七)。後日パウロが回心するに至つたのは、この最初の殉教者の美はしき死と、彼の祈の應答とも見る事が出来る(徒七の六十、廿二の廿)。

**罪標**

**雜語** 羅馬帝國に於ては、犯罪者を處刑するに當り、その罪名を書き記した板を罪人の前に運ぶか、又は罪人の首にかけて運ばす習慣があつた。而して十字架にかけた場合には、その罪標を罪

ステファダ

人の頭の上に掲げたのである。イエスの罪標はヘブル、ロマ、ギリシヤの語で記されてあつた（ルカ傳廿三の三十八、ヨハネ傳十九の廿）、ヘブル語は宗教的な言で當時バレスチナで使用せられたもの、ロマ語即ちラテン語は政治的の言で公文書に用ゐられた者、ギリシヤ語は哲學的・文學的の言で、アレキサンダー大王以後東方諸國の通用語であつた。而してマタイ傳には「これはユダヤ人の王イエスなり」を記したとあり、マルコ傳には「ユダヤ人の王」を記したとあり、ルカ傳には「此はユダヤ人の王なり」を記し、ヨハネ傳には「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」を記したとある。多分ヨハネ傳がヘブル語の分を傳へ、マルコ傳がラテン語の分を傳へ、ルカ傳がギリシヤ語の分を傳へたのであらう。罪標の全文は下圖のやうに書かれてあつたと思はれる。

**ストイク** || **ストア派** 學派名 ギリシヤ哲學の一派で、クプロ島の人ツエーノーン（紀元前三四〇—二六五年）の創立に係るものである。これをストアと名づけたのは彼がアテネに來つてストア・ポエキレー（彩色した廻廊）で學校を開き、弟子に教授したからであるといふ。この哲學は或點に於ては基督教の教理に似た所があるが、かれこれこれはその間に大なる懸隔があつて、相一致する事は出來ぬ。その主張は實行の二三を擧ぐれば、人をして幸福ならしむる者は唯知識である。人生の災害は實在のものではなく想像的の害悪である。賢人は喜樂又は悲哀を以てその心を動かしてはならぬ。而してその實行に於ては専ら忍耐嚴格にして、世情に無頓着なる風を裝うてゐた。この派で最も有名な人はセネカ、エピクテト

ישוע הנצרי מלך היהודים  
ΟΥΤΟΣ ΕΣΤΙΝ ΙΗΣΟΥΣ Ο ΒΑΣΙΛΕΥΣ ΤΩΝ ΙΟΥΔΑΙΩΝ.  
REX JUDAEORUM.

標 罪

ス、マルクス・アウレリウス皇帝等で、彼らの論説集・教訓・冥想録は、何れも不窮の名著として諸國語に翻譯せられ、邦譯書も出版せられてゐる。

**スミルナ** || **スミルナ**

地名

「ギリシヤ語『没藥』」

この市邑は小亞細亞の西方のヘルメアン



橋路水の昔るけ於にナルミス

灣内の濱にあつて、エベソより北方へ距る四十哩、太古より貿易の盛なところであつた。新約時代には羅馬の領地で、パゴス山の傾斜には二萬人を容れるに足る劇場があつた。又紀元廿三年にチベリウスはその母ユリアを崇むる爲に神殿が建てられた。又ゼウスの神殿に續く「黄金街」は古代に於ける最も名高いものの一であつた。この市邑がかく繁榮をなつたのは、そこが良港であるにも因るが、亦四圍の地味が豊沃なるにも負ふ所がある。無花果・葡萄・橄欖樹の實。阿片・スポンヂ・綿・甘草等は、その輸出品の重なるものであつた。基督教會は早くより建設せられ、キリストによりて稱賛せられた良教會であつた（黙示録二の八一—八二）。使徒ヨハネの有名な弟子で、この地の教會の監督であつたポリカールは、燃ゆる薪の中に投げ入れながら、讚美・祈禱のうちに喜んで殉教した。彼の墓を稱せらるるものが、今尙この地にある。現今はイスミルと稱ばれ、トルコ帝國に屬してゐる。小亞細亞中の最大都市で、人口廿五萬その半ばはギリシヤ人で、四分の一より少からざるマホメッド教徒がある。街路は廣く、且つ敷石でつめてあるこの市の貨幣制度は古く、殆ん各時

スミルナ



スラクサ スリア

代の貨幣が発見せられる、科擧及び醫學の學校、並に美しい建物によつても名高い。

スラクサ—シラクサ (改譯)

地名

【ギリシヤ語で複數形であるが、その意味は不明である】

シシリ島の東岸にある有名な市邑で、周圍十四哩の石垣に圍まれてをる。この地の王には有名な人が多く、文學者の秀でたものも多くあつた。時には帝政政治が行はれ、時には共和政治が布かれた。使徒パウロはロマへの護送中、三日間この地に止まつた(使徒行傳廿八の十二)。

スリア—シリヤ (改譯)

地名

【もこへブル語のツルといふ言から出たギリシヤ音譯で、ヘブル語のアラム又はギリシヤ語のメソポタミヤを指してスリアといふのである】此國はいさ廣大で、其境界に定まりがなく、バレスチナの北方、地中海ヨルダン河との間に位し、其延長大約二百四十哩、其幅百五十哩で、五六の小國が其中に籠つてをる。もこハムの子孫が此地方に住んでゐて、ハマテの市邑は其首府であつた(創世記十の十八)。ダビデ王が此國を征服して以來ソロモン王の時代の終まで、スリヤは以色列に服従したが(サムエル後書八の三—十二、十の六—十九)、後獨立して屢猶太國に向つて戰爭をした(列王紀上十五の十八—廿、同下十の三十三、十三の廿二、十四の廿五・廿八)。其後紀元前七百四十年アツスリヤ國に征服せられ、ついでバビロン、ペルシヤ及びギリシヤの屬國となり、紀元前六十四年終に羅馬帝國の屬國となつた。現今はトルコ帝國の領地となつてをる。此地は自然の地勢上東西の二部に分れてをる。西部は高地で、住民が少く、東部は高地である。東部の南に世界最古の都府ダマスコがあり、その北東にテフサがある。西部のオロンテス河畔にハマテがある。此邊を「窪めるスリヤ」ミいふ。それより北に進めばアンテオケがある、新約時代に於ける異邦傳道の根據地である。又ハマテミマダスコの中央、オロンテス河の上流にリブラがある。アツスリヤ及びバビロンの遠征軍が大本營を

置いた有名な地である。尙別項『アラム』を参照せよ。

スロ・フェニキヤ

地名

別項『ビニケ』を見よ。

セントケ

人名

(女)【ギリシヤ語會ふ】ピリビ教會の會員であつた婦人で、使徒パウロは彼

ミユウオデヤミの間の不和をいましめ、主にあつて心を同じうするやうに勸告した(ピリビ書四の二)。

セ

誓願

術語

聖書に於ては神より受けた恩恵を感謝し、又は患難の來らんことを恐れ、或は幸福を受けようとして、何事か善事をしようし、神に約束を結ぶことを誓願といつてをる(申命記廿三の廿一—廿三、使徒行傳十八の十八、民數紀六の二—廿一)。

聖書

書名

聖書に新約書中に記されてゐるのは、何れも舊約聖書のこゝである(ロマ書一の二、

テモテ後書三の十五・十六)。但本項には舊新約書の全體について述べる事とする。聖書は神が自ら語り給うた言、又はその旨を人に授けて語らしめ給うた言で、別ちて舊約・新約の二部に大別せられてある。何故か名をつけたのであるかといへば、この書は神とその民との間に成れる契約が載せられてあるからである。而して契約には二つの時期があつた。一はキリストの降世前であつてこれを舊約ミ稱へ、一はキリストの降世後であつてこれを新約ミいふ。舊約書中には三十九卷あり、新約書中には廿七卷があつて、合せて六十六卷ある。その記者の數は總計少くも三十六人で、その中舊約書の記者は約廿六人、何れもヘブル人で、その國語を以てこれらの書を記し、新約書の記者は約十人で、その中ルカを除く外はみなヘブル人であつたが、彼らは當時の通用語であつたギリシヤ語を以てその書を記してをる。

スロ・フェニキヤ スントケ セイグワン セイシヨ

これら三十餘人の聖書記者はさまざまの種類の人で、その身分も職業も教育もは各皆異なつてゐる。即ち王があり、祭司があり、政治家があり、學者があり、將軍があり、預言者があり、農夫がある。又文武の道に秀で、哲學に通じたものもあり、尊き官吏もあれば、賤しき漁夫、税吏の如きものもあつたのである。又聖書の記された處も時も皆各異なつてをる。アラビヤで記したのもあれば、パレスチナで記したのもある。或はスリヤ、或はバビロニヤ、或はベルシヤ、或は小亞細亞、或はギリシヤ、或はイタリヤに於て記されたのである。又聖書全部六十六卷は約一千六百年の年月を経て書かれたもので、舊約書は紀元前千五百年頃モーセの記した書を以てはじまり、これより千百年後のマラキの記した書を以て終つてをる。その後三百年餘の間は、更に聖書に加ふべき書がなかつたが、キリスト降世以後四十年より百年に至るまでの間に、新約書は完備したのである。斯く聖書は夥多の書冊を合せた書じ、その記者の数が多く、その記された時も處も皆異なつてゐるけれども、終始一定の精神と目的とを保つてをる一の完き不思議な書物である。且つその教ふる所の眞理も一である、即ち神は一であつて萬物を宰り給ふ事、神は人類の父にして、人は神に事ふる義務ある事、神に人々に對して盡すべき愛の事、又人の罪咎より救はる事は、神に人との兩性を具へ給ふ一の仲保者によるの一途ある事、又人の現世の目的は專ら來世の運命を定むることにあつて、萬有の主たる神は義しき審判を以て現世に於て爲したすべての行爲に従ひ、これに無限の歡樂若くは無限の苦痛を與へ給ふ事を教へてをる。要するに聖書は世界の開闢・改良及び贖罪に於ける神の啓示と、神の人を待遇し給ひし歴史、將來に關する預言、萬代萬民の爲に活ける教訓・誠命・模範等を示したもので、キリスト教徒がその信仰と行爲に於ける無二の確實なる條規となすべき書物である。

聖書の諸時代

雜語

茲に時代を稱するは、長き年月の間に於て、神の與へ給へる道德の光に

より、罪と責任の等しき時期を一括した名稱である。神はその各時代に與へ給うた道德の光に照して人を審判し給ふのである。而して聖書の時代は創造より新天新地に至るまで、七時代に分れてをる。この各時代に於ける(一)人間の最初の狀態、(二)人間の責任、(三)人間の失敗、(四)神の審判等を鳥瞰的に見よう。1 無邪氣の時代 (アダムの創造よりエデンの園外に追出さるるまで)。(一)この時代の人間最初の情態は創世記一の廿六・廿七にある、即ち人は神の像と其の性質を與へられ、萬物を支配する權能を有してゐた。(二)その責任は神に對する絶対的の服従で、しかもそれはただ善惡を知る樹の果を食べてはならぬとの一事を命ぜられたのみであつた(創世記一の十六・十七)。(三)然るに人間は失敗した。即ち神の命令に叛いて、禁斷の果實を食つたのである(創世記三の六)。(四)そこで神の審判は臨んで、彼らはエデンの園より放逐せられたのである。但審判の中にも恩恵を忘れ給はざる神は、女の裔より蛇の頭を碎く救主の出づることを約し(創世記三の十五)、彼らに義の皮衣を與へ(同三の廿一)エデンの園の入口に御臨在を顯し給うた(同三の廿一)。(五)されど、罪の結果の及ぶ所は意外に廣く深く、且つ遠くして、アダムの罪は全人類の死と苦を齎らすに至つたのである(創世記三の十四・十五・七、ロマ書五の十二・十八・十九)。2 良心時代 (人間の墮落よりノアの洪水まで)。この時代の年数は第一の時代を合して、約千六百五十六年間である。(一)その最初の狀態は創世記三の廿二にある。人類は墮落によつて、自然的良心即ち善惡を知るこいふ特質を得、これをその子孫に傳へた。これによつて人は善を行ふ責任の下に置かれたのである。(二)それ故この時代の人の責任は善を行ふ事であつた。良心に従つて事をなすにあつた。その他には何等の禁制もなかつたのである。善をなすものは

神の前に顔をあげ得るが、然らざるものは神の罰を受けなければならなかつた。換言すれば人類は因果律によつて支配せられる立場にあつたのである。勿論悪事をなした者であつても、その非を悟つて改心する者の爲には、罪祭を献けて神の祝福を受け得る途がそなへられてあつたのである(創世記四の七)。(三)然るに人間は再び失敗した。創世記六の五・十一・十二を見れば、暴虐は實に盈満ちて、到底救済の見込がなくなつた。(四)そこで神の審判は再び臨んだ、神は洪水を以て全世界を蔽ひ、唯敬虔なるノアの家族八人のみをのこし給うたのであつた(創世記七の十一・十二・廿三)。次に 3 人間政治の時代(洪水よりバベルの塔まで)となつた。この年代はアブラハムのカナンに入つた年までを加算して、四百廿七年間である。(一)この時代は唯八人を以て始められた。而してノアは人類の王であつた。彼らは潔められた地球に棲息するものとなつた。當時の人間の状態は創世記七の一及びヘブル書十一の七よ』に、これに附帶して殺人をいましめられた(創世記九の一六)。(三)けれども人類は三たび失敗した。彼らは散る事を好まなかつた。彼らはシナルの平原に塔を建てる時に言つた『かくして我ら名を揚げて全地の表面に散る事を免れん』(創世記十一の一四)。(四)そこで神の審判もまた彼らに臨んだ。神は彼らの言語を亂し、彼らを全地に散らし給うたのであつた(創世記十一の五・九)。4 約束の時代(アブラハムの召よりモーセに律法を與へられし時まで)。この年数は四百三十年間である。(一)この時代に於ける人間の最初の状態は創世記十二の一・二・十三の十四・十七、十五の五等に見る事が出来る。神は前時代の審判せられた民の中よりアブラハムを撰び出し、彼に契約を結び給うた。即ち神は彼に國を與へ、子孫を與ふる事を約し給うた。而してその子孫は地につける肉體の子孫のみならず、天につける心靈的の數多き子孫であるといひ給うた。そしてその條件として、忠實と従順とが彼らに要求せられたのである。(二)彼らの責任は神の與へ給うた地に住むべき事であつた。『エジプトに下るなかれ、汝この地に生まれ、我汝と共にありて汝を祝まん』(彼の命令と約束であつた(創世記廿六の二・三))。(三)然るにこの點に於ても彼らは失敗した、即ち彼らは悉くエジプトに移つたのである(創世記四十七の一)。勿論神はこの失敗をも、恵によつて善きにはらせ給うたのである。けれども神はその聖旨に叛いたものに對して、全然不問に附し給ふ事はない。されば之に對して審判し給うた。(四)出埃及一の八・十四を見れば、これが爲に如何に彼らが悲境に陥つたかが知れる。即ち彼らはエジプト人の奴隷となつて了つた。神はエジプト人を用ゐて彼らを審判し給うたのである。 5 律法の時代(シナイ山よりカルバリーまで、即ち出エジプトより十字架まで)。この年数は千五百廿四年間(一)この時代に於ける最初の状態は出エジプト記十九の一・四にある。彼らはエジプトより救ひ出され、神の選民となつた。これは勿論神の大なる恵で、神はこれを彼らに經驗せしめ給うた。彼らは更めて恩まれし選民として立つてゐたのである。(二)而して神は彼らに律法の與へらるる事を欲するか否かを諮詢し給うた。するに民は自ら傲り、恩を以て導かるるよりも、却つて自ら律法を行ふ事を告白した。曰く『エホバの言ひ給ひし所は皆われら之を爲すべし』(出エジプト記十九の五・六)。茲に於て彼らの責任は定まつたのである。即ち彼らは律法の實行をなさなければならぬ立場に置かれたのである(ロマ書十の五)。(三)然るに民は之までにも、またこの後にも律法を破り、叛逆のみをなした。神は屢義人を遣はして、忠告その他の方法によつて、彼らを引返さうとしたまうたが、民は始終失敗を繰返へした(列王紀下十七の七・十七・十九、使徒行傳二の廿二・廿三)。(四)茲に於て神はまた彼ら

す、天につける心靈的の數多き子孫であるといひ給うた。そしてその條件として、忠實と従順とが彼らに要求せられたのである。(二)彼らの責任は神の與へ給うた地に住むべき事であつた。『エジプトに下るなかれ、汝この地に生まれ、我汝と共にありて汝を祝まん』(彼の命令と約束であつた(創世記廿六の二・三))。(三)然るにこの點に於ても彼らは失敗した、即ち彼らは悉くエジプトに移つたのである(創世記四十七の一)。勿論神はこの失敗をも、恵によつて善きにはらせ給うたのである。けれども神はその聖旨に叛いたものに對して、全然不問に附し給ふ事はない。されば之に對して審判し給うた。(四)出埃及一の八・十四を見れば、これが爲に如何に彼らが悲境に陥つたかが知れる。即ち彼らはエジプト人の奴隷となつて了つた。神はエジプト人を用ゐて彼らを審判し給うたのである。 5 律法の時代(シナイ山よりカルバリーまで、即ち出エジプトより十字架まで)。この年数は千五百廿四年間(一)この時代に於ける最初の状態は出エジプト記十九の一・四にある。彼らはエジプトより救ひ出され、神の選民となつた。これは勿論神の大なる恵で、神はこれを彼らに經驗せしめ給うた。彼らは更めて恩まれし選民として立つてゐたのである。(二)而して神は彼らに律法の與へらるる事を欲するか否かを諮詢し給うた。するに民は自ら傲り、恩を以て導かるるよりも、却つて自ら律法を行ふ事を告白した。曰く『エホバの言ひ給ひし所は皆われら之を爲すべし』(出エジプト記十九の五・六)。茲に於て彼らの責任は定まつたのである。即ち彼らは律法の實行をなさなければならぬ立場に置かれたのである(ロマ書十の五)。(三)然るに民は之までにも、またこの後にも律法を破り、叛逆のみをなした。神は屢義人を遣はして、忠告その他の方法によつて、彼らを引返さうとしたまうたが、民は始終失敗を繰返へした(列王紀下十七の七・十七・十九、使徒行傳二の廿二・廿三)。(四)茲に於て神はまた彼ら

を審判き、彼らを奴隸として、アツスリヤ及びバビロンに過さしめ給うたのである（列王紀下十七の一六・廿、廿五の一―十一、ルカ傳廿一の廿―廿四）。言ふまでもなく以色列の民は、凡ての國民の代表者である。神は彼らを選んで、凡ての人に教を垂れ給うたのである（コリント前書十の一―十一）。彼らはかく審判かれた。けれども審判のうちにも恩恵を忘れ給はざる神は、捕囚の中より敬虔なる者をエズラ、ネヘミヤ等によりて本國に還らしめ、彼らの裔よりイエス・キリストを生れしめて、救の約束は彼によつて成就せらるる事となつた。尙この時代に於て、舊約聖書が書かれたが、出エジプト記第九章以下マラキ書第四章に至る全體の意味は、要するに、義務的のものである。6 恩恵の時代（十字架より基督の空中再臨まで）。この年数は既に殆んど千九百年を経過したが、何時終るかは不明である。恩恵は人の受くべき筈がないのにも抱はらず、神の與へ給ふものである。前時代に於て神は人より義を求め給うたが、この時代に於ては神は唯めぐみを施し給うた、換言すれば神の方から義が行はれたのである。完全なる救ひ永遠の救ひは、唯一つの條件即ち信仰によりて與へらるる事となつた。新約聖書はこの時代に録されたのである。その最初の四書はキリストの傳ひその教を記したもので、この四書は律法全く恩恵の時代に屬するもので、兩時代の性質にあづかるものである。使徒行傳及び他のパウロの書は諸時代と等しく審判を以て終る事は、聖書に前言せられてをる。又審判の來る時この世は全く不信仰の世で、教會は背教者となる事が見えてをる。（一）この時代の人間の最初の状態はマタイ傳十八の十一及ロマ書三の十九にある。即ち凡ての人は罪人で、滅亡に行きつつある者である。（二）而して人の責任はキリストを信する事にあり（ヨハネ傳一の十一―十三、三の三十六）、これによつて救が滅亡かが定

まるのである。（三）然るに人の失敗は、かく前言せられてをる。即ちこの世の中に殆んど信仰がなきほゞである（ルカ傳十九の十二―十四、十八の八、マタイ傳廿四の二十七―二十九）。（四）そこでその時代の終にも亦審判が臨む。それは不信仰の者に對して行はれるので（テサロニケ後書七―十四）、即ち地上に大なる艱難時代が來るのである。これは實に世の始より未だ會て起らざる苦難の時、戦争・飢饉・疫病・地震その他種種の苦難の時代である（マタイ傳廿四の廿一・廿二、ゼバニヤ書一の十五―十八、ダニエル書十二の一、エレミヤ記三十の五―七、黙示録七の十四）。けれどもこの艱難の來る前、信ぜし聖徒は空中に携擧せられて、空中まで再臨し給ふキリストに會ふのである（テサロニケ前書四の十六・十七）。而して艱難時代の終に大なる榮光と權威を以てキリストは地上に再現し、生ける國民の審判をなし給ふのである（マタイ傳廿四の廿九・三十、廿五の三十一―四十六）。これにつきては別項『再臨』を見よ。7 王國時代 一名千年王國時代（基督の地上再臨より一千年間）。（一）第六時代の終の審判によつて、世は潔められ、主は聖徒と共に世を治め給ふ。即ち以色列人は立歸り、聖徒は以色列人に異邦人を治めるのである。而して政治の中心はエルサレムである（使徒行傳十五の十四―十七、イザヤ書二の一―四、黙示録十九の十一―廿一、二十の一―六、イザヤ書十一全體）。勿論その時偽預言者も偽基督は火の池に、サタンは縛せられて底なき穴に閉込められ、一切地上に働く事が出来ない。地は豊に産物を出し動物の性情までも變化する（別項『千年王國時代』参照）。これがこの時代の最初の状態である。（二）而して人間の責任はエホバを禮拜し、結茅節を守る事である（ゼカリヤ書十四の十六―十九）。（三）然るに千年時代中サタンに試られる事のなかつた彼らは、この時代の終に暫く釋放たれるサタンに試みられる時、前時代の如く惡に傾き、サタンは大將となつて、不信者と共に神に

向つて戦ふに至る（黙示録二十の七・八）。いつまでも弱く罪深きは人である。（四）そこで又神の審判は火を以て彼らの上に臨み、サタンは火の池に投込まれ、これに従ふものは焼盡される（黙示録廿の十）。（五）遂に最後の大審判が来り、世の始よりの死人はここに甦らされ、白き大なる寶座の前に於て審判かれ、死も陰府も罪人も火の池に投げ入れられる。而して生命の書に記されたものは新天新地に入るのである（黙示録廿の十一―十五）。（六）新天新地については黙示録二十一の十一―廿二の七に録されてをる。

聖徒

術語

舊約に於ては神聖なる以色列國の民である特権を表はす名で（サムエル前書一の九、詩篇十六の三、三十の四、三十七の廿八、五十の五、九十七の十、百十六の十五、百三十二の九、百四十九の九、ダニエル書七の十八）、新約にありては基督教會の會員たる特権をあらはす名である。聖徒はかく『神に選ばれて聖潔く』なつたる者で（コロサイ書三の十二、エペソ書一の四、コリント前書一の二、ロマ書一の七）その聖徒たる事は彼らが信徒としてキリストに對して有する關係によりて定められるのである（エペソ書一の二、コロサイ書一の二）。それ故その資格と情態は伴はずして、聖徒とは稱へられても、其實際に於て必ずしも無罪のものでない。罪を犯した者が死の行を悔改め、神に向ふ信仰によりて義とせられ、更生の經驗を得た者は、みな聖徒と稱はれてをるけれども、その心情が純潔であるとはいへない。されば使徒等は彼らが進んで聖潔の實驗を得、キリストの完全に至るべき事を勸告してをる（エペソ書四の十二、五の三、コロサイ書一の十二、ユダ書三等）。

聖靈

靈名

三二の神の第三の人格である。その性徳は父なる神、子なる神と同一で、異ふ所はないが、その職務に區別がある。1 舊約書に現はれてゐる聖靈（一）聖靈は人格を有する神で

あつて、（二）宇宙の創造に與り給ひし全能者（創世記一の二、ヨブ記廿六の十三、三十三の四、詩篇百四の三十）、在さざる所なき者（詩篇百三十九の七）、人々争ひ（創世記六の三）、人を照らし（ヨブ記三十二の八）、奇巧を與へ（出エジプト記廿八の三、三十一の三）、力を與へ（士師記十四の六・九）、智慧を爲し遂ぐる才能を與へ（士師記三の十、六の三十四、十一の廿九、十三の廿五）、黙示を與へ（民數紀十一の廿五、サムエル後書廿三の二）、又神の僕を強め給ふ者である（詩篇五十二の十二、ヨエル書二の廿八、ミカ書三の八、ゼカリヤ書四の六）。（三）聖靈は『きよき靈』（詩篇五十一の十一）、『恵ふかき聖靈』（詩篇百四十三の十）、『鞫する焼きつくす靈』（イザヤ書四の四）、『智慧・聰明の靈・謀略・才能の靈・智識の靈・エホバをおそるるの靈』（イザヤ書十一の二）、『恩恵と祈禱の靈』（ゼカリヤ書十二の十）なごみ稱はれてをる。（四）而して舊約時代に於ては、聖靈は求めないでも自ら人人の上に降り給うたやうである。（五）尙舊約書には將來に於て、聖靈が以色列の上に注がれる（エゼキエル書三十七の十四、三十九の廿九）、又「凡ての人、わが僕・婢」の上に注がれるこの約束が見えてをる（ヨエル書二の廿八・廿九）。2 新約聖書に現はれてをる聖靈（一）その神性なる人格者である事は、舊約書と同様である（ヨハネ傳十四の十六・十七・廿六、十五の廿六、十六の七―十五、マタイ傳廿八の十九）。（二）人が求めないでも、自ら人人の上に臨んでたまふけれど、これを父に祈り求めなければその人のものにならない。即ち常にこれを我がものとして有つてゐる事が出来ない。それ故イエスはこれを父に求めよと教へ給うたのである（ルカ傳十一の十三）。凡そ信者は聖靈を有ち（ロマ書八の九）、又滿されてをるべき筈である（使徒行傳二の四、四の廿九―三十一、エペソ書一の十二・十四、五の十八）。（三）聖靈はイエス・キリストの祈禱により、彼を通して來るものである（ヨハネ傳十四の

十六・十七、ヨハネ傳七の三十七―三十九、使徒行傳二の三十三、亦聖靈にみたされた人人の按手によつて降る事もある（使徒行傳八の十七、九の十七、テモテ後書一の六）。（四）聖靈は猶太人のみならず、信する異邦人の上にも降る者である（使徒行傳二の一―四、使徒行傳十の四十四、十一の十五・十八）。これを受くる爲には常に求むるのみならず、信じ（ガラテヤ書三の十四）、また従はなければならぬ（使徒行傳五の三十二）。（五）聖靈は信者の關係をいへば、（イ）聖靈が臨み給ふ時、彼は罪の自覺を與へ（ヨハネ傳十六の九）、キリストを信賴すべき救主として顯し（ヨハネ傳十六の十四）、信仰を與へ（エペソ書二の八）、再生を與へ給ふ（ヨハネ傳三の三―十六）。（ロ）又彼が信者の心に住み、信者とその殿をなし給ふ時（ロマ書八の九、コリント前書六の十九、ロマ書八の九―十五、ガラテヤ書四の六、コリント前書六の十九）、彼は我らに印して神の子たる事を證し、神の嗣業に與り得るものであるとの確信を與へ給ふ（ロマ書八の十五・十六、エペソ書一の十三・十四、四の三十）。而して肉慾に克つ力を與へ（ロマ書八の二―四、ガラテヤ書五の十六・十七）、信者の徳を建て（ガラテヤ書五の廿二・廿三）、信者の荏弱を助け（ロマ書八の廿六）、祈らせ（エペソ書六の十八）、喜んで神と交らせ給ふ（エペソ書二の十八、ガラテヤ書四の六）。又聖靈は聖書を以て信者を深め、聖別し（エペソ書五の廿六、テサロニケ後書二の十三、ペテロ前書一の二）、慰め、懇求し（使徒行傳九の三十一、ロマ書八の廿六）、キリストを顯し給ふ（ヨハネ傳十六の十四）。（ハ）聖靈が信者の上に降り給ふのは、キリストに奉仕するために要する能力を受けしめ（使徒行傳一の八、二の四、十の四十一）、賜物を盛にする爲である（コリント前書十二の一―十一、廿七―三十、十一の十二）。（六）キリストと聖靈との關係をいへば、彼は聖靈によりて孕り（マタイ傳一の十八―廿、ルカ傳一の三十五）、バプテスマを受け（マタイ傳三の十六）、

動作き（ルカ傳四の一・十四）、甦り（ロマ書八の十一）、またこの時代にも常に聖靈の證を受け給ふ（ヨハネ傳十五の廿六、十六の八―十一、十三・十四）。（七）聖靈は教會との關係をいへば、聖靈は教會を建て（マタイ傳十六の十八、ヘブル書十二の廿三）、信者が一つ靈によつてバプテスマを受け（コリント前書十二の十二・十三）、神に奉仕するやうに賜物を與へられ（コリント前書十二の七―十一、十七・三十）、彼によつて導かれる（ルカ傳二の廿七、四の一、使徒行傳十六の六・七）。（八）聖靈に對して犯す罪。（イ）未信者の犯す罪は、聖靈を漬す事（マタイ傳十二の三十一）、聖靈に逆ふ事（使徒行傳七の五十一）、侮る事（ヘブル書十の廿九）等で、（ロ）信者の犯す罪は、惡を離れず、聖靈を憂へしめ（エペソ書四の三十・三十一）、その指導に従はずして聖靈を熄す事（テサロニケ前書五の十九）である。（九）聖靈の儀表は「膏」（ヨハネ第一書二の廿七、ヘブル書一の九）、「水」（ヨハネ傳七の三十八・三十九）、「風」（使徒行傳二の二、ヨハネ傳三の八）、「火」（使徒行傳二の三）、「鳩」（マタイ傳三の十六）、「質」（エペソ書一の十三）、「印」（エペソ書一の十四、四の三十）。

ゼウス

【靈名】

【ギリシヤ語】日の尊父。ラテン語では「ジュピター」。ギリシヤ人の説によれば

ゼウスは開闢の昔天地を主宰した神で、諸神の首長であり、靈山オリンパスの絶巔に搖曳せる白雲の裡にあつて、常に下界を照覽し、また時には暴風の雲に駕つて、霹靂雷火を地上に投下し、大雨を降らしむる、神變不思議の神である。後年ローマ人はこれを生命光輝の神として尊崇するに及んで、ジュピターと稱んだ。鷹を以て使鳥となし、樅の樹の風に鳴るを以てその神託とした（使徒行傳十四の十二）。ルステラの邑人はゼウスをこの邑の特別の守護神として、市邑の門前に神殿を設け、これを祭祀つてゐたのである。

ゼウス

## ゼカリヤ

人名

(男)

【ヘブル語「エホバ臆ゆ」】

1 十二小預言者中の一人で、その祖父を

イドといひ、父をベレキヤといつたが(ゼカリヤ書一の一)、父ベレキヤが早世して、老祖父に養はれたので、猶太の系圖記載法により、イドの子と稱ばれてをる(エズラの書五の一、六の十四)。ネヘミヤ記を見るに、イドはゼルバベルと共に捕囚より歸還した一祭司の家族長で、彼はエシユアの時の祭司であつた(十二の四・七)。ゼカリヤも亦祭司等の宗家の長の一人であつたが、彼が宗家の長であつた時は、エシユアの子ヨアキムの時代であつた(ネヘミヤ記十二の十二・十六)。彼が預言を始めた時は、未だ年若き頃であつたが(ゼカリヤ書二の四)、普通は三十歳以上でなければ祭司の務をする事が出来ぬ程であつたから、少くとも三十歳以上であつたらうと思はれる。しかしそれは慥かにさうだ。斷言は出来ぬ。而してゼカリヤ等の歸還したのは、紀元前五百三十八年であつたらう。彼の預言はベルシヤ王ダリヨスの治世の第二年八月(紀元前五二〇年)、即ちハガイより二ヶ月遅く始り(ゼカリヤ書一の一)、第四年の七月(同五一八年)まで二ヶ年間繼續したもので(ゼカリヤ書七の一)、ゼカリヤ書の第九章以下は、彼の預言でない論ずる學者もある。しかし此部分もやはり神殿建築後に於ける彼の使命であるを見て、何等の差支もないのである。2 この預言者の外にゼカリヤといふ名を有する者が、聖書中に廿七人ある。その中七人はレビ人(歴代志上九の廿一、十五の十八、廿四の廿五、廿六の十一、歴代志下廿の十四、廿九の十三、三十四の十二)、四人は祭司(歴代志下三十五の八、ネヘミヤ記十一の十二、十二の十六(?)・三十五・四十一)、二人はエズラに倍にバビロンより還つた長等、その他の一人は祭司長エホヤダの子である(歴代志下廿四の廿)、尙ギレアデのマナセの有司イドの子(歴代志上廿七の廿)エベレキヤの子で、預言者イザヤが誠實なる證人とした人である(イザヤ書八の二)。

## ゼカリヤ書

書名

舊約書の十二小預言書中の一卷で、預言者ゼカリヤの預言である。當時猶

太人はクロス王の解放令によつて本國に歸り(紀元前五三八年)、エルサレムの神殿を建てようとしてゐたのであるが、中途にしてサマリヤ人の反對にあひ、種種の困難もあつて、歸國後十七年間を有邪無邪の中に經過し、紀元五百廿年に至るも、尙建築の運に<sup>はこび</sup>至らなかつたのであるが、ハガイミゼカリヤが神より遣はされて預言した結果、一同奮起して工事に當り、遂に五百十六年に至つて、神殿再築の工を竣へるに至つたのである。この兩預言書の日附により預言一覽表を作るに、次の如くなる

- (1)、ダリヨス王の二年(前紀五二〇年)六月一日 ハガイの第一預言(ハガイ書一の一―十一)  
 (2)、同年七月二十一日 ハガイの第二預言(ハガイ書二の一―九)  
 (3)、同年八月 ゼカリヤの第一の使命(ゼカリヤ書一の一―六)  
 (4)、同年九月廿四日 ハガイの第三預言(ハガイ書二の十一―十九)  
 (5)、同日 ハガイの第四預言(ハガイ書二の廿―廿三)  
 (6)、同年十一月廿四日 ゼカリヤの第二の使命(ゼカリヤ書一の七―六の終)  
 (7)、ダリヨス王の四年(前紀五一八年)九月四日 ゼカリヤの第三の使命(ゼカリヤ書七、八)。

かくの如く、兩預言者は力を合せて神殿建築の事業を遂ぐる爲に盡したのであるが、それと共に深く彼らに省みさせ、熱心なる悔改の勧告をなし(一の一―六)、與へられたる種種の異象を述べて、猶太人殊にその首領たるゼルバベルミヨシユアを奨励し(一の七―六の八)、ベテルの使者の質問に對し、外形的斷食や齋戒は無意味である事を告げて、道德的律法の實行を勧め(七)、メシヤの治世の光景を述べて彼らの希望を燃やしてをる(八)。而して第九章以下に於て、ギリシヤ、羅馬時代を始め、世の終に至る

までの預言をなして、後の世の我らをも教へ勵ましをる。要するに本書の使命は神がその民を熱愛し、その救のために最善を盡し給ふこいふにあつて、その論節は一の十四、二の八、八の二である。

第一部 神殿建築當時の預言 (二一八)

- 一、第一の使命—(緒言)—(一の一—六)
- 二、第二の使命—(八異象)—(一の七—六の終)
- 1、烏拈樹と騎士—(一の七—十七)
- イスラエルの現在の状態
- 2、四つの角と四人の鍛冶—(一の十八—廿一)
- イスラエルの敵の滅亡
- 3、量繩を手に執る人—(二)
- エルサレムの祝福
- 4、祭司の長ヨシユア—(三)
- 潔められたる祭司としての以色列
- 5、金の燈臺—(四)
- 理想に従へる以色列
- 6、飛ぶ巻物—(五の一—四)
- エホバの義しき政治
- 7、エバ樹—(五の五—十一)
- 惡の抑制
- 8、兵車—(六の一—八)
- エホバの審判全地に臨む

第二部 神殿建築以後の預言 (九一—四)

- 一、ハゲラクの地に關する重荷—(九一—十二)
- ギリシヤ及び羅馬時代
- 1、アレキサンダーの東方諸國征服に關する預言—(九の一—八)
- 2、メシヤ—イエス・キリスト—來る—(九の九—十三)
- 3、マカビースの救濟時代に關する預言—(九の十二—十の終)
- 4、メシヤの受難—(十一)
- 眞の牧者と偽の牧者の衝突—眞の牧者棄てられ、銀三十にて賣られ、十字架の上に宰らる
- 二、以色列に關する重荷—(十二—十四)
- 棄てられしメシヤ榮光の位に坐す
- 1、選民の最後の勝利—(十二の一—十三の六)
- イ、ユダ萬國を服す—(十二の一—六)
- ロ、ユダミイスラエル救はる—(十二の七—十三の六)
- 3、メシヤの最後の勝利—(十三の七—十四の終)
- イ、メシヤの受難—(十三の七—九)

- 三、歴史的挿話—(六の九—十五)
- メシヤ再臨の時の象徴
- 四、第三の使命—(七—八)
- 1、ペテルの使者の質問—(七の一—三)
- 2、四重の答辯—(七の四—八の終)

ロ、エホバの日—(十四の一—八)

艱難の時代、選民に向ふ最後の懲戒

ハ、最後の救—(十四の九—廿一)

ゼシヤク

地名

これはバビロンの別名で、この名は隠語である(エレミヤ記廿五の廿六、五十一の四十一)。(ヘブル語のいろはの最初の文字對最後の文字ミ云ふ風に組合すミバベルはシシクミなる。

ゼタデ

地名

【ヘブル語】傾斜の所】イスラエルの北の國境にあつた市邑である(民數紀三十四の八、エゼキエル書四十七の十五)。現今メゲル・アイウン・ミヘルモンとの間にあるクールベット・ゼラダであるこいふ。民數紀三十四の七十人譯はザラダクで、その發音が似通つてゐる。

攝理

術語

この語は造物主はその造り給うた萬物を保ち、またこれを治め給ふこいふこころを意味する。即ち神が始めに萬物を造り、その無限の智慧と能力と恩恵とによつて、最大なる物にも、最小なる物にも、各各にその形状と、その個有の性質を與へ、變る事なくこれを守り給ふ事と、また各各その性質に應じて相關係する事と、その相互の運動の道を治め給ふ事と、神はその攝理によつてその智慧と公義と恩恵と慈悲の榮光をあらはし給うた。而して聖書は始より終に至るまで、くはしくこの教義を教ふる書である(ヨブ記三十八の四十一、詩篇百の四、百四十五の十五・十六、百四十七の八・九、箴言十六の三十三、イザヤ書十四の廿六・廿七、マタイ傳十の廿九・三十、使徒傳行十七の廿四—廿九)。

ゼテキヤ

人名

(男) 【ヘブル語】エホバの義】ヨシユアの子エコニヤの叔父で、ユダ國最終

ゼシヤク　ゼタデ　セツリ　ゼテキヤ



の王である。その元の名をマツタニヤミいつたが、バビロン王がその名をゼデキヤミ改めて、ユダ國の王としたのである。これは紀元前五百九十七年のことであつて、彼は當時廿一歳であつた。この時以來彼は十一ヶ年間その國を治めたが（歴代志下三十六の十一）、その治世の第九年に至り、彼はバビロンに對して叛逆を企てたので、バビロン王はその軍勢を率ゐて、ユダの國へ攻め入り、その堅固の諸邑を攻め取り、終にゼデキヤ王治世の十一年に至り、進んでエルサレムを攻めてこれを陥れた。その際ゼデキヤ王とその一家のものは、悉く夜に乗じてエルサレムより遁れ走つたが、中途にして見あらはされ、エリコ近傍に於て敵の爲に擄りなつた。バビロン王は深くゼデキヤを惡み、その目前で彼の子等を殺し、又ゼデキヤ王の目を抉り（エレミヤ記五十二の十一、これを銅索につないで、バビロンへ携へて行つた。而して彼は遂にバビロンで死んだのである（列王紀下廿五の一―十一、歴代志下三十六の十二―廿、エレミヤ記三十二の四・五）。嘗てエゼキエルは彼の事を預言して「バビロンを見る事なし」といひ（エゼキエル書十二の三）、エレミヤは「汝の目はバビロン王の目を見るべし」といつたので（エレミヤ記三十四の三）、兩者の預言に矛盾があるから當にならぬ、僞であるといつて信ぜなかつたが、この事實の起つた時、兩者共に眞實を語つたのだと知つたのである。ヨセフアスは言つてをる。一見矛盾する如く見ゆる預言も、かく適確に成就する事は、實に嚴かなる思を我らに起さしめるではないか。

## ゼニル

地名

【アモリ人の語「雪山」】アモリ人がアンチレパノン山脈の北の部分、即ちヘルモン山を呼んだ名である（申命記三の九、歴代志上五の廿三、雅歌四の八、エゼキエル書廿七の五）。

## ゼバニヤ

人名

（男）【ヘブル語「エホバの秘せし者」即ち「守る者」】ゼバニヤは小預言者の一人で、その系圖はゼバニヤ書の一に記されてある。これによれば彼はヒゼキヤ四世の孫であるが、

ヒゼキヤといふ名は以色列の普通人の名でないから、多分ユダ第十三の王ヒゼキヤの事で、彼はマナセの兄弟の曾孫であらうと想像するものがある。この説を探るにすれば、彼の誕生は紀元前六百五十五年頃で、マナセ王がアツスリヤの捕囚より歸つて來た頃なるのである。さうして見るに彼は紀元前六百三十年頃來襲したスクテヤ蠻族の暴虐無人のおそろしき振舞を目撃したに相違ない。彼はこれを回想しつゝ、エホバの審判の日の近きを思ひ、偶像に事ふる不道德なる慣習を、神に對する疑惑の罪を責め、之に對するエホバの審判を預言したのであらう。その性格の著しき點は、彼が新約のヨハネの如く、雷の子で且つ愛の使徒であつた事である。ピーチャ―は彼の預言年代を六百三十六年としてをるが、恐らくはもすこし後で、ヨシユア王の治世の十二年より宗教改革までの間、即ち紀元前六百三十年乃至六百廿四年の間であらうと思ふ。尙別項「ゼバニヤ書」を見よ。

## ゼバニヤ書

書名

舊約書小預言書中の一卷で、預言者ゼバニヤの著である。ヒゼキヤの死後、その後を繼いだマナセ及びその子アモンは、共に墮落せる偶像崇拜者で、エルサレムは爲に汚穢な罪惡の巢窟となり、國內は宗教的にも社會的にも紊亂して、ヨシユア王治世の始にまで至つた。ヨシユアの治世中第一に最も顯著なるはその宗教改革で、即ち彼はその治世の第八年にエホバを求むる事を始め、その第十二年よりユダミエルサレムを潔める事を始め、第十八年までにエホバの家を始として、ユダの凡ての邑邑より偶像を除去した。次いで彼は神殿の復舊工事に取かかり、その工事中神殿中に律法の書が発見せられた結果、王の痛切なる懺悔となり、新契約の締結となり、逾越節の嚴守になつたが、本書の預言は王がユダミエルサレムを潔める事を始めたその治世の十二年より、第十八年の偶像を悉く除去去りしまでの間即ち紀元前六百三十年より六百廿四年までの間のものであらうと思はれる。

<p>第一部 罪惡とその刑罰 (一)</p> <p>一、罪惡とその刑罰 (一)</p> <p>1、審判の日近けり(二の二一七)</p> <p>2、審判の日に處刑せらるる三階級(一の八一十三)</p> <p>イ、牧伯と王宮にある者(八)</p> <p>ロ、不正の利を貪る商人(九一十一)</p> <p>ハ、宗教に冷淡なる者共(十二一十三)</p> <p>3、審判の日の光景(十四一十八)</p>	<p>第二部 悔改の勸告 (二の一一三の七)</p> <p>二、悔改の勸告(二の一一三の七)</p> <p>1、ユダに對する悔改の勸告(二の一一三)</p> <p>2、異教國の罪惡と刑罰の宣告(四一十五)</p> <p>イ、ペリシテ人に對して(四一七)</p> <p>ロ、モアブとアンモンに對して(八一十一)</p> <p>ハ、エテオピヤ人に對して(十二)</p> <p>ニ、アツスリヤ人に對して(十三一十五)</p> <p>3、エルサレムに在住する上流階級指導者階級の罪(三の一一七)</p>	<p>第三部 忠信なる少數者に對する祝福の約束 (三の八一廿)</p> <p>三、忠信なる少數者に對する祝福の約束(三の八一廿)</p> <p>1、大患難の後忠信なる遺殘者エルサレムに集められる事(三の九一十三)</p> <p>2、エルサレムは祝福の中心地となる(三の十四一廿)。</p>
--	---	--

**セブナ** **人名** (男) 【アラマイク語】若き ユダの王ヒゼキヤの書記官で、アツスリヤの將軍ラブシャケの許へ遣された使者の一人である(イザヤ書三十六の三、列王紀下十八の十八・三十七、十九の二)。彼は前にヒゼキヤ王の家老であつたが、イザヤの預言(イザヤ書廿二の十五一廿五)により

書記官に地位を下され、エリアキムが彼に代つたのである。彼は外國人であり、また成り上り者であつたが、エルサレムにある王達の墓地に自分の墓を造つたのであらうといはれてをる。

**セブルン** **人名** (男) 【ヘブル語】住所 以色列の先祖ヤコブが、その妻レアによつて生んだ所の、第六の男子で、以色列十二支派の一の先祖である(創世記三十の廿、三十五の廿三)。以色列人等がシナイの曠野に於て、その人口を調査した時、この支派には廿歳以上の男子が五萬七千四百人あつたが、カナンに入らんとする時には六萬五百人に増してをる(民數紀一の三十・三十一、廿六の廿七)。彼らに對するヤコブの預言は『セブルンは海邊にすみ舟の泊る海邊に住はん。その境はシドンにおよぶべし』であり(創世記四十九の十三)。モーセの祝福は『セブルンにつきては言ふ。セブルンよ汝は外に出でて快樂を得よ……海の中に盈てる物を得て食ひ沙の中に藏れたる物を得て食はん』(申命記三十三の十八・十九)であつたが、彼らがカナン入國後籤によつて産業地を定めた時、その預言や祝福の如く、彼らはヨルダン河ミガラヤの湖水を以てその東の境とし、カルメル山と地中海を以てその西の境界とした(ヨシユ記十九の十一十六)。イエスの時代にはガラヤラヤの中に含まれ、ナザレ、カナ、テベリヤ、カペナウン等はその境内の市邑であつた。又預言者ヨナはこの支派より出でた人である(列王紀下十四の廿五)。

**ゼベダイ** **人名** (男) 【ヘブル語】わが賜物 ガラヤラのベテサイダといふ邑の漁夫で、サロメといふ婦人の夫で、また使徒ヤコブ及びヨハネの父である。その二人の子等がイエスに従はうとして、その父である彼を離れ去つた時、彼は何の故障をもしなかつた(マタイ傳四の廿一・廿二、マルコ傳一の十九・廿)。その妻サロメは救主イエスに従つた婦人たちの中の一人であつた。彼女は聖母マリヤの

セブルン ゼベダイ

ゼボイム セボレテ セム セラ セラ セラビム

姉妹であつたさいはれてをる(ヨハネ傳十九の廿六参照)。

**ゼボイム** **地名** 【ヘブル語】**豺** 1 ソドムやゴモラと共に焼き滅された市邑である(創世記十の十九、十四の二・八、申命記廿九の廿三、ホセア書十一の八)。2 サムエル前書十三の十八に同名の邑がある。これはユダの東南方の曠野にあつた邑で、現今のワデイ・エル・ケルトであらうといふ。

**セボレテ** **雜語** 別項「シボレテ」を見よ。

**セム** **人名** (男) 【ヘブル語】**名** ノアの長子で、セムチツクの族の祖先である。かの大洪水の時方舟に乗つて、難を遁れたが、その時彼は九十八歳であつた。その後その父の酒に酔ひて醜體をあらはした時、彼はこれを見ず、これを蔽うた事によつて、その子孫に豊なる幸福を齎らした(創世記九の廿三・廿六・廿七)。彼は享年六百歳で死に、ヘブル人、エラム人、アシユル人、アルバクサデ人、ルデ人、アラム人等はその子孫である(創世記五の三十二、十の廿一—三十一)。宗教的天才がその裔から多く輩出した。

**セラ** **雜語** 【ヘブル語】**上げる** 詩篇中に七十一回記されてをる言である。これは詩を歌ふ時、その調子を高めるしるであらう。

**ゼラ** **人名** (男) 【ヘブル語】**太陽上る**、**生る** 1 エテオビヤの王である。彼は大軍を率ゐてユダに攻め入り、却つてユダの王アサの爲に打滅された(歴代志下十四の九)。2 この外ゼラミ稱する者が聖書中に三人ある(創世記三十六の十三、民數紀廿六の十三、歴代志上六の廿一)。

**セラビム** **靈名** 【ヘブル語】**高貴なる者**、**燃ゆる者** 蛇さいふ字に同一である所から、エ

ジプトのセルフで、神殿の入口を守つてをる蛇の表徴であるとする説もあるが、イザヤ書六の二一六にあるものは、その様な神話めいたものではなく一種の天使を指す事は明かである。

**ゼルバベル** **人名** (男) 【ヘブル語】**バビロンで生れしもの** タビデ王の血統で、シャルテルさいふ人の子である。ハガイ書にあるが(一の一)、歴代志上三の十九にはベダヤの子とあるから、シャルテルに子がなかつた所から養子となつて行つたものであらう。彼はバビロンから本國に還る事を許された猶太人の首領で、又猶太の方伯であつた(エズラ書二の二)。彼は本國に歸つて後、神殿の基礎を据ゑ、また遂にその建築を竣工した(ゼカリヤ書四の六—十)。

**ゼルヤ** **人名** (女) 【ヘブル語】**バルサム香** ダビデ王の姉妹で、ヨアブの母である(サムエル前書廿六の六、歴代志上二の十六)。

**ゼレデ** **地名** 【ヘブル語】**柳の叢** エドムとモアブの間を流れ、死海に注ぐ谷川である。

**ゼロテ** **黨派名** 【ギリシヤ語】**熱心黨** 猶太人の中で、ガリラヤのユダさいふ人が始めて起した政教派で、ユダがクレネオの第二戸籍調査の時(紀元六・七年)叛逆を企てて死んだ後は(使徒行傳五の三十五)、その子孫エリエゼルがこれを率ゐた。この派の人人は以色列の王たる者は神のみであるから、羅馬帝へ税を納めるのはよろしくないとの主義を唱へ、劍によつてメシヤ王國を來らせんとし、遂に羅馬帝に對して叛逆を企てたのであつたが、撃破られて處處に散亂し、強盜の如き者となつた。後には熱狂度に過ぎて嘗て羅馬のみならず、何人に對しても反對するに至つた。十二使徒の一人であるシモンはこの黨派の一人であつた(マタイ傳十の四、マルコ傳三の十八、舊譯に「カナンのシモン」にあるが、「カナン」はアラマイク語の「熱心」を意味する語であるから、改譯は「熱心黨の」にしたのである)。

ゼルバベル ゼルヤ ゼレテ ゼロテ

ゼロヘハデ ソアル

る。ルカが『ゼロテ』としたのは『熱心』のギリシヤ語が『ゼロテ』であるからである（ルカ傳六の十五、使徒行傳一の十三）但英譯にこれを『カナン人』としたのは誤譯である。

ゼロヘハデ

人名

（男）

【ヘブル語】神に清められた者、或は『長子』

マナセの子孫である。

彼は嗣子となるべき男子なく、五人の女を遺して死んだが、女等が父の遺産を要求したので、この時より男子の嗣子が無い時には女子をしてその産業を嗣がしむる法が定まつたけれどもかくして世嗣となつた女子は、他の支派の者と結婚する事を許されなかつたのである（民數紀廿六の廿三、廿七の一・七、三十六の二・六・十・十一、ヨシユア記十七の三、歴代志上七の十五）。

ソ

リ

人名

（男）

【古エジプト語】クロヌス（神）に捧げた者】

エジプト國の王で、イスラエル

王ホセヤも同時代の人である。ホセヤがアツスリヤ王に攻めほろぼされたのは、彼も同盟の約束を結んだからである（列王紀下十七の三一・六）。史家は彼をエジプトの第廿五王朝（エテオピヤ出の王）の最初の王であるシャバコであらうとしてをる。紀元前七百廿年にアラビヤに於てアツスリヤ王サルゴンが、ガザのハノンと其の聯盟者であるシビを敗北せしめた記録があるが、それにはシビはエジプト王パロの將軍であるとしてある。このシビが聖書のソであらうといひ、或はシビとシヤバコは同一人であつて、シビは彼が未だ王位に上らない前の名であらうとの説をなす者もある。

ソアル

地名

【ヘブル語】小さい】

ヨルダン河の谷にあつた元ベラといつた邑である（創世記十三の十、十四の二・八）。ソドム、ゴモラの諸邑が滅された時、ソアルはロトの願によつて残され、

かつその避所となつた（創世記十九の廿一・三十、申命記三十四の三、イザヤ書十五の五、エレミヤ記四十八の三十四）。ソアルの位置は明かでない。或人は死海の東岸で南に寄つた所にあるケラク川の岸邊にあつたものであらうといひ、或人は死海の西岸よりヘブロンに通ずる所のワデイ・ケウエーラの中にあつたらうとしてをる。

ゾアン

地名

【エジプト語】低き地方】ヘブル語では『移住』を意味するが、多分エジプト語で

あらう】ナイル河の東の支流の濱にあつた最古の堅固な邑で、その建てられたのはヘブロンよりも七年後であつた（民數紀十三の廿一）。モーセの時代にこの邑はエジプトの首府で、且つパロの住所であつたから、モーセが王に見えて談判をしたのはこの所であつた（詩篇七十八の十二・四十三、イザヤ書十九の十一・十三、三十の四）。ギリシヤ人はゾアンをタニスと稱んだ。二十一王朝はこのタニスから起つたのである。今はこれをエル・ハガルといひ、荒廢した地で、少數の漁夫が住んでをるに過ぎないが、その古跡中に種種の大なる古物が存つてをる。中にもラメセス二世が、その神殿に安置して置いた花崗石の彼の巨像は、高さ九十二呎あつたといふ。

素祭

礼典

以色列の民が幕屋及び神殿に於て献げた供へ物の一種で、格別に人の爲に生涯を送る事を表はすものである。人の眼の前に聖き生涯を送る事は、神に身を献けたものの當然なすべき事である。この献物は植物性のもののみで、即ち麥粉と油と乳香とで、それに鹽を加へるものである。その献物は壇に祭司に分割せられ、一部は壇の上に燻き、他の一部は祭司の食ふべき食物として、その前に差出さるのである（レビ記二）。尙別項『犠牲』及び『禮物』を見よ。

ソステネ

人名

（男）

【ギリシヤ語】國民を護る者】

1 コリントにあつた猶太人の會堂宰

ゾアン ソサイ ソステネ

で、前の會堂宰クリスポが基督者になつてその職を退いた後を襲うて宰になつた（使徒行傳十八の八）。而してパウロに甚く反對して猶太人を煽動し、ガリオの裁判所にパウロを引かせたのであつたが、ガリオはその訴を取上げず、ソステネはギリシヤ人等に打ちたたかれた（使徒行傳十八の十七）。  
 2 コリント前書一の一に同名の人があるが、これは前記のソステネか、或は他の人か明かでない。

・ソドム

地名

〔ヘブル語「燃ゆる」〕

往昔シデムの谷、死海の濱にあつた市邑であつたが、アブラハムの時代にその民は甚しき罪惡に溺れたので、神は天より火と硫黄を降して、これを焼きほろぼし給うた（創世記十の十九、十三の十一・十三、十八の十六・三十三、十九の一・廿九）。ソドムの位置

については死海の南方にあつたといふ人があり、又北方にあつた論する者もあつて、確定し難いが、死海の南方の浅い處をソドムの跡とする方が適當であらう。聖書中には處處にソドム、ゴモラの滅亡をさして、エホバの必ず罪惡に耽溺したものを罰し給ふ事を教へてをる（申命記廿九の廿三、イザヤ書一の九・十、三の九、十三の十九、エレミヤ記廿三の十四、四十九の十八、エゼキエル書十六の四十九・五十・アモス書四の十一、ゼバニヤ書二の九、マタイ傳十の十五、十一の廿三・廿四、ペテロ後書二の六・八、黙示録十一の八）。

供前のパン

物名

幕屋及び神殿中の聖所の金の案の上に常に供へられてあつた酵なきパンで、

その數は以色列の十二支派にちなみ、又一年中の月の數にしたがひて、十二個あつた。これを六個づつ二重に積み上げ、金の椀に入れた乳香をその上にすゑた。このパンは安息日毎に新しきものを以て古き物に代へ、且つその古きパンは、祭司のみが聖所に於て食ふべきもので、他の人の食ふまじきものである（出エジプト記廿五の三十、レビ記廿四の五・九、サムエル前書廿一の一・六、マタイ傳十二の三）。

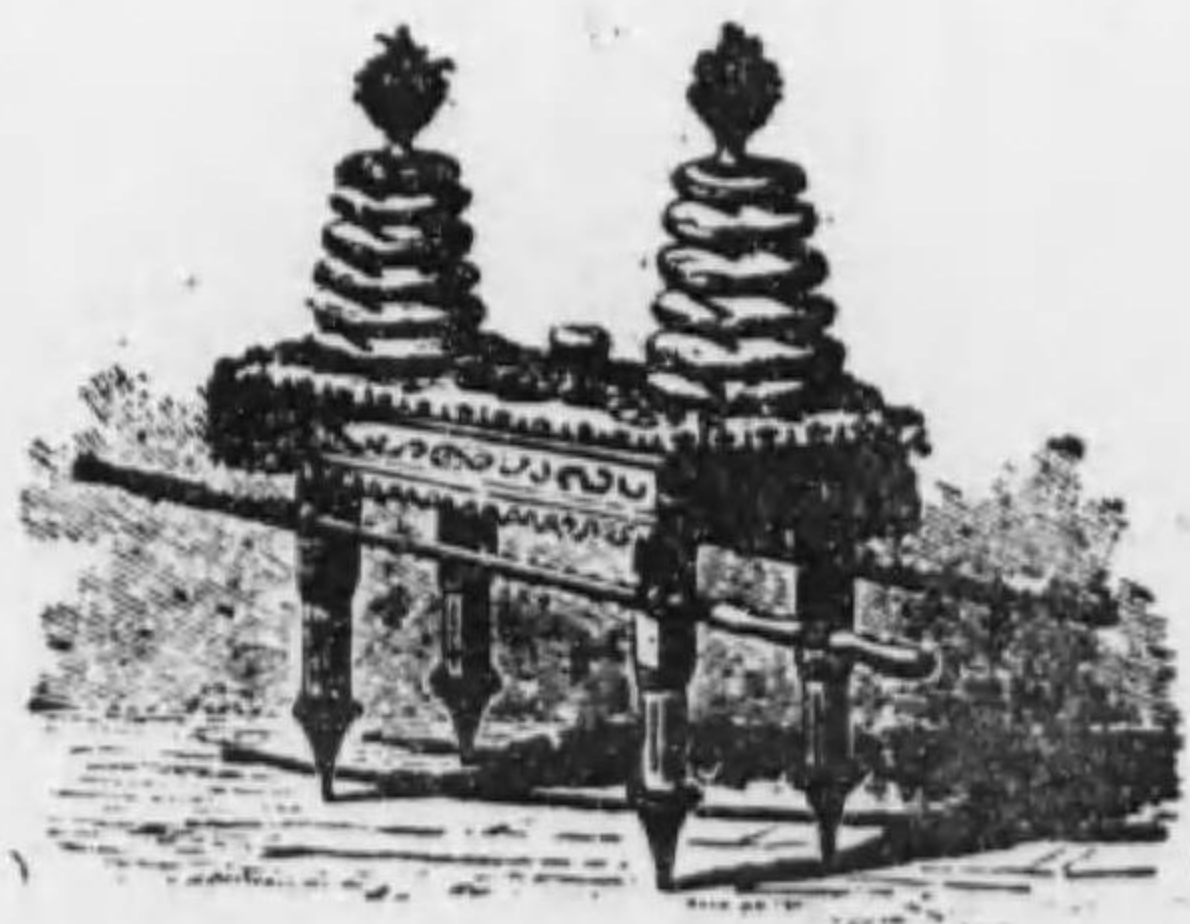
このパンの案は幕屋に於ては聖所の右の中央に置かれてあつたが、ソロモンの神殿に於ては尙十個を増つくり、その左右に置かれたのである（多分聖所の方に五個、入口の方に五個を置かれたであらう。別項『聖所』を見よ）。

禮物

禮典

イエス・キリストの世に來り給はない前、すなはち舊約時代には、以色列の民はさまざまの禮物を獻けて神を禮拜した。

その禮物に二種類があつた。それは血のある物と血のない物とである。血のある物は牛・羊・山羊・鶴・山鳩等の鳥獸で、血のない物はパン・油・葡萄酒・麥粉・蜜・鹽・及び果物等である。人間を供物とする事は嚴しく禁ぜられてあつた（レビ記十八の廿一、廿の二）。畜類の禮物に『燔祭』・『罪祭』・『酬恩祭』・『愆祭』の四種類があつた（各各別項を見よ）。これを獻けようとする人は、先づ家畜の中から全き疵なきものを取り、これを幕屋の門に携へ來り、手をその畜類の頭に按き、而して後これを屠り、祭司はその血を携へて祭壇の周圍にそそぎ、肉を壇の上で燔いた。これらの禮物を皆すべて火祭といひエホバが人の罪を贖はんために、自ら供へ給ふその羔なるイエス・キリストのこゝを、模して示し給うたのである（創世記廿二の八、ヨハネ傳一の廿九、エペソ書五の二、ヘブル書九の廿六）。又血なき禮物の中に『素祭』がある（別項『素祭』を見よ）。その他『搖祭』及び『擧祭』といふ禮物がある。これらは畜の禮物又は麥粉の菓子・煎餅なごより取る分で、これをエホバの前に左右に搖り、或はさしあげて獻げ、然る後これを祭司に渡して、



案のソパ

ゾバ ゾバル ソラ ソレク

その分こなす例であつた(出エジプト記廿九の廿六―廿八、レビ記七の十二―十四)。これらは感謝の禮物である。又『灌祭』といふ禮物がある。葡萄酒を以て素祭に加へ、火祭にそいで加へる事である。その注ぐ所の葡萄酒の量は、火祭の物によつて異なつてをる。その量は約六合より一升五合に至るといふ事である(民数紀十五の一―十二)。

ゾバ

地名

〔ヘブル語『住居』又は『平地』〕

スリヤの一部分で、ダマスコの東北に位し、レ

バノン山とユフラテ河との間にあつた國である。この國民は強くして、屢以色列の民に敵したが、ダビデ王は遂にこれを征服した(サムエル前書十四の四十七、サムエル後書八の三―八・十二、歴代志上十八の三―八、詩篇六十の序文、サムエル後書十の六―十三、歴代志上十九の六)。

ゾバル

人名

〔ヘブル語『粗い』〕

ヨブを訪問しようとして、彼の許へ来た三友人中の一人である。彼をナアマ人といふのは、エドムのナアマ族の家長であつたからであらう(ヨブ記二の十一、十一の廿、四十二の九)。

ゾラ

地名

〔ヘブル語『熊蜂』〕

ダンの産業地中であつた市邑で(ヨシユア記十九の四十二)、

有名な士師サムソンの故郷であり、又その葬られた處である(士師記十三の二・廿四、十六の三十一)。この邑は海面より千五百五十呎の高い山上にあつて、ソレクの谷(ワデイ・エス・スラル)の北側にある。エルサレムを距ること西方へ十三哩、ベテシメシを距る事二哩である。又ソレクの谷を越えて西南二三哩の處にテムナテといふ市邑があつた。ゾラは今スラミ稱ぶ。丘上にはムカム・ネビ・サムト(サムソンの墓)が跡を止めてをり、丘の上にはオリブの林があり、北には井戸がある。

ソレク

地名

〔ヘブル語『善き葡萄樹』〕

エルサレムを西へ距る十四哩許にあるベテシメシ

ゾラの近傍にあつた谷である。この所はサムソンの愛したデリラミ呼ぶ娼妓の住んでゐた處である(士師記十六の四)。地味が豊饒で、谷の傾斜面に善い葡萄が出来るからソレクミ稱ばれたのである。現今アラビヤでは高價な葡萄の種類をソレクミ稱んでをるが、これは小粒で紫色をなし、甘くて種子が少く、汁が赤いので名高い。

ソロモン

人名

(男)

〔ヘブル語『平和』〕

ダビデ王の子で、又その嗣子となり、齡廿一歳に

して以色列全國の王位に即き、紀元前千〇廿二年より九百八十二年まで、四十年間世を治めた王である。彼は即位の始ギベオンに於て神に燔祭を献けたが、神がその夜の夢にソロモンに顯れ、その求むる所を尋ね給うたに對し、彼は何物よりもエホバの民を治むる爲に智慧を求めたので、神はこれをよしとし、智慧に加へて富貴長壽を約し給うた(列王紀上三の四―十五)。その夢は事實となつて彼は世界に比類なき大智者となり(列王紀上四の廿九―三十四)、その領地は廣大にして、南は紅海より北はユフラテ河に至り、西は地中海より東はスリヤの砂漠に至るまでの全地を包有し、その面積は六萬方哩即ちカナンの殆んど十倍に達してゐた。又その歳入は夥多しく、その富は實に驚くべき巨額に上つてゐた(列王紀上十の十四―廿九)。當時エジプト國は既に全盛期を過ぎて革命の戦亂に忙はしく、國力疲弊して昔の如き勢なく、老朽せるカルデア帝國は既に倒れ、新進のアッスリヤ帝國は未だ代つて興らない際であつたので、更に外寇の憂もなく、眞に平和の時代であつた。この平和は以色列に發達し富貴を修養しを得しむる機會を與へ、舊約書中に異彩を放てる箴言、傳道の書、及びソロモンの雅歌はこの時代に作られたのである。ソロモンの爲した事業として最も注目すべきものは神殿及び宮殿の建築である(列王紀上六―七)。又多くの城邑を修築して、その國の邊境を警めた事(列王紀上九の十七―十九)、水道

ソロモン

タアナク

を作つてエルサレムの水利に便した事等である（傳道の書二の四一六）。外國との關係も亦廣大で、以色列の歴史中空前絶後の盛況を呈してゐた。即ちツロ（フェニキヤ）の王は父ダビデの時より親しき交があつて、この時代にはその交際が愈濃厚となり（列王紀上五の六一十、歴代志下二の三十四）、エジプトとは貿易・結婚等が行はれ（列王紀上三の一、十の廿八・廿九）、紅海の南端に位するアラビヤのシバの女王をはじめ、他の諸王との交易もあり（列王紀上十の一・十五）、又紅海の濱にあるエジプトンゲベルを経て、極東（多分印度）との交易が行はれた（列王紀上四の三十、九の廿六）。勿論ユフラテ河によつても、東の國國との交易が行はれたのであらう。西方は遠くタルシシ（スペイン）にまで及んだ（列王紀上十の廿二）。しかしソロモンは晩年に至り、外國より娶つた妻妾に誘はれて、偶像を拜し、且つ他の惡むべき罪を犯したので、遂に彼の死後以色列國の分裂を來すに至つた（王上十一の一十三）。だが幸にして王は再び神の道に立歸つたといはれてゐる。

タ

タアナク

地名

「ヘブル語『戰場』」元カナン人の市城であつたが（ヨシユア記十二の廿一）、ヨシユアがこれを取つて、イツサカルの支派の産業に屬せしめ更にこれをレビ人の市邑とした（ヨシユア記十七の十一一十八、廿一の廿五、士師記一の廿七）。現今は賤しき小邑となり、山の西傾斜面の壞れた跡の中に存つてゐて、テル・タアナクと稱んでゐる。メギド（今のテル・エル・ムテセリム）の東南四哩、エルサレムとは四十八哩の距離がある。この丘はヴァインナのセリン教授によつて發掘され、古代文化の好材料が多く發見された。これは恰もエジプトのテル・エル・アマルナに於けると同様の瓦に概形文

字をもつて書かれてある。

崇邱

術語

太古より山又は岡等の高所に祭壇を築いて、神を崇むる物を禮拜したのは、世人の習慣であつた。アブラハム、イサク、ヤコブは何所に宿ることも、そこに祭壇を築いてエホバを禮拜した（創世記十二の七・八、廿六の廿五、廿八の十八）。モーセもその様にした（出エジプト記十七の十・十五、民數記廿の廿五―廿八）。ヘブル人が始めてカナンの地へ入つた時、彼らはエホバの命令に従つてエバル山に祭壇を築いた（申命記廿七の五、ヨシユア記八の三十）。けれどもかのカナン人及びモアブ人の如く、崇邱に祭壇を築いて偶像に仕ふる惡風に染まぬ爲に、エホバはその撰び給ふ處の外には、宮又は祭壇を建つる事を堅く禁じ、他の祭壇を偶像をば悉く打ち毀つべき事を命じ給うた（申命記十二の二十一）。然るにヘブル人はエホバの誠命に全く従はずして、カナン人の偶像を、其崇邱を毀たず、却つてこれに事へたので、屢神の震怒を蒙つた。ソロモン王がエルサレムに神殿を建てた時までは、神の幕屋があつたにも拘はらず、士師の時代にも、又サウル王や、ダビデ王の世にも、崇邱に祭壇を築いて、エホバを祭つたのである。しかしエホバはソロモンの時代に至つて神殿を建てた時までは、彼らが崇邱に祭壇を築いてエホバを禮拜する事をば、不問に爲し給うたのである（歴代志下七の十二―十六）。ソロモン時代後に於ても崇邱は除かれずに残つてゐた。けれどもこれをエホバ禮拜の爲には用ゐなかつたやうである。唯イスラエルの王アハブの時、カルメン山にエリヤが破壊せられたエホバの壇を修理して、神に祈り、天よりの火を呼下した例外があるのみである（列王紀上十八の三十一―三十九）。

ダゴン

靈名

「ヘブル語『魚』」コンダーはアカデヤ語で『人魚』を意味するダガンであつて、アカデヤで禮拜した神であるといふ。しかし一般にはペリシテ人の間に拜せられてゐた神で、魚を意味

タカキトコロ ダゴン

するダクから来たので、ダゴンは魚の神に相違ないに信ぜられてをる。が、もつと道理らしいのはダガン(穂)といふ字から来た者で、農業の神で、豊饒の守護に當つてをる者であらうといふ説である(サムエル前書六の四・五)。そこから進化して戦争の神となり(歴代志上十の十)、それから國家神になつた。(サムエル前書五の八一六の十八)といふ學者もある。智慧の海の神を指すに解する人もある。それはバビロンの碑文にあるオアンネーヌといふその神像の、腰より上は人の貌で、下は魚の貌であるのは、智慧の海を表はすものであるといふのである。サムエル前書五の四の終に『體のみのこれり』とあるへブル語の原文は『ただダゴン(魚の部分)のみのこれり』とある。ヨシユア記十五の四十一に『ベテ・ダゴン』、ダゴンの家とある事は、ダゴン禮拜の行はれてゐた一證差である。



神ンゴダ

**助主**(改譯) **靈名** 聖靈の別名。別項『訓慰師』を見よ。  
**ダタン** **人名** 『へブル語』泉』ルベンの支派に屬したエリアブといふ人の子である。彼はモーセミアロンに叛きて、謀叛を企てたレビ人等に與して、非常に怖ろしい刑罰を受けた(民數紀十六、申命記十一の六、詩篇百六の十七)。

**駝鳥** **動物名** 駝鳥は荒野に住む鳥で、その名は駱駝に似てをる所から、かく名づけられたものであらう、長い頸、丈夫な足、それに砂の中にすわるすわり方まで似てゐる。體量は三十六貫目もあつて、

現存せる鳥類中の最大なるものである。その習性についてはヨブ記三十九の十三―十八に書かれてある。蕃殖期になるころ一つの雄が三四羽の雌をしたがへて群から離れる。産卵に先だつて雄は砂の中に大きな穴を掘る。わきにまごづいて見てをつた雌が、毎日それに一つづつ産卵する。巢の中の卵の数が十か十二になるまでは、そのままにしてをく。あとで砂をかける。晝は大方、強い日の熱にまかせて置くが、夜中には雄が主として冷えぬやうに卵をあたたためる。尤も穴の外にも幾つかの卵を産み放しにしておく。それは餌の少い沙漠の事にて、雛鳥の孵化した時の食になるのだといはれる。孵る卵は砂の中に隠れて見えす、孵らぬ卵の巢のほりに散在せるより、産みすてるに稱せられたのであらう。哀歌四の三にも『荒野の駝鳥の如く子をはぐくまぬ』といふ句がある。しかし駝鳥は子をかまはぬのでも、敵を防がぬでもない。『神これに知慧を授けず、さきりを與へざるが故なり』とあるが、アラビヤ人は、今も駝鳥を愚かだといつてをる。石や、金屬だの、消化し得べくもあらぬ物をも食するもの、この鳥のおろかさの数へられてをる。これは駝鳥が硬き物を嚙み下して、食物の消化を知らぬからである。翼短かくて空を飛び得ぬこの鳥も脚力の健かなるには驚かされる。一時間には二十六哩走るともいはれる。汽車ほどの速さである。又この鳥は夜物すぎき聲をして鳴く。その聲は遠くまで聞えわたる。獅子の聲にまがふといふ人もあり、野の牛の聲に聞く人もある(ヨブ記三十の廿八・廿九、ミカ書一の八)聖書には駝鳥をいまはしきものに數へてをる(レビ記十一の十六、申命記十四の十五)。

**龍** **動物名** 原書にタンニンとあるのは蛇又は河海にある大魚の事であるが、和譯にはこれを龍とした場合が屢ある(詩篇七十四の十三、百四十八の七、エレミヤ記五十一の三十四)。默示録十二の三七・九・十三―十七等にある龍は惡魔の事である。



**タデモル** **地名** 「アラム語『棕櫚の樹』」スリヤ國の最も豊かな泉のある地に建てられた市邑で（列王紀上九の十七・十八、歴代志下八の四）、ダマスコを去る事東北方へ百二十哩、ユフラテ河を距ること六十哩の處にあつた。ギリシヤ人やローマ人はこれをバルメラミ稱んでゐた。インド、ベルシヤ等よりスリヤ、アラビヤ及びエジプトの諸國へ輸入する所の貨物は、みなこの市邑を経たので、甚だ繁華な富んだ市邑となつた。今は少數のアラビヤの農夫が小屋に住んでゐるのみである。但太陽神の大きな神殿の遺跡があつて、六十本ばかりの柱が立つたまま遺つてをる。西南の谷にある墓場には、數階の大きな塔がある。而してこの市邑の周圍が十哩位あつた事は、遺つてをる城壁によつて窺ふ事が出来る。

**譬喩**

**雜語**

譬喩はこれによつて神の國の靈の救を得しむる爲に語られたもので、これを用ゐて眞理を示さんとする假像は、嚴密に實在に合ひ、各の物はその性に從ひて活動し、各の活動は確にあり得べき活動でなければならぬ。之は（一）心靈界を本領とし、萬有の定則を破らざる點に於て物語り異なる。傳説と違つてをる。（二）また外部の事柄とその中に隠された意義と混同せずして、二者の別が判然たる點に於て傳説と異なつてをり、（三）第三に諺よりも稍詳かにして、如何なる場合にも他に比較する者を有する點に於て諺と異なる。於て諺に於て、寓言と異なる。之を比べて、内外の別が常に判然し、一方の特性と關係が、他の一方に移らない點に於て、寓言と異なる。之を比べてをる。監督トレンチは述べてをる。イエスの語り給ひし譬喩は實にかかる譬喩であつた。その數少くも三十、その一つ一つが實に尊い教訓である。ゴデーはこれを分類してその中六個は天國の準備、六個は教會の形を取つて實現せらるる者、十八個は會員の個人的生活に關するものとしてをる。

**ダニエル**

**人名**

（男）「ヘブル語『神は我が審判者』」聖書中にダニエルと稱する人が三人ある

1 ダニエル書の著者であるダニエルは、ユダヤの貴族の出で、紀元前六百五年、多分彼が十四五歳の頃、ネブカデネザルの爲にバビロンに捕囚となつて行つた（ダニエル書一の三）。彼はその身分・容貌・智能等の最も優れた他の三少年と共に、召し出されて、バビロン王宮に於て特殊の教育を受け（ダニエル書一の三―七）、十七八歳の頃、バビロン王ネブカデネザルの夢を判斷して著名になり、登用されてバビロンの總督となり（ダニエル書二の四十八）、爾來カルデヤ、メデヤ、及びベルシヤの各王朝に仕へて、最も高き官位を保つた（ダニエル書六の三、廿八）、彼は一個人としては最も敬虔な、そして政治家としては舊約書中最も卓越した者の中の一人であつた。2 ダビデの子（歴代志上三の一）。3 イタマルの子で、バビロン捕囚より歸つたもの（エズラ書三の二、ネヘミヤ記十の六）。

**ダニエル書**

**書名**

舊約書中大預言書中の一卷であるが、ヘブルの聖書に於ては聖文學の中に入つてをる。方今これを『ハガタ』の一例と認むるものが多い。『ハガタ』とは元來歴代志的事實に基いてはをるが、教育建徳の目的を以て、極めて自由にこれを布意改作した宗教的記事をいふのである。而して本書を以てバビロニアの歴史中に現はれた事實を取つて、以色列の神が攝理を以て世の事件を統御し給ふ狀を示し、己が智慧の善しを見たまふ所に從ひ、國王の心さへこれを處理し變化せしめ給ふ事、及び己が忠實なる僕を保護して、危険を免れしめ、或は苦楚に報いるに名譽を以て給ふ事に就ての道を示さうとして著されたもので、歴史の事實を取つて、記者のこの目的を現はすに恰適するが如く、これを應用したのであるとしてをる。そして本書の著者はダニエルではなく、紀元前百六十八年アンチオカスが大迫害をはじめてから、百五十三年にスリヤミユダの休戰條約の成るまでの間、多分百六十四年頃、マカビウス時代の勇者殉教者をその塗炭の苦楚中に鼓舞獎勵せんとの目的をもつて、無名の一聖

**ダニエル書**

徒の著したものでらうと論じてをる。尙論者は本書二の四一七の廿八までがアラマイク語で書かれてをる事、樂器の名にギリシヤの物がある事等によつても本書を後代のものとしてをる。しかしながらこれをダニエルの著でなく、假作物語とす事は大なる誤であらう。これに就て佛國第一流の東洋學者にしてアッシリヤ史エジプト史の權威たるルノーモンは言つてをる。『獨逸派の學者がダニエル書はダニエルの作でないといふのは速断である。ダニエル書の記事はバビロン時代の歴史に符合が多いから、これをその時代の作とするは、東洋學上最も妥當なる見解である』と。彼は神學者ではなく、宗教に冷淡なる科學者でありながら、この言をなしてをる。第二章に於ける火中の三聖徒の物語、第四章に於けるネブカデネザルの狂態、第五章に於けるベルテシヤザルの事蹟、第六章に於ける獅子の穴にありしダニエルの記事等は、近代に於ける實驗心理學、精神病學、考古學、動物心理學等によつても解決する事が出来る(信仰によつて解決し得る事は勿論である)。又アラマイク語の用ゐられてをる事についても、これが紀元前八世紀より用ゐられ、バビロン時代に於て盛に用ゐられてきた事はスリヤ、バビロン、エジプト、アラビヤ等で發見せられたアラマイク語の銘によつて知り得らるる。ギリシヤの樂器の名が書かれてをる事は、當時に於てもギリシヤと交通のあつた事であるから問題にはならぬ。而してダニエルが第二章乃至第七章をアラマイク語で書き、第八章以下をヘブル語で記した事は、一は世界歴史並にその權力の繪畫を一般的に見たものであつて、異邦人と猶太人との區別に關係がなかつたので、當時の世界の共通語であつたアラマイク語を用ゐる、第八章以下は特に猶太人の運命に大關係を有するものであるからヘブル語を用ゐて書いたのである。一は政治家の立場から、他は心靈的預言者の立場から書いたもので、自ら文體に相違があるわけであるを解説する學者もある。

第一部 歴史的部分(一一一六)

- ネアカデネザル、ベルシヤザル、ダリヨスの三王に仕へて宰相たりしダニエルの手記
- 一、ダニエル及び三少年の節操 (一)
- 二、ネアカデネザル王の夢 (二)
- 1、王の夢と知者の無能 (一一一十三)
- 2、ダニエルの解明 (一四一十九)
- 「金の頭」はバビロン帝國、銀の胸と兩腕はメデヤとペルシヤの聯合帝國、銅の腹はギリシヤ帝國、「鐵の腰」は羅馬帝國(歴の二本あるは東西羅馬即ちコンスタンチノーブルとローマを指す)

第二部 預言的部分(七一十二)

- 一、四匹の獸の異象 (七)
- 1、「第一の獸」獅子はバビロン帝國(四)
- 2、「第二の獸」熊はメデヤとペルシヤの聯合帝國 (五)
- 3、「第三の獸」豹はギリシヤ帝國(六)
- 4、「第四の獸」怪獸は羅馬帝國(七)
- 5、「十の角」は將來羅馬の跡に興る多くの帝國 (七)
- 6、「小さき角」は將來現れ来る反キリスト (八)
- 7、「日の老いたる者」の審判はキリストの再臨と神國の建設(九一十四)
- 二、牡羊と牡山羊の異象 (八)
- 1、「牡羊」はメデヤとペルシヤの聯合帝國(他國に對しては熊の如く、ユダヤ人に對しては溫柔
- 四、大なる默示 (十一十二)
- 1、大なる示現と緒言 (十一)
- イ、異象を見るまで (一一五)
- ロ、人の子の異象 (五・六)
- ハ、示現を見たる結果(七・九)
- ニ、天使の職掌とその行爲の記録 (十一廿一)
- 3、默示の内容 大戦争 (十一)
- イ、ペルシヤに於ける諸王と國の衰運(一一二)「三人の王」はカンビセス三世(前紀五二九一五二二)と、僭王スメルザス(前紀五二二)と、ダリヨス第一世(前紀五一四一四五)で、「第四の者」はクセクルセス第一世(前紀四八五一四六四)であらう。
- ロ、ギリシヤ帝國とその分邦 (三一三十五)「一個の強き王」(三)はアレキサンダー

(一)「鐵と土の脚と十本の指」は羅馬帝國の跡に興る多くの帝國(鐵と土とは君主主義と民主主義を指す)。「人手によらずして出づる石」とはキリスト再臨と神の國を指す。

三、火の試練と三少年の誠信(三)

四、ネブカデネザル王の詔勅(四)

一、王の見たる大木の夢とダニエルの説明(一一―廿七)

二、王の懲罰と悔改(廿八―三十七)

五、ベルシヤサル王の酒宴とバビロンの滅亡(四五)

六、ダニエル獅子の害より免る(六)

なる羊の如くであつた)

三、「牡山羊」はギリシヤ帝國

「一の角」(五)はアレキサンダー大帝。「四つの角」(八)はアレキサンダー大帝の四將軍。「一の小き角」(九)はアンチオカス・エピファネス(彼は來るべき反キリストの型)。基督の地上再臨前に來る艱難時代(九―十四)

三、七十週(九)

一、ダニエルの祈禱(一一―廿三)

二、七十週の預言(廿四―廿七)

「七週」アルタシヤスタ王の廿年(前紀四四五)よりエルサレム再建まで四十九年間。

「六十二週」エルサレムの再建よりイエスの王としてのエルサレム入城まで四百三十四年間。

(六十二週と最後の二週の間)に現今の福音時代が挿入される)

「二週」(廿七)艱難時代、反キリストの活動。

大王、「天の四方に分れん」

(四)は同王の死後に於ける帝國の分裂、「南の王」はエジプトの王、「北の王」はスリヤの王。兩王の戦は艱難時代の大戰争の型。

ハ、艱難時代に於ける反キリストの活動(三六―四十五)

三、封じられたる終末の黙示(結尾(十二))

(イ)大艱難時代に於ける猶太人の救拯(一)。(ロ)末の日に於ける復活(二)。(ハ)傳道者の報償(三)。(ニ)黙示を封ずべき命令(四の上)。(ホ)末の世に於ける物質的進歩―交通機關の整備―智識の發達。(ヘ)奇跡の終る時期についての問答(五―九)。(ト)末の世に於ける宗教的狀態(十)。(チ)幸福の時代に入る時期(十一―十二)。

除禱節 ダニエル書 別項『過越の祭』を見よ。

タビタ 人名

居つた女の信者で、その善事と施濟により、人人に愛せられたが、彼女が病んで死んだ時、使徒ペテロの祈禱によつて、不思議にも死よりいきかへされた(使徒行傳九の三十六―四十)。

ダビデ 人名

で、以色列の有名な王である。彼はベツレヘムに生れ、長じて父の羊を牧つてゐたが、凡そ十五歳の頃、サムエルは彼に膏を注いで、將來王となるべき者である事を現はした(サムエル前書十六の一・十二・十三)。しかし彼がユダの王位についたのはそれより約十五年の後で、それまでにサウル王に追はれて、或時はユダの曠野に、或時はモアブに、或時はペリシテに、その居所を變ふる事十六回、幾多の辛酸を嘗むる内、次第に地盤を堅め、サウル王がギルボア山に戦死した後、遂に紀元前千六十六年ヘブロンに於てユダの王位に上り、後七年六月月を経てイスラエルを合せ、エルサレムに於て以色列全國の王となつた(サムエル後書五の一―五)。ダビデはついでペリシテ人、モアブ人、スリヤ人、エドム人、アモリ人等と戦つてこれを征服し(サムエル後書八)、大にその領地を廣めて、レバノン山よりエジプトに至り、又ユフラテ河より地中海に至る一大帝國をなし、建國以來未だ曾てあらざる所の昌盛なる状態となつた。然るにダビデ王は誤つて大なる罪を犯し、これが爲に大なる恥辱と不幸をその一家の中に以色列國民の中へ來した。就中その最も哀むべき事は、アムノンのタマルを辱めた事、アブサロムの謀叛及びその死である。老年に及んでその位をその子ソロモンに譲り、又彼に神殿建築の設計及び之が爲に募集した金銀財寶を委ね、又民の長たる人人に暇を告げ、後安然に眠に就き、ダビデの城に葬られた(列

タナイレヌバンノイハヒ タビタ ダビデ

タベラ タボル

王紀上二の十。時に紀元前千十三年で、享年七十歳であつた。舊約書中の詩篇は重にダビデの作で、その思想高尚優美にして、敬虔の念がその中に充滿してをる。その中にはキリストに關はるいこ深奥なる預言がある。これによつてダビデの性質信仰を窺ふことが出来る。尙ダビデはキリストの模で、彼が以色列を治めた事は、ダビデの子であるイエス・キリストが靈なる以色列を永遠に治め給ふ事の模である(マタイ傳一の一、九の廿七、十二の廿三)。

タベラ

地名

【ヘブル語】燃ゆる

以色列の民がシナイを出發した後の最初の停足場で、彼ら

はシナイ出發後休息所を得ずして進行する事三日、時は五月の中旬で、暑熱と疲勞が甚しく、飲料水の乏しきと、家畜に要する糧秣の少きと、又見渡す限り休息すべき所もない爲に、啞いてエホバの御怒を招き、火が燃え出でて彼らの營を焼いたところである。ここは多分シナイの東北二十五哩乃至三十哩の處にある現今のワデイ・エス・サアルであらう。この地は又ここに行はれた他の事件により、キプロテ・ハツタワも稱された。別項『キプロテ・ハツタワ』を見よ。

タボル

地名

【ヘブル語】高き

エストラエロンの平原の北方、ナザレの東七哩にある、ゼブ

ルンミナフタリの界にあたる名高い山で(ヨシユア記十九の廿二)、その高さは地中海面より二千〇十八呎、麓より千〇五十三呎ある。恰も婦人の乳房に似た圓錐状の山で、山腹には樹木茂り、山嶺よりは廣く四方を見渡す事を得、バレスチナ中眺望最も美なる所である。エレミヤ記四十六の十八には『山山の王者』として記されてをる。これはデボラの古戦場で(士師記四の六一―五五)、又ギデオンの子の殺されたところである(同八の十八・十九)。ホセア書五の一に「タボルに張れる網」にあらは、そこが獵に名高いところであるのみならず、ここに偶像が安置された事であるに説くものもある。申命記三十三



山  
ル  
ボ  
タ

の十八・十九をここに聖所が建てられる預言である。見る學者もある。現今はエル・トルミいひ、アラビヤ人はエベル・エト・トウル（山の山）ミいふ。橡・テレピン樹が生ひ茂つて北の谷にまで及び、フランシスカン派並にギリシヤ派の僧院が建てられてをる。尙この山をキリストの變貌山だとする説は紀元三世紀頃より行はれた古い説であるけれども、これは間違で、變貌山は聖書によればピリポ・カイザリヤに近きヘルモン山であるやうに思はれる。

**靈魂**

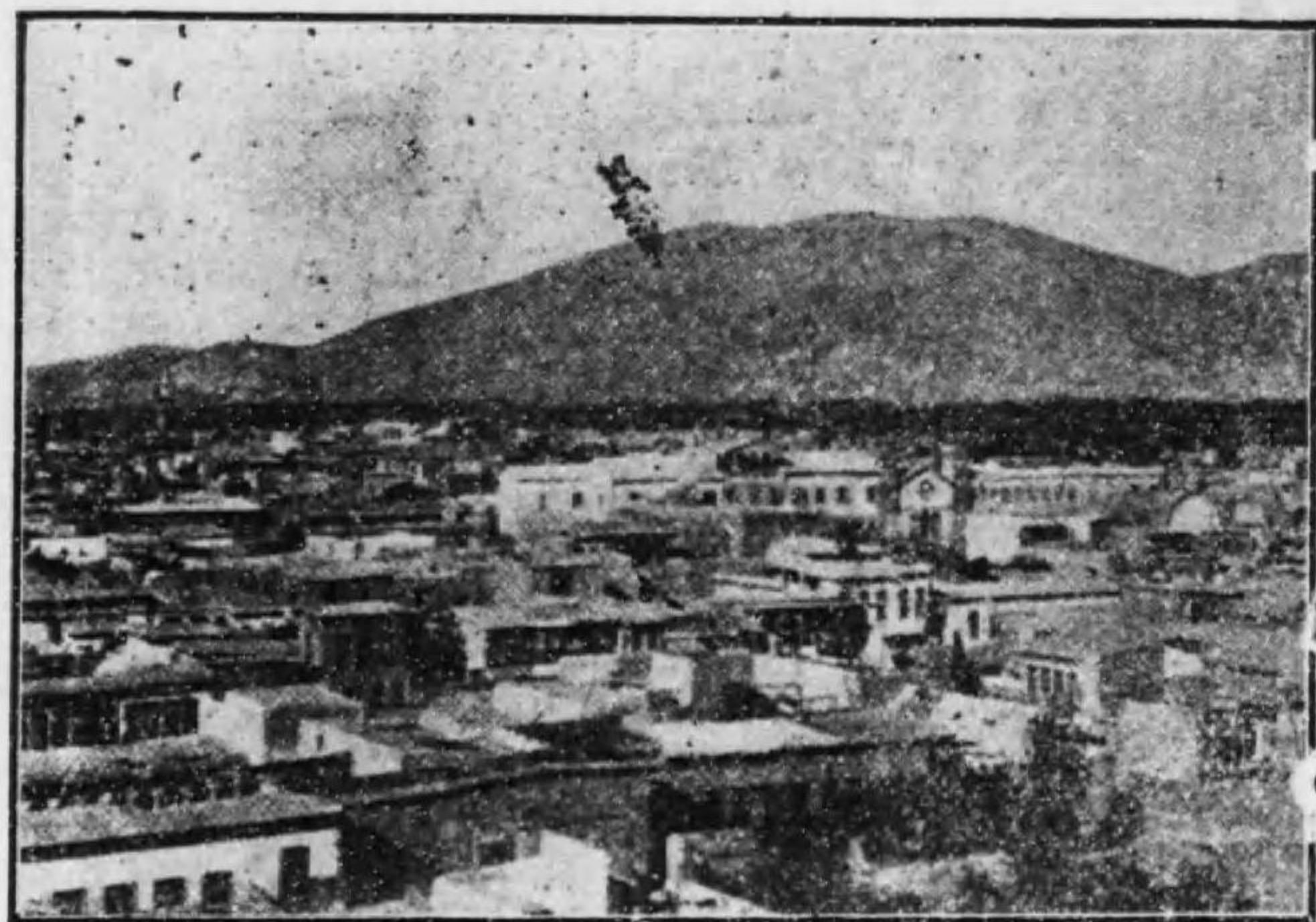
**術語**

これは物質ではなく、靈質に屬するもので、生命又は智慧・知識・情慾等の本源である。人類は肉體と靈魂との二者より成立つもので、その肉體は朽ち、死に、又は壞れるものであるけれども、靈魂は朽ちず、死なず、永遠に生くる者である。肉體は靈魂の鞘、またその住所で、靈魂をしてこの物質世界に關係せしむるに適當な器械の如きものである。創世記一の廿七に神がその像の如くに人を造り給うたことあるのは、普通に人の靈魂を指していはれた語である。信ぜられてをる。（此語を靈魂のみならず、人の肉體も神の像に似せて造り給うたのである。見る學者もある。別項「神の像」を見よ。）

**タマスコ**

**地名**

【アラム語「メセクの所有」アカデヤ語「緑の邑」】スリヤの國の首府で、世界中の最も古き都會である。エルサレムを距る事百三十三哩、レバノン山の東麓に砂漠の間にある長さ三十哩幅十五哩海拔二千二百六十呎の高原中に建つてをる。この高原は昔アバナミバルミ名づけ、今はバラダミアワアジ、稱ばれてをる兩河の、多くの支流に潤はされてをる水利よき豊饒な地である。旅行者はみな前記の二流の清冽にして深く緩かた氣持よき流である事を述べてをる（列王紀下五の十二）。その風景は美しく、回教徒はこれを地上の樂園と稱んでをる。果樹の多かつた事は、枯れたのや切り取つた枝で、その町に要する薪に充分であつた程であるといはれてをる。ヨセファスの歴史によれば、こ



の都府はセムの子ウズの建てた所である。聖書によればアブラハムはハラシを出発してカナンに入る途次、この地を通過し、後ロトを助くる爲にこの地の附近まで東方諸國の王を追撃した創世記十五の二、十四の十五。ユダの王ダビデは千〇四十年頃に、イスラエル王ヤラベアムは八百二十年頃に、この地を占領した(サムエル後書八の五・六、列王紀下十四の廿八)。又紀元前七百三十二年にはアッスリヤ王はこの都市を取り(アモス書一の三・五、イザヤ書十七の一・三)、その民をアッスリヤのキルへ移した。これより以後紀元前三百三十三年まではアッスリヤ及びベルシヤに屬し、後またギリシヤに屬し、紀元前六十二年羅馬帝國の所領となつた。紀元六百四十三年以來回教徒の手に歸し、トルコの所領となり、後十字軍の時一時キリスト教徒の手に歸したが、再び回教徒に奪回され、歐洲大戰の時までトルコに屬してゐたが、大正七年十月英軍の手に占領せられ、現今その支配の下にある。人口は十五萬乃至廿萬人あつて、木細工、家具、美術金細工、織物等を産出してをる(アモス書三の十一、エゼキエル書廿七の十六)。新約時代には多くの猶太人がこの地に住んでゐた(使徒行傳九の二、コリント後書十一の三

十二)、タルソのサウロが迎へられたユダの家のあつた「直いふ街」は現今デルブ・エル・ムスタキムと稱ばれ、邑の東の門(バベシユ・シエルキ)から西へ一直線に走つてをり、圓柱がすたつ立ち並んでをる(使徒行傳九の十一)。アナニヤの家といはれてをる所は、横街の北に當つてあつて、小さいラテン派の會堂が建つてゐる(使徒行傳九の十以下)。又パウロが逃れた壁上の家だとい稱ばれてをるものもある(コリント後書十一の三十三)。現今の市は東西一哩南北約半哩あつて、市外一哩ばかりのところに「神の門」といふ靈場がある。尙サウロが復活のキリストを視たところはダマスコより五哩を隔てたエルサレムより通ずる道の、パニアスミケフルハウルより來る道の交叉點であるとい傳へられてをる。現今鐵道はダマスコよりハイファア、ペーラウト、メゼリブに通じてをる。メツカへの線は千九百一年に起工し、千九百十年に竣工した。

**ダマリ** **人名** (女) 【ギリシヤ語『若き牝牛』】使徒パウロがアテネでキリストの道を宣べ

た時、その教を受けて信者となつた婦人である(使徒行傳十七の三十四)。

**タマル** **地名** 【ヘブル語『棕櫚の樹』】 1 死海の東南にあつた地で、エゼキエルの理想的王國の境界である(エゼキエル書四十七の十九、四十八の廿八)。 2 列王紀上九の十八のタデモルは『ケレ』に從つたもので、『キツトブ』にはタマルとなつてをる。これは南ユダにあつた邑で、『野にあるタマル』として知られてゐた。これは南スリヤにあつたバルミラの邑とは別である。

**タマル** **人名** (女) 【ヘブル語『棕櫚の樹』】 1 ヤコブの子ユダの長子エルの妻であつたが、その夫エルの死んだ後、猶太人の習慣に從つて、ユダの次男オルナンを妻となつたが、オルナンも亦死んだので、三男セラの妻となるべき筈であつたが(申命記廿五の五)、ユダがこれを拒んだので、タマル

はその子なきを恥ぢ、密かにユダを欺き誘うて、彼によつてバレズミザラの双子を得た(創世記三十八)。このバレズはダビデの先祖で、またイエスの祖先である(ルツ記四の十二・廿二、マタイ傳一の三)。

**洗盤**

【物名】

幕屋の庭及び神殿の祭司の庭に備へ付けられた物。

1 幕屋で用ゐたものに就て

は出エジプト記三十の十八―廿一、同四十の三十一―三十二にその位置、目的、用法等が示されてをり、之を『集會の幕屋の門にて役事をなすころの婦人の鏡をもて作れり』と出エジプト記三十八の八にある。2 神殿で用ゐた洗盤は十個あつた。而してこれらは銅製の臺の上に据ゑられて、神殿の左右の庭に置かれてあつた。一つの臺の大きさは長さ幅各六尺、高さ四尺五寸、種種の美はしい彫刻が施され、邊に鏡板がついてゐた。洗盤はその一つに四十パテ即ち約六石の水を入れ得るものであつたのである(列王紀上七の廿七―三十九上半)。

**タラント**

【雜語】

猶太の金屬を量る目方、別項『度量衡(聖書の)』を見よ。

**ダリク**

【雜語】

「ベルシャ語『王の弓』」

ベルシャの金貨で、表には王の肖像があり、裏には弓の

形があつた所から、この名が出たらしい。或書には表面には弓と鎗を携へた王の肖像があつたとも記されてをる。別項『金錢』を見よ。尚「歴代志上廿九の七は目方を意味するらしい。それはダビデの時代にはベルシャの金は使用せられなかつたから」と説く學者もあるが、多くの人人の信する如く、この書をエズラの編纂したものとするれば、そこにベルシャの貨幣の名が挿入せられてあつたとしても、それはあまり問題にならぬ。

**ダリヨス**

【人名】

(男)「ベルシャ語『偉業者』(これはヘロドトスの説明である)」。1 メデヤ人ダリヨス(ダニエル書五の三十一―六の廿七)。バビロン王ベルシャザルを滅し(前紀五三九)、その國

を取りて王位に上つた人で、ダニエルを獅子の穴に投じた王である。普通歴史に知られた限のダリヨスといふ王の中には、ダニエル書の記事に符號する者がまだ見當らない。多くの註解者はベルシャの大將ゴブリヤスであらうといつてをる。古記録によれば彼はクロスの代表としてタンムヅ(六月)の十六日にバビロンに入城した。而してこの攻撃がベルシャザルの死を致したのである事がわかる。又彼がバビロンの法官に任ぜられたことも記されてある。コンダーはこの困難な問題を次の如く解いてをる。「このダリヨスはゴブリヤスのことである。アラマイク語ではこの兩文字は混同し易い(ダニエル書の二―七章はアラマイク語で書かれてある)。そこでゴブリヤスといふ名によく馴れない筆記者が、原文を謄寫する際、この字を見て、よく知られてをるダリヨスと間違へる事はあり得べきことである。しかもアラマイク語では、唯一點の有無でゴブリヤスもダリヨスも読み得らるのである」。又「ダリウスとは職名で、「抑制者」または「維持者」の意であるから、強いてその名を穿索するにも及ばぬと論ずる者もある。この他にこのダリヨスをキヤクサレズ二世であらうといひ、ダリヨス・ヒスタスピスであらうといひ、又はアステアゲスといふ人もあるが、何れも歴史的の證差はない。2 ヒスタスピスの子であるダリヨス。彼はベルシャのアリアン朝の始祖で、紀元前五百廿一年より四百八十六年迄その國を治めた王である(エズラ書四の五・廿四、ハガイ書一の一・十五、ゼカリヤ書一の一・七、七の一)。クロス王が猶太人にエルサレムの神殿を建てることを許した詔を、エクパタナの宮殿に於て發見し、その詔に従つて神殿の建築を許したのは、このダリヨスで、神殿は四ヶ年で落成した。時はその治世の第六年である(エズラ書六の六―十五)。3 ダリヨス第三世即ちコドマナス。これはネヘミヤ記十二の廿二に記されてあるダリヨスで、ベルシャ國の終の王である。紀元前三百三十六年に即位し、屢アレキサンダー大帝

ミ戦つて敗られ、後遂にその旗下の大將の爲に殺された。時に紀元前三百三十一年。これは預言者ダニエルの預言の成就である(ダニエル書八の四一七)。

## タルシシ

地名

「ヘブル語『固し』」

1 往昔貿易の繁盛であつた處であるが、今その地は明

かでない。舊約書にこの地の事が度々録されてある。ヨナ書一の三、四の二によれば、これはバレスチナより遙か西である事がわかる。エゼキエル三十八の十三はシバミデタンミが東洋貿易の地であるに對して、やはりタルシシは西方を指してをる。(歴代志下廿の三十七は記者若くは寫字者の書き落しがあつてであらう)。多くの學者はタルシシはスペインの西岸グワダルクキヴイル河の二つの河口の間にある古代のタルテサスの事で、後にスペイン全國の名になつた論じてをるが、又これはテルセニヤン即ちエトラスカンス(イタリヤ中央部の古國)を指すのであらうといふ者もある。その地の民は勇敢で海賊を働く民で、エジプト人は之をタルシヤミ呼んだ。又『島』ミ書かれてをるが、これは嚴密な意味でいふ島ではなく、海に接した陸地をも言つたから、タルシシを離れ島ミ見るに及ばない(詩篇七十二の十、イザヤ書六十の九、六十六の十九)。タルシシの富は、銀・鐵・錫・鉛等である(エレミヤ記十の九、エゼキエル書廿七の十二)。2 タルシシの船。これは必ずしもタルシシに屬するもの、解すべき必要はない。この名はオフルへ航する船にも用ゐられてをる(列王紀上廿二の四十八、歴代志下廿の三十六)。多分ソロモンの時以後は大船のこみをかく稱んだのであらう(列王紀上十の廿二、歴代志下九の廿一、詩篇四十八の七、イザヤ書二の十六、二十三の一、エゼキエル書廿七の廿五)。

## タルソ

地名

【ギリシヤ語『翼』】

小亞細亞のキリキヤの首府で、タウラス山脈ミ地中海ミの

間にある廣く豊かな平地の中央、シドナス河の畔にあつた。その名稱は神話にあるペガスの翼が落ちて

來たといふ所から名づけられたのだこの事である。世界歴史に有名な「キリキヤ人の門」ミいふ峠のあるタウロス山脈は、四時雪を戴いて、市より北三十哩にその雄姿をあらはし、また南十哩の處には地中海の波が夜も晝も岸邊の膝にささやいてをる「キリキヤの門」は古代のタルソ人によつて、花崗石の山を切り開いて造られたもので、昔は山脈を横斷する唯一の輸送道であつたが、現今はコンスタンチノーブルを起點とするバグダ大鐵道が、多額の費用を投じて造り上げた鐵橋・築堤・隧道によつて、この處を自由に走つてをる。市の埠頭はシドナスの流を利用して、東西から運び込まれる貨物が、山のやうに積まれてゐる。これらの貨物はタルソから半島の中心地に輸入されるか、或はこの地の名産である山羊の毛の織物ミ交換されるのである。タルソはパウロがいつたやうに「鄙くない邑」であつた。タルソの通貨はそれを證明してをる。また當時の世界にあつた三大學の一の所在地ミしてもそれを知る事が出来る

## タルソ





しかも他の大學は他郷の大学生が大部分で其土地の人は案外無頓着であつたが、タルソの學生は殆んど土着の人で、修業後諸方に出たのである。ストラボは「タルソの住民の哲學・教育に熱心であつた事はアテネ、アレキサンデリヤを凌駕してゐた」といつてをる。多くの哲學者はこの地より出たが、特にこの地の名譽すべき事は、大使徒パウロの出た事である。現今も昔の名を止めて「テルスース」と稱び、商業は甚だ盛であるが、位置が健康に適せず、濕氣が多い。而して昔の盛大の面影を留むるものは少く一番目ぼしいものにしてはギリシヤ、ローマ風の神殿が残つてをる。人口は約二萬五千あるこの事である。

**タルタク** **靈名** 【アカデヤ語「審判」。フュールストは「暗黒の英雄」の意で陰府の神だといふ】

アツスリヤ王の命によりサマリヤに移されたアビ人等の崇拜した偶像の名で、『タルマツド』には驢馬の形をした神であつたといある(列王紀下十七の三十一)。

**ダルマテヤ** **地名** 【ギリシヤ語「欺く燈臺」】 イタリヤ國の東の灣即ちアデリヤ海の東濱であるイルリコ國の一部の地方で、使徒パウロはテトスを遣はして、この地に福音を傳へしめた(テモテ後書四の十)。

**ダルマヌタ** **地名** 【アラマイク語「高き建物」】 ガリラヤ湖の西岸にあつた地で、マルコ傳八

の十に出てをるのみであるが、マタイ傳十五の三十九のマガダンの代りに置かれてある所から見ると、同一の地を指すと思はれる。

**ダン** **人名** (男) **地名** 【ヘブル語「審判者」】 1 ヤコブがその妻ラケルの婢であるビル

ハによつて産んだ所の子で、彼の第五男である(創世記三十の六、三十五の廿五)。その子孫は以色列十

二支派の一になつた。その産業は地中海濱で、ベニヤミンの産業の西方、ユダミエフライムの産業の間であつたが、彼らはアモリ人を打退けるこゝが出来なかつたので、その中の或者らはカナンの北方へ行き、ヘルモン山に近い處を占領して、そこに住んだ。2 彼らの占領したその邑は前にはライシミ稱したが、彼らはその先祖の名に因んで、ダンミ名づけた(士師記十八)。この邑はベテ・レホブの近くの谷にある。パニヤスからツロへの途上西へ四哩に當つてをる平原中にある。ここにヨルダン河の水源の一がある。現今はテル・エル・カデイといふ。アラビヤ語のカデイはヘブル語のダンミ同義である。聖書に「ダンよりベエルシバまで」この語が屢あるが、これは以色列全國を意味する語で、即ち北端ミ南端の兩邑を目標とした譯である。尙モーセの祝福の言の中に「ダンは小獅子の如くバシヤンより跳り出づ」の語があるが(申命記三十三の廿二)、これは彼らが北の地を占領する事の豫言である。ヤコブの豫言は創世記四十九の十六―十八にあるが、そこにある「途邊にある蝮」ミは有角蛇で、彼らの性情をあらはすものである。前記のライシ占領(士師記十八の廿六―廿九)に關していはれたミする學者もあるが、これを彼らの中より反キリストの出づる預言と見、默示録七の四以下の印せられたる十四萬四千人の中に、ダンの支派が省かれてをるのは、この故であらうと解説する學者もある。或は彼らが偶像を拜むやうになつたからであるともいはれてをる。列王紀上十二の廿九にヤラベアム第一世が金の犢を此邑に安置して以來、この邑は自ら偶像崇拜の民になつたのである。而して傳説によれば、この金の犢はアツスリヤ王テグラテピレセルによつて奪ひ去られたといふ。3 創世記十四の十四にダンミといふ言があるがこれは多分モーセの時代に尙存してゐた所で、アブラハムの功績を紀念する爲にダン(審判)ミ名づけたものであらうと解する學者もあり、その場所を後にダンミ名づけられたライシミする者もあるが、「楔形

文字のダヌー(アツスリヤ語の「審判」)は又カサドウー即ち「到着する」ミいふ音を有してをる。そこで「ダンまで追ひ行けり」ミは「到着するまで追撃せり」ミいふ事なる。それはその次の節に「彼らを攻め彼らを打破りてダマスコの左なるホバまで彼らを追ひゆけり」ミあるによつて知られる。ホバはダンの北尙ほ四十哩もある。後世ダンが以色列の北端としてよく知らるるに至り、読み方が今のやうに讀まるるやうになつたのであるけれども、ここでは何もダンを邑のやうに書いてゐないところから察しても、前述の事が頷かれる。ミコンダーはいつてをる。それ故創世記に「ダン」のある事によつて、これを後世の著する證據はならぬ。

斷食

情例

猶太人の間に於ては、屢斷食をする習慣があつた。彼らは神の前に自らを卑うし、罪を悲みその赦を求め、大なる災害を免れんが爲、又精神を潔め、嚴肅に神と交り、自らを聖別する爲にこれをなした(士師記廿の廿六、サムエル前書七の六、列王紀上廿一の九、廿七、歴代志下廿の三、ヨエル書一の十二、ヨナ書三の五―八その他)。しかし神の定め給へる公の斷食は、大なる贖の日に於ける斷食のみであつた(レビ記十六の廿九以下廿三の廿七以下)。バビロンに捕囚となつた以色列の民は、贖の日の斷食の外に第四月、第五月、第七月及び第十月の四回公の斷食日として守つた(ゼカリヤ書七の一―七、八の十九)。四月のはエルサレムがネフカデネザルの爲に取られて、日日の犠牲を献ける事の出來なくなつたのを記念する爲、第五月のは神殿の滅亡を記念せん爲、第七月のはケダリヤの死を記念する爲、第十月のはエルサレムが始めてネフカデネザルに圍まれた日を記念する爲に行はれたのである。この外アダルの月の十三日にはエステルの斷食が行はれた(エステル書四の十六)。以上六日の斷食の外現時猶太曆には廿二の斷食日がある。けれどもこれらはその凡てではなく、彼らは一週二回即ち月曜ミ

木曜ミに斷食したのである(ルカ傳十八の十二)。彼らがこの二日を撰んだのはモーセが再び律法の板を受くる爲に木曜日にシナイ山に上り、月曜日に下り來つたこの傳説に基いたものである。斷食の效果に關しては屢迷信的思想が行はれ、これを形式的に行ふものがあつた爲に、預言者はこれを非難し、生活上正義と純潔を離れた形式的のものは無益であるを宣言した(イザヤ書五十八の三―七、エレミヤ記十の十一―十二、ゼカリヤ書七、八)新約書中にも屢斷食の事が書かれてあるが、イエスは斷食を非難し給はず、斷食は神に對して爲すべきもので、人に見せんが爲に爲すべきものでない事(マタイ傳六の十六―十八)、神と偕なる喜ばしき生活には斷食の必要がない(マルコ傳二の十八―廿)を教へ給うた。勿論彼は大なる贖の日に於ける斷食の如き斷食に反對したまうたのでなく、一定の方法を定めて、無暗に幾多の斷食を強制する事に反對し給うたのである。さればイエス自身も斷食をなし給うたし(マタイ傳四、マルコ傳九の廿九舊譯)、初代教會もこれを宗教上一定の義務として守つたやうである(使徒行傳十三の二、十四の廿三、廿七の九)。

タンムズ

靈名

【バビロン語】「生命の子」、スメリヤ語では「ドウムズイ」又は「タムズ」で、彼は太陽神であつてイスタルの夫である。彼は牧者として知られてをるマースのボーア(冬)のために殺されて天折したので、イスタルは彼を取かへす爲に陰府に降つた。而して彼はタンムズの月(六月)の第二日にその死を紀念されて悲しまれてをる(エゼキエル書八の十四)。カナン人はこの神をアドナイミ稱んだ。そこからギリシヤ人にアドニスミ稱ばれるやうになつた。アモス書八の十及びゼカリヤ書十二の十の「獨子を喪へる哀傷の如く」ミあるのは、このタンムズの爲に年毎の哀哭をなす事に關聯してをり、エレミヤ記廿二の十八の「哀いかな、哀いかな」もタンムズの挽歌を表徴してをるミ説く學者もある。

タンムズ

この神の禮拜には不徳義な甚だ猥褻な儀式が伴うてゐた。

## チ

**血** **【雜語】** 血は体内へ受くるところの食物によつて生ずるものである。聖書には『生命は血の中にある』と書かれてある。それ故神は人に血を食する事を堅く禁じ給うた（創世記九の四、申命記十二の廿三、使徒行傳十六の廿八、レビ記十七の十）。神に献けた犠牲の中、血は最も大切な部分であつた。而して祭壇と幕屋及びその中にあつた諸の器は血を以て潔められ（ヘブル書九の廿二・廿五、ヨハネ第一書一の七）、又これを以て贖が成されたのである（レビ記十七の十二）。ヘブル人の神に献けた犠牲の血は、神の羔であるイエス・キリストの血の模である。即ちキリストはその生命を棄て、罪によつて失はれた人の生命を贖ひ、又人の汚穢を清め給うたのである（マタイ傳廿の廿八）。又信者に立てられた新約はキリストがその血を以てこれに印して、その確實なる事を證明してゐ給ふのである（マタイ傳廿六の廿八、ヘブル書十三の廿）、聖書中或所には人を殺す事を血といつてある（サムエル後書三の廿八、マタイ傳廿七の廿五）。尙『血肉』とは人の靈性に反する所のものを指した言である（コリント前書十五の五十）。

## チウダ

## 【人名】

【ギリシヤ語】『神の賜物』セオドロスの縮まつた形である。使徒行傳五の三十六に記されてゐる如く、彼は徒黨を組み、一撥を起した人である。ヨセファスの歴史に紀元後四十四五年の頃チウダといふ魔術家があつて、古代のヨシユアやエリヤの如く、ヨルダン河の水を分けてその間を渉る事が出来るといひ立て、多數の人人を欺き、ヨルダン河畔に誘うたのであつたが、有司は直ちに兵

卒を遣り、彼を追撃してこれを殺し、その他の徒を散亂せしめたといふ事がのせられてあるが、勿論これはガマリエルの忠告後十年ばかりの後であるから、この事件の説明とはならぬ。

## 智慧

## 【術語】

1 ヘブル人は智慧の源が三つあるといつてゐた。即ち律法と預言と智慧とである。律法は神が人間に予へ給うた聖旨であり、預言は神の聖旨を解説する者であり、智慧は人間の方から神の予へ給うた律法と預言を受納れ、それについて熟考した上で出来る経験である。彼らが智慧を書いた書としてゐたのは『ヨブ記』、『箴言』、『傳道書』、『エクレジヤステス』、『ソロモンの智慧』である。

2 パウロがコリント前書二の六―十六に用ゐてゐる『智慧』とは、聖靈が信者に教へ給ふ神の眞理の事である。ノスチック派の人は「我らに眞の智慧がある」と誇つてゐたが、パウロは智慧の源は眞理の本源であり、またその化身であるキリストである主張した（ダニエル書二の廿一・廿二、ロマ書十一の三十三、コロサイ書二の三）。

## 誓

## 【慣例】

嚴かに神を指して事物の眞實を保證する事である（ヘブル書六の一・六）。誓をなす風は太古家長政治の時代から行はれたが（創世記廿一の三）、ただに人の中のみならず、神も亦自ら誓をなし給うた（使徒行傳二の三十、創世記廿六の三、申命記廿九の十二）。かくて誓は誠命の一ヶ條となつて、その妄用を禁ぜられ、又主イエス・キリストも不注意な神を讀す所の誓をなす事を誠め給うた（マタイ傳五の三十四―三十六）。誓をなすには種種の儀式を用ゐた。たゞへば『エホバは活く』といひ（サムエル前書十四の三十九）或は『エホバは活く、汝の靈魂は活く』といひ（列王紀下二の二）、或は天を指し、地を指し、エルサレムを指し、神殿を指し、神殿の金及び祭壇等を指して誓つたのである（マタイ傳五の三十四、廿三の十六―廿二）。又ヘブル人の中に於ては誓をなすにあたり、これと共に特別の式

を行つた。即ち手を擧げる事（申命記三十二の四十）、又手を人の髀の下に入れる事なきが行はれた（創世記廿四の二、四十七の廿九）。尙舊約には誓が各種の人人の間に取結ばれた條約を批准する爲に行はれた事が見えてをる。王又は治者は嚴かにその約束を守る事を保證して誓をなし（列王紀下廿五の廿四、マタイ傳十四の七）、僕はその主に對して誓をなした。又總督は祭司より、主人はその僕より、家長はその民より誓を取つた（ネヘミヤ記五の十二、創世記廿四の二）。或人はマタイ傳五の三十四、ヤコブ書五の十二の言を以て、全く誓を禁じたものとしてをる。若しキリストの精神が世に充滿するに至らば、「然り然り、否否」さいふだけで充分である。

## チグラク

地名

「ヘブル語『曲れる』」

ユダの産業の地の南方にあつた市邑で、後シメオンの支派に與へられ、その産業もなつた（ヨシユア記十五の三十一、十九の五）。この邑は時にはペリシテ人の所有もなつた事もあつたが、ガテの王アキシがこれをダビデに與へてその住所として以來、ユダの支派に屬する市邑もなつた（サムエル前書廿七の六、三十の一・十四・廿六、同後書一の一、四の十、歴代志上四の三十、十二の一・廿）。その遺跡はガザの東南南十一哩、ワデイ・エス・シエリヤの北四哩にあるツヘーリカであらうさいふ説さ、ベエルシバの南、ベレドの東七哩にあるアスルイであらうさいふ説さがあるが、何れも荒廢した場所である。

## 地球

雜語

地球が如何なる基礎の上に置かれてあるかについては、世界の各國に幾多の荒唐無稽の傳説が傳へられてあるが、聖書中には少しも斯る記事がなく、却つてこの地球が物なき所即ち空間に懸けられてをる球體である事が記されてをる事は實に驚くべき神の智慧であるさいはねばならぬ（ヨブ記廿六の六、イザヤ書四十の廿二）和譯聖書に『地』さある原語は『周圍』の意で、世界の球形である

事が明白である。因にヨブ記は多分アブラハム時代のもので今より三千八百餘年前の著、イザヤ書のこの部分は今より殆んど二千五百年前の著である。

## チギリス

地名

「ベルシャ語『矢』」

この河はヘブル語ではヒデケルさいふ『急流、矢の如き流』を意味する。エデンの園より出でた四つの河の一である（創世記二の十四）。この河はその源をアルメニヤにあるゴルイク湖の少し南に發し、ディアルベクルを過ぎて、オスマン・キーウイで東チギリスを受け、東南流してベルシャ灣の上方百二十哩に於てユフラテ河と合する。水流の延長千五百五十哩（ユフラテ河まで毎年雪消の爲に三四月頃溢水し、五月中頃以後減水する、河の幅はニネベの古跡に對ふモスルさいふ所で三百呎、之より下流は約六百呎である。而して吃水四呎の舟は六百哩の上流にまで上る事が出来る。昔この河の傍に夥しき人口があり、かの大なるニネベの市城があつたけれども、今はバグダットの外には、大なる市邑はない。ただ古の市城の古跡さ、壞れた塚が遺つてをるばかりである。

## 地獄

術語

聖書に地獄と譯されてをる字は、ギリシヤの原語ではゲヘナで（改譯は「ゲヘナ」

さしてある）、ヘブル語ではゲー・ベンヒンノムである。ゲー・ベンヒンノムは「哀哭の子の谷」の意で、エルサレムの西南方にあつた深く且つ狭き谷の名である。昔猶太の人人は此谷にモロクと稱する偶像の爲に崇邱を築き、この所でその子供を火で焼き、若くは火の中を通らせたのである（エレミヤ記七の三十一、歴代志下三十三の六、列王紀廿三の十）。後世この谷はエルサレムの塵埃、獸類の屍等を棄てる所もなつたので、猶太人はこの谷をば悪人が死して後、その靈魂が永遠にをる所であるとしてゐた。この思想が一層精神的もなつて新約時代には、ゲヘナは悪人が末日審判の後に投げ入れらるべき刑罰の最終の場所もなつたのである。別項『ゲヘナ』を見よ。